

---

# 原子番号173

克己 残心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

原子番号173

### 【NNコード】

N9326W

### 【作者名】

克己 残心

### 【あらすじ】

とある湾岸都市、久宇慈市。その街の機動隊に務める、剣道が取り柄の青年の名は今村大希。タイムトラベルだとか、巨大ロボットだとか、子供じみた夢のある話が今でも好きな彼は、とある深夜にタイムトラベルについて組まれた特番を見る。結局その出来栄えは大希を落胆させたが、その夜から世界は動き始めていた……

剣に生きる、正義感に溢れた青年の名は今村大希。優しく、気遣いもできるがどこかに影を持つた青年の名は来栖未成。この一人の

周りで流れしていく、不思議な2012年。

B e y o n d a l l S p a c e a n d T i m e . 全て

の時空を越え、繋がっていく。

人は進化を渴望する。その根源的な欲望はどんな存在よりも強い。地球の四十億の歴史の中、たつた数百万年という間に人間は凄まじい変遷を遂げてきた。手に武器を持ち、火を手に入れ、言葉を生み出し、ついには爆発的な成長を遂げ始めた。農業革命、都市革命、そして産業革命。人は進化を、成長を続けた。それを経てもなお、人はその欲望を收めるところを知らなかつた。それが結果的に原子爆弾の悲劇を生み出そとも、人はそれでもその進化の欲望に従つて、この世の理を求め続けたのだ。

もし、人が少しでも進化の欲望を抑え、知性の成長を待とうと努めたならば、こんな出来事は起きなかつたのかも知れない。

時計の針が、暗闇の中で一時を指していた。狭苦しい六畳間の中、一人の青年がテレビをじっと見つめていた。鷹のように、丸い中にも鋭さのある目が、青や赤、緑と様々な光を反射している。隣の寝室では相部屋の友人がいびきをかいているというのに、よくもまあ集中を切らさず見つめ続けられるものだ。おそらく、青年が一つの憧れを持つてこの番組を見つめていたからなのだろう。

青年の前のテレビの中では、暖色が目立つポップでちゃちなデザインのスタジオのもと、科学者達の舌戦が繰り広げられていた。片や白い髪を生やし、白衣を身にまとつたいかにも科学者という外見をした三人。しかし、人は外見では判断できないものだ。白衣を着ている事が、素晴らしい科学者であることの理由にはならないのだ。眉にしわを寄せた青年は、その事をはつきりと理解させられているところだった。黒いスーツを身にまとい、画一的に髪を整えた三人。科学者というよりは、むしろ銀行マンに見えるその三人が、形から入っている博士達を次々に論破していたのだ。

『時空間が歪んだワームホールを通る事により、未来にも瞬時に飛び出しが出来れば、過去にだって遡ることが出来るのです。そして、負のエネルギーを持つ物質が存在すると同時に、またワームホールの存在も実証されているのです』

瓶底メガネまでかけた、一昔前のアニメにいそうなイメージをこれでもかと体現した白衣の男性がそう口にする。隣のボサボサ白髪頭の老人も強く頷いてみせた。このボサボサ頭の老人は、既に『宇宙ひも』と呼ばれる存在を利用したタイムマシンの存在を否定されていたのだ。『宇宙の端など行けるか』と。まさしく、ワームホール論はこのオールドタイプ三人衆が抱く最後の希望だったのだ。しかしこれもまた、スーツを着て、テレビ越しにもわかるほど髪をワックスで塗り固めた男に、いとも簡単に打ち砕かれてしまうのだった。

た。

『あなたが仰りたい負のエネルギーとは、反物質のことでしょうね。確かに、1995年に反水素が生み出され、その存在は実証されました。しかし、現在もなお反水素は、ようやく0・2秒その姿を保つたに過ぎません。そんな不安定な物質を、一体あなた達はどれほど用いるつもりでいるのですか』

白衣の老人たちはうなだれ、黙りこんでしまった。コストパフォーマンスを話題にするなどとか、まだ戦おうと思えば戦えたのだろうが、それはしょせん裸の王将がちょこまか逃げ回るようなものだ。これ以上自分達が傷つくのを恐れた三人は、ついに無抵抗を決め込んだのだった。

そうして出来上がった空虚な時間を突き、髪を真っ直ぐ切りそろえたスーツの男が立ち上がる。いきなりスタジオの真ん中に躍り出ると、手を叩いて乾いた音をさせながら、男は歯を見せて愛想よく笑う。『過去に遡る』という、数多の創作に反映されてきた人類の夢をこれでもかと否定したのだ。多少イメージを気にしているのだろう。テレビを見つめている青年は思つた。

『皆さん。確かに、過去への時間旅行は人類の果てなき夢かもしれません。ですが、まあよく考えてみて下さい。未来から来たという人間が、一人も見つかっていないというのは甚だおかしな話ではありませんか。それこそ、時間旅行が出来ないということの証拠なのです。ですが、これから人はおそらく過去の世界へ飛ぶことを渴望するでしょう。それがいつか過去への旅を実現しないとは……言い切れません』

研究者が言い終わらぬうちに、青年は口をとがらせ、いかにも不満そうな様子でテレビを消してしまった。リモコンをちゃぶ台の上に放り上げ、部屋中に染み渡るため息をつきもした。蓋を開けてみるまで、この青年、今村大希いまむら たいきはこの番組をずっと心待ちにしていたのだ。二十三にもなる大希だったが、心は少年、『タイムトラベル』だと、『巨大口ボット』だと、そういうものにずっと憧れを抱

いていた。

ところがどうだ。蓋を開けてみれば、甲斐もなくこじてんぱんに言い込まれられる情けない研究者しか出演していなかつたのだ。夢物語であるにせよ、もう少しまたもな理論を背負つて戦つてくれると思つていたのに、某ネット大辞典で出てくるような知識しか、あのポンコツ研究者は提示できなかつたのだ。失望した大希は一気に夜更かしした疲れに襲われて、再び暗闇の中でため息をついた。

「ふざけんな、あのボケ老人ども……あんなんじや柳田何とかにも完敗だつつうの」

機動隊勤務の身に夜更かしはあまり好ましくない。それでも楽しみに起きていたといふのに、やはり深夜番組のクオリティでしかなかつたのだ。テレビをもう一度だけ見て鼻で笑うと、大希は友人を起こさないよう、抜き足差し足で隣の寝室に身を滑り込ませる。大希の苦悶も知らず、友人の空井健は酒の匂いを漂わせながら楽しそうに眠りこけていた。大希はその寝顔を羨ましい目で見つめる。

「俺もあのテレビ見て、戦国時代にでも行つた夢を見て寝たいとか思つてたのにや……」

そう独り言を呴くと、今日は何の夢も見ないと決めて薄い布団に倒れこんだ。

時をほぼ同じくして、ここは久宇慈市のある住宅街。もうすぐ草木も眠る丑三つ時という時に、一人の男があてどもなく街をさまよつていた。その目は虚ろで、着ている服はすり切れ、足も引きずるようにして、とにかくまともな生活を送つてている人間のようには見えなかつた。そんな男がこんなところで何をしているのか、誰が見ても皆目窺い知ることができないだろう。ただ歩いているだけ、これぞ本物の『さまようこと』としか言いようがない。通りに入つ氣はなく、大小様々な羽虫だけが、次の瞬間に起きる出来事に備えて街灯に集まつていた。

十分して、ついに丑三つ時がやつてきた。草木が眠り、家の軒が

三寸下り、魑魅魍魎<sup>ちみもうじょう</sup>が跋扈<sup>ばっこ</sup>する丑三つ時<sup>う三つ</sup>がやつてきたのだ。それでもなお、男は時折止まつたり、時折動き出したり、その不審な雰囲<sup>ふんいん</sup>気を一ミリたりと変えようとしない。本当に、ただただ歩いているらしい。だがそこへ、魔が静かに忍び寄つてくる。ナイフを街灯<sup>まちとう</sup>のもとに光らせ、電柱<sup>でんしゆ</sup>の陰に隠れながら、その浮浪者を窺つている男が一人。この男が、どんな思いで浮浪者にそつするのかはわからぬ。だが、ナイフを持っているのだから、することは一つに決まつている。

浮浪者が立ち止まつた瞬間、ついに男は走りだした。高らかに足音をさせながら、ナイフをしっかりと構える。しかし、浮浪者はまるで無頓着<sup>むとんちく</sup>、この世で何が起きようが関係ないというように、振り向いたりする素振り<sup>そぶり</sup>は全く見せなかつた。

「死ね」

悲鳴は上げなかつた。ただその身をぶるつと震わせ、さして苦しむ様子もなく、浮浪者はすぐにぐつたりと動かなくなつた。手に伝わる浮浪者の全体重を感じると、男はすぐさま浮浪者からナイフを抜き去つた。そして、自分が殺した相手をこれ以上一瞥<sup>いっべつ</sup>することもなく、血だまりを飛び越え男はその場を走り去つていつた。

白く照らされた寂しい夜道<sup>よし</sup>の中で起きた、たつた一分の出来事。それを見ていたのは物言わぬ羽虫だけ。血に塗れた無残な死体が見つかるのは、明日の五時まで待つこととなるのだった。

大希は込み上げてきた諦めにも似た思いを排する。それから竹刀を握り直し、大希は再び柳剣人やなぎけんとと向かい合つた。

高校時代は共にのぎを削り合い、そして共に玉竜旗を目指した間柄の二人。本来なら剣質の違いこそあれど、そこに実力の違いは無いはずであった。ところが今日はどうしたことが。先程も剣人の攻めに小手を引き出され、剣先が中途半端に上あがつた間抜けなところに重たい面打ちを叩き込まれてしまつたのだ。親友に子供扱いされつつある自分が悔しかつたが、まぶたが重たいこの状態では勝ちようがなかつた。

それでも、やるからにはやらなければ剣人に呆れられてしまう。それだけは大希のプライドが許さなかつた。じりじりと数センチ刻みですり寄り、そこから気合いとともに面に飛ぶ。しかし剣人は動じない。すげなくその剣先を払つて、そのまま逆に面を放つた。大希は首を捻つて何とかかわす。剣人の体当たりを食らつてよろめいたところを、彼はさらに間合いを詰めてくる。とつさに竹刀を頭上に掲げて剣人の一撃を防ぎ、そのまま突つ込んできた彼とぶつかり合つた。そのままつばぜり合いに持ち込み、大希は腰に力を入れて剣人に圧力をかける。つばぜり合いには強い自信があつたから、簡単に分かれられないよう必死に食い下がつた。剣人の方はさつさと分かれてしまつたかったのだが、適当に逃げては大希の引き面の餌食になるから、やはり中々分かれることができない。

だが、徐々に空気の流れが変わり始める。大希が軽質で高めの気合を上げると、剣人が応えて重みのある気合を発した。どちらの油断もないことを確認した二人は、ようやくじっくりと間合いを置き始めた。示し合わせ、二人は同時に足を背後にすらせていく。その間にも、出し抜かれないように油断は怠らない。お互い血眼で睨み合いながら、剣先が触れるか触れないかの間合いまで離れた。

その刹那、大希はいきなりその場で腰を入れながら踏み込む。剣人は思わず身構えてしまつた。それを見逃さなかつた大希は、そのままさに剣人の間合いへとわずかに踏み込んだ。感度が高くなりすぎていた剣人は、思わず面を引き出されてしまつた。そこを見逃さなかつた大希は、機先を制して飛び出す。

「小手エ！」

キレのある出小手が、剣人の右小手を確かに捉えた。大希の鋭い気合いと竹刀の鋭い打突の音が、格技室の一帯に凜と響く。残心も備わつた、文句なしの一本だつた。この出小手こそ、大希が恐れられてきた理由なのだ。いくら眠かるうが、一心に磨いてきた最高の一撃だけは鈍るはずもない。剣人は悔しそうに顔をしかめていた。直後に地稽古の終わりを告げる太鼓が鳴り響く。大希は安堵し、そして本日の不甲斐なさを思つてため息をついた。

「今日はダメダメだ。ぜんぜん歯ヒいたえがなかつたな。どうしたんだよ」

練習も終わつて解放されるやいなや、剣人が手拭いで汗を拭きつつ大希のところまでやつてきた。その鋭い目はいかにもつまらなそに細められていて、先ほどの稽古に不満を持つてているのがありありと見て取れた。あれだけ動けただけでも満足だ、と言いたいのをこらえて、大希は苦笑いしてみせる。

「いやあ、昨日夜更かしちゃつてさ」

「夜更かしい？ なんだ。今でも健康優良児のお前にしたら珍しいな。彼女でもできたか？」

剣人のからかうような口調に、大希は顔をしかめた。一年前に昔の彼女と別れて以来、とんと浮名は流せていなかつた。一方の剣人はもうすぐ結婚という所までこぎつけているのだから、明らかな当てこすりというほかになかつた。

「彼女と眠れぬ一夜を過ごしたつて？ そうだつたら良かつたよな。深夜の特番に期待して、バカを見ただけだよ」

「そんな面白い番組あつたか？」

すぐさま大希は首を振る。今日の深夜まではあると信じていたが、

今はもう、あんな番組を楽しみにしていた自分が恥ずかしかった。

「いや。無かつたね」

剣人が大希の言い回しに首を傾げていると、二人の背後から健がやつてきた。一人のやり取りをちゃっかり聞いていた健は、その子供っぽさが残る顔にやたらとにやにやとした笑みを浮かべていて、忍び足で大希のそばに忍び寄り、出し抜けにその肩を叩いた。

「何言つてんだよ。『ガチンコSF生討論会』を見るにあたつて、お前は昨日の夜からタイムトラベルについて復習してたじやないか。

大希は気まずそうに顔をしかめる。剣人は呆れたように顔をしかめる。

「何だよその安っぽい番組。ハズレに決まってるだろ……お前がいまだに特撮とか大好きなの知ってるけど、それくらいの見境は付けろよ。だから彼女できないんだぞ」

「関係ないだろ！……その話はもうやめだ！」

大希が腕ですっぱりと空を切り、他愛のない無駄話を封じ込めてしまった。まだまだつつきがいがある話題だつただけに不満が残つた剣人と健だつたが、こうなつてはもう口を裂いても言葉は引き出せない。一人は肩をすくめあい、せーので諦めた。すると話すこともなくなるので、自然に三人は着替えに赴く。その途中で、突然健が思い出したように口を開いた。

「あ。ゆうべといつたら、通り魔が出たんだよなあ。朝から刑事部の奴らは大変だつたよな」

健がうんざりしたような口調で呟くと、大希も眉にしわを寄せながら頷いた。自分がくだらない番組にいらいらしながら眠りにつこうとしている影で、一人の浮浪者が殺されているのだ。世界というのはどこで何が起きているかわからない。剣人もため息をついて、指を折りながら人づての情報を数え上げ始める。

「死因は背後から心臓を一突きされたことによるショック死。死亡

推定時刻は午前一時から二時頃。目撃者はゼロ。聞いたのは大体これくらいだ」

袴の帯を解きながら健は唸った。体が資本を地で行くような奴だつたが、それでも警察の端くれ、考えることは考えるのだ。  
「目撃者がいないって、相当難しい事件になりそうだよな。それに、わざわざ丑三つ時を選ぶなんて気味が悪いぜ。通り魔つつても、かなり計画を練ってるんじゃないか」

袴の下から器用にトランクスを履き直しつつ、剣人は健の言葉に頷く。彼は将来刑事になる目標を持つてこの世界に飛び込んだから、犯罪に関する知識は隣の二人よりも持つていていたつもりだった。

「そもそも通り魔自体が難しい事件だからな。現行犯逮捕ならともかく、こういう風に人目につかない時間を選ばれたりすると、下手をすれば完全犯罪だつてあり得る。殺された奴の身元自体もわからんんじゃないじゃ、余計に」

二人の言葉にももちろん耳は傾けていたが、大希は別のこと考えていた。考えてみると引っかかるのだ。簡単に骨格図を描いてみると、やはり一つの壁にぶつかった。大希は道着の紐を解きながら唸る。

「おかしくない？ 背後から心臓を一突きつて、適当に刺したら背骨で逸れるだろ」

「あ。そういえばそうだな……」

剣人は大希の言葉に納得した。心臓を一突き、というのは存外に難しい。正面から刺しても、肋骨で逸れて上手く刺せないときが多いのだ。それが背後となれば大変だ。そもそもかなり刃渡りのある刃物を使わなければならぬし、今しがた大希の言った通り、胸骨ならいざしらず、背骨を一刀のもとに貫く刃物はそうそうない。餅割り程度に日本刀を扱ったことのある三人は、その切れ味もおぼろげに覚えていたが、やはり正面きつて心臓を突き破るのは至難に思えた。シャツの袖に腕を通し、健はその人差し指を立てた。

「合理的に考えようぜ。肋骨を避けて突き刺したつて考えるのが普

通だろ」

「お前から合理的という言葉が聞ける日が来るのは思わなかつた」  
剣人がやりとしながら言つと、むつとした健が剣人の肩を叩いた。

「なんだよ。俺だつてバカじやないんだよ」

「バカだろ。警察学校でも、いつも赤線をぐぐり抜け続けてきたような男のくせに、何言つてんだ」

「それを言つうな！」

健は歯噛みしたが、ため息混じりに大希はその二人の動きを制する。かたや熱血だけれど落ちこぼれ寸前、かたや冷静でもつて秀才。自然とぶつかり合う機会が多くなり、そして中庸の大希が潤滑油となる機会も多くなる。大希はいつも神経をすり減らす損な役回りだつた。

「やめろよ面倒くさい。もつと建設的に話をしよう。肋骨を避けて突き刺したつてことは、それなりに腕がある人間だつてことじよ」

「あ、ああ。そうだな……」

健は唇を噛みながら頷いた。事実、それが分かれば犯人の絞り込みもしやすい。ナイフの手練など、久宇慈市という平和な街にそういうものではない。彼はあごをさする。

「剣のプロなら居合や剣道の有段者を探ればいいけど……ナイフって実力を測れないからな イテツ！」

剣人は眉にしわを寄せ、健の額を指で弾く。握力の強い剣人は弾指の威力も強い。健は返せる言葉も返せず、ただただ額を赤くしてうつむいた。三人の中で一番小柄な健は、そのまま百九十に迫る長身の剣人に見下ろされる形となつてしまつた。

「だからバカなんだつて。そんな表面的なもので実力が図れるわけ無いだろ。無計画に殴りに行つたんならともかく、わざわざ簡単に足がつくような方法で人殺しなんかしないさ」

健は顔をしかめて睨んだが、今回の『バカ』呼ばわりはさすがに言い返せなかつた。

「くつそお……」

大希はこれ以上介入せず、もつなるがままに任せておくことにした。そう決めてみると、一人の滑稽なやり取りはとても楽しく映るのだ。うつすらと笑みを浮かべて一人の姿を見つめていると、いきなり一人の男が更衣室に現れた。

「すいません。ここに今村大希さんはいらっしゃいますか？」

大希はすぐに手を挙げた。

「はい。僕ですが、どうかしましたか」

「いえ、刑事部の方から、今村さんが参考人として召喚されているんですよ」

「え？」 「はあ？」 「お？」

三人が一様に似たり寄つたりな反応で振り返り、磁石で引かれるかのようにするすると新米の雰囲気を全身に湛えた青年の方に寄つていく。その他もチラチラとその三人と一人の様子を窺い始めた。久宇慈高校黄金世代の三人に取り囲まれば青年も縮こまるしかなく、居心地悪そうに手いじりしながら小声で続きを口にした。

「えっと、ですから、すぐに署の方へ来て欲しいそうです」

健はつばを飲み込むと、とにかく訝しがる様子の大希の肩をつついた。

「おい。お前何かしたのかよ。あ！ お前さては……」

「バカか。俺は大酒のんだお前の隣で寝たつつの」

大希が口を尖らせると、健はそうだよな、と眩き肩をつつく指を引っ込めた。剣人は宙を睨んでうむと唸り、そのまま大希に問い合わせた。

「最近財布落とさなかつたか。お前の持ち物が被害者から見つかったのかもしんないぞ」

重要参考人として呼ばれたわけではないし、通り魔に少しも関わりない大希が呼ばれる理由としたら、近くで大希の持ち物が見つかることぐらいだろう。だが、大希はそれもなかつたのだ。

「ないよ。警察が交番のお世話になるつて、カッ「悪いだろ」「それは俺に対する当てつけか。なあ」

最近まさに財布を落として交番のお世話になつた健が迫つてきた

が、大希はすぐ払つて新米の脇をすり抜けた。

「もういいよ。……このあと体力トレーニングがあるけど、まあ、署へ出頭なら許してくれるだろ。ご足労ありがとうございます」

「はい！」

新米は勢い良く頷き、大希の後をついて歩き出した。

その頃、刑事部の方では、一人の青年がやたらと落ち着かない様子で待ち構えていた。

「大希……早く来いよお……」

町の中心よりわずかに外れたところに建つ、展望台付きの白い鉄塔。これだけでは単に東京タワーを縮小し、そして純白に塗つだけの独自色の欠片も無い街のシンボルに見える。だが、このタワーには凄まじい計算性があるのだ。まず、このタワーには最新式の原子時計が積まれ、常に正確な時を刻んでいた。それだけでも物珍しいが、なんとこのタワーそのものがカルジオイド式の日時計となっているのだ。証拠が街の至るところにあるモニュメントが様々に趣向を凝らした形で文字盤の役割を果たしており、元旦に正確な日時計として作用するというスポットである。ベッドタウンで高い建物が少ないからこそできる芸当、爆発的な人気は無いが、息の長い観光名所となっている。

話が逸れた。だが、話すだけの価値はあると思つ。また逸れた。今度こそ戻ろう。とにかく、そんなタワーのすぐそばに、久宇慈の警察署はあるのだ。

「未成！ わざわざ出迎えに来てくれるなんて、苦労かけたな」  
車から降り、大希は玄関先で待ち構えていた青年に駆け寄つた。  
青年の名は来栖未成という。変わった名前だが、『達成したと満足せずに、いつまでも向上心を持つように』と名付けられた、れっきとした由来のある名前なのだ。『身なり』と聞き間違えた大希に、未成はいつだかそう言つた。

「すぐ来てくれてよかつたよ。タクシーを呼んでるから、すぐ大学病院に行くよ」

鑑識として働いている未成が大学病院へ行く理由は一つくらいしか思いつかなかつた。だからこそ疑問になり、大希は小さく首を傾げた。

「ホトケさんに会いにいくのか？ どうして機動隊の俺が必要なん

だよ。参考人として引っ張り出してまでさ」

未成はしつかりと頷く。彼にとつてしてみれば、彼がいなくては話が始まらないとさえ思っていた。重要参考人として呼んでもいいくらいだと。

「必要だから呼んだんじょ。理由は追々話すから、まずはタクシ－に乗つて。ほら来たよ」

未成の細くしなやかな指が、遠くから走つてくるてつぺんに丸い時計のオブジェを付けた白いタクシーを捉えた。大希は自分の乗つてきた中古の軽自動車と見比べながら、ぼそつと呟く。

「俺、車あるの知つてるだろ？ どうしてわざわざ……」

未成は猫のよう人に懐つこい笑みを浮かべ、大希の方に振り返つた。

「もちろん、君とゆつくり話したいからわ」

言葉自体は何でもなかつたが、大希は気がついた。その頬が少し引きつっていることに。元々性格の優しい未成のこと、遺体を見に行くことに少々は緊張するのだろうと気にしないことに決めた。タクシーの自動ドアが開き、大希は素早くその空間に体を滑り込ませる。未成はその後にゆつたりとつき従つ。タクシーの運転手の質問に、未成は控えめの声で答える。

「大学病院までお願いします」

「了解しました」

サイドブレーキが引かれ、タクシーは滑るように走りだす。最近の車は随分騒音もなく、確かに話を交わすにはもつてこいかもしれないなかつた。大希は背もたれに全体重を預け、横目で未成の顔を窺う。彼はアイドルのように優しい顔立ちの男で、警察というと驚かれ、鑑識というと少し落ち着かれる、そんな外見をしていた。一年前にふらりと転勤してきて以来、二人は趣味も合つて意氣投合し、

親友の関係を築いていた。

「未成、もう一度聞くけど、どうして俺が必要なんだ？」

未成はため息をついた。一瞬こちらを見るのだが、すぐに目を伏

せてしまう。いかにも不審な様子だった。

「なあ大希、変な話するけど、『クローン人間』って信じるかい？」

大希はぽかんと口を開け放した。彼が信じるわけがなかつた。まあ確かに、可能な技術ではある。だが、人々は認めないだろう。大希にしても、いつだかにそんな設定のあるゲームをやつたくらいにしかその存在を頭にとどめていなかつた。

「信じるわけ無いだろ。できたって、しちゃいけないことはたくさんあるぜ。クローン人間はその一つじゃないか」

未成は曖昧に頷いた。信じたいが、決定的な理由のせいでの、それを信じることが未成にはできなくなつてしまつていたのだ。

「まあね。普通ならそう言つよ。僕だつて昨日まではそう思つてた。でもさ……技術的には可能だし、もしかしたら、なんだよ……」

大希は表情を歪ませた。未成は知性に溢れた青年であつたし、彼が決してふざけているわけではないこともその深刻な表情からも読み取れる。だからなおさら、大希は今の言葉が全くちぐはぐなものに思えてしまつた。未成の表情から目を外し、大希は外の並木に目を向ける。

「未成らしくないな。そんなこと、あつたらたまらないじゃないか」一向に自分の言葉に耳を貸そとしない大希。未成はそろそろ焦りだした。声を殺し、彼は大希に耳打ちをした。

「でも、事実あるんだよ！ 今日の深夜に殺された浮浪者の顔が、大希にそっくりだつたんだ！」

「な、なんだつて？」

身を捻つて、大希はモノトーンの無機質な車内に目を戻した。自分に似た人間が殺されたのはあまりいい気がしないし、今まで一番の衝撃だつた。だが、待てよと冷静になる。いくらなんでも、ただ似ているだけでクローンとするのは暴論だ。

「いやいや、いや。他人の空似だろ？ バカなこと言つなよ

「本当は写真があるんだけどさ、見せたつて大希は同じ事言つんでしょ？」

「ああ。」大希はすぐさま頷いた。「世の中には自分と同じ顔の人間が三人いるっていうだろ。そしてその三人に会つたら人生アウトだつてね」

未成はため息をついた。「ここまで自信を持つて言われててしまうと、こちらもそうなのだろうと思えてくるから困つてしまつ。だが、やはり未成には単なる他人の空似とは思えなかつたのだ。

「だから見に行くんでしょ。見たら、何か思い出すことだつてあるかもしけないし、何より解剖の人が『今村大希じゃないのか』とか言つてるから、とりあえずその『今村大希』ではないことを証明するためにも大希がいてくれた方が早いんだよ。身元を明かすものがないんだ。照合するために指紋を取つたけど、本当にそれくらいしかないんだ」

「ふうん……よくわかんないなあ……」

一人が黙り込んだところを縫うように、タクシー運転手の落ち着き払つた声がやつてきた。

「お一人とも、そろそろ大学病院に到着しますよ」

未成は興奮の早口をやめて、小さく頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。」そして、思い出したように頼んだ。「あの、機密情報というわけではないのですが、ここで聞いたことはなるべく口外なさらないで頂けるとありがたいのですが……」

純白の、いかにも病院らしい大きな建物の前で景色の流れが緩くなる。運転手は料金を確認しながら頷いた。

「はい。分かりました」

薬品の匂いが漂う、白やベージュを基調とした調度品の揃つた病院に入つてみると、すぐに違和感に気がついた。カウンターの奥の受付や、廊下を行く白衣を来た人々の視線が自分に向かつて飛んでくるのだ。ちらりと目を合わせてみれば、彼らはすぐにそれを逸らしてしまつ。視線に含む意志を読み取る技能を身につけてきた大希には、白衣の人々がいかにも驚き、そして不審に感じていることが

簡単に読み取れた。風邪でしきりに「ゴホゴホやつて」いる患者達から離れた席に座りながら、大希は受付の方から戻ってきた未成に目を向ける。

「よし。連絡は付けてもらつたから、靈安室に行こう。そこで検視担当の人と落ち合つつもりだから」

「ああ。さつさとしようぜ。みんなジロジロ見てくるから、ちょっと居づらい」

「そうだね……まあ、仕方ないよ」

未成はそれだけ言つて歩き出した。大希も膝を叩いて立ち上がり、足早にその細い背中を追いかける。未成は特に迷う様子もなく、立ち止まらず順調に病院の隅っこへと向かっていた。その後を追ううちに、大希は自分のしていることがわからなくなってきた。自分は一体何のためここにいるのか。自分に似ているという刺殺体を見に来たのか。だが、単なる他人の空似であつて、自分には何ら関わりがない。そもそも、生存確認なら電話で済むだろ。考えれば考えるほど未成の考えが読みがたいものに感じられるようになつっていた。「あんまり気分よくないな。自分の死に顔見るようなもんだろ? なのに、俺には何の脈絡もないときた」

「だから、『今村大希』だとして譲れずにいる解剖医達に文句なしに理解してもらうためだつて。で、ついでだから見て欲しいな、つてことさ。あ、ここにちは」

未成は靈安室の前で待ち構えていた、小柄で、白髪を綺麗に整えた初老の男性に頭を下げる。だが、一向にその男性は未成に目を向けようとせず、食い入るように隣の大希を見つめていた。一人が立ち止まるやいなや、男性はいきなり大希に詰め寄つてきた。

「あなたが今村大希ですか? 息をして、しっかりと生きているあなたが」

生きているも何も、ここまで歩いてきたのだから死んでいるわけがない。自分はロボットかと突つ込んでやりたくなつたが、相手はかなりの年長者だ。上意下達の厳しい世界で生きている大希に、そ

んな小生意気なことを言つ勇氣は無い。その鷹のよつた目に困つた色を浮かべ、薄い唇をいっぱいに引き伸ばして苦笑いした。

「ええ。神奈川方面機動隊勤務、今村大希と申します」

「なるほど。そうかそうか……いやや、申し訳ない。てっきり、先日お亡くなりになつた方はあなただとばかり……」

やはり、実際の口から聞いてみると違つ。本当に、検視担当も殺されたのは大希だと信じて疑わなかつたらしい。そこまで言わると、ついに大希も氣掛かりになつてきた。そわそわと手の置きどころを探しながら医師に尋ねる。

「そんなに私と似てゐるのですか？」

「ええ。これは見て頂いた方が早いでしょ。」ちらへ

医師はゆっくりと靈安室の戸を引いた。がらがら鈍い音がして、圧殺されそうなほど重たい雰囲気を保つた空間が開かれていく。最初は神妙に振る舞い、無表情で靈安室の中を見つめていた三人だが、ほぼ同時に異変に気づき、そして医師は目を丸くして部屋に飛び込んだ。

「ない！ 遺体がない！」

雷に撃たれたように立ち尽くしていた大希は、望み薄だが、それでも全身全靈をかけて信じたい事を尋ねてみる。

「そ、そんな。もう運びだされたんじゃ……」

「そんなことはない！」

医師はぐるりと振り向き、つばを飛ばして叫んだ。その目は恐怖に見開かれ、手はわなないでいる。怪生のものに会えば、丁度似たような反応になるだろうか。それ程に医師の様相はひどいものだった。

「まだ遺体は解剖を待つていた。解剖がなかつたとしたら、誰が好き好んで遺体なんか持ち去る?とする? 消えたんだ。忽然と消えてしまつた！」

あまりに大きい医師の叫びを聞きつけたか、若い看護師が大希や未成のそばまで駆け寄ってきた。いかにも戸惑つた表情を浮かべた

彼女は、心配そうに靈安室の中を覗く。

「い、一体どうしたんですか。かなり響いてますよー。」

しかし、医師は青くなつて近くの椅子に座り込んでしまい、顔を両手に埋めてうつむいてしまっていた。まともに答えられる様子ではない。それを見て取つた未成が代わりに受け答える。

「先日殺害された、身元不明の遺体が解剖を前に消えてしまったんです。しかも、誰も触れた形跡がないんです……」

看護師は目を見開いた。そして、大希がついぞ言つたことを復唱してしまつたが、答えはやはり同じだつた。この世で起きたとは思えない事象を前にして、看護師は彼女自身も知らないうちに後退りを始めていた。

「あ、あの……わ、私。知らせてくれますね。他の人にも……きっと誰かが運び出したことですよ。きっと」

うわ言のように言い残すと、看護師は脱兎のごとく駆け出していく。それを見送つた大希だつたが、自身もかなり混乱していた。確かに、死体など持ち出す意義がない。そして、それが死体だつたからこそ、余計に『消えた』という結果に説得力を持たせてしまう結果になつていた。空想の絵空事をいきなり真実として突きつけられた大希は、その混乱を処理することができずに頭痛を覚えるようになつてきた。しかも、その痛みはいや増すばかりだ。大希は歯を食いしばりながら、未成に引きつた笑みを見せる。

「お、俺、帰るよ。何だか頭が常に何かで叩かれてるみたいなんだ

……」

未成も小刻みに頷いた。大希はひどく顔をしかめており、その辛さが見て取れたのだ。蒼白な顔で大希の背中を見送ると、そのまま未成はぎこちなく靈安室の方に目を向けた。その目を厳しくし、未成は遺体が存在したであろうベッドを凝視すると、未成は誰にも聞こえない声で呟いた。

「こんなことになるのか……」

外に出た大希は、急いでタクシーを捕まる。最早まともにものを考えることもできなくなってしまった彼は、とにかく自宅のせんべい布団に戻り、心に決め、走りだしたタクシーの中できつく目を閉じた。

気づけば、大希は霧の中に立ち尽くしていた。滅多に無いほど濃い霧で、二メートル先さえはつきりと見えない。大希は周囲を手探りで確かめ、ようやくここが時計塔の下だと気がついた。自分がどうしてここにいるのか、いる必要があるのかわからなかつた彼は、ひとまず自分の家に帰ろうと心に決めた。ところが、そう思つた矢先に大希は不思議な声を耳にした。

「今村大希……」

大希は足を止めた。霧の中、大希は刮目して周囲に気を立てるが、この霧では声の主が全くわからない。彼は戦慄していた。その声が自分の声とあまりに似ていたからだ。大希は白い虚空に向かつて叫ぶ。

「誰だ！ 一体誰なんだよ！」

「今村大希。お前も今村大希だ」

今度は前から後ろから、二つの方向から自分の声が聞こえてきた。この時点で、既に大希の理解を越えて世界は動いていた。虚ろな目で首を振りながら、大希は前に進むことも後退りすることもかなわず、ただ固まつてしまつた。そんな大希のもとに、周囲に染み渡るような靴音が聞こえてくる。そして、急に霧が晴れた。

「うわあ！」

大希は悲鳴を上げた。そこにいたのは何人もの自分。三人、四人、五人。それどころではない。十人くらいはいるかもしだらなかつた。口が震えて、大希はまともに口をきくことすらできない。そんな大希の肩を、一人の“彼”がしかと捕まえた。

「な、何するんだ。やめろ！」

大希は必死に振り払おうとしたが、この世のものと思えない恐怖に縮みきつた体では、剣道で鍛えてきた体も形無しだつた。周りの“大希”的人が、なんと自分の首に手をかけてきた。鷹のような

目で凝視し、獣のように歯を剥き出し、普段の整った表情からは遠くかけ離れた人外の笑みを浮かべながら、目の前の“大希”は首にかけた力を強めていく。大希は恐怖と絶望の入り混じった目つきで目の前の凶行を見つめていた。

その時だ。乾いた音が何度も何度も響き、大希の目の前で彼らは不自然に吹き飛び始めた。頭からつんのめるもの、胸を突き出すようにして吹き飛ぶもの、肩からきりもみに飛ばされて地面に打ち倒されるもの。最後に首を絞めている個体が目の前でどこかを擊たれ、静かに崩れ落ちていった。目の前の事態をまるで呑み込めず、大希は羽交い締めにされたまま遠くに目を向けた。すると、塔のちょうど真下に立っていた人物が、こちらに向かって銃口を向けていた。最初は助けが来たのだろうかと前向きに期待したが、その顔を見た途端、大希の心は地獄の底に突き落とされてしまった。

「お前も、偽者だ」

「うわああ！」

大希は絶叫した。周囲の空気を皆震わすほど絶叫した。その絶叫をも引き裂き、銃声が響いた

「ああ！」

大希は布団を蹴り飛ばして起き上がった。途端に、男所帯の埃っぽい臭いがして、目の前に乳白色の壁が現れた。足下には、いつも寝ているせんべい布団が敷かれている。眩しい朝日を浴びて、ようやく大希は自分が夢の世界に置かれていたことに気がついた。

「夢……？ なんだ。そうかそうか……」

大希は安堵のため息をもらしてしまった。考えれば考えるほど、奇つ怪でおぞましいシチュエーションだつた。起きた大希には、それを夢と気付けなかつた自分自身が不思議で仕方なかつた。

「おう。起きたんなら食べちまえよ。軽いもの作つといたから」

居間の方から、どこか上の空の様子で健が大希に向かって呼びかける。大希は眠い目をこすりながらそれに黙つて応じようとしたが、

立ち上がった瞬間に聞こえてきた音で立ち止まつた。

少々電子的な銃声。銃火器の発射音。ある予感に大希は顔をしかめる。一足飛びに居間へ踏み込み、そしてテレビの方を見た大希はため息をついてしまつた。

「お前、朝からゲームなんかするなつて」

テレビの中で繰り広げられていたのは、一人の傭兵が基地の中へと潜り込み、あんな戦いやこんな戦いをしたり、ついでにダンボールに潜つたりする活躍劇だつた。当然、銃声は鳴るし、ときおり爆発音さえ鳴る。本当のことを言えば、アクションゲームをするのが趣味の健のこと、今日明日のように一日連続で非番が続くという日に朝からゲームをしているのはさして珍しいことではない。しかし、この銃声が自分の夢に関わりあるだらうと思うと、大希は呑気にコントローラーを握っている健が少々許せなかつた。ちゃぶ台の前にあぐらをかきながら、大希は口を尖らせる。

「おい。聞いてんのか。俺はニュース見たいの」

「わかったわかった。ちょっと待てつて。セーブするから」

健は宣言通り、しっかりとセーブを始めた。再びため息をついた大希は、リモコンを手の内でくるくると回したり、あちこちのボタンに指を置いたりする。別にニュースを見ようと思わなければ、健のことなど大希は放つておいた。健はゲームが上手く、見ていも楽しいのだ。だが、今日ばかりはそういうわけにもいかない。気になることが多すぎる。いろいろとリモコンの平らな部分を叩き始めた頃、ようやく健はゲームの電源を切つた。

「そりかりかりすんなつて。体に良くないぜ」「つるさい」

健のからかうような言葉をすげなく払い、大希はさつさとチャンネルを回す。普段見ているニュース番組だが、幸い地方のニュースが報道されていた。大希は目の前の箸に手をつけることなく、じつとテレビを見つめた。

『先日未明、身元不明二十代の遺体が久宇慈市の住宅街で発見され

ました。警察は、殺人事件として犯人の行方を追っています』

昨日の事件は報道されるだらうか。大希はさらに聞き耳を立てた。のだが、それ以上は何の情報も提示されることなく次のニュースへと入ってしまった。横浜であつたちょっとした祭りの話で、殺人事件からは遠く離れた話題だ。大希はその結果に物足りないような、納得したような、そんな感情になつた。一、二度繰り返して頷くと、ようやく大希はいただきますを言い、目の前の目玉焼きに手をつける。

「やっぱり、箝口令といつか、やっぱりあんな事は伝わっても報道されないよな……」

大希の咳きに興味を示し、テレビから目を逸した。

「え。どうして箝口令を敷くよつなことがある? といつか、今日伝えられるのはあれが全てだろ」

大希は健の不思議そうな瞳を見つめた。表情まで少年じみている。大希は勘定した。果たして昨日の出来事を話して、健が信じるだろうか。そしてすぐに答えは出た。健はそのよつなお化けや怪奇現象の類を全く信じしないのだ。つまり、話したところで無駄といふことである。

「ああ。まあそうだよな……」

長く息を吐き出しながら、大希は惰性でニュースを見つめる。そこにあつたのは、久宇慈市の湾岸部にある一つの研究所だった。『久宇慈量子化学研究所が、一二六番元素の研究と並行し、一三七番元素の研究に着手しました。一二七番元素とは、リチャード・フAINMANによつて、存在可能な最後の元素と指摘された元素であり、その名を取つてFAINMANウムとも呼ばれる元素です』

久宇慈量子化学研究所。この誕生には曰くがあつた。十二年余りの長さにわたつて職務を全うしている現市長は、初めてその任に就いた時、『时空都市、久宇慈』といつ、親父ギャグにも似た雰囲気を持つしょももないネーミングのスローガンを掲げた下で、近未来的な雰囲気を持つたまちづくりを目指したのだ。時計塔もその一環

の一つである。そんな市長だから、研究所を建てるという計画が持ち上がった時真っ先にアピールし、そして受け入れられた結果できたのが『久宇慈量子化学研究所』なのだ。

「よくやるよな、研究者の皆さんも。一三七番元素なんか、ビニで活用するかわからねえよ」

「まあ、作れただけで価値はあるだろうし、そこが大事なんじゃないの？」

「まあ、そりなんだろうけどさ……」

途方もない構想のニュースを見つめながら、二人はのどかな朝を過ごしていた。

所も時も変わつて、未成は昼頃からずっと署の鑑識課でパソコンをいじつていた。それほど事件も起きない久宇慈市では、その規模も大して大きいことはなく、学校の教室ほどの広さの中、雑然とした設備が広がつている。その一角に陣を構えた未成は、同僚や上官から度々視線を送られつつ指紋の照合を行つていたのだ。そして、未成は抱いていた疑惑を確信に変えることとなる。

「やつぱりだ。そうなるしかないもんね……」

未成はぼそぼそとパソコンに向かつて呟く。その画面に広がつていたのは、消えてしまつた遺体から取つた指紋が、しっかりと今村大希の指紋と一致していた事を示すものだつた。彼の声は小さかつたが、静かな部屋では十分聞こえていた。上官がすぐさま立ち上がり、未成のそばまで駆け寄つてきた。

「どうした。何がそうなるしかないんだ？」

未成は上官の目を見て頷くと、そつとパソコンの画面を指差した。ざつと目を通した上官は、しばらく漠然と画面を見つめていたが、その結果を飲み込めた瞬間、いきなりその目を見開いた。

「どういう事だ！ 奴、昨日からピンピンしてただろう！ どうなつてるんだ！」

未成はいきなり胸ぐらを掴まれる。目を白黒させながら、未成は

何とかその腕に手を重ねる。

「や、やめてください。僕にわかるわけないじゃないですか……」

「あ。そ、そうだな……」

もつともな言葉に冷静さを取り戻し、上官はそつと未成の胸ぐらから手を放した。すっかり毒気が抜かれた様子の上官に、未成は曖昧な顔で笑つてみせた。取り乱す上官など今まで指で数えられるほどしか見たことがなく、もう一人いた同僚も未成達の所まで駆け寄つてくる。

「い、一体どうしたんですか？」

「いや、これを見てくれ」

「これですか？ あ、な、何で大希が……」

未成はじつと指紋のデータと大希の名前を交互に見つめる。後ろで慌てている一人の声が遠く、くぐもつて聞こえる。未成はそれ程に深く思案の海に飛び込んでいたのだ。

紛れも無く、未成は『大希』という存在が複数あることに気がついていた。しかし、それを確信めいて大希に伝えれば、間違いなく頭のおかしい奴と思われてしまつ。だから、大希には実感としてその存在を知らしめておくつもりだつた。しかし、それも叶わず、遺体は消えた。そこは未成にとつて予想外の出来事だつた。そもそも、その存在を消そうとした人間がいたことに驚きだつた。果たして、ただの通り魔なのだろうか。未成はそこまで踏み込み考えていた。

「誰が、何のために殺した……？ 殺す必要がある存在にも見えなかつたはずなのに」

何かが変わろうとしている。『この』2012年に、何かがわり始めている。未成は心の中、自分に向かつて語りかけた。そつと未成は周囲に目を配る。同僚の一人はこの事実をどこかへ知らせに行つたのか、課から消えてしまつっていた。見ている人物がいないことを確認すると、未成は素早くインターネットを開き、アドレスを打ち込み始めた。

その間にも、未成は大希にこの事実をどう伝えたものか考えてい

た。

久宇慈警察署の休憩スペース。フロントからでは全く見えないとこりにあり、警察署に油断した雰囲気を持たせないよう配慮されていた。自販機が置いてあつたり、やや柔らかい椅子があつたりして、狭いが概ね快適なスペースではあつた。使う人は、大半がアクリル張りの喫煙スペースに入つてゐるが。その中でタバコをふかしてゐる他課の人々にときおり目を配りながら、大希と未成はプリントされた指紋照合の結果を挟んで向かい合つていた。

「くつだらないなあ！」

未成に延々話を聞かされた後の開口一番、大希はのけぞりながらそう叫んだ。せつかくの非番一日目、健がせつかく誘つてくれたからと、自分も健と共にコントローラーを握つて健とゲームを楽しんでいたところだつた。だが、いきなり大希は未成に呼び出された。指紋照合の結果が出たから、自分が休憩時間のうちにちょっと来て欲しいと。親友の頼みのこと、面倒だつたが仕方なく赴いてやつたのだ。それが、さらに面倒な話を聞かれるきつかけとなつてしまつた。

「くだらないって……僕は大真面目だったのに。証拠もあるし」

「証拠つて！ 指紋なんか、十万分の一の確率で同じになつちまうんだろ？ それで、殺された被害者が俺のクローンみたいな存在だなんて、馬鹿げてるんじゃないか？」

舌鋒鋭い大希の言葉に肩を縮こまらせながら、未成はそれでも愛想よく笑つた。本当に、この男はめつたに怒るということをしない。怒るということを忘れてしまつてゐるかのようだ。資料をまとめ直し、未成は冷静に受け答えた。

「大希。君は世界に三人ほどしか自分に似ている人間がないといつたじゃないか。一応遺体の写真も今見たでしょ？ 世界に三人ほ

どしかいない人間が、さらに十万分の一の確率で指紋が一致しているなんて、有り得ない確率じゃないか」

未成の飄々とした言葉に、大希は思わず口を塞がれてしまった。未成の言葉を噛み碎くように口をもぐもぐとさせ、顔をしかめる。確かに遺体の写真を見た。その顔には痛みに苦しんだ様子も、安らかな様子もなく、ただ魂が抜けていったような、そんな空虚な死に方を如実に表していた。だから、鏡に写したぐらに似ている様子をしつかりと確認できたのだ。

「そりゃあ……未成の言つとおりぢ。顔も指紋も同じような人間なんて、そうはいない」

けれど。大希は心の中で呟いた。やつぱり俺は、そんな事を認める訳にはいかない。自分が知らない所でクローランが作られていたなんて、馬鹿な事は信じられない。

「でも、俺みたいな没個性的な顔なんか、どうせ他にも似てる奴はたくさんいるだろ」

「そんな事言うなつて。イケメンだよ」

「うるせえや」

かつこいいと言われて嫌になるほど捻くれた人間ではなかつたが、話をごまかされたくはなかつた。大希は身を乗り出し、その人差し指を未成の真つ直ぐな鼻先に突きつける。

「あのさ、一応技術的にはできるわけだし、可能性については、可とすることにするよ。クローランを産む人もいるとする。で、俺がクローランの素体になつたとするよ？ 俺はその事を全く覚えていない。クローランにしてまで複数用意したいほど有用な人間でもない。やつぱり無理がある」

「そう言われたら、そののかもしけないけど……」

仰け反り至極残念そうに顔をしかめている未成に、大希はさうに迫つた。昨日の夢は、まだしつかりと覚えていたのだ。

「俺、昨日クローランに襲われる夢なんか見たんだぜ？ しまいにはズドンだ。お前がクローランの話なんかしなかつたら、俺は絶対そん

な夢を見なかつたね」

未成はついに諦めた。これはいかに手を叩くそつと、この事実は理解してもらえそうにない。だが、まあそれならそれでも構わないし、彼に何か異変が起きた様子もない。全くの安泰だ。ならば、長々この話題を引っ張るのは友情の障害となるに違いない。

「わかつたよ。ごめん。もうこれ以上変な事は言わないよ」

未成がそつと手を合わせて頭を下げる。大希もこれ以上詰め寄るつもりは無く、腕組みをしてため息をついた。

「まあいいさ。本当に、そうだと信じたくなるような事件だつたしな。それじゃ、俺は帰るよ」

大希はソファーから重い腰を上げた。今度は健が昼食をこしらえて帰りを待つているころだらう。すぐに帰らうと思つた大希だが、一つ思い出したことがあつた。休憩スペースの入り口で立ち止まつて振り返る。

「……なあ、仕事が終わつて暇なら、ほんの少し飲みに行かないか？」

「え？……あ、もちろん！　でも給料日前で……」

どこか驚いたような顔をした後、すぐに頷きかけた未成だつたが、自分の懐事情を思い出してもつむく。その様子を見て、大希は小さく笑つた。

「いいよ。俺がおこるから。もちろん、俺もあんまり金は出せないけどさ」

「本当かい？　よかつた。なら行くよ。行く行く。なんだか大希、最近不満がありそうだしね。お礼に愚痴くらい聞くよ」

屈託なく笑う未成の言葉に、大希は先日のテレビの光景を思い出した。全く満足は出来なかつたが、酒の肴にはなるかもしねれない。大希は微笑み、小さく頷いた。

「ああ。頼む」

駅前、大手の居酒屋の隣にある小さな店舗。年老いた店主が道楽

で商売しているためか、この店はかなりおつまみの値段が安い。いつも大希や、彼らの友人はこの影に隠れた良心的な店で飲んでいるのだった。

座敷になつている席の隅に座り、二人は大手を避けてきた他の人々を見つめながらおちょこを傾けていた。焼き鳥の香ばしい匂いが店中を包み込み、畳の間はどこか家のようにくつろげる。カウンターに座れば、店の親父が嫌味も言わず愚痴を聞き、的確なアドバイスを授けてくれる。大手の込み具合に辟易し、この外装は少し汚れた店に入つてみる勇気が湧けば、この店に間違いなくハマってしまう。大希達はそういうクチだった。

「あの人達もどこか楽しそうだね」

ほんのりと頬を赤くした未成は、カウンターに座つて親父と話の花を咲かせている三人のサラリーマン達を見つめていた。大希はこながりした焼き鳥を口に運びながら微笑む。

「ああ。ああして俺や健、剣人もここで飲むようになつたからな。あの人達もちよくちよく来るようになるさ。大手みたいにわいわい騒ぐ雰囲気じゃないけど、そこがいいんだよな」

息をつくと、大希は隅に設置されているテレビを見る。ちょうどニュースが入つていて、見出しには『超光速物質の存在が立証』という文字が躍つていた。朝にそのニュースを一度見ていたが、やはりこの話題には惹かれるものがあった。

「なあ、未成はこのニュース見たか？」

「うん。もちろん見たさ。ニュースリノがついに超光速の物質として実証されたつてことでしょ？ 本当にすごいことだよ」

「ああ。ちょうど去年に報告されて、ついに今年実証されたつてわけか。この物質のお陰で、時間の逆行やワープの実在も示唆されたんだ。いやあ、感動的だな」

お酒で少なからず勢いがついていた大希は、そのまま先日から溜め込んでいた愚痴に走る。

「全くさあ、この前そういう感じのテレビを見てたんだ、俺」

未成は枝豆に手を伸ばしながら耳を傾ける。素直に聞きくと回つてくれた未成に気を良くし、大希はすらすらぺらぺら話し始めた。「深夜番組だつたんだけども、タイムトラベルについて議論するつていう話だつたから、俺ずっと楽しみにしてたんだよ。わかるでしょ？ 俺、インターネットで予習までしたんだぜ？」そしたらさ、その予習で得られた知識ぐらいいしかタイムトラベル可能派は言い出さなくてさ、否定派にコテンパンだよ。もう、完膚なきまでとはあいうのを言つんだらうね。こつちはわざわざ夜更かししてまで見てやつたつてのに、とんだ目にあつた。その後剣人や健にからかわるしさあ……もつとレベルの高い議論はできなかつたもんかね」ぐいとおちよこを傾けた大希を見て、未成は目を細めて優しく微笑んだ。

「それは大変だつたね。でも、ここのユートリノ実証がきっかけで、タイムトラベルが可能なものとしてこれから議論されていくんだよ。間違いなく」

おちよこを食卓に置いた大希は、未成の励ましを聞いて嬉しそうに頷いた。

「ああ。あのボケ老人のエセ科学者どもじやなくて、本物の科学者がまじめにタイムトラベルを議論する口が生きているうちに来るかもしれないって思つたらわくわくするな。やつぱりこいつ話題はいいよなあ」

天井を見上げ、しみじみと語尾を引き伸ばした大希。それよりさらにしみじみと、むしろ寂しそうにも見える目をして、未成は深く頷いた。

「ああ。きっとタイムトラベルはできるつて、言われるよつになるよ」

未成は、SFの話題にはさほど酔えなかつたようだ。彼のあまり好ましくない表情を悟つたのか、大希は一旦口をつぐみ、それから再び口を開いた。とりあえず話を変えることにした。本当に話したかった話題に。

「なあ、そんなことよりもつと氣になることがあるんだ」

「何だい？」

大希は周囲に氣を配る。カウンターの人々は気持ちよく飲んでいるのだ。こんな話を聞かせるのは悪い。そう思つた大希は、未成の方へと思い切り顔を近づけた。

「この前の遺体だよ。あれが俺じゃないにしても、不思議なことがもう一つある。何で消えたんだ？ それとも、やつぱりどこかに行つてただけなのか？」

あまりに急な話題転換に、未成は瞬間目を丸くした。しかし、ある程度予想はしていたことだつたから、その対応は柔軟だつた。彼も周囲に気を配り、手でかばいながら小声で答えた。

「消えたんだ、本当に。何にもない。行方知れずなんていう度を越してる、というのが結論だよ」

「そうか……消えた。俺達は狐にでも化かされてるのか……？」

彼は大してオカルトチックな話に興味を示すタイプではなかつたが、これまでの生き方に方針の転換を迫られているような気が大希はしていた。だが、未成は力強く首を横に振る。

「そんなレベルじゃないと思う。そんな、そこらへんに転がつてるような話の出来事じやないよ。これは」

普段は控えめなはずの未成が今に限つてはかなり力強い語調だつた。そこに田ざとく気がついた大希は、小さく心の中で小手に踏み込んでみる。

「なあ未成。お前、本当は何か知つてるんじゃないのか？」

未成はいきなり顔を上げて目を丸くした。ドキッとした、らしい。眉根にしわを寄せてため息をつくと、未成は静かに首を横に振つてみせた。

「そんなことないよ。僕が知つてる理由があるかい？」

「ああ。まあそうだよな……」

大希はぼんやりとした調子でとつくりを傾ける。その間にも、意識は消えてしまった遺体で頭がいっぱいだつた。いきなり未成が大

声を上げるまで、その調子は收まらなかつた。

「ねえ大希！ 溢れてる溢れてる！」

「あ！ うわあ、やつちまつた……」

小さいおちよこから溢れ、テーブルの上に光る焼酎。顔を見合わせると、二人はお互いに苦笑してしまつた。

結局一人は他愛のない話に落ち着き、結局十時頃まで飲み続けていた。その調子で長々話し続けるのかに見えたが、結局大希は健康優良児を地で行く青年だつたため、それ以上は飲まずにのんびりと帰り道に就いたのだつた。

「さあ、明日は仕事だしなあ、さつさと帰つてゆつくり寝るかな……」

住宅街の路地の中、大希は伸びをして夜空を見上げた。よく晴れた夜に月が映えている。大希はひんやりした気持ちのいい空氣に包まれながら、ほつと長々と息をついた。親友のこきげんな様子に、未成はやはり嬉しそうに微笑む。

「よかつた。愚痴を言つて少しは気分が晴れたのかな」

「ああ。大分助かつたよ。これでまた明日から、訓練に没頭できるや」

「頑張りなよ。こざという時が、いつ訪れるかはわからないからね」未成がそう言つて微笑んだまさにその時だつた。何の氣もなしに路地の分かれ道へと目を配つた時、思わず自分の氣が確かかどうかを疑つてしまつ光景が目に飛び込んできた。

「嘘だ……」

未成は茫然自失とし、呻きにも似た言葉を洩らした。その目の前には、二つの人影。向かい合つようにして立つてゐる。だがどこか不自然だ。どこが不自然かというと、一人の男は胸に向かつて腕を突き出し、もう一人の男はその背中から何か突き出でているのだ。間違いなく、殺人が行われたまさにその瞬間だつた。

大希も言葉を失つた。人死にを見たのは円満なものがわざかしか

ない。殺される瞬間を見るなど、かの事件ですら無かつた。凄まじい衝撃に、大希はしばしその光景を見つめていることしかできなかつた。

だが、大希も職務を思い出す瞬間がすぐにやつてきた。刃物を抜かれ、一人の男が倒れ伏した瞬間を見た途端、大希はその身を驅り立てる使命感が湧き上がつた。誓つたのだ。この世の悪をくじく警察になると。その警察になつた今、目の前で人を殺した男を放つておくわけにはいかなかつた。目をうんらんと輝かせ、大希はいきなり突進を始めた。

「お前！ そこで大人しくしろ！」

大希の吼え声に気が付き、手を汚した男が彼の方へと向き直つた。大希は目を細める。その男の顔を確認できないのは、ただ単に暗がりの中というだけのことと思つていた。しかし、そうではなかつた。その男は返り血を浴びたマスク、そして黒い頭巾を深々と被り、その顔を窺えないようにしてゐたのだ。

「サツか……？ いや、お前は……」

殺人者は大希と倒れている男とを見比べるような動作をした。その隙を突いて、大希は殺人者に向かつて鋭い蹴りを突き出した。しかし、やはり大希は酔つていた。その蹴りは見事に照準を外し、殺人者の肩あたりを捉えてしまつていた。威力も弱く、殺人者を突き飛ばすはおろか、痛みに呻かせることさえ叶わなかつた。

「俺の邪魔をするな！ 今村大希！」

「どうして、俺の名前を、知つてる！」

殺人者は鋭い拳を大希の鳩尾めがけて振り抜こうとする。大希は突きを外す要領でその拳を叩き落とし、素早く蹴り上げた。だが、これは殺人者が簡単にかわしてしまつ。そこから殺人者の動きは早かつた。大希を手で突き飛ばしてバランスを崩せると、そこにナイフを構えて一気に襲いかかつた。

「ぐあっ！」

ナイフは大希の横腹あたりを捉えていた。焼け付くような激痛が

腹から全身を駆け巡る。しかし、大希はそれしきのこととくたばるような人間ではなかつた。ナイフを掴んでいた殺人者の手首を掴み、思い切りその筋肉が薄い部分を狙つて殴つた。人間としての本能か、いきなり腕に危害を加えられて殺人者は大希に刺さるナイフを手放してしまつた。

「未成い！ 救急車頼む！」

「あ、ああ。わかつた！」

痛みで頭がもうろうとするのをこらえながら、大希はナイフを抜き放つた。せつかく止まつていた出血が蘇る。痛みも蘇つてきた。だが、余計に動かれて傷が広がるよりはずつとましだらうと大希は考えたのだ。救急車も上手く事が運べばすぐに入るだらう。大希はとにかく殺人者を取り押さえようと飛びだす。ナイフは奪つたのだ。後は自分が気を失うまでにかかる時間との勝負だとしか考えていなかつた。次の瞬間までは。

「うああ！」

乾いた銃声が周囲に響き渡る。それと同時に大希の肩から血が舞つた。衝撃に耐えられず、大希は道にもんどうり打つて倒れこんだ。腹と肩を襲う激痛に、今度こそ大希は敗北を知らされることとなる。男はゆっくりとそばまで歩み寄り、銃口を大希の額に押し付ける。大希は冷や汗が吹き出してくるのを感じた。殺される。大希は確信してしまつた。彼の身が硬くなつてているのは、怪我だけのせいではないだらう。息を荒げ、大希はただただ無慈悲な殺人鬼を見上げていた。

「お前は違う。邪魔立てするならこうしてやるが、黙つていればなにもしないでおいてやる。わかつたか」

それだけ言い切つた殺人者は、ゆっくりと額から拳銃を離した。大希が目を見開いたままでいる中、男は悠然とナイフを拾い上げ、拳銃を懐に収める。そして、その男はさも普段通りの仕事をしたかのように、口笛を吹きながら歩き去つていつた。

どうやら殺されずには済んだらしい。しかし、薄れていく意識の

中、燃え上がる悔しさだけが大希の中に残っていた。何とかうつぶせになり、起き上がろうとしながら大希は歩いて行く男の背中に手を伸ばした。

「この、野郎……」

しかし、その手は全く届かない。悔しさに顔を歪ませ、拳をアスファルトに打ち付ける。その痛みが、ほんの少しの時間、大希に倒れるまでの猶予を与えた。そして大希は被害者の顔を確かに見た。そして、これまで無かつたほどに驚愕した。

「そんな！ また……俺なのか？」

倒れていたのは、紛れも無く虚ろな顔をした自分だった。いよいよ大希は混乱する。頭の中がいろいろな感情でごった返し、血の足りなくなつた頭はすぐに限界を迎える。

「ちくしょう……どうなつてるんだよ。誰か教えてくれ、よ……」

大希は未成が慌てて駆け寄つてくる足音を耳にしながら、静かに意識を失つた。

大希はまたしても霧の中にいた。ただ、その霧はあまりに異質で、まるで演出に使うドライアイスの煙のようだ。そして、立っているのはまた時計塔の前。今度の大希はすぐに気がついた。

「今度も夢か……？」

夢だと思い当たつたはいいが、結局大希には夢から出る術がない。諦めた彼はその場にあぐらをかいて、横腹に手を当ててみた。傷はない。だが、刺された痛みも撃たれた痛みも思い出し、大希は顔をしかめてしまつた。大希は考える。その後自分はどうなつただろうか。夢を見ているのだから、死んだという事は万が一にもあるまい。無事に救急車で病院に運ばれ、輸血を受けたり、傷を縫われたりしながら一命を取り留めたに違いない。結論に至つた大希は、ため息をもらした。<sup>安堵のもの</sup>かというと、決してそれだけではない。

「あーあ。井上さんにどやされちまうなあ。酔つて犯人を取り逃がして、その上大怪我を負つただなんて……」

自分の足元を見つめて頭を搔く。誰からも鬼と恐れられている上司の目に付いたのは間違ひ無いだろう。目を覚ました途端に大目玉かと思うと、目を覚ましてしまつのもなかなか億劫だつた。だが、夢の中にいたところで、することも見つからない。全く困つたものである。大希は諦めたような顔で時計塔を見上げた。

「やっぱり起きなきやダメだよなあ。どうしたら起きられる？」

時計塔に聞いたところで何か答えてくれるわけはなく、相変わらずその文字盤は厳格に時を刻んでいた。大希は言葉も無くその文字盤の数字が移り変わつていくさまを眺めていた。五十九分、〇分、五十九分……。

「え、おい。一体どうなつて……」

大希は思わず呟いた。そのうちにも、どんどん時計の数字がめちゃくちゃに移り変わつていく。加速度的に時計が巻き戻つたかと思

えば、今度はゆっくりと進み始める。夢の中なのだから何が起こつてもおかしくはないが、いつたい心の奥底で何を考えているのか怪しくなる。訝しんで時計を睨みつけていたら、急に時計塔の足元が輝き始めた。大希はいよいよ言葉を失い、弾かれたように立ち上がつて後ずさりを始めた。その間にも時計塔の足元の光は青白さを増し、霧が急に濃くなつていく。大希は、これは夢だと言い聞かせなければ、まともにその光景を眺めることができなかつた。

急に光が失われ、今度は周囲を包んでいる霧」と闇に包まれた。その闇は大希に強い印象を植え付け消えていく。後に残つたのは、この世のものではなかつた。

ロボット。その姿を見上げた大希の頭にはすぐにその単語が浮かんできた。金属の関節がのぞき、白に塗装されたフレームを持ち、低い電子音を響かせているその様子は確かにロボットに見える。だが、その外見はあまりに凶暴だつた。三体のそれは、サソリにクモ、そしてカマキリをそれぞれ模しており、見ただけで萎縮させられてしまうだろう。

さらに困つたことには、凶暴なのは決して外見だけではないといふことだ。サソリの尾やハサミには銃口のようなものが取り付けられているし、クモはどんな攻撃をも撥ね付けそうな外見をしている。カマキリの腕は、全てを貫き破壊してしまいそうだ。戦うために生み出された、巨大、強大な機械達であつた。

そんな圧倒的な存在を前に、大希は恐怖し凍りついた。しかし何故か、初めて襲われる恐怖だとは思えなかつたのだ。大希は心の中で呟く。

……デジャ＝ヴュ？　いや。ここが夢の中なんだけどな……

既視感に恐怖が少し緩み、大希が目を細めたその瞬間だ。急にサソリが切れ長の目を光らせてこちらを睨む。同時にハサミを振り上げこちらに向けてきた。そのハサミの根元で光つているのは、ガトリング砲の銃口だ。それに気がついた大希は、咄嗟にその場から逃げ出した。轟音と共に銃弾が飛び、地面に亀裂を作つていく。大希

は必死に逃げた。甲高い電子音が響き渡り、エンジン音と金属音が混在した耳を塞ぎたくなるような音を響かせながらサソリ、そしてクモが動き出す。確かに大希の姿に狙いを定め、その眼を赤く光らせながら追ってきた。反対に大希は蒼白になり、抵抗もままならないままにただただ逃げ続けた。

「何で追つてくるんだよ！ 止まれ！ 止まれよ！」

既にこの世界が夢の中だということなど、頭から吹っ飛んでいた。生きたいという思いに任せ、大希は必死に走り続けた。無力で哀れな一人の青年に向かって、サソリ達の発した無機質な音が追いかけ る。

Follow the given command. Follow the given command. Follow the given command.

「何たよ！　来るな！」

大爺のヨゴレも嘘 べ、カソラ達は黒感覚に弱い ベバ。

大希の叫びも虚しく、サンリ達は無感情に迫りてくる。サンリの放った銃弾のせいで地面が砕け、大希は躊躇地面に叩きつけられてしまつた。それでも大希は、這いつくばつたままで一歩でも先へと進もうとする。振り返ると、サンリがその銃身を光らせ、こちらへ正確に狙いを定めているところだつた。

「……おひきさま」

その刹那。突如サソリ達の動きが固まつた。

Follow the given command

サソリ。クモの方は、必死に一步を踏み出そうとしている。大希は何がどうなったのかもわからず、尻を擦るように後ずさりをしながら、その姿を見つめた。サソリの目から光が消えた。クモの目からもなくなつた。途端、ただの置物と化したその一體はその場に崩れ落ちてしまう。肩で息をしながら、大希はぼんやりとそのガラクタを見つめていた。その時、いきなりカマキリがサソリやクモを引き裂き現れた。大希は再び飛び上がる。

「ああ！ 忘れて」

大希が言うか言わないかのうちに、カマキリはその鎌を大きく振り上げる。が、いきなり大希の目の前でカマキリもまた崩れ落ちた。その呆氣無い幕切れに戸惑い、大希は言葉を失つたままでその姿を見つめ続けていた。

「大希」

エタノールの匂いがわずかに漂う白い病室の中。聞き慣れた親友の声で、大希はようやく目覚めた。未だ霞んでいる視界の中で、大希は未成の姿を捉える。

「未成……？ あれ。サソリのロボットは？ クモも……カマキリも……」

すっかり混乱しきつたように見える大希の目を見て、未成は顔をしかめてため息をついた。

「何を言つてゐるのかわかんないよ。君は刺されて撃たれた後、病院に運ばれて緊急の手当を受けたんじやないか。あの夜から三日、大希はずつと意識を失くして寝込んでたのに。みんな心配してたよ」「み、みんな？」

大希は自分が寝かされていた白いベッド、そして腹に巻かれている白い包帯に目を落とす。右腕には点滴が繋がれている。ようやく大希は現実と非現実の区別が付き始めてきた。よくよく考えてみれば、あんな存在がこの世に、この久宇慈市に存在しているはずもない。大希は自嘲気味に小さな笑い声を上げた。

「そうか……あれは夢だったか。そうだ。夢だ夢だ」

ようやく普段通りの真っ直ぐな男に戻り始めた大希を見て、未成はほつと胸を撫で下ろした。いつものように小さく微笑み、彼の肩を叩いた。

「よかつた。やつとまともに話ができるそうだね」

「話？ ああ。そうだ！」

大希の脳裏に、倒れる寸前に見た被害者の顔が蘇ってきた。今度

ははつきりと見た。あれは自分だとしか言いようがない。街灯の元に照らされたその顔は、どこを取つても自分にそつくりだつた。大希は未成に詰め寄りたいところだつたが、点滴で動けないため首だけ向ける。

「なあ、被害者的人はどうなつた？ また俺に似てたじやないか！ 一体どういふことだか……」

未成もまさにその話をしようと思つてゐるところだつた。ただ、再び取り乱したこの様子で聞いてくれるとは思えない。彼の肩を叩き、髪をかきむしってゐる大希をなんとかなだめる。

「焦らないで。焦つたら、余計に次の話でびっくりするよ」

「あ、ああ。わかつた……」

大希は肩をすくめ、ゆつくりとベッドにもたれかかる。何もわかつていないうちから慌てたところでどうにもならないことは、彼も気がついていた。首を一、二度振つて、大希は未成の顔を見上げる。

「結局、あの後どうなつたんだ？」

单刀直入の質問。未成は慎重に話の展開を練つた。こちらも单刀直入に返せば、必ずや大希は驚くだろう。一応重傷を負つてゐるのだ。負担をかけるのは良くない。大希の急かすような目に愛想笑いで応えながら、未成は一言一言丁寧に話し始めた。

「いいかい？ 落ち着いて聞いてくれよ。まず、被害者が君に似ていたという話だつたけど、これには刑事部の方もいよいよ怪しがり始めたんだ。あ、これ以降話は隠匿されてる……隠匿する必要は無いんだけどさ、平凡に生きている人が信じてくれるわけがないからね、仕方ないんだ」

未成が一語一句確實に話していくものだから、話が非常に間延びした。特にせつかちな性質を持つわけではなかつたが、あまりの遅さに大希はいくらなんでもイライラさせられてしまつた。腕を組もうとして、改めて両腕が動かせないことに気がついて顔をしかめ、左手で軽く布団を叩きながら大希は眉を寄せた。

「前置き長い。その内容を教えてくれつて言つてんだぞ」

「ああ。『じめん』『めん』。色々な話が持ち上がったよ。あの死体が消えたのは、蘇つて、『じつ』して再び殺されたからだとか、僕が前に言ったみたいに、クローンがどうとか。うん。自分で言つてる分にはわからないけど、他から聞くとナンセンスに聞こえるね」

目を光らせ、真剣な様子で話を聞いていた大希だったが、未成の冗談に再び脱力させられる。

「だからあ。そういう『冗談はいらないから、さつさと先を話してくれよ』

「君に楽にしてほしいから、『じつ』の言葉を挟んで上げてるんじゃないか」

「そう思つてるなら逆効果だ。余計イライラするからな」

両手を挙げてとりなそつとする未成を、大希はばつさりと切り捨てた。未成はため息を洩らし、鼻頭を搔いた。怒られるようでは仕方がない。

「それならいいよ。わかった。で、これは指紋検査だけじゃ怪しいということになつて、ともかくDNAの検査をしてみよつと『じつ』とに決まつた。でも、また消えた」

「なんだつて！」

大希は素つ頓狂な声を上げた。未成は言わんこつちやないとでも言つかのように顔を曇らせ、大希の頭を小突いた。

「だから気楽に落ち着いていて欲しかつたのに……」

他のベッドでも病人が動き出している。二人は少し申し訳ない気分になつた。未成はさらに大希の頭を小突き、大希はすっかり小さくなつてしまつた。隣では、一人の患者がこちらを睨んでいる。未成は愛想笑いで頭を下げ、今度は大希に耳打ちした。

「まあいいか……最後まで話をするとな、結局その正体はわからなかつた。厳重に管理されているはずのDNA検体までなくなつたからね……」

「まさか。じゃあわかつたことは、結局あの遺体が確實に消えたことだけか？」

大希のうんざりしたような声に、未成は苦笑いで答えた。それから、二人は示し合させたくらいに同じタイミングで肩を落とす。本来はありえないはずの出来事がたくさん積み重なり、壁のように厳然と二人の目の前に横たわっていた。大希は唸る。今になつてみると、以前はどれだけ突きつけられている不可思議をかわす手段があつただろう。今は受け入れる以外に無いように思えた。だが、大希は認められなかつた。健もこの手の話題には相当頭の硬い奴だと彼は思つていたが、大希も十分頭が硬かつたというわけだ。彼は肺から全ての空気を搾り出すようにため息をつく。

「知らねえや。もういいよ。そもそも、これは考えるのは未成達の役目であつて、俺が考えるようなどじやない。これ以上はもう考えない。考えれば考えるほど、頭がこんがらがりそうだ」

「え。待つてよ。君にも十分関わりがあるんだから、君にも一緒に考えて欲しいんだけど……」

未成の言葉を潔さの無いものと受け取り、大希は顔をしかめた。  
「嫌だね。こんな、よくよく考えてみれば、こんな……話、向き合う気になれない」

馬鹿馬鹿しいと言えなかつたのは、警察官としての矜持があるからであつた。怪生の類とさえ思われるような存在でも、死んだには違ひないのだ。大希はがくりとうつむいた。

「くそ……俺は一体どうしたらいいんだよ？　被害者を氣の毒に思うことすら難しくなつた。被害者のために、何が何でも捕まえようと思つところを、いきなり自分は加害者の動機を探つてる。順序が違つんだよ。何であれ被害者の為に全力を尽くすのが当然だし、動機はともかく、まず加害者を捕まえないと話は始まらないんだ。……わかつてることなのに、全部がおかしくなつてゐる。俺と寸分違わない外見だつてことで」

搾り出された大希の言葉に、『犯罪者を捕まえられなかつた』という責任の重みを感じた未成は黙りこむ。励ましてやりたいと思うところだつたが、未成にはふさわしい言葉が見つけられなかつた。

「あ、えつと……その……」

口ごもる未成は、頭を搔いたり、手を揉んだりすることしかできなかつた。何か言おうと口を開いたり、断念して閉じたりしているうちにも、気まずい時間が経っていく。そんな時に、柳剣人は現れたのだ。

リングが詰まつた綱をぶら下げながら、剣人は大股に大希の横までやつてきた。大希は顔を向けず、横目で剣人のことを捉えた。彼は黒いスラックスに白い長袖シャツ、そしてまた黒いベストという全く可愛げのない格好だ。この男はあまりカジュアルというものを知らないのだ。そんな生真面目な男がやつてきたところで、この暗い雰囲気は晴れない。

「剣人か。こんなところまでどうした？ 非番だつてのに」

剣人は口元にうつすらと笑みを浮かべ、そつとリングを顔の高さまで掲げた。そしてさつさと病室の隅の椅子を一つ取り、未成の隣に並べて座つてしまつた。それから、無造作にリングをテーブルの上に置く。

「差し入れを持つてきてやつたんだ。理由は一つに決まつてるだろ」それから、剣人は開け放した扉の向こうに目をやる。何かを待つている様子だ。大希や未成もつられて廊下に目をやる。一時流れる静寂。それから三人の目の前に現れたのは、一人の女性だつた。小さなメモを手に持つて、おそらく病室の名簿を確認しているのだろう。その丸い目をきょろきょろとさせている様子は、まるでリスのようだつた。剣人は一瞬愛おしそうな目をして、それからその女性に向かつて手招きする。

「おーい、さくら。こっちこっち」

さくらと呼ばれた女性は、すぐさま剣人を視界に捉えた。自分や剣人の幼なじみであり、剣人の恋人でもある彼女。その明るい笑顔でこちらまでやつてくるのだろう。大希はてつきりそう思ったが、そうはならない。彼女は頬を軽く膨らませ、長いスカートをなびかせながらやつてきた。

「置いてかないでよ。結局病室を聞き直す羽目になつたんだからね」  
デニム生地のロングスカートにブーツを履き、クリーム色のカーテン

「ディガンを羽織った彼女は、素朴な中にも育ちの良い雰囲気を醸し出している。その表情のどこかにあどけなさを残し、それがまた彼女の雰囲気を強調していた。そんな彼女を愛している剣人は、素直に頭を下げてしまう。

「悪い。さつさと大希の顔を見ておきたくてさ」

「はいはい。わかりました、つと」

さくらにしても、これ以上に責める気はない。肩まで伸びた髪を

背中に流すと、さつさと剣人の隣に腰かけた。

「……二人とも、元気で何より」

会つた途端に痴話喧嘩を見せつけられ、大希はすっかり鳩が豆鉄砲を食らつたような顔になつていた。気付いたさくらは、肩をすくめて上目遣いをする。

「ごめんね。気を使わせちゃつたかな。お見舞いに来たのに。ほんとは私が言つセリフよね、それ」

戸惑いどおしの大希だが、久宇慈高校のミスコンに推薦されたような美人に謝られては、男として許さないわけにもいかなかつた。大希が引き出されるように頷いてしまうと、さくらはにつこりと笑い、手に提げていたかばんから紙皿と果物ナイフを取り出し、リンゴの網を開け始めた。

「待つてて。今リンゴむくから」

「あ、ありがとう」

大希は頬を緩め、さくらの手の内でリズミカルに動く果物ナイフを見つめはじめる。さくらはただ料理が得意なだけではなく、こうした細かい作業も上手だ。そこには彼女の気配りができる性格が現れている。美人で性格にも優れているとなれば、剣人のことを誰もが羨むのは当然だった。

「さくらさんと剣人さん、式はまだ挙げないんですか？」

カップルの隣で気恥ずかしくなつたのか、未成は二人の方を見ない。改めて尋ねられて、剣人とさくらは向かい合つてみた。もうすでに、見つめあつただけでざきまきするような初々しさはなくなり、

一緒にいて当たり前と一人は思うようになっていた。

「まあな。付き合いだして九年か。そろそろ結婚してちょうどいい頃かもな」

「私は大学を出た頃からずっと言いつてるけどね。結婚しよう、しようと。結局は剣人の肚次第なんだよ」

さくらが剣人の瞳を覗き込みながら言いつと、彼は苦笑いしながら頭を搔いた。

「だつて、まだ十分に生活資金が貯まってなかつたからさ……」

「そういう慎重なところはあなたのいいところだけど、私だつて稼いでるんだから、こいつの時には思いきつてほしいな」

「そうか？」

しばし相思相愛のやりとりを見つめていた大希だが、しだいにうるさく感じるようになつていて。普段は眞面目でお堅いところもある一人のためか、なぜだか余計に鬱陶しかつた。

「愛し合つてるのはわかつたから、いい加減にしてくれよ。お前たちは俺の田の前でイチャイチャするためにここまでわざわざ来たのか？」

ようやく一人は我に返つた。笑顔を引きつらせ、ぎこちない動作で大希の方に目を戻す。剣人は頬を赤らめた咳払いと大希の質問に答える。さくらは目を泳がせながら、切つたばかりのリング「ゴを差し出した。

「ごめんね。もちろんそんなつもりは無いよ……この話題は一人で家まで持ち帰るから、許して」

「ああ。勘弁してくれよ？」

大希は眉にしわを寄せたまま、さくらが差し出した色濃く甘そうなリング「ゴに手を伸ばす。このこじろづつと彼女がいないものだから、二人の仲睦まじい様子を見るのは面白くなかったのだろう。嫌そうな顔を少しも崩そうとしない。剣人とさくらは困った顔で目配せするしかなかつた。

そんな時に助け船を出せるのが未成なのだ。三人の顔をぐるりと見渡した彼は、柔軟に微笑んだ後、リングを一つ頂戴しながらさくらに尋ねた。

「じゃあ、さくらさん達は一体何をしにここまで？」

それを聞いた途端、さくらはぱつとその顔を輝かせた。目で感謝を必死に伝えながら、さくらは上ずつた声を出す。

「う、うん。そうそう… そうよ。私達はとても心配な事があつたからここまで来たの。全く、私達たら何してんだろ」

そのわざとらしい言い回しといったら、大希はさらに視線を強めてしまつたほどだ。さくらは苦笑いをひきつらせ、さすがの未成もこれを助けるのは無理だと思つ。だが、歴戦の大将は小さな小さな突破口一つで勝利を得てくるのだ。

「そうだな。本当はお前に忠告をしに来たんだ。お前が思つた以上に元気だつたから、一瞬忘れそつたけどさ」

「忠告？」

大希はいきなり目を鋭くした剣人に怪訝な顔をした。その目は全く心当たりが無いらしく、疑問の色が浮かんでいた。それを見て取つた剣人は舌打ちをして、出し抜けに大希の左肩を掴んだ。

「いてえ！ 何すんだよ！」

反射的に剣人の手を払い落とし、そのしかめつ面を睨み返す。その視線に久宇慈の大将はびくりとも動じず、にべもなく言い放つた。

「その痛みを忘れんな。これ以上の無茶は絶対にするなよ。… 親父みたいになるぞ」

剣人が言い放つた横で、さくらも控えめに頷く。大希は目を瞬かせた。久方振りに蘇つてくる過去の記憶。心に深く刻み込まれたそれは、そして自分や剣人、そして健が警察官を目指すきっかけだつた。そして、この世の理というものを付きつけられた瞬間でもあつた。大希は困つたように肩をすくめ、自分の腹に巻き付いている包帯に目を向けてた。

「切り替え早いな。結婚するしないの話の後で、いきなりその話を

持ち出すかよ、普通」

「これくらい切り替え早くないと、大将の仕事はやつていけないからな」

不敵に笑つてみせた剣人と、感心した笑みを浮かべた大希。その二人の間に交わされる感情のやり取りを読み取れない未成は、交互にその笑みを窺いつつ、申し訳なさそうに声をかける。

「あの……その話、詳しく聞かせてくれないですか？」

テーブルに片肘ついていたさくらが、不思議そうな顔で未成の目を窺う。

「あれ。あの時結構なニュースになつてたんだけど、やっぱり転勤してきたばかりじゃわからないか」

未成は目を泳がせ、少々うろたえた様子だ。何の気なしに言つたつもりだったが、変に困らせてしまつたことに気づいたさくらは慌ててとりなそとする。

「『ごめん。そんなに悩まなくていいよ。話しても減るものじゃないし、今話すから。ねえ？』

さくらから送られてきた視線を受け取り、剣人は静かに頷いた。

その時、やたらと大きな音で病室の戸が開く。相部屋の人々から迷惑そうな目を一身に受けっていたのは、空井健だつた。一番来て欲しい人間がやつてきて、大希は満足げに微笑む。

「ちょうどよかつた。待つてたんだ、お前のこと」

「は？ 待つてた？ 何のこと？」

スーパーで買つてきたらしい詰め合わせセツトをぶら下げ、健はぽかんと口を空けた。前も後ろもわかつていらない健に、さくらは指を振りながら説明した。

「今から、この来栖未成くんに私たちが共有している思い出を話してあげよつと思つてゐる。そこにちょうど役者が出揃つたつてわけ。オッケー？」

しばらく首を傾げていた健も、大希、剣人、さくらの表情を見回

していろいろうちによつやく話が飲み込んだ。

「ああ、あれか。そりやあ、俺も必要だよな」

健は椅子を取り上げ剣人達とは反対の側に座った。それを確かめた大希は、首を捻つて未成の目を見つめる。

「俺達が今こうして警察をやっているのは、今から話す事件がきっかけなんだ」

その時彼らは小学四年生、この世の不条理など知らない無垢な四人だった。その時既に現在まで繋がる絆は作り上げられており、よく一緒に行動していた。これより始まる事件が起きた日も、四人は変わらず一緒に下校していたのだ。

「ねえ、大希つて、好きな子には意地悪するの？」

人通りの少ない住宅街に入るやいなや、さくらがランドセルを背負い直し、気分良く飛びはねながら尋ねる。それはあまりに唐突過ぎ、大希は思わずつんのめつた。

「どうしてそんなの聞くんだよ！」

大希は歯噛みしてもどこ吹く風、さくらはその丸い目で大希の困りきった顔を見つめ、体を傾け全身いっぱいに疑問符を浮かべてみせる。

「今日ね、友だちと話したんだ！ 彰が由紀ちゃんのほっぺたつね つたり、髪の毛引っ張つたりするの、もしかしたらそのせいじゃないかな、ってね！」

口をつぐんでむつとした口元を作り、大希は目を細くした。確かに、彰はいたずら好きだが、引っ込み思案の由紀に対しては泣かせてしまうほどひどかった。女子たちの言葉もどこ吹く風、日ごとに様々な嫌がらせをしている。そのうち先生にも注意されそうだ。その姿を思い浮かべ、大希はゆっくりと首を振る。

「あいつはそうかもしない。でも、俺はいろんな人から『嫌われるだけだから止めておけ』って言われてるから絶対にしないよ

「ふうん」

納得した顔で頷くと、さくらはそのまま大希の後ろを歩いている剣人や健に向かつて尋ねた。

「剣人や健は？」

「俺達もやんないよ。嫌われるのやだし」

「みんないい子なんだねえ。よかつた」

田を丸くした、さも心外という健の顔を見て取ったさくらは、腕組みをして何度も頷いた。愛嬌のある可愛らしい振る舞いをじっと見つめながら、剣人はやりと笑つた。

「ま、さくらは心配いらないな。さくらをいじめたりなんかしたら、他の女子が許しちゃいないし」

「そうそう。まあ、さくらはかわいいから、気になつてる奴は多いと思うぜ」「うーん」

大希が言うと、さくらは頬を染めながら髪をくしけずつた。女友達からかわいいと言われるのに比べて、幼なじみの男の子からかわいいと言われるのはやはり照れくさかつた。十字路にさしかかりながら、さくらははにかむ。

「褒めてくれてありがと」

だが、不穏とはこんな平穏を引き裂いて現れるものだ。十字路の影から現れた軽トラック。さくらは慌てて足を止め、道を行くトラックをやり過ごそうとした。危なくひかれてしまいそうで、さくらは冷や汗を拭つたが、なんとそのトラックはさくらの前で停まった。さくらは目を丸くし、恐る恐る首を傾げた。

「え、何？」

さくらは逃げ腰だつた。知らない人に付いて行つてはいけないと教えられている。声でもかけられようものなら、さくらは大声を上げながら逃げようというつもりだつた。だが、声さえかけられなかつた。いきなり運転席のドアが開いたかと思うと、田出し帽をかぶつた、体格のいい一人の男が飛び出し、いきなりさくらの両腕を掴んだのだ。凍りついてしまつたさくらから声は出でこない。そのまか弱い少女はトラックの暗い荷台の中に押し込まれてしまつた。

「待て、さくらに何するんだよ！」

そこで黙つていなかつたのは大希だつた。古参の機動隊である父

からは、『危ないことには首を突つ込むな』と釘を差されていた。

しかし、昨日ヒーローショーに連れていくつてもらつて昂ぶつていた正義の心は収まらない。剣道で磨いた身軽さを生かして、荷台の扉を閉めようとしていた男に飛びかかる。そのまま踏み込みで鍛えられた足を男に叩きつける。不覚を取つた男は地面に突き倒された。身を翻し、大希はもう一人の男に向かい合おうとする。

その瞬間に拳が飛び、大希の鳩尾に叩きこまれた。所詮は小学生、大の大人に敵うわけがなかつたのだ。吹つ飛び、もんどり打つてうつ伏せに叩きつけられる。抵抗できなくなつた大希の体を掴み上げると、先ほど蹴倒された男は、恨み返しとばかりに大希の頬を一度殴りつけた。

「大希！」

さくらは荷台の奥から飛び出そうとする。だが、大希の鳩尾を殴つた男は懐からナイフを取り出し、その目の前に突きつけた。

「出でくるな。一度と人前に出られなくしてやるぞ」

頬を切つ先で撫でられたさくらは震え上がり、蒼白な顔で引き下がつた。それを確かめた男は、大希の肩を踏みつけているもう一人の方に振り向き、そして鼻を鳴らす。

「ガキに向かつてよくやるぜ」

「ああ、生意気なガキはこうしてしつけしてやらないとな！ 親の顔を見てやりたいぜ！」

不意打ちは相当男を立腹させたらしく、大希は既にボロ雑巾のようになつて横たわつていた。その顔へ、男は歯でも折つてやるうと足を振り上げた。

そこで黙つていられないのが、クラス一クールに振る舞いつつも、クラス一友情に厚い剣人だつた。始めは起こつた出来事に戸惑い動けなくなつていたが、大希が為す術もなく叩きのめされていのうちには、その心の内に火が付いたのだ。

「やめろ！」

叫びながら飛び出し、剣人は素早く男の襟首を掴んで引つぱる。

片足立ちの姿勢になつていた男は、いくら体格がいいといえどもバランスを崩した。だが、やはり剣人も敵わなかつた。何とか窮地を救つたはいいものの、今度は剣人が襟首を掴まれ、なんとさくらのいる荷台に彼も押し込まれてしまつたのだ。さくらをナイフで脅した男が、もう一人に向かつて呼びかける。

「そいつもこの中に入れる！ こいつらからも身代金は取れるだろ」「危なくねえか？」

「どうせ見られてるんだ、そいつもまとめて突つ込め」

大希を掴み上げた男は頷き、荷台の中に放り込んだ。その有様に、さくらは声にならない悲鳴を上げた。それから、男はもう一人の姿を探し始める。

「おい、あいつはどこだよ」

大希に突き飛ばされた方の男が口走つた時、いきなり甲高い音が鳴り響いた。

「うわ！ 何だ！」

男は音が鳴り響いている車の前方へと走る。そこには、鳴り響く防犯ベルを取り落とした健がいた。思わぬ事態に、焦つた男は逆上した。

「てめえ！」

「わ、わあ！」

元々インドア系で、その時まだ臆病な所があつた健。それでも小さな勇気を振り絞つての行動だったが、男の圧力に耐え切れずに踵を返して逃げ出そうとした。しかし、慌てた健は足をもつらせ転んでしまつた。そんな健をつまみ上げ、男はその歯を見せた。

「面白いことしてくれんなあ？ お前もまとめて連れてつてやる。後で見てろよ」

「や、やめて！ お願ひ！」

当然耳を貸すはずもなく、男は健もトラックの中に放り込んだ。扉を固く閉めると、男達は運転席に飛び込んだ。ちらりとサイドミラーを覗くと、一人の女性が軒先で息を呑んでいるところだつた。

「やべえ、見つかった！ ずらかれ！」  
男はいきなりアクセルを踏んだ。

さくらは暗い車内で泣き叫んだ。ナイフを付きつけられ、幼なじみの大希が叩きのめされた。このトラックの行き先はわからない。『誘拐』されたのだ。恐怖に惑い、さくらは取り乱して泣き叫ぶ。「出して！ ここから出して！」

健も隅で膝を抱えてすすり泣いていた。大希は虫の息で起き上がり、とてもさくらの事をかまつてやる余裕など無かつた。さくらの悲鳴は強くなるばかり、息をつまらせ苦しそうに喘ぎながらも、さくらはその小さな拳をトラックに叩きつけ続けた。最早普通ではなく、そのまま気が違つてしまいそうだった。

「さくら、落ち着け」

唯一他人に気を配る余裕があつた剣人は、さくらの肩に手を置き、何とかなだめようとする。しかし、既に周りが見えなくなつていたさくらは剣人を大希の方に突き飛ばす。

「離して！」

剣人はたださくらをなだめようとするだけではどうにもならないことを悟つた。痛みに呻く大希を申し訳なさそうに一瞥し、今にも壊れてしまいそうな彼女を見つめた。気の毒だと思う感情と共に、もう一つの感情が浮き上がつてくる。その感情に従つた剣人は、喚き散らすさくらを抱き寄せた。

「さくら、落ち着け。泣いたって……疲れるだけだ」

急に感じた他人の暖かさに惑い、さくらはぶるりと体を一回震わせた。剣人はさらに抱きしめる力を強くする。

「さくらの事は俺が守るよ。きっと助けだつてくる。そうだ。大希のお父さんが来てくれるかもしねれない」

「大希の、お父さん？」

さくらがオウム返しにすると、剣人は強く頷いた。ときおり剣人や大希が所属する剣道少年団に足を運んでくる大希の父親、今村竜<sup>いまむらたつ</sup>まさ

将。その凄まじい名に全く恥じない剣士で、全日本大会でも常にベストエイトに残り、昨年は準優勝を果たしたことさえある経験の持ち主だった。剣人は、その姿を思い出しただけで安心できる気がした。

「ああ。すっごく強いんだ。あんな奴ら、十秒で参ったって言つよ剣人の力強さに、さくらの呼吸も少しづつ落ち着き始めた。自分から剣人にしがみついたさくらは、そのわずかな体重を全て剣人に預けた。

「うん……私、信じる」

「そう。信じようか」

さくらの重みを感じながら、剣人は目を閉じ、憧れの剣士に思いを馳せていた。

トラックは、港の空き倉庫へ入るうとしていた。

「そこに入つてろ！」

港前の廃倉庫に連れ込まれた途端、四人はナイフで脅されながら狭い一室へと追いやられた。埃のかぶつた机やパソコンが雑然と散らかっていて、長い間人が入っていないことを思わせる。四人は今まで想像もできなかつたひどい空間に、ますます気落ちしてしまつた。そこへ追いうちをかけるように、男が扉を思い切り閉めきつた。その鉄が軋む音、ぶつかる轟音に四人は同時に飛び上がる。

「すつごく古いこのパソコン。何年前のだろ……」

健は恐怖を紛らわそと、目の前に並ぶパソコンを見て、キーボードを適当に打ちながら首を傾げる。そんな思いに全く気付かない大希は、疼く全身に苦しみながら顔をしかめる。

「そんな事どうだつていいだろ。まずはこの状況をどうにかしないと」

「どうにか？　どうにもならないじゃないか。……助けを祈るしか無いよ……」

健はキーボードを脇へと押しやりながら大希を睨み、そして脱力してため息をついた。こんな所で口論したところでどうにもならないことは、誰もが共通して納得していた。さくらは隅で膝を抱えて座りながら、窓から見える男の姿を怯えきつた眼差しで見上げる。

「どうして私たちがこんな目に遭わなきやならないの……？」

剣人はさくらの隣に腰を落ち着け、ほんやりと思案を巡らせた。その活躍に憧れて、様々なものを見る刑事ドラマや探偵アニメ。たまに取り扱われる誘拐において、その理由は単純明快なもののが多かつた。不幸なことに、さくらの出自はその理由にすっぽりと当てはまるのだ。

「それは、さくらの家がお金持ちだから。だろくな

城家。<sup>しろ</sup> 住む家は立派だが、祖父母を含めた五人暮らしならじく当

前の広さだ。服も友達と同じようにキャラクターがプリントされたものだとかを着ている。車で学校の送り迎えとか、そういう金持ちじみたことは全くなく、毎日大希や剣人と元気よく歩いている。その暮らししぶりは大して周囲と変わっている様子は無い。しかし、父は若くしてとある企業の社長を務めており、金持ちであるに違いないのだ。剣人の呟きを耳にして、さくらは鼻をすすつた。

「ごめんね。剣人や、みんなに迷惑かける……私のお父さんのせい……」

「そんなことを言つたらだめだ。さくらも、さくらのお父さんも全く悪いない。全部悪いのはあいつらなんだ」

剣人は自分で自分がわからなくなつていた。怖いと思つているはずなのに、さくらの隣にいるだけで言葉がするする出てきてしまう。そして、その言葉は確実にさくらを勇気付けられているようなんだ。さくらはようやく笑顔を見せた。

「ありがとう。剣人つて、とっても優しいよね。友だちは剣人の見た目をほめてるけど、剣人の一番いいところは優しさなんだって、私が知つてるんだ」

剣人はどつきりした。心臓がぐつと締め付けられるようだつた。どうしてこんなに苦しくなつたか、これまた剣人は自分がわからなかつた。その戸惑いを押し隠し、剣人は小さく笑つてみせた。

「よかつた。いつものさくらに戻つたな」

「うん」

二人は自分達が置かれている状況も忘れ、くすくすと笑い始めた。それを大希は感心しつつも、うんざりしたような顔で見つめた。

「元気になつたのはよかつたけど、少し安心しそぎじゃない？俺達はさらわれたまんまだぞ？」

大希の言葉で現実に引き戻された二人は、ため息をついて顔を曇らせた。

「そうだよな。ごめん」

剣人とさくらが揃つて頭を下げる同時に、地面に耳をつけるよ

うな格好をしていた健が急に三人を制する。

「しつ！ このひび割れから、あいつらの声が聞こえてくる……」

三人は息を殺し、健は目を閉じ外の音に集中し始めた。

「ああ、城行成さんですか？ 今ねえ、お宅の娘さんと、その友人を預かっているんですよ」

その声は全くおかしなものになっていた。アヒルにも似た、妙に上ずつたその声は、口から発せられていないようさえある。あまりに珍妙な声に健は首を傾げる。ちょっと顔を上げてみると、男達は携帯電話と大きなスプレー缶を交換しているところだった。健は再び耳をすませる。

「娘は！ 娘の友だちは無事なんですか！」

オンフックにしているのだから。さくらの父の優しい声色も聞こえてきた。

「ああ、今のところ無事ですよ。そして、あなたが我々の要求を呑むなら、この先も無事ですよ」

さくらの父の、ほつとしたため息が聞こえてきた。それから、感情を抑え込んだ、無機質ながらも苦しげな声が聞こえてくる。

「一体、何が目的なんですか」

「何が目的？ 決まっているでしょう。あなたからまだ貰いきつてない『退職金』ですよ」

「な、何ですか？ 『退職金』？ まさかあなた達は……」

さくらの父は何かに思い至ったようだつた。ほんの少しだが、電話越しの雰囲気が強くなつたように健には感じられた。

「どうして娘やその友だちをさらうんですか。逆恨みじゃないですか！ セクシャルハラスメントや飲酒運転を繰り返すような社員を置いておけるほど、私の任せている支社に余裕はありません！」

「おつと、もうこいつん言つてみろ？ お前の可愛い娘の爪、一枚一枚剥がしてやううか。この電話越しにぎゃんぎゃん泣きわめく声を聞かせてやるうか？」

「ま、待ってください！ それだけは、娘を傷つけるのだけは……」

健はこれ以上聞いていられなかつた。目を固く閉じて、唇を噛みしめながら耳を離した。考えただけでもむごたらしい。健は身震いした。

そんな彼の様子を機敏に感じ取つたのか、さくらはひどく怯えた顔で尋ねる。

「どうしたの？ 何か言ってた……？」

健は慌てて首を振つた。違和感を持たれることは避けねばならない。ただその一心で、彼は平静を装つた。

「ううん。みんなには何もしないって」

やはり先ほどの顔をしつかり確かめていたからか、三人とも少し訝しむような目をしていた。健は唇を噛んでうつむく。何とかみんなで前を向けるようになつてきたところだ。自分がその雰囲気を壊すわけにはいかない。自分に言い聞かせた健は、努めて明るい笑みを浮かべた。

「さくら。大丈夫だつて。何にも起きない。俺達は、助けが来るまで我慢してればいいんだよ。わかる？」

大希は健の思うところを知つた。その心意気を汲んで微笑む。

「ああ。そうだな」

四人が励まし合つて恐怖を紛らわしている、まさにその時だつた。外で男が騒ぎ出した。何か筒のような物が投げ込まれ、つんざくような音を立てて破裂した。大希達は思わず耳を塞いでしまう。それは外の男達も同様で、その隙をつき、五人の警官達が倉庫に飛び込んできた。ふらつきながら、犯人は五人を妨害しようとドラム缶を転がしたり、一人で木箱の中身をぶちまけたりと、ここに至つて往生際の悪いところを見せている。

「助けがきた！」

「頑張れ！」

さくらと剣人は窓にしがみつき、五人の警官が犯人の妨害を乗り

越えて迫る様子を応援し始めた。健はおつかなびっくり、窓枠から目から上だけを出して眺めている。そして、大希の目は一人の機動隊員に注がれていた。

「お父さん？」

銃を構えて先陣を切る、竜を思わせる目をした警官。確かに大希の父、竜将だつた。ドラム缶を飛び越え、リンゴを蹴り払い、竜将はその目に激しさを宿らせ駆けていた。その勢いに負け、勝ち目がないと踏んだ犯人たちは、ついに四人がいる部屋に飛び込んできた。さくらは思わず悲鳴を上げる。

「来い！ ぶつ殺すぞ！」

つばを飛ばし、目を飛び出しきそうなほどに見開いたその表情に、四人は再び縮み上がるがつてしまう。そろり、そろりと四人は男達の方へと歩き出していく。人質にとつて、何とかこの場を凌ごうとでもいうつもりなのだろう。そうは問屋がおろさない。その背後には、既に竜将が追いついていた。拳銃をぴったりと構え、真っ直ぐに男の胸を狙っていた。

「止まれ！ これ以上四人に手を出すな！」

「う……」

男はナイフを手にぶら下げたまま、竜将を睨みつけた。だが、竜将はそれをさらに上回る圧力をかけた。その威圧感に耐えうる人間など、わずかしかいないだろう。男達は急に震えだした。

「う、うわああ！」

竜の圧力を前にして、人は狂わずにいられない。金に困つて思いついた犯罪。正義というものの強さを舐めていた男達は、とうとう自暴自棄になつた。

「ちくしょう！」

大希に蹴飛ばされた方の男が飛び出し、ナイフを持っていた男が思い切りそれを投げつけた。一瞬飛び出してきた男に気を取られ、竜将はナイフに気がつくのが一瞬遅れてしまった。避けられず、竜

将はその右手の甲にナイフを受ける。さくらが悲鳴を上げた。

彼は鋭い痛みに目を見開き、拳銃を取り落としてしまう。それと同時に、飛び出してきた男が竜将に体当たりを食らわした。痛みでその他の感覚を奪っていた竜将は、いとも簡単に突き倒されてしまった。目を血走らせ、とうに正気を失った男が、ナイフの代わりに竜将の落とした拳銃を取り上げる。

四人が凍りついた。絶望した。倉庫に響き渡る音と共に、竜将は電気ショックを受けたかのように跳ね上がる。違うのは、鮮血が一気に噴き出したことだ。四人はもちろん、犯人さえも今しがた起きた出来事を飲み込むことができず、呆然としてしまった。そこに四人の警官が飛びかかり、容易く犯人を取り押さえた。警官がのしかかる中で、犯人はついに気がつく。

「ああ……やつた。やつちまつた……」

抵抗の色も示さず、男達はいとも簡単に拘束された。引っ張り立たされ、まだ少年らしさを残す警官二人に悄然と連れられていった。その様子を呆然と見つめていた大希は、急に鼻を付いた血生臭さに現実へと引き戻された。

「お父さん！」

大希は固まっている三人を放つて飛び出し、虚ろに天井を見つめている父に駆け寄った。胸元からは血が今も溢れ、彼の命運が尽きたことを明らかにしていた。そんな事を認められるはずもなく、大希は必死に父の肩を叩いた。

「お父さん！ お父さん！」

「大希……か？ ひどい顔だな……許せない」

今まさに自分が死のうとしていても、竜将は大希の父親だった。その父親としての使命感が彼を逸らせ、呆氣無く致命傷を負わせたのはこの世の理不尽としかいう他にないだろう。大希は目につづり涙を浮かべ、父の肩を必死に叩いた。

「そんな事より病院！ 早く手当てしないと

「大希」

父の声と、そしてもう一人の声が重なつた。見上げると、そこには父の同僚、井上勝が立つていた。普段の強面は歪み、哀れみと悲しみ、そして同情が入り混じつた感情を隠しきれていなかつた。

「多分、お前の親父はもう助からない。黙つて、最期の言葉を聞いてやれ。」勝は背を向ける。「勝手に先走るからだ。だから参加はやめとけつて、言ったのによ……」

憎まれ口は震えていた。鬼の涙を、竜将は鼻で笑う。

「お前らしくないな……そこのみんなもこっちに来てくれ」

剣人はずつと目を見開いて、さくらは剣人にはがりついて泣きじやくり、健は放心した顔でやつてきた。先に来ていた大希と共に、四人は自分たちのせいで、大希の父親が死のうとしていると自分自身を責めていた。責め続けていた。それを読み取つたのか、竜将は小さく息をついた。

「自分を責めるな。悪いのは父さんなんだ。君たちを助けたい、助けたいと思って、ちょっと焦りすぎたんだよ。油断してたのかもしない。日本で一番になったからつて……」

「ごめんなさい。」めんなさい……

さくらは呪文のように唱え続けていた。竜将は血塗れの手でさくらの肩を叩く。

「だから……さくらちゃんのせいじゃない。他のみんなのせいでも、ない……悪いのは、みんなをさらおうとした馬鹿な男達だ。職務怠慢で辞めさせられた逆恨みなんて、人間としてみつともない。みんなは、絶対そういう人間になるなよ」

四人は沈黙していた。竜将は眉根にしわを寄せてみせ、少し強い口調で迫る。

「返事は？」

「は、はい」

「よし。それから、君たちは本当によく頑張った。怖かつただろう？ それなのに、みんなはよく頑張ったよ。今日頑張った事は絶対に忘れないようにしなさい。これからもきっと頑張れるはずだ」

「はい」

竜将は一度目を閉じて息を吸い込み、息子の顔をしかと見据えた。  
「大希。もう一度言ひ。絶対に自分を責めるなよ。父さんは死ね  
ど、それをずっと引きずり続けるな。父さんは誇らしげ。お前たち  
の為に死ねたんだ。モウロクして、お前や、嫁さんに迷惑かけなが  
ら死ぬよりずっといい……」

「何言つてやがる。死んだら元も子もねえだろ？」「  
すかさず勝は咳いたが、やはり竜将は鼻で笑う。

「そういう事は、しつかりと怒つて言えよ。そんなんじゃ迫力ねえ  
ぞ。お前はこれから俺の分も神奈川の機動隊を引っ張つてくんだ。  
もっと頑張れ」

「言われなくとも」

そんなやり取りを見つめていた大希に、電撃が走るよつて一つの  
考えが立ち上がる。急に顔を引き締めた。涙を拭き、姿勢を正して、  
大希は素早く敬礼する。

「お父さん。俺、絶対警察になる。お父さんの分も、頑張つて働く  
！」

「そうか……嬉しいなあ。でも、絶対に、こんなダメ親父になるん  
じやないぞ。お前は、元気に働いて、ちゃんと定年迎えろよ」

「はい！」

大希と父のやり取りを見つめていた剣人も、静かに敬礼する。健  
也、さくらもそれに倣つた。

「俺も警察になります。俺も、おじさんのように正義の為に戦いた  
いです」

「ぼ、僕もなります……まだビビリだけど、絶対克服して、立派な  
警察になります」

「私もなります。絶対に」

「さくらちゃんはやめておきなさい。警察のお手伝いをしたいなら、  
他にもたくさん仕事がある。さくらちゃんに似合つ仕事を見つけて、  
そこで活躍してほしい。警棒振り回すようなこと、絶対行成さんが

嘆くから

「は、はい……」

さくらはほんの少し気落ちしたようだつたが、すぐに敬礼をし直した。再び深く息をついた竜将は、ゆっくりと体から力を抜いていく。

「ありがとうな。みんな。俺の人生を引き継ぐ、だなんて言つてくれる子がこんなにいるなんて、本当に嬉しい。俺も、安心して逝ける……大希。母さんに、『愛してました。迷惑かけるけど、許してくれ』つて、伝えるのを忘れないで、くれ……」

竜将は目を閉じ、崩れた。涙をこらえた四人の少年少女、そして勝は、父として、警察として散つた亡骸に向かい、静かに敬礼を続けていた。

「こんな感じだよ、未成。んでもつて、俺は堂々と約束破つて、こんな目に遭つたつてことさ」

大希はこともなげに話を終えたが、未成は真つ暗な表情でうつむいていた。さくらや健が心配そうにその表情を窺う中で、彼はぼそぼそと呟いた。

「知らなかつた……父親を亡くしたとは聞いてたけど、まさかそんな事があつたなんて……」

大希は首を捻つた。親友とはいえ、彼女ではないのだから親に挨拶しに行つたことはないし、父を亡くしたと話した覚えが一切なかつた。だが、酔つた拍子にほんと飛び出したのだろうと納得する。

「言つたつけ？ まあいいや。未成まで気に病む必要はないんだつて。俺達だって、もう悲しんでない。多少暗いけど、俺達の人生を決めた大切な出来事だつて、この事件に関わつた人間みんなが共通して納得してゐるんだ。だから、みんな前見て生きてるんだし」  
健が力強く頷いた。そこに十三年前のおどおどした姿はなく、事ある毎におどける飄々とした姿を存分に見せていた。

「そうそう。苦労したんだぜ？ 最初は『なにこいつ張り切つてん

の?』 なあんて目で見られたしさ。みんな必死に努力したんだよ」  
大声で話す健が、すでに諦めの眼差しを向けられていることに気が付き、さくらはくすくすと笑いながら頷いた。

「そうね。私も元は国語や音楽が得意だつたんだけど、習つてたピアノとか茶道とか、全部やめて機械いじりの勉強して、今じゃ警察が扱う機器の技術顧問になつたし。あ、ソフトの方ね? . . . とにかく、みんなちゃんと頑張つたんだよね」

剣人は笑いあう健とさくらを見ながら、小さく微笑んだ。

「ああ。これからも頑張つていくんだよな」

大希も強く頷き、白い天井を見上げた。

「そう。四人で父さんの何倍も頑張つていくんだ」

大希は強く握り拳を作り、同じく拳を作つた他の三人と突き合わせた。

「よし。みんな頑張るぞ!」

「おう!」

四人の絆は、永遠に切れることはないだろ?。

一ヶ月が経つた。その頃には大希の傷も平癒し、衰えた体力を取り戻すために早朝からランニングに勤しむ毎日を送っていた。その頃には彼の周囲を騒がせた殺人事件の音沙汰もとんとなくなり、大希は頭の隅にその出来事を押しやっていた。今も殺人鬼がこの街をうろついている。今度会った時は確実に捕まえてみせる。それくらいにしか考えないようになっていた。

そんなわけで、大希はいつものように河川敷を走っていた。疾走感のある曲を聞きながら、そのテンポに合わせて調子よく足を踏み出していく。聞いている曲も大分早いものになり、来週からはちゃんと出勤できそうな様子である。そうなると気分も良くなり、大希はますます張り切った。足取り軽やかに、彼は河川敷の曲がった道を駆け始める。

彼を見て、道行く人誰もが振り返る。皆一様に不思議そうな顔をして、中には怪訝な顔をする者もいた。大希も気が付かないわけにいかず、横目で気にするようになり始めた。犬を連れた一人の中年女性と目が合う。犬は大希に歯を剥いて吼える。女性はそんな犬を引っ張り、慌てて大希とは反対の方向に走つて行つてしまつた。

「なんだ……？」

その動作に不審を覚えないわけにいかず、大希は思わず立ち止まつた。顔を上げれば、川にまたがる橋が目の前に見えた。ときおり浮浪者が現れる場所でもあり、近づく人はあまり多くない。橋の下に目を凝らすと、身なりがボロボロの人間が歩いている。大希はため息をつくと、浮浪者に気を払いながら歩き出す。徐々にその様子がわかつてくる。男性だということ、そうそう年は取つていないということ。もう数歩近づいてみた時、ついに大希は人々が不思議がつっていた理由に気がついた。

「そんなんばかな」

大希は思わず呟いた。目を呆然と瞬かせ、頭の整理が全くつけられないまま浮浪者の顔を見つめ続けた。

『大希』だつたのだ。生きているのか死んでいるのか全くわからぬような表情をしている事以外は、完全に大希そのものだつたのだ。何を目指しているわけでもなく、それはただ歩いていた。もう一人が硬直し、恐怖にも似た視線を送り続けていることには全く気付かない。そのまま『大希』は大希の側を横切り、行ってしまった。

「おいおい……夢か。また夢なんだろ」

大希はうわ言を呟いて、必死に腕や頬をつねつてみた。しかし、その行動は確かな痛みとして帰ってきた。今大希が置かれていたのは、全くの現実だつたのだ。

大希は冷や汗がどつと吹き出してくるのを感じた。これが紛うことなき現実だとしても、大希は受け入れられなかつた。

「帰ろう。さつさと帰つて、家で筋トレしよう。ああ。それがいい」大希は現実から目を反らすことに決めた。遅いテンポの曲に変え、彼はだらだらと走り出した。河川敷の上に登り、自宅を目指した。今も心臓が引つくり返りそうだが、さすがにもう何事も起きないはずだ。大希はそう自分に言い聞かせ、のんびりと歩き始めた。秋も暮れ頃の早朝、空気は寒々としていたが、混乱した頭を冷やすにはぴつたりだ。

大抵はこれで終わりになる。しかし、大希に降りかかる出来事の重大さたるや、これだけでは收まらなかつた。まずは、目の前からおしゃべりで有名なおばさんが、サンバイザーにウェストポーチといふ、いかにもな外見でウォークリングしてくるのだ。絡まれたらさつさと帰れないからと、大希はうつむきがちになつてその場をやり過ごごそとする。しかし、やつぱりおばさんに抜け目はない。

「ねえ、ちょっと? 大希君! ?」

「へ? な、何でしようか」

大希は唇を噛み、眉間にしわを寄せておばさんの顔を凝視する。

その顔はいかにも心配そうだ。大方怪我の心配でもしているのだろう。さつさと話を終わらせてほしい。大希は心の中で何度も唱えた。だが、おしゃべりおばさんの口から放たれたのは、その予想を遙かに外れた一言だった。

「さつき大希君、向こうにいなかつた？ どうしてこうちにいるの？」

おばさんの指さした方角は、明らかに大希の進行方向だった。彼は真っ青になつた。後ろを振り向き、そして目を凝らす。そこには黒い影が今もいる。先ほどそれ違つた、彼の生き写しに間違いない。「ねえ、ちょっと大丈夫？ さつきも変だつたけど……」

大希は何かを振り払うかのように首を振つた。それからまっすぐおばさんを見据え、丁寧に尋ねる。

「あの、僕は向こうにいたんですね？」

それを聞いた途端に、おばさんは怪訝な顔をした。間抜け、と田で訴えているようである。

「大希君、ちょっと何言つてんの？ いたに決まってるじゃない！ 私がこの田で見たんだから」

「ありがとうございます。それじゃ！」

これ以上関わる必要はない。大希はおばさんの言葉をこれ以上聞かずには走りだした。心臓が早鐘を打つているのは、走っているからというだけではない。想像を絶する事態がこの世で起きていることに気がついてしまつたのだ。大希は素直に恐れ、戸惑つていた。

「嘘だ。そんな事があるなんて……」

思わずそう呟いた時、大希は河川敷公園の真ん中に佇んでいる人影を認めた。間違いであつてくれと願いながら、坂を半ば滑るようにして下つた。そのままに、大希は人影の隣まで駆け寄つた。息を整えながら、大希は恐る恐るボロボロの装いの男に尋ねる。

「あの、すみません」

しかし、男からの反応はない。ふと、脳裏に先ほどの無機質な表

情が蘇ってきた。大希は唇まで青くして、いきなり男の肩を掴んで振り向かせた。

「うわあ！」

大樹は情けなく上ずつた悲鳴を上げ、思わずその男のことを突き飛ばしてしまった。だが、それに対する何の反応も示さず、男は放心して打ち倒されたままになつていて。不気味という言葉がこれ以上にしつくりくる状況はなく、大希は足どりおぼつかない状態で後退りを始めた。

「こんな、こんなことなんて……」

おばさんが言つていたことは真実だつたのだ。唇をわなわなと震わせ、大希は脱兎の如く駆け出した。

「何だ？ 何が起きてるんだ！」

叫ばずには心の平衡を保てなかつた。これで、この街には四人も自分に似た人物がいたことになつた。これをただの偶然として片付けられるだろうか。大希にはできなかつた。今の状況をこの世のものと認められず、とにかく逃げ出しだのだ。

しかし、彼はきっと不幸に違ひない。河川敷の道を逸れ、住宅街に足を踏み入れた大希。まさにその時、一人の男がこちらに近づいているのを認めた。そして、よせばまだ一日が楽に過ぎたものを、大希はその顔を確認してしまつたのだ。

もはや大希は言葉も出ない。そこにいたのはまた『大希』。ついに自分の気が狂つたのかと思い、前後不覚になつた大希はとにかく走りだした。

「嘘だ！ 何かの幻だ！ 何かの冗談だ！」

喚き散らし、大希はあてもなく走り続けた。彼はあくまで家に向かっているつもりだつたが、全く見当違いの方向に走つていた。視界の向こうに時計塔が見えて、彼は全く気が付かなかつた。気が付けなかつた。そんな状態では、目の前すらもよく見えない。前を横切ろうとうごめく一つの影を避けられず、勢い良く衝突してしまつた。きれいに尻餅をついた大希は、そのまま這つて目の前の人物

に近づく。

「す、すみませんでした！」

気が動転したまま、大希は土下座する。していたが、自分が今何をしているのかはよくわかつていなかつた。だが運命は容赦無い。最早ボロボロの大希に、さらなる追い討ちをかけたのだ。

「ああ！ どうして、どうして！」

大希は半ば悲鳴を上げた。ぶつかったのも、また『大希』だつたのだ。何とか立ち上がつた大希は、もう夢中で走りだした。ぶつかつた時の痛みで、とうにこの世界が夢だという希望は持てなくなつていた。あちこちに躊躇、そのたびにふらつきながら、大希はとにかく走つた。

一分ほどして、大希は時計塔前の広場に辿り着いた。その開けた空間を前にして、彼はようやく自分が家に向かつていることに気付いた。

「あれ……家に向かつてたつもりだつたのに……」

疲れきつた大希は、時計塔の下でようやく立ち止まる。どつと疲れが押し寄せ、腹の底からため息をついてしまつた。全く、今日は朝からとんでもない目に遭つたものだ。大希はとにかく家に帰り、一度寝てしまつことに決めた。幸いまだ休んでいるように言われている。朝から不可思議な出来事に遭つて、誰がまともに一日生活できるだろう。心のなかで何度も言い訳した大希は、時間を確認しようと時計塔を見上げた。

「……もう、驚けないな」

そして大希は肩を落とした。時計塔の真下に、またしても『大希』が立つていたのだ。虚ろな顔で、時計塔を見上げている。相変わらずわけがわからなかつたが、大希はついに慣れてきてしまい、驚くことも無かつた。ふと、これは何かの陰謀ではないかと思つた。何か大変な事件が起きて、その罪を自分に被せるために、たくさんの偽者が影で行動しているのではないかと。大希はすぐに首を横に振つた。よくよく考えてみれば、それは最近読んだ物語の展開にそつ

くりだつた。ため息をまたついて、大希は『自分』に背を向けた。

「これを誰に話せるかな……誰に話しても信じてもらえるだろう……」

大希はまず未成の顔を思い浮かべた。元はと言えば、未成から始まつたのだ。何を話してもバカにされるということはあるまい。ついでに、三人の親友の姿を思い浮かべてみた。剣人はぶつきらぼうな雰囲気のある外見に反して、おそらくはさくらの影響だろうファンタジーやSF系の本も好んで読んでいる。しかし、現実に関しては話が別だ。まともに聞いてすらくれないだらう。さくらなら大丈夫かもしれない。完全に信じてくれるということはないにしても、面白がつて耳を貸してくれそうだ。

大希は強く頷いた。とにかく、明日辺りにでもさくらや未成に話を聞いてもらおうと決めた。誰かに話を聞いてもらわなければ、彼を苦しめる心のもやは晴れないだらう。

気分を仕切り直そと、大希はどびきり明るい曲をかけ、ゆつくりと家に向かつて走り出した。

大希が部屋に帰つてくると、健はまだ出勤の準備を整えているところだつた。一旦唇を噛み、大希はおそるおそる話しかけてみた。

「なあ健？」

健はあくびを噛み殺し、眠たそうな顔のまま首を傾げた。

「なんだ？」

「俺さあ、さつきラシニングしてたんだけど、不思議なことがあつたんだよ」

「ふむ？」

「これがさ、四人の自分に会つたんだよ。不思議だと思わないか？」

健は一瞬大希を見つめたが、すぐ荷物に目を落としてしまつた。

「なあ大希」

「なんだ？」

「俺にも今朝不思議なことがあつたんだよ」

「ふむ？」

「俺にも今朝不思議なことがあつたんだよ」

「起きたまんまで夢を見る奴がいたんだ。不思議だと思わないか？」

大希は口を尖らせたが、やがてため息交じりに呟いた。

「ああ。そうだね……」

やはり健は論外だった。

仕事中の眞が昼食をとっているであろう時間帯、大希は耳に携帯を押し当て、呼び出し音を三回、四回と数えていた。さくらのお気楽な声が待ち遠しく、ちゃぶ台を指でせわしなく叩いた。だが、さくらはなかなか出してくれず、結局呼び出し音が途切れたのは十回ほど数えてからだった。

『はい。どしたの？』

このあけすけした声は、彼女の素晴らしい点の一つに違いない。大希はほつと息をつきつつ、そんなことを思った。

「いきなりごめん。さくら、仕事終わったら、どこかで会えないかな」

『ん？……じゃあ、ファミレスでご馳走してくれるんなら、付き合つてあげる』

電話の向こうでは、彼女がにっこり笑つてゐるに違いない。その声色はとにかく明るく、楽しそうだった。心底疲れきつた表情をしている大希とは大違いだ。そんな彼は重たい動作で財布を取り、中身を調べ始めた。

「……ああ。まあいいか。それくらいなら安いもんさ」

『ねえ、剣人はどうするの？ 私が引っ張つてくれ？』

大希はため息をついた。さくらを誘えばおまけがついてくることはわかつていたし、彼女も当たり前のように話している。だがもちろん、大希はきつぱりおまけを断つた。

「いらない。今日はさくらに話したいんだ。剣人には話したくない」さくらが電話の向こうで笑い声を上げた。思わずそうしてしまつくらい、大希の口調は深刻めいていたのだ。彼に起きた大変な出来事など知る由もなく、さくらはくすくす笑いをしながら喋つた。

『何？ 剣人と別れて、俺と付き合わないか、とか？』

「馬鹿な事言うなよ。そんな事言つたら、俺剣人にボコボコにされるよ。絶交間違いなしだ」

大希がうんざりした声を上げると、さくらはだらしなく間延びした調子ではいはいと応えた。机に突つ伏したような音も聞こえてくる。見た目はやはり淑やかなお嬢様なのだが、油断するといつなるのだ。大希はときおりもつたないと思つたことさえある。彼氏がいるわけだから、気にするまでもないのだろうが。

『わかつてゐる。まあ、どんな話でも、私がしつかり聞いてあげる。なんか疲れてるみたいだし』

「ありがとう。さくらみたいな聞き上手が親友にいると、何かといいもんだな」

さくらはしばし嬉しそうに笑つてゐたが、いきなり思い出したような声を上げた。

『そうそう。未成くんも呼ぶんでしょ？』

『え？ 何で知つてるんだよ？』

大希は目を丸くした。一切彼女に話していながら、まさにその通りだ。それを話すと、さくらはふふんと鼻を鳴らした。きつと向こうではしたり顔をしてゐるだらう。

『ちょっと考えればわかるつて。大希の友達で聞き上手つて言つたら、未成くんだもん』

「ふうん。まあ、未成は何となく話しやすいんだよな。聞いてもらうと何だか安心する」

聞いているのかいないのか、さくらは電話の向こうであくびを噛み殺した。食事を終えて、眠くなつたといつところだらう。

『じゃあ、駅前のオブジェに午後八時集合ね。未成くんにもそう伝えておいて』

「ああ。了解」

『はあい。じゃあねえ』

電話が切れた。大希は携帯に向かつて頷くと、すぐさま未成に向かつて電話を始める。

「あ、もしもし？」

一方、電話を切ったさくらは、ゆっくりと伸びをして、弁当箱を丁寧にしまった。まだ昼食の時間がだが、できる仕事はしておいた方が、午後から楽になれる。さくらは気合いを入れ直し、そばに置いていた眼鏡をかけなおした。それを見ていた唯一の女性同僚が、感嘆のため息をついた。

「眼鏡をかけたさくらもいいねえ。かわいいし、やつぱり頭良さそう」

さくらは照れたように微笑んだ。視力は全くもって悪くないが、彼女は仕事中に伊達眼鏡をかけてているのだ。それは同僚が言つた通り、また彼女に違つた雰囲気を与えていた。

「そんな。理加なんか、もつと知的に見えるよ。インテリに見える」「えへへ。そうかなあ」

理加が頬を染めると、さくらは何度も頷いた。そして、ちらちらと周囲の同僚にも目を配つた。さくらの職場は、誰もが眼鏡をかけている。さくらが伊達で眼鏡をかけているのは、その影響だった。

「さて、頑張らないと。ファミレスでお食事が待つてるもの」

握り拳をつくつて気合いをさらに入れると、さくらは鑑識課奥のパソコン前に腰を据え、再び向かい合つた。

午後八時。大希とさくら、それから未成はとあるファミレスを訪れていた。スーツ姿のままやつてきたさくらは、何やら「機嫌の様子だ。席につくなり、嬉しそうに声を弾ませる。

「いやあ、ファミレスなんて久しぶり！」

こうした理由だった。大希は不思議そうに首を傾げる。今いるファミレスは値段が安く、給料日前のデートは、ここで食事というカツプルも少なくないからだ。一年の大希もそうだった。

「なんだ。剣人とは来ないのか？」

「うん。これから二人でファミレスに行くのはファミリーになつて

から、つて一年前に決めたからね

さつそくのろけたさくらの表情に、未成は静かに微笑んだ。

「アツアツですねえ。何だかこっちまで幸せになります」

「まあね。山あり谷ありだつたし。うん！ どれも美味しそう」  
話している間にも、さくらはメニュー表を取り出し、中に目を通して輝かせている。大希は財布の中を覗きつつ、さくらの方を見やつた。

「あんまり高いもの頼むなよ？ 金下ろしてないから余裕ないんだ」「大丈夫だつて。私の胃の大きさなんか知れたもんだから。よし。やつぱりこれかな……はい、未成くん

「僕も決めました。はい、大希」

未成もさくらの横からメニューを覗いていたようで、手渡されたメニューをそのまま大希へ渡す。なぜか、彼は受け取つた瞬間に真剣な顔をした。そのままの表情でちらりとどこかを窺い、急いでメニューを開く。そのまま窺つた方から、ウェイトレスが水やメニューを携えやつてきた。形整つたスマイルを見せながら、手際よく水やおしごりを配つていぐ。そして、最後にメニューを置いた。

「じゅつくりどうぞ！」

マニーアル通りの行動を終え、ウェイトレスはそのまま立ち去ろうとする。そこを、大希はすぐさま呼び止めた。

「あ、もう決まつたんで、注文させて下さい」

ウェイトレスはきょとんとした。確かに、メニューを置きに来たらずでに注文が決まつていいなどそうはない。頭が回りづ、少し困惑した様子の彼女に大希は声をかけ直した。

「あの、注文してよろしいですか？」

「あ、ああ。はい。大丈夫ですよ」

どこか固まつた表情のまま、彼女はタブレットを取り出し、ペンを構えた。大希は改めてメニューを見つめ、選んだメニューを指差した。

「オムライスとシーザーサラダ一つ、お願ひします

「私はカルボナーラで」

「僕はナポリタンお願いします」

三人の余りに早い決断に戸惑っていたものの、ウェイトレスは笑顔で応答し、その場を後にした。

「今日は特に早いね。決断力を鍛える訓練だつて？」

おしほりで丹念に手を拭きながら、さくらは感心したような声を上げる。メニューを戻しつつ、大希は満足げに頷いた。メニューを開いて五秒。今日は最速だつた。

「ああ。父さんの教えの一つだからな。『こんなくだらないことでも迷つていたら、いつまでも強い剣士にはなれない』ってね。母さんは適当なだけじゃんつて言つけど。でも、さくらだつて早かつたじやないか」

「今日はとにかくカルボナーラが食べたかったから、あるかどうか確かめただけだし。未成くんも早かつたね」

「ええ。僕も今日はナポリタンが食べたかったので」

ふうん、とさくらがテーブルに肘をついた時、いきなり陽気なメロディがさくらのポケットから鳴り始めた。弾かれたように立ち上がり、ポケットから桜色の携帯を取り出す。未成に謝りながら席を抜けだすと、さくらは大希に会釈した。

「ごめん。ちょっと電話かかってきたから、出るね」

「え？ ここで話せばいいじゃ」

「私としては、そういうのって御行儀よくないと思つてるからさ。

料理来たら、先に食べてて」

さくらは大希の言葉を遮ると、そのままファミレスの外に出でしまつた。大希は首を傾げ、不思議そうな顔をする。

「あいつが気にするとは思わなかつたんだけどな……」

未成は指を立てた。

「女性は食卓のマナーが気になるつてテレビで見た。さくらさんもそなんだよ」

「ふーん……」

大希が腑に落ちない様子で口を尖らせると共に、今度は未成の携帯が鳴つた。覗いた彼は、急に席を立ち、大希に向かつて手を合わせた。

「ごめん。僕もちょっと中座する」

「当然大希は驚いた。」

「は？ お前も？」

「うん。僕も電話は周りに迷惑だと思つから」

それだけ言い残すと、未成は大希が何も言えないうちに入り口へと走つていった。後に残された大希は、頭を押さえてため息をつく。「何なんだよ、一体……」

未成が外に出ると、さくらはちょうど携帯を閉じたところだった。彼女らしく優しい微笑みを浮かべ、くすりと笑う。

「来たね。未成くん」

未成は戸惑つた顔で自分の携帯を振る。さつきのメールはさくらから来たものだつたのだ。

「どうしたんですか。僕をいきなり呼び出して、ついでに大希くんには内緒つて……」

「まあ、ちょっと仕事関係のお話だからね。……これは未成くんも、あんまり多くの人には知られたくないと思うし」

さくらは胸ポケットから銀縁の伊達眼鏡を取り出し、静かにかけた。彼女が仕事モードに入つた時の合図だ。先ほどまでの呑氣で陽気な雰囲気が薄れ、静かで鋭い雰囲気が立ち現れる。不敵な笑みを浮かべ、さくらは腕組みをした。

「ねえ。今日は鑑識課のパソコンのセキュリティチェックを行つてたんだけど、未成くん、入り口から一番奥のパソコン使つてるよね」未成はどきりとした。だが、すぐに心のなかで不安を打ち消す。大丈夫。痕跡は全て消したはず。

「え、ええ。はい」

彼女はため息をついた。深く、深くため息をついた。失望してい

る、という雰囲気ではないが、やはりどこかがつかりしているようだ。口を尖らせ、少々強い口調で迫る。

「ねえ。パソコンをあんまり私的に使用しないでほしいのはもちろんだけど、何だか変なサイトに繋げてない？」

「へ、変なサイト？」

「うん。セキュリティチェックにクッキーが引っかかったの。それで調べてみたら、コマンドプロンプト画面が出てきて、いきなりパスワード提示を要求されて……ねえ。深くは聞くつもり無いけど、そのサイトって情報流出の可能性、あるの？ ウィニーみたいに」  
いつの間にやら、未成の心臓は早鐘を打っていた。全て消したはずなのに。さくらの視線が、まるで矢のように突き刺さってくる。表情は柔らかいものだったが、その奥に、怜俐で鋭い光が透けて見えた。下手なことを言つたら墓穴を掘る。未成は慎重になった。

「大丈夫です。検査情報漏えいなど、あつてはならないことはきちんと理解してます。それだけの矜持は持ちあわせてますから」

つとめて真面目な表情をした未成の瞳を、さくらはじっと覗き込む。未成はつばを呑んだ。気まずい静寂が落ち込んでくる。未成は口が乾いてくるのを感じ、早く離れて欲しいと願つた。その願いを汲み取つてくれたのか、さくらはようやく離れてくれた。困つたような微笑を浮かべ、彼女は肩を竦める。

「ま、いががわしいサイトに繋いでたら失望の一つや一つしたけど、まあ、今回だけは内緒にしといてあげる。……バレたら首飛んじゃうかもだけど、友達だし」

さくらは眼鏡を外した。再び呑気モードに戻つて、腕をぶらぶらさせたりしながら、彼女は屈託なく笑う。

「一度だけよ？ もう一度こんな事あつたら、今度こそ報告するし、パスワードも解析するからね」

「は、はい」

戸惑つたままで未成が頷くと、さくらはこつこつ笑つて頷き返した。

「そりそり、素直が肝心。じゃ、戻ろつか」

それだけ言ひ畢、やぐひせれり やぐト ミニスのドアを押し開き、

唇を噛む。

「どうして、あんなに聰明で、優しいの?」

未成には糞を伝へ涙を拭かなかつた

時計塔広場前の交差点。曇り空の下で、大希はその横断歩道の近くに立っていた。その田の前には小学校低学年くらいだらうか、小さな子ども達が五人ほどいた。にっこり笑いかけた大希は、かつての父が自分たちにそうしてくれたように、子ども達に明るい声で呼びかける。

「はい、青になりましたね。ちゃんと右を見て、左を見て、もう一度右を見てから渡るんですよ…」

「はい！」

子ども達と一緒に、大希は右を見て、左を見て、もう一度右を見る。けれど、もう一度右を見ないで渡つていいく子が一人いた。ランセルの肩紐を持ったまま、すました顔で正面を見て歩いている。それに気がついた大希は、笑顔を一瞬曇らせた。ひとまず青なのでみんなを渡らせ、自分は渡つてしまつた子どもを追いかけた。

「ねえ。ちゃんともう一度右を確認しないと駄目だよ？」

大希が呼び止めると、子どもはつまらなそうな顔をして口を尖らす。

「だつて。父さんも母さんも、そんな事してないよ」

しゃがみ込み、大希は子どもに田線を合わせる。確かに、丁寧に左右確認をする大人など中々いない。彼自身も中学生の頃に左右確認を真面目にしていたかと「う」と、疑問である。だが、警察になってからはしつかりと左右を確かめるようになつた。交通マナーを指導する立場なのに、自分が守らないでは仕方ない。子どもの肩をポンと叩き、大希は静かに笑いかけた。

「そうかもしけないね。でも、しなくちゃいけないことだから言うんだよ。右から来る車の方がぶつかりやすいから、右はしつかり確かめないとダメなんだよ」

「ふうん。そうなの？」

あまり興味がない顔をしているのが残念だったが、大希は辛抱強く話しかける。

「そう。事故が起きてからだと遅いんだ。だから、これからはちゃんと確認してね」

「はい。もう行くね」

子どもは結局つまらなそうな顔をしたままで、よそ見ばかりしている。これ以上は話を聞いてくれなさそうだ。諦め、大希はため息混じりに送り出す。

「そつか。じゃあまたね。気をつけて帰るんだよ」

まだまだ大希は若いつもりだったが、このように冷めた子どもが増えたように最近感じてしまう。やはり時代なのかと悲しい思いに浸りつつ、大希はぼんやりと子ども達の集団に戻っていくその一人の背中を見送っていた。

こんなようにして、大希は学校帰りの小さな子どもたちがやつてくると、一緒に横断してやつたり、交通ルールを教えてやる、という事をずっと繰り返していた。機動隊というハードな仕事に就いている大希がどうしてこんな事をしているかといふと、今日が交通安全強化週間だからだ。違法駐車、スピード違反の取り締まりなども強化するため、署だけでは人手が足りず、手が空きやすい機動隊に白羽の矢が立つたのだ。ときおり寂しい思いをしながらも、大希はいつもとはまた違う充実感をもつて仕事をしていた。

そんな時だった。微かだが、大希は広場の方角から悲鳴を聞いた気がした。訝しむような顔で振り向くと、細々と見える人々の動きがやたらと慌ただしい。とても紅葉並木の景観に浸っている雰囲気ではなかつた。それどころか、人々はこちらに向かってきているようだ。大希は目を細め、こちらにやつてくる人々の表情を窺つた。

「何だか怖い顔してるな……」

大希が呟いた通り、人々は何かに恐怖しているような顔をしてい

た。腕をめちゃくちゃに振り、何かから逃げ惑つているようだ。いよいよ不審に思い、大希はスーツを着た男性にかけ寄つた。

「どうしたんです？ 一体何がありました？」

「どうしたも何も、人が殺されてんだよ！ お前警察だろ？ 何とかしろよ！」

男はほとんど恐慌状態だった。目は飛び出してきそうなほどに見開かれ、今にも殴りかかってきそうな雰囲気もあつた。気圧された大希は、帽子を口深にかぶり、まともにその顔を見ないようにする。

「り、了解です」

「ならさつさと行けよ！」

男はそう吐き捨て、逃げる群衆の中へと戻つていった。それを見送つた大希は、踵を返して時計塔を見据える。

「多分、あいつだ……」

無意識のうちに大希は横腹を押さえる。あの夜、自分が一敗地に塗れた男に違いない。大希は一気に走りだした。『あれ』が生きている意味も、『あれ』を殺そうとする意味もよくわからない。しかし、この街を恐怖に陥れるような輩は、是が非でも許すつもりはなかつた。大希は素早く携帯を取り出し、剣人に電話をかける。

「はい、どうした？」

運よく剣人はすぐに出てきた。大希の荒い息遣いに気づいたのか、彼は間を置かずに付け足す。

「おい、何かあつたのか」

「ああ、あつたよ。殺人だ。まだ犯人が暴れてるだろ？ から、なるべく早く応援に来てくれないか」

電話の向こうで、剣人が息を詰めた。いつも増して真剣な声色が帰つてくる。

「わかつた。すぐに向かう。……この前みたいなへマはすんなよ」

「身にしみてわかつてるよ」

それだけ言い残すと、大希は携帯を切つて塔の下に急いだ。風に乗つて血なまぐさい臭いが流れてくる。灰色の雲が重くのしかかっ

てくるようだ。白い鉄塔が、今日は何やら不気味に見えた。しかし、大希は恐れず駆けていく。今度こそは取り押さえるという決意が、彼の疾走を支えていた。

鉄塔へ近づくにつれ、その下で起きている惨劇が明らかになつてきた。一人がすでに倒れ、一人が今まさに男の凶刃に倒れたところだつた。大希は思い切り男の顔を睨み、拳銃を抜いて叫んだ。

「そこまでだ！ 大人しくしろ！」

男は血の滴るナイフをぶら下げ、ひどく緩慢な動作で大希と正対した。ボサボサの黒い長髪に切れ長の目。返り血で怪しく光るその黒い服は、軍服のようなシルエットをしていた。ニヤリと笑つた男は、拳銃を取り出し大希に向ける。

「しつこい奴だな。俺の好きにさせろよ」

「好きに？ 人殺しを放つておけるような立場じやないんだよ。俺は！」

大希の一切揺るがない視線を受け、男は笑顔をひそめた。目を反らし、手の内で銃を弄び始める。大希がその真意を探りかねていると、男は静かに口を開いた。

「なあ。お前には、俺がただの殺人鬼に見えるのか」

大希はうつむいた。言わると、確かに『ただの』殺人鬼には見えないので。殺されたのは、皆自分に瓜二つの男。何か意味があるようになしか思えなかつた。

「確かに、お前には何らかの意図があるんだろうな。それは俺も認める」

途端に男は冷酷な笑みを浮かべた。一步一歩と大希の方へと歩み寄りながら、不自然なほどに落ち着いた口調で話し始める。

「そうだ。思つたよりは話が通じてよかつた。なら聞け。俺はこの世界を守るために、こいつらを殺しているんだ」

「何だと？」

大希は眉根にしわを寄せた。

「この世界は停滞し続けている。究極の停滞だ。そこに未来はない。

ただ無駄に同じ日々を繰り返しているだけだ

ふと男は笑みを消し、刃のように眼を光らせて大希を睨みつけた。

「俺は時間を無駄にするのが大嫌いなんだ。だから俺は世界を変える。搖るがす。その変化は、この世界にきっと未来をもたらす……だから俺はこの存在を消し去るんだよ」

男は倒れている死体を蹴りつけた。大希は銃口を持ち上げ、再び男の心臓に的を定める。その握る手に力を込め、ありつたけの敵意を込めて男を睨み返した。

「それは、俺に似た人間が、この世界に關つてることか？」

「ああ。時間のロスが少なくて助かるよ」

大希は鼻を鳴らした。人殺しに褒められたところで、ちつとも嬉しくない。

「そうか？ この話自体が時間の無駄だつたと俺は思うね。世界がどうとか言われたところで、俺のお前を捕まえようという氣持ちは変わらないからな」

男は顔に手を当てた。その間から、震えた異様な笑い声が洩れてくる。大希にはもう、目の前の男がまともだとは到底思えなかつた。「くくっ。そうかそうか。確かにそうだつたなあ？ ならもう話すのは止めだ。もう一度お前に大怪我くれてやる。一度と俺の邪魔ができるようになあ」

蛇が絡み付いてくるような口調に、大希は思わず身震いした。しかし、すぐに父から受け継いだ誇りを取り戻す。姿勢が治り、銃口の僅かな震えも止まり、自然と足の踏ん張りも利き始めた。大希は怒りの表情を消し去り、ただただ使命感を帯びた真つ直ぐな瞳で男を見据える。

「いつか、父さんが言つていた。人殺しの上に築かれた平和は、すぐには壊れるつてな。未来も一緒だ。人殺しの上に生まれた未来なんか、すぐに壊れる」

大希の言葉を黙つて聞いていた男。彼が言い終わつてもしばし黙り続けていたが、突如目を剥き吼えた。

「綺麗事を！」

男は弄んでいた銃を突き出す。その瞬間に大希は撃つた。その銃弾は見事に男の銃を捉え、弾き飛ばした。右手にかかつた衝撃の大希に呻き、男は反射的にその手を押さえる。すかさず大希は走りだした。全ては男を捕らえるため。しかし、男も易々とは捕まらない。左手に握っていたナイフを持ち替え、袈裟がけに斬りつけた。大希はすんでのところで足を止め、後ろに飛び退きナイフをかわす。

「大人しくしろ！」

大希は警棒を腰から引き抜き、男の右手に向かつて振り下ろす。当然黙つて当たるはずがなく、男は右腕を引いてかわした。そこに大希はさらに詰め寄り、警棒で心臓あたりを突いた。男はさらに飛びすさつてかわそうとしたが、それよりも早く大希の警棒が男の胸を捉えた。男は呻き、僅かによろめく。

「お前、この短期間でどうして強くなれた？」

歯を食いしばり、拳をきつく握り締めながら男は大希を睨みつける。警棒をくるりと回し、大希は口の端にわずかな笑みを作る。

「今がしらふなだけだ」

「……ふん」

男は目を見開いて大希を見据え、ナイフを握り直す。一方の大希も左足を引いて半身になり、警棒の先端を男の眉間に持つていく。その佇まいは、やはり剣士だった。今にも飛び出さんばかりの体勢をしている男だったが、大希の放つ無言の圧力を前に中々飛び出すことができない。その圧力をかわそうと、男は右へと足を擦らせる。大希はそれに動きを合わせ、あくまで正対を保ち続ける。

「どうした？　来ないのか？」

大希は軽く挑発したが、男も真剣だった。ほんの少しの反応も見せず、やはり正対の状態から外れようとするばかりだ。大希も再び黙りこみ、二人は静寂の中、円を描いて動き続けた。

ついに大希が動いた。すり足で一步進み出る。そこからさらにもう一步踏み出すかに見えた時、男も動きだす。一息に飛び出し、そ

の勢いを乗せてナイフを大希の腹めがけて突き出した。

しかし、大希はそれを狙っていたのだ。突き出されたナイフを警棒で外に払い、無防備になつた男の右腕を鷲掴みにする。そのまま流れるように男を引き寄せると、大希は警棒を男の胸元に突き付けたのだ。剣道型が染み付いていたからこそできる、鮮やかな動きだった。

自分の動きを手玉に取られ、男は悔しそうに舌打ちした。大希は振りほどかれないよう力を手に込め、警棒を男の胸に押し当てる。

「お前の負けだ。もう観念するんだな」

男は黙り込んで目を閉じていた。その神妙な表情は、ついに年貢の納め時を実感したように見える。大希はしばしその表情を見つめていたのだが、いきなり男は開いていた懷に左手を突っ込んだ。虚を突かれ、大希はわずかに固まつてしまつた。男はにやりと笑い、何かを掴んだ左手を引き抜いた。

「何だこれ？」

大希はそう口走つた。男が懷から取り出したのは、銃でもなればナイフでもなく、化学の教科書だった。

「これを受け取れ。そして読め。きっとお前の信じていた世界が引っくり返るぞ」

単なる脅しには聞こえなかつた。見た瞬間から、大希はその教科書に何かを感じたのだ。男の手から離れ、教科書は地に落ちる。大希はしばらくの間それから目を離すことができなかつた。

「大希！」

遠くから剣人の声が聞こえてくる。大希は大人しくなつた男に手錠をかけ、自分は落ちた教科書を拾い上げた。その時、男はふと思い出したように声を上げた。

「言い忘れてた。俺の名前を、俺を捕まえられた記念に教えてやる。」

工藤征尚だ

「……何が記念だ。黙つて、自分のしたことをゆっくり考えるんだな」

大希は男を尻目にかけ、殺された命を思つて目を閉じた。

翌日の夜八時、剣人は健のいる部屋を訪れた。先刻『一緒に飲まないか』ともちかけられたのだ。呼び鈴を押すと、まもなく健がドアを開け、そつとその顔を出した。彼らしくない、静かな微笑みを浮かべていた。

「お、来たか。じゃあ入れよ」

いつもと違つて振る舞いが大人しくなつている健を見て、剣人は思わず笑つてしまつ。靴まで丁寧に揃えて、本当にしおれた様子だ。

「何だよ。やつぱり昨日の事引きずつてたのか」

靴を脱ぎ捨て、剣人は健の後に従い大股で居間に足を踏み入れる。健はゆつくりとちゃぶ台の前に座り、チューハイの缶を開けて頷く。ぐいと缶を傾けると、健は深々とため息をついてしまつた。

「引きずるに決まつてんだろ。大希の言うことが本当だつたなんて……」

連續殺人犯『工藤征尚』を捕まえた時、健と剣人はうつ伏せに倒れている死体を仰向けに起こした。目の当たりにしたのは、隣で本を見つめている大希と寸分違わない顔立ちだつた。健は言葉を失い、もう一人倒れている死体に駆け寄つてみた。そして、その死体も大希と同じ顔をしていることをしつかり確認させられたのだった。開いた口が塞がらない健に、大希は一言こう言つた。

「俺は夢なんか見てないぞ」

「ああ……かんつぜんに冷たい目をしてた。あれは！ 俺、どうして大希の言つ事信じてやれなかつたんだろ……」

健は頭をかきむしり、上ずつた調子で呻いた。とにかく落ち込んでいる様子をどこか楽しそうな表情で見つめ、剣人もチューハイを開ける。

「まあ、お前はそういうファンタジー全開な話題に関しては頭固いしな。大希だって、元々信じてもらえると思つてないだろ」

剣人は健の苦悩など何も考へていらない口調だつた。つれない友人に苛立ち、健はちやぶ台を手のひらで何度も叩く。

「うるせえや。そういう事が問題じゃないんだよ。俺達四人は、竜将さんの遺志を継ぐつて決めてから、ずっと親友としてやってきたじゃないか。それなのに、俺は大希の言うことを信じようとしたのかつたんだ。自分が情けねえよ、俺

「……最早酔いが回ってきたのか、健はいきなりちゃぶ台に突っ伏して

ぐぐぐすと鼻をすすり始めた。剣人は目を細めてその様子を眺める。小学生時代の健は、氣弱で泣き虫という扱いだつたが、中学以降の健は熱血で涙もらいという扱いに変わつた。結局泣きやすいには違いない。だからこそ、健の涙は変化の象徴なのだ。昔を思い出しながら、剣人は健の肩を叩いてやつた。

「まあまあ。誰だつてそういう事はあるつて。『」れか、うどつかるか考ふる』つて、お前よく言つたじやないか」

「それ、全然かつこよくないからな。夏休みの宿題がたくさん残つてて、俺がやばいんじゃないかって剣人やさくらが言うから、苦しくて『過ぎた日々を考えたつてしようがない、これからどうするか考える』って言つただけだからな」

目を赤くして起き上がり、健は剣人の鼻先に人差し指を突きつけた。剣人はその人差し指を掴むと、健が痛がるのも気にせず勢い良く天井に向けた。

「健。小さいことでいつまでも落ち込むなって。話を聞いてもらえなかつたくらいで大希が怒るか？全然大丈夫だつて。ぐだぐだ引きずつてないで、『これからどうするか』考えろよ」

健は大げさに痛がりながら剣人を睨みつけた。その目の前で、剣人は腕組みをして笑つてゐる。何か言つてやろうと思つていた健だったが、彼の自信たっぷりな笑みを見つけるうちに忘れてしまった。

「なあ、今から大希の言つことを信じてやつても大丈夫かな」「何が？」

何の氣もなさそうに台所へ赴き、剣人は冷蔵庫を漁り始めた。そんな様子を見て首を振り、健は缶を握りしめて必死に尋ねる。

「親友として、大希の助けにやつてなれるかな。俺、何だかこの事件には裏がある気がしてきたんだよ」

チーズを取り出しきた剣人は、鼻を鳴らしてどっかりと腰を下ろした。そして健の質問には答えないまま、床に置かれていたリモコンに手を伸ばす。健は口を尖らせる。

「なあ、人の話を聞いてくれよ」

剣人は首を鳴らしながらチャンネルを回していく。ニュースを見定めながら、彼はようやく口を開いた。

「聞いてるさ。ただ、答えてやるまでも無いかと思うんだよな。健。それは自分自身で答えが出来るんじゃないのか？」

健は黙り込み、握った缶に目を落とす。中々言葉を発しないから、剣人は斜に構えるのを止め、ようやく健に向き合うこととした。

「お前にだつて色々あるのはわかるさ。今まで信じてた世界が、きっと昨日崩れたんだろ？」でもな、お前だつてわかるじやないか。今一番大変なの、きっと大希だと思つぜ。殺されたのが、自分とおんなじ顔の四人ときたら、俺達以上に何がなんだかわからないはずだ。だろ？」

「ああ。そんな事はわかってるよ」

缶が照り返す光を見つめながら、健はぼそぼそ呟いた。剣人はため息をつき、彼の肩にゆっくりと手を置いた。

「なら、いいだろ。これからあいつにしてやれることはたくさんあるはずだ。こんな言葉があるぞ。『後ろを向いている暇があつたら前に進め』って言葉が」

健は顔を上げる。剣人は満面の笑みを浮かべ、彼の不安そうな顔に向かってゆっくりと頷いた。健は涙を拭いた。頬を一回叩き、歯を見せてにやつと笑う。彼らしい、憂いの無い笑顔だった。

「いい言葉だな、それ  
「お前の受け売りだよ」

その頃の大希は「『うど、例の小さな居酒屋を未成と共に訪れた。とはいっても、口にするのは烏龍茶で、テープルにあるのはおつまみではなく教科書だ。店の雰囲気にそぐわぬ真剣な表情を浮かべ、未成は大希が差し出した化学の教科書を見つめる。声を潜めて尋ねた。

「これを、大希は連續殺人犯から貰つたのかい？」

大希は頷いた。今でも、これを出した時の男の表情はよく覚えていた。後顧の憂いを断ち切つたような、そんな満面の笑みを浮かべていた。

「ああ。『『これを見ただら世界が変わるぞ』、なんて言われてな。まあ、この事件には色々怪しいこともあつたし、もしかしたら、と思つてさ。そして、ついでに未成にも見てもらおうと思つたんだよ』」未成は目を閉じてうつむいた。眉根にしわが寄つて、少し苦しそうな表情をしている。ついでに低く唸り始め、一向に話しだそうとしない。大希は少し首を傾げ、未成の前で手を振つた。

「おい、どうした？　なんか言つてくれよ」

「え？　ああ。うん。どうして僕に？」

はつとなつた未成は、すぐに笑顔を取り繕つた。ぱつとしない未成の反応に、大希は顔を少ししかめてしまつ。

「何だ？　ぼーっとして。未成はこういう系の話、好きなんだろ？　この前家に入れててくれたけど、たくさん化学に関する本があつたじゃないか。丁寧に教科書まで買ってさ」

「うん。まあね……教科書はわかりやすいし」

大希の言つ通りだつた。未成が暮らしている狭いアパートの一室は、本棚が一つ化学にまつわる本で埋まつていた。大希はその知識を見込んで、自分は履修しなかつた『化学Ⅱ』の教科書と一緒に見てもらおうと思ったのだつた。教科書を持ち上げ、大希は表紙を

未成に見せつける。

「さ、見てみようぜ？」

うつむいたり、こめかみを搔いたり、どこか気乗りしない雰囲気を見せつとも、未成はよつやく頷いた。

「うん。そうしようか」

未成は大希から教科書を受け取ると、震える手で教科書の表紙をめくった。大体化学の教科書の裏には原子の周期表が乗っているもので、この教科書も例外ではなかつた。ただ、上からのぞき込んでいた大希は一つおかしい点に気がついた。

「あれ？ 原子の周期表って、こんなんじゃないよな」

大希は訝しんで、周期表を指でなぞつていく。本来、周期表はランタノイド、アクチノイドという元素群が独立して一列並べられている。しかし、この周期表は、さらに一列独立しているのだ。かと言つて、何か名前がついているわけでもない。ただ『ウンビなんたら』が並べられているだけだ。大希は首を傾げた。

「何でこんなに似た名前ばっかりなんだ？ 名前考えるの面倒くさかつたのか」

未成は烏龍茶を呷り、重たい動作で首を振つた。

「そういうわけじゃないんだ。それは未発見元素。『ウン』とか『ビ』つていうのは、『一』とか『一』とかに対応してるんだ。たとえば、『ウンビクアジウム』つて、そこにあるじゃないか。それは単に『一一四番』つて意味なんだよ」

「へえ。やっぱり詳しいな。未成を連れてきてよかつたよ」  
未成は照れくさそうに笑い、それから再び伏し目がちにして頭を搔いた。

「ちょっと勉強すればすぐにわかるよ」

「ふうん。じゃあ、この百一十六番、『ヴィンソン・マシフィウム』は、発見された元素つてことか。なつがい名前だなあ」

「ああ。そういう事になるね」

未成が微笑むと、大希は納得したように何度も頷き、列の末端に

ある最後の元素を指差した。

「じゃあ、これもか。この『ギャラクシウム』ってやつも」

大希が指差したのは、百三十七番目の元素だった。一瞬未成の笑顔が凍りつく。すぐに溶かして、未成は言葉にならない声を上げながら頷いた。

すると、大希は唸りながら首を傾げた。ふと、一ヶ月辺り前のニュースが蘇ったのだ。その疑問のままに大希は呟く。

「それにして、ニュースでやつてたけど、一三七番の元素つて、一ヶ月前に開発研究が始まつたばかりだよな。なんでこの教科書には載つてるんだ？」

心底不思議そうに『GX』の文字を大希は見つめる。未成はどこか疲れたような笑顔を浮かべ、気の抜けた声色で応じた。

「そうだね。どうしてだろ」

大希はもう一枚ページをめぐり、目次に目を通す。教科書の目次になどほとんど目を通したことのなかつた大希は新鮮な気分だったが、その気分を打ち消し、驚愕させられてしまつよつた一文が目に飛び込んできた。

「ギャラクシウムの……性質？ 開発研究が始まつたばかりなのに、性質なんかわかるのか？ 一五〇ページ……」

大希はブツブツ呟きながらページをめくつていいく。一方未成は关节が白く浮き出すほどコップをきつく握りながらその手の動きを見開いた目で追つていた。そんな様子には全くもつて気付かず、大希は小さな声で、一五〇ページの文を読み上げ始めた。

「ギャラクシウムは、現在判明している最後の元素である。人工元素は寿命の短いものがほとんどだが、ギャラクシウムは安定している。それは、このギャラクシウムが時空間に歪みを作ることで自ら安定な状態を作り出し、核分裂をしないからである。また、その強力なエネルギーを我々は利用し、枯渇した化石燃料に変わるエネルギーの筆頭となつている……なんだこれ」

大希は言葉を失いかけた。この教科書が根本的におかしいことに

気がついた。この教科書は、すでに百三十七番元素が使われているような扱いになっている。しかも、化石燃料は枯渇したというわけの設定付きだ。未成は蒼白な顔で首を振り、教科書に手を伸ばそうとした。

「なあ、その本なにかおかしいよ。もつ見るのを止めないかい」「いや、とりあえず最後まで読ませてくれ」

未成の手をかわし、大希は最後の一文を読んだ。そして、彼も目を見開き、口を震わせた。

「また、その性質を利用したタイムマシンの計画も持ち上がりつたものの、失敗に終わっている……だつて？」

いくらなんでもおかしい。大希は心にそう叫ばれ、巻末の発行日時を確かめた。

「……二一五年……だつて。おいおい」

大希はしかめつ面で本を裏向きに閉じた。鼻を鳴らして首を振る。「ちょっと世界が変わる気がしたけど、さすがに眉唾ものだな。手の込んだ作り物にも見える」

未成は顔を上げた。きょとん、としたような表情で、しきりに瞬きしている。

「信じないのかい？」

「まあ、ここまで手の込んだ本の出處がわからないし、ここまでやる手間を考えた時、偽物とするのも怪しいさ。でも、俺は健に鍛えられてるから、自分自身でも疑つてかかっちゃう部分はあるんだよな。俺の偽者みたいなやつだつて、最初はどうにも納得いかなかつたし……で、結論としては、これは手の込んだ偽物だと思うんだ」

「どうして」

腕組みしながら教科書をぽんぽんと叩いている大希に、未成は呆然としたまま尋ねた。すると、大希はにやりとしながら、空中で本をぱらぱらめくるような仕草をしてみせた。

「本当に未来のものだったら、あれだ。『ゴビキタス』になつてるだろ。電子書籍。今も実験的に使われている所があるつていうし、

今から百年以上も後だつたら……もしかしたら紙の本はほとんど廃れていたつておかしくない。と、俺は思う」  
未成はため息をついた。どこかほつとしたようで、彼の表情は柔らかくなっていた。

「そう単純なものじゃないと思つけど……まあ、そうかもね」  
「うん？ 何か書いてあるな……」

大希は教科書の隅にある文字に気がついた。記名欄に、『K・M』と書かれていたのだ。大希がそれに気がついた途端、未成は大希がその教科書を取ろうとする前に取り上げた。

「ね、ねえ。ちょっとこれを僕に預からせてもらえないかな」

「え、あ？ ああ……まあ、別にいいけど」

大希が目を瞬かせると、未成はいきなり時計を見た。大げさに驚いてみせ、未成はポケットから財布を取り出し、千円札を一枚乱暴に取り出した。

「あ、こんな時間だ。明日少し忙しくなるから、僕はこれで失礼するよ。ごめんね。会計、これで払つておいて」

「へ？ あ、おい。ちょっと待てって」

大希の言葉は無視された。未成は靴を突っかけるようにして履くと、そのまま店の主人に頭を下げ、慌ただしくその場を後にしてしまつた。取り残された大希は、主人にちらりと目を合わせる。「急に忙しそうになりましたねえ……」

「ええ。はい……」

二人は、開けっ放しの戸を見つめ続けていた。

交通安全強化週間も終わった。明日は非番、大希や健は「当地番組を見ながらのんびりと過ご」していた。

『はい、こちらはナデシコの地下食品売り場にやつてきています。現在ここではハロウインセールが行われておりまして、たくさんの買い物客で賑わっています……』

橙色に彩られた店舗の中を、リポーターは様々にコメントを口にしながら練り歩いていく。家族やカップル、色々な人々が店に集まり、笑顔で品物を見つめている。一〇一年もあと一ヶ月だが、久宇慈の街並みは今日も平和だった。大希はサラミをつまみに発泡酒を空けながら呟く。

「知ってるか健。今年は一〇一年だつて。平和だよな」

健はうつんと唸りながら天井を見上げた。一〇一年といえば話題は一つ。マヤ暦の終了、そして世界の存亡だ。だが、リアリストの傾向がある健にしてみれば、やはり馬鹿らしい。サラミを一枚一枚つまんで口に運びながら、欠伸混じりに首を振る。

「一〇一二年つて、あれだろ？ 地殻大変動が起きて、地球が滅亡するつてやつだろ？ ないない。世界がそう簡単に変わつてたまるかよ」

大希は健の横顔を見つめた。すました顔をして、つまらなそうな目でテレビを見つめている。そのつづけんどんな口調に、大希は何かに閃いた。

「ん？ 健。もしかして、映画見た？ しかもあの時の彼女と、にやにやしている大希と目を合わせるのは気分が良くなかった。健は目の遣りどころをテレビに求め、そのまま頷いた。

「ああ。見たよ。確かに迫力はあつたけど、何だか心に迫るものを感じられなくてさ……あいつに『こんな風になつても、守ってくれる？』って尋ねられて、『こんな事起きないから大丈夫』って言つ

ちまつて……まあ、それつきりさ

「ははあん。お前らしい『最期』だな

「つむせえや。お前はどうなんだよ」

すっかり健をからかってやるつもりになっていた大希に、健がお返しとばかりに噛み付いた。すると、今度は大希がつっけんどんな口調で話す番となってしまった。

「俺は……あれだ。仮面ライダーが最終回でさ、よかつたなあ、って言つた瞬間に引かれた。『ガキがお前は』、だつてさ」

頬を赤くしながら言い終えた途端、健はちやぶ台を何度も叩き、

甲高い声を上げて笑い始めた。

「ハハハハハッ！　ああ、そうかそうだな。お前にはそういう弱点があつたな！　そうだよな。二十歳過ぎても仮面ライダーが好きつて、そりやあバカにもされるかもな」

大希は缶を一気に傾け、ちやぶ台を強く叩いた。

「何だよ！　いいだろ？　俺はいつでも童心を忘れないつもりだからな」

酒の入った健は、腹を抱えたまま中々笑い終わらない。結局落ち着いたのは、駅地下のリポートが終了した頃だつた。

「はあ、腹痛くなつちまつた。まあ、お互い様だな。女探しには難儀しそうだ」

「ああ。俺は特撮趣味に理解ある人じやないと。……これからは初めて話した時から話題を振つていくか……」

新しく始まつたニュースを見つめ、健は腕組みした。

「俺は、ちゃんとファイクションと現実を区別してくれる人がいい。あんまりぶつ飛んだ話されても、俺困つちまつし」

「現実的すぎるのも、困りものだと思うけどな……」

大希が首を傾げると、健はわかつていないとでも言つたかのようになつて首を振り、ちやぶ台越しに詰め寄つた。

「そういう意味じやないつて。たとえば、幸せな家庭を築くとか、どんな暮らしがしたいとか、そういう夢はいいんだよ。大好きさ。

困るのは、もしも魔法が使えたたらとか、『もしも』の話ばかりしてくる奴。もしドラえもんがいたらとか、考えたつて仕方ないじゃないか』

大きな手振りを交え、大げさに話す健を見て大希は笑ってしまった。

「まあまあ。お互いがんばろうぜ」

缶の中身を飲み干し、健は小さく頷いた。

「おう」

その頃、剣人はさくらの住むマンションを訪れ、彼女と一緒に秋の夜長を過ごしているところだった。彼女は映画が、特にファンタジーの映画が好きだ。だから、自宅データなんかをする時には、決まってDVDを鑑賞するのが常だった。そして今日見たのは、ファンタジー映画の金字塔、『ロード・オブ・ザ・リング』だった。『はあ、やっぱり最高。これは『ホビット』も見なきやだめね』さくらのすっかり満足げな表情に、剣人は思わず顔をほころばせた。もちろん映画も楽しかつたが、このあどけなさの残る純粋な笑顔も、剣人にとっては楽しみだった。

「そうだな。今年だけ?」

「そうそう。今から読み直して予習しようかなあ」

剣人は頷きで応えてやり、適当にチャンネルを合わせる。ニュースが入つていて、アナウンサーの淡々とした声が映像と共に流されていた。普段ならば、さくらが映画にまつわる蘊蓄を一つや一つ披露するところなのだが、この映画を見たのは三回目、すでに話し切っていた。

二人は黙りこみ、寄り添つたままでニュースを見つめていた。お互い、この沈黙を重苦しいとは考えない。間を持たせるために、適当なことを話そうとか、野暮つたいことも一切考えない。言葉を交わさなくても、お互い繋がっていることくらい承知なのだ。証拠に、二人は安らかな表情でテレビを見つめていた。

アナウンサーがいた画面が切り替わり、若い女優が映った。彼女は何かのインタビューに笑顔で応じている。さくらはその女優を指差した。

「剣人、女優の伊坂美代が結婚だつて。一般人男性と」

さくらは膝を抱え、そつと剣人に肩を預けた。その柔らかい感触を感じ取り、剣人は静かに目を閉じた。

「それはつまり、いつもの話か？」

「そう。一ヶ月前、大希の前で剣人も言つたじやん。そろそろ結婚考えてもいい頃か、つてね」

「まあな。確かにそうだな……」

別に独身でいたい理由もない。働き始めた直後から生活費を極力切り詰め、さくらと一緒に暮らしていくための資金も貯めている。色々と考えているうちに、剣人は結局自分次第なのだということに気がついた。

「ああ。そうだな。そろそろ籍入れたり、式挙げたりしてもいい頃だな」

剣人は頷き、そつとさくらの肩に手を回した。隣で小さく丸まっていた彼女は、猫がいつもそうするように、気持ちよさそうに目を閉じ、そつと剣人にすり寄つた。

「そつか。ついにその気になつてくれたかあ。本当に待つてたんだからねえ？」

さくらは急に体育座りを解いた。ジーンズが似合つすらりと伸びた足を投げ出すと、しなやかな腕を伸ばして剣人の首筋に絡ませていく。そつと顔を近づけて、彼の耳元でそつと囁いた。

「ねえ。今日は私の家に泊まつて行かない？ 私たちの家庭づくりの計画、じつくり話し合おうよ……」

彼女の声色が急に熱っぽく、そして艶っぽくなつた。剣人は生唾を飲み込み、さくらの表情を食い入るように見つめた。映画に目を輝かせていた、少女とも見紛う笑顔は消えていた。代わりにあつたのは、愛を求める、妖艶さを秘めた女の顔だった。剣人は目を泳が

せ、ポケットから携帯を取り出し、時刻を確かめた。

「うーん……どうしたもんかな」

「いいじやない剣人。最近ご無沙汰なんだし……どーせ明日は休みなんでしょ？ 知ってるんだから」

「そうだなあ。確かにさくらの言つ通りだしなあ」

剣人は頬を搔きながら、目をさらに泳がせてみせる。さくらは一瞬口を尖らせた。しかし、すぐにつぶけた視線を送り、さらに体を密着させた。

「焦れつたいなあ。女にねだらせないでよ……」

さくらの手が剣人の頬に触れた時、剣人はふとため息をついた。さくらの肩に載っていた手を、そつと腰の方へと回していく。

「今日はさくらの言う通りにするか。たまには完徹も悪くないな

「何だあ。渋つてた割には乗り気じやない？」

剣人はさくらの問いかけに口付けで応えると、歯を剥き出し獣のような笑みを見せた。

「（）無沙汰なのは俺も同じだ」

さくらは剣人の表情を見て愉悦を覚えながら、しなを作つて微笑む。

「剣人。私、新婚旅行はパリがいいなあ。ねえ、どう？」

「そうだな。お洒落なさくらにはぴつたり……か、も」

剣人はちらりとテレビの方に目を向け、そして固まつた。さくらは再びキスを交わすつもりが、すっかり当てが外れてしまった。女の子の顔に戻つたさくらは、頬をふくりと膨らませて剣人の横つ面を指で突つついた。

「ねえ。ムードが壊れるんだけど」

さくらが怒つたように語氣を強めても、剣人は一向にテレビから目を離そとしなかつた。消しておけばよかつたとさくらが後悔するも、ようやく剣人は静かに声を絞り出した。

「悪い。さくら、やっぱり明日の夜早いうちにしないか？ こんなもん見ちまつたら……」

剣人の様子は明らかにおかしかつた。さくらは顔をしかめ、テレビを半ば睨むように見た。見て、さくらは驚きのあまり色々な文句が飛んでいってしまった。

『情報が入つてまいりました。パリ直下を震源とした地震のマグニチュードは7・0を記録し、停電で都市機能が停止し、現在パリは混乱状態に陥っています。また住宅も多数倒壊し、現在被害状況は確認できぬ状況です……』

そんな言葉と共に、テレビには被災してひび割れたパリの道路、未曾有の大地震に耐え切れず、無残に崩れてしまつた町並みが映される。また、次の瞬間には、今にも崩れそうな凱旋門もアップで映し出されていた。

「嘘……こんな事つて有り得るの？」

さくらはすっかりこの事態に戸惑つてゐるようだつた。剣人は唸つて頭を搔いた。

「現実に、こうして起きているとしか言いようがないな……」

それきり一人は言葉を失い、茫然と混迷を極めるパリの様子を眺めていた。

華の都の混乱をテレビ越しに眺めつつ、未成は教科書を裏向きに閉じた。そこには、細い文字で『K・M』と記されている。未成はその文字とテレビを交互に見つめ、そつと目頭を押された。

「何が、世界が変わる、なのさ。全然変わらないじゃないか、……」

未成は目を閉じる。クラクションや怒号が強く聞こえ、まるでその現場にいるようだ。

『こちらはパリ市街地です！ 現在交通機関が麻痺し、何とか帰宅しようとする人々で大混乱が巻き起こっております！』

『ただ今凱旋門の上空の映像が届きました。右側が大きくひび割れ、再び余震が起きれば崩落も免れない状況です』

映像のように動かなくなつていた未成は、急に頬を叩いて立ち上がりつた。

「 いろんな事してる場合じゃない。僕にはやらなきゃ ならないことが

……

未成は教科書を取り、きつく握りしめた。

翌日。来栖未成は、留置場の接見室にいた。目的はある男だ。首筋を搔いたり、手元に視線を落としたりしながら待ち構えていると、看守に連れられ工藤征尚は現れた。相変わらず暗い笑顔で、未成の前にすとんと軽い調子で座り込んだ。その目を一睨みすると、未成は一人の看守に尋ねた。

「すみません。五分だけでいいです。一瞬この場を外してもらえませんか」

「何故ですか？ 私どもに聞かれて困るようなことはあるんですか？」  
未成は口をつぐんで考え込んだ。困る、といえば困るし、困らないといえば困らないかもしない。聞かれないに越したことはないが、怪しまれるのも嫌な話だと、未成は考えを改めた。

「いえ。やつぱりそちらの裁量にお任せします」

「ならばこの場にいることにします。一応規則ですから、従つておいた方が、後々面倒が起きないので」

「了解しました」

未成はため息をついた。折れた時点では想はついていたが、彼はやはり気難しい顔をしていた。腕組みをして足を組み、ふてぶつい態度で征尚は未成のしかめつ面を見据える。

「何だ。俺に話があるならやつせと話せよ。暇じゃないんだ。俺も看守も」

未成は征尚の馬鹿にしたような笑みを一瞥し、鋭い口調で切り返した。

「あなたが看守さんの心配までする必要はない。黙つて僕の質問に答えればいいんだ」

征尚は口笛を吹いた。眉を持ち上げ、小さな拍手まで始める。

「なるほど。人畜無害そうな顔して、そういう口を利くだけの度胸

はあるのか

「黙れ」

未成は低い声で迫ると、懐から例の教科書を取り出した。眠たそ  
うにあくびをしている征尚に白い目を向け、未成はさらに抑えた声  
を出す。

「あんた、一体誰なんだ。誰の命令を受けた?」

征尚はあくびを噛み殺し、首を回す。未成の問い合わせなど、全く  
意にも介しないという様子だ。頬杖ついて、どこまでも面倒そうな  
様子で鼻を鳴らす。

「俺は他人から命令を受けるような立場はない。そうだな。強い  
て言つなら、俺は提案して、そのまま頼まれたんだよ」

「頼まれた? まさか。『マザー』に?」

未成は蚊の鳴くような声で呟いた。目は見開かれ、その表情は固  
まっていた。戸惑いを隠し切れない様子の未成を見つめ、急に征尚  
は笑い声を洩らした。その表情からは、全く反省の色は窺えなかつ  
た。それどころか、自分が今置かれた現状さえ滑稽に思つているよ  
うに見える。

「そうだ。全ては世界を変えるためにしたことだ。むしろ褒めても  
らいたいもんだなあ」

未成は机を叩いた。たとえ見てくれは優男でも、その中には警察  
らしい正義感がある。釣り上がった目、食いしばった口元がそれを  
証明していた。

「ふざけるな。世界を変える? たとえそんな事のためでも、人を  
殺していい理由になるもんか!」

勢い良く立ち上がり、未成は呻き、下を見つめた。

「お前がどれだけのことを知つてる? 人が一人や一人死んだって  
世界は変わらないんだよ! 全く変わってないじゃないか!」

ふと顔を上げたとき、アクリル板越しに征尚の拳が飛んできた。  
鋭く弾けるような音が部屋いっぱいに響き渡る。あまりの気迫に未  
成は思わず尻込みしてしまった。

「違う。お前がいつまでもそうちだから世界は変わらない。世界はいつも決断だ。思い切らなきゃ世界はまるで動かない。気づいてないのか」「

雷に撃たれたような顔をして、未成は硬直した。唇をわななかせ、震える声でうわ言のように呟く。

「どうしてそれを。どうして……」

征尚はアクリル板にぎりぎりまで顔を近づけ、恐れとも戸惑いともつかない未成の表情を見つめて歪んだ笑みを浮かべた。

「俺は全てを知ってるんだよ」

未成はすっかり気圧された表情で征尚のことを見ていた。最初の威勢はどこかへと消え、今にも膝を折って崩れ落ちそうである。すっかり血の氣を失い、首を振りながら、一步、また一步と後ずさりを始めた。さも愉快そうにその様子を見つめ、腕時計を天井にかざすようにして見つめた。

「まさか。どうして僕の事を……」

「後、十秒だな」

はつとして、未成は自分の腕時計に目を落とした。部屋の隅に立つ看守が、二人の間に行われる不可思議なやり取りに首を傾げた、まさにその時だった。

部屋全体が突き上げられたような感触の後、いきなり横に搖すぶられた。天井の電球が明滅する。未成が立っていた椅子が倒れる。未成も尻餅をついてしまって、中々立ち上がることができない。彼は這々の体で征尚と自分とを分かつ壁に身を寄せた。看守一人も、何もないこの場所では身を守るものが用意できず、ひどく心細そうな顔で壁に引っ付いている。そんな様子とは対照的に、椅子に深く腰掛けたまま、征尚は欠伸を繰り返す。

「おいおい。悪いようにはならねえだろ」「……」

数十秒ほどして、静かに揺れは収まった。終わってみれば、結局椅子が倒れたくらいの出来事しか起きていなかつた。溢れた冷や汗を拭いながら、壁に背を付けて座っていた看守二人は立ち上がつた。

征尚を連れてきた看守は、再び彼を拘束し、未成の側に立っていた看守は戸を開ける。

「すまないが、面会はこれで終わりだ。状況を把握しないとならないから、付き合っている時間がない」

「え、ええ。そうですよね」

未成はズボンに付いた埃を払い、看守の後に従つて部屋を後にしようとすると。その時、ふと反対側を見ると、征尚と皿が合つた。

「見てろ。世界はこれから変わつていいく。それをどうするかはお前が考えるんだな」

ため息をつき、未成はすっかりやつれた様子で、征尚の自信に満ち溢れた瞳から皿を反らした。

「あんたは何なんだ。工藤征尚……」

「俺はただのスタートキーだ。世界の変化はこれから加速されるぞ。振り落とされるなよ？」

未成は答えられなかつた。肩を落とし、まだ地震に揺られ続けているような足取りで接見室を後にした。ドアを閉めた看守は、やれやれと肩をすくめ、同情の眼差しを未成に送つた。

「どうやら、まともな話はできなかつたようですね。ずっとあんな調子なんだそうです。精神鑑定が必要かも知れませんね。いやいや、困つたものです」

看守は同意を求めるような視線を送つてきた。未成は教科書を取り出し、その表紙を見つめる。原子核を中心に、百以上はある電子が飛び回っているその絵。未成は静かに目を伏せた。

「ええ。そうですね」

その頃、大希は健と共に散らばつた本や食器を片付けていた。速報によれば震度は四。おんぼろ官舎もガラスを激しく鳴かせながら耐えたが、棚の中身まではどうにもそつはいかなかつた。元々粗野な男所帯、本のしまい方も、食器のしまい方も雑だったのだ。

「あーあ。たくらが言つた通りにしつけば、こんなに皿を無駄にし

なくてすんだんだよ」

本を棚に突っ込みながら、健はうんざりした調子で呟く。前に四人でこの部屋に集まつた時、さくらが耐震対策だの何だと口うるさく大希達に『指導』したのだ。棚や冷蔵庫のつつき棒にはそれが生かされているが、あと一步意識が足りなかつたようだ。掃除機をかけながら、大希はため息をついた。

「俺たちはまだこんなもんですむから良かつたさ。フランスなんてぼろぼろじゃないか。もともと地震に強い家じゃないし……」

「まあ、そもそも強くある必要なんてないしな」

本をちゃぶ台において、健はふと思い出したように呟いた。その目には、無残に崩れ去つたパリの街並みを黙々と片付ける重機の映像が映つていた。掃除機の電源を切り、大希は腕を組んだ。

「そうだよな。日本と違つて、パリはほとんど地震が起きないはずなのに」

健は大希の方を振り向いた。唇を噛みしめてうつむき、何か言うのを躊躇つて見えた。だが、健は首を強く振り、頬を何度も叩いて、ついに顔を上げた。

「なあ、やつぱりおかしいと思わないか。去年や今年を見たら、地震がなんか多い氣がするんだ。去年は大変だつたし、その前にニュージーランドでも地震が起きてる。ついでにトルコでも地震が起きたし、ほとんど起きないと思われてたニューヨークも、小さいけどあつた。極めつけがパリだ。起こりつこないところで地震が起るなんて、絶対おかしい。……ほんとはこんな事認めたくないんだけど、説明のつかない変化が、この世界に起きているような気がしてきたんだ」

大希は健の思いつめた表情を見つめた。そして目を閉じると、何故だか自分の偽者が脳裏をよぎつてきた。ひどく個人的だが、不可思議な現象といえばこの事だつてそうだ。あの存在は、一体どこから現れたのか。大希には予想もつかなかつた。

「俺もそう思う。……一〇一年、本当ににか起きるのかもな」

大希は田を細くして、窓の向こうに見える時計塔を見つめていた。

久宇慈の時計塔は、相変わらず同じ時を刻み続けて、都市が今日も平凡平和なことを周囲に教えている。未成はその足元に立ち、すっかり塞いだ表情で塔の文字盤あたりを見つめていた。目を閉じると、瞼の裏側にとある姿が過ぎる。自分の運命を、世界の運命を縛るその姿が。深々とため息をついた未成は、腕時計のカレンダーに目を下ろし、固く拳を握りしめた。

『違う。お前がいつまでもそうだから世界は変わらない。世界はいつもでも決断だ。思い切らなきゃ世界はまるで動かない』

田を赤くして、未成は時計塔を睨みつけた。

「そんな事、もづつとわかつてんんだよ……でも、僕は弱いんだ。とても弱い……」

世界の運命は、刻一刻と動き始めようとしていた。

「走れ！ もつと早くだ！」

スピーカーから井上中隊長の声が響く。その声に応じて、大希、健、剣人の三人はさらに蹴り出す足の力を強めた。かなり厳しい。集団警備の訓練で、三人はフル装備なのだ。透明なシールドを左手に、銀色の警棒を右手に携え、剣道の防具にも並ぶ重さの防弾チョッキを身にまとっているのだ。並々ならぬ訓練をしていなければ、とても全力疾走などできないだろう。目的地には白線が引かれ、揃つた者から盾を構え、前方を威嚇するように警棒を振り上げる。大希もすぐに辿り着き、同じように構えた。すぐ後に辿りついた健と剣人は、大希の背を支えるように陣を組む。

こうして、七十人の機動隊員は密集陣形を組み、デモや暴動の突撃に対抗するのだ。その行動には迅速さが求められる。事件は待つてくれない。それが、第一中隊長である井上勝がいつも口酸っぱくして言い続けていることであつた。

笛がなり、隊員達は陣を解いた。それぞれ軽い私語をしながら小休止する中、盾を地面に立て、大希は警棒を腰に収めた。それから、こちらに向かつて悠然と歩いてくる井上の顔を見た。誰が見ても、厳しい鉄仮面に見えるその表情だが、大希はそこにほんの少しの緩みを感じ取つた。

「集合！」

「はい！」

井上の声で隊員はすぐに隊列を整える。彼の厳しい訓練の賜物だつた。その様子を見て、井上は頷いた。

「よし。今日は中々満足できる結果だつた。これから一時間の休憩を与えるから、次の訓練も精力的に臨め！ いいな！」

「了解！」

「じゃあ、解散だ」

場の空気が一気に緩んだ。いつもは僅かな乱れも見逃さない井上からの説教があるのだが、今日は無かったことも大きかった。大希もきょとんとした。今日に限って、なぜ井上は怒らなかつたのだろう。数度瞬きすると、どこかへ立ち去ろうとしている井上の背中を追いかけた。

「井上さん！」

「ん？ ああ、大希か。どうした」

例の件で大黒柱を失つて以来、元々付き合いのあった井上家と今村家はさらに結束を強くしたのだ。大希は井上のことを第一の父として尊敬していたし、井上も、親友の遺児として大希のことは気にかけていた。

「いえ……どうして今日はお説教が無かつたのかと思つて……」

井上は鼻を鳴らした。

「たまにはいいだろう。今日はみんな真剣に取り組んでいたし、特別に言うこともあまりなかつたんだよ。それとも何だ？ お前だけ特別に説教して欲しいのか」

真顔で尋ねられ、大希は慌てて首を振つた。個人的な説教など、ひと月前の一件だけで十分だつた。すぐさま気をつけをする。

「い、いえ。とんでもないです！」

「そつだろ？ ならそんな事聞くなよ」

口元に笑みを浮かべ、井上は大希に目配せした。

「あ、はは……そうですね」

大希は愛想笑いをすることしか出来なかつた。大手を振つて歩き去つていく井上の背中を目で追いながら、大希はため息をついた。

「今日は雪が降るかもなあ……」

呟いた瞬間、いきなり訓練場へと向けられたスピーカーから大声が鳴り響いて大希は飛び上がつた。

「緊急事態だ！ 第一中隊、すぐに集合しろー！」

「え、あ、ええ？」

雪が降るどころか、とんでもないことがどこかで起きたようだ。

大希は戸惑いを隠せず、一言二言意味のない言葉を口走った。咄嗟に井上方を向くと、彼は目を細めてスピーカーの方角を見つめた。ふと彼が大希の視線に気が付き、二人の視線がぶつかる。目を怒らせ、井上は手を大きく振って庁舎を指し示した。

「聞いたか。早く行くぞ！」

「了解です！」

大希は頷き、井上の背中を慌てて追いかけていった。

十一月の三日。国民の休日ということもあって、憩いの場である時計塔南広場には、十数人が集まっていた。木枯らしが吹く秋晴れの中、ベンチに座つて話込んでいた若いカップルもいるし、赤く色づいた紅葉をのんびりと楽しんでいる老人もいる。通りに並べられた様々な彫刻をスケッチしている人もいた。地震から立ち直り、すっかり平凡な生活が戻つてきていた。だが、そんなところに脅威は忍び寄つていく。

「なあ、あの時計おかしくないか？」

とあるカップルの男の方が、訝しげに時計塔を見て彼女に話しかける。彼女は時計塔を見上げ、そして自分の時計に目を降ろした。どちらも共に正午。全く違いは無かつた。いきなり不思議なことを言い出した彼氏に、思い切り不思議そうな視線を送る。

「別に、それでないと思うけど……」

「よく考えろよ。一秒が、あんなに長いわけ無いだろ？」

彼氏は時計塔の文字盤を指差した。彼女は口を尖らせながら、渋々その指先が示すものを見る。文字盤の「コロン」は点滅しており、常に一秒を刻んでいるのだ。彼女はぼんやりとそのコロンを見つめてみた。そして、彼女も次第に疑念を抱き始めた。

「おかしい。段々遅くなつてる」

彼女の言つ通り、コロンの点滅する間隔は遅くなりつつあった。

「だろ？ やっぱり変だ」

彼氏は我が意を得たりという調子に言つ。そのうちに文字盤の

明滅は遅れ続け、ほとんど付きっぱなしになってきた。不審を覚える人間も増えてきて、周囲と話を交えるようになってきた。一体どうなっている、何が起きているんだ、と。

そして、不可思議な出来事が起きた。急に時計塔の像が歪んだかと思うと、それは深い霧に包まれその姿は隠れてしまう。同時に人々は時計塔に向かつて、見えない力に引き倒された。そのままずるずると、強い力で引きずられていく。

「うわわ！ どうなつてんだよ？」

何とかその力に歯向かつて立ち上がるうつとする例の彼氏だが、虚しい抵抗に終わる。彼女も戸惑いの色を隠さない。

「なんか、引つ張られてるみたい……！」

広場は、見えない力に小さな恐怖を抱く人々の声で満たされていた。引力からもがくその姿は、蟻地獄にはまつた蟻のように無力だつた。霧の中に引きずり込まれ、いよいよ人々は心細くなる。その時、潮が満ちれば引くのと同じく、再び変化が起きた。一瞬人々にかかる引力が緩んだ途端、今度は斥力に突き飛ばされた。腹から突き上げられるようにして宙を舞い、人々は地面に投げ出される。同時に霧も吹き飛んで、その中に隠されていたものがあらわにした。人々は元通りの姿となつた時計塔の下を見た。そこにいたのは、正体不明の十人だ。俗に言えばビームライフルのような、メカニカルな装飾の施された白を貴重とした色彩の銃をぶら下げ、黒みがかった迷彩服の上に白いプロテクターをまとっていた。その姿は、どこかに近未来を思わせるものだつた。

何とか立ち上がつた人々を、銃を携えた不思議な兵士が見た。黒いサングラスをかけていて、その表情はうかがい知れない。突如現れた十人を、人々は困惑の眼差しで見つめる。公園を走つていた、ジャージ姿の中年男が呟く。

「い、一体……」

静寂が過ぎる。風が吹いて紅葉が散つていった。わずかに人々がそれに気を取られた瞬間だつた。

「ここから立ち去れ」

いきなり住人のうちの一人が、銃口をジャージ男に向かた。兵士達の目も、市民達の目も、一気にそのジャージ男に注がれた。男は一瞬固まつたが、どこかおもぢやじみても見えるその銃の危険性がよく伝わらず、男はただただ困惑して自分の胸を指さすだけだった。

「え？ い、一体何を……？」

兵士の口元が真一文字に結ばれた。いきなり銃口を並木の一つに向けたかと思うと、その引き金を引いた。銃身の中ほどにある、赤い三角模様が光つた。

広場中に響き渡る高い音。燃え上がる炎にもうもうと上がる白煙。焦げ付く臭い。人々は悲鳴を上げて腰を抜かしたり、固まつたりした。銃から放たれた光が、いきなり木を発破して炎上させたのだ。震え上がっている人々に顔を向け、十人の兵士は銃を構えた。

「さあ。早くここから立ち去れ！」

人々は震える体で立ち上がりと、どうにかこうにか走りだした。足がもつれて何度も転びそうになる。その背後で次々に木が爆ぜる音が響き渡つた。閑散とした並木道が、一気に火の海へと変わる。恐慌状態の人々は、蜘蛛の子を散らすように逃げていつた。

「始末しなくてもよかつたのですか？」

転んだり、つまづいたりしながら必死に逃げていく市民達を見送りながら、小柄な兵士が銀色の腕章を着けた上官に尋ねる。炎上させた木々を見つめながら、彼は静かに頷いた。

「『干渉』による影響はまだはつきりしない。無用な殺害は避けたほうがいい。それに、我々はいち早く『サイバー隊』がこちらへこれるように整備するのが役目だ。その意味でも行き過ぎた行動は厳禁だ。いいな」

「了解です」部下は敬礼で応えた。

「ならばいい。さつやとこの広場を更地にするぞ。迅速な行動が第一だ」

「はい！」

二人は背負っていたバッくパックからメガホンのように見えるものを取り出し、銃口に取り付けた。

異様な沈黙を保ち、緊急車両が通る。鉄の箱がそのまま動いてい るような警備車が先頭を行き、バス型の輸送車が続き、さらに消防車に似た姿をした放水車が追いかけていく。そしてしんがりは照明をくつつけた投光車だ。目的地はもちろん、今も武装集団が破壊を 続ける時計塔南広場だ。その空にはヘリが飛んでいる。大方、マスコミが乗り込んで、破壊の様子を俯瞰しているのだろう。

「あいつらの根性にも頭が下がるよな。わけのわかんない武器持つた奴を見下ろすなんてさ」

輸送車からヘリを見上げ、健が呟いた。隣で剣人は真剣な顔をし、プロテクターの留め金と、拳銃の中身も確認していた。

「他人事じやないぞ。その、『わけのわかんない武器持つた奴』を俺達は取り押さえようつていうんだからな」

「まあ、それもそうだな……一発で木を爆発させりつて、どんな兵器だよ」

「木どころか、彫刻も全部やられたらしいな」

「おかしいぜ。そんな武器がこの世にあつていいのかよ うつむいたままぶつぶつしゃべり続けている二人を、大希は後ろから小突いた。

「文句ばっかり言うなよ。俺たちが止めないで誰が止めるんだ。自衛隊だつてまだ着かないし、せめて時間稼ぎだけでもするしかないだろ」

「おう。悪い悪い」

健は頭を搔きつつ再び外を見た。久宇慈の白い塔も目の前だ。その様子を見て、すでにヘルメットを被っている部下がすかさず口を開いた。

「健さん。そろそろ着きますよ」

「わかつてゐるつて」

数分後、広場からほんの少し離れた位置に車両を停め、第一中隊は速やかに降り立つた。井上の判断で、敢えて盾は持たないことになつた。現場を見ている巡査からの報告を聞く限りは、盾など持つていても仕方がなさそうなのだ。

「説明した通りだ。気取られないよう素早く南広場を囲め。武装を見るに危険が伴うが、ここで働くなら、俺達はただの穀潰しだ！ 何としても取り押さえるぞ！ 行け！」

井上の発破を合図に、中隊は散らばつて走り始めた。尻込みするような奴は一人もいなかつた。

大希達も、ビルの路地を縫うように南広場を目指してひた走る。直接取り囲んでも仕方がない。警備車と投光車で気を引いた瞬間、ビルの隙から一気に飛び出し包囲する。井上の朗々とした作戦説明の声が蘇ってきた。

「大希。相手は何が目的なんだと思う？」

剣人が大希の背後で尋ねる。大希は目を泳がせ、少し唸つた。しかし、すぐに首を横に振つてしまつ。

「今考えたつて仕方ないだろ。それに、よりによつて広場を選んで壊す目的なんか、本人に聞いたつて理解できないと思うぜ」

剣人はため息をついた。思い通りの言葉ではない、といった調子だ。

「まあ、それも一理あるか……よし」

切り替えの早さが剣人の美德だ。すぐに真剣そのものの表情へと立ち返り、すでにビルの壁に張り付いている健の隣に身を寄せた。すでに彼は銃を抜き、ちよくちよく広場の様子を眺めていた。剣人を一瞥すると、そつと広場の集団を指さす。

「見ろよあれ。なんだかもう、きれいさっぱりしてゐるぜ」

言つ通り、武装集団はきれいに南広場を更地とえていた。そして、向こうからはどうにも殺伐とした雰囲気が伝わつてこない。ど

ちらかといえば、もうすでに一仕事終えたかのような雰囲気だ。驚異と思われた謎の武装も、やたらと膨らんだ銃口から風が出ているだけだ。破壊しつくした彫刻や、並木の燃えかすを吹き飛ばすためだけに使っているらしい。その様子といつたら、まるでお掃除だ。切羽詰まつた雰囲気などかけらもない。拍子抜けで、大希は拳銃を握りしめたまま苦笑いした。

「マスコミは何て取材してんだろうな」

「冗談いいから集中するぞ。奴らの作戦かもしない」

剣人があまりに大真面目な調子で言うので、大希も段々そんな気がしてきた。何はともあれ、彼らの武器が彫刻から何から破壊したのは事実なのだ。

「ああ。 そうだな」

大希は胸ポケットから無線を取り出し、早口で吹き込んだ。

「こちら今村。 位置につきました」

『わかつた。 サイレンの音を待て』

周囲の十人に緊張が走る。勝負は一瞬、しくじればどうなるかわからない。誰もが息を殺し、緊張の糸をぴんと張り詰めた。

けたたましいサイレンが耳に鳴り響いた。青い箱が凄まじい勢いで南広場に押しかける。それに気がついた兵士達は、慌てて銃口の先からラップの口を外した。その様子を見た大希達十人は額き合い、一気に走りだした。やや遅れて、灰色の身なりをした投光車が兵士に向かって眩い光を放ち、ついでにクラクションを鳴らす。兵士たちは落ち着いていたが、いきなり数十人もの警察が銃を構えて現れたのだ。的を定められず銃口がふらふらしている。

「抵抗は止めろ！ 大人しくするのがお互いのためだ！」

警備車から降り立つた井上が、ゆっくりとメガホンを構えて兵士達を睨みつける。その手は汗ばんでいた。いくらこちらが優位を取つたといえど、相手が死に物狂いに反抗すれば、甚大な被害が出るだろう。様々に場数を踏んできた井上にとつても、この作戦は一か

ハがだつた。その目の前で、兵士達は顔を見合わせた。どこから突破しようかとか、そんな事を考えているのかもしれない。井上はうつすらと体が汗ばむのを感じた。

しかし、顛末はあまりに呆氣なかつた。兵士達は額き合ひと、銃をいきなり下に放り投げてしまったのだ。戸惑つ數十人の目の前で、高く持ち上げられた彼らの両手。閑散とした広場の中、無抵抗を静かに表明していた。

不可解な点を多く残したまま、南広場破壊事件はひとまず終結した。そんな状態だから、大希達も、マスコミも、市民も万々歳では終わらないでいた。市井では木を炎上させた瞬間の恐怖が盛んに囁かれたし、マスコミはマスコミで、未知の武装を盛んに取り上げ、いつの間にやら全国規模での話に変わっていた。世間がそうなっている中では、大希達もやれやれと腰を落ち着けることはできない。まるでデモ活動の警備を控えているような有様で、缶ビールをえ空けることができなかつた。

大希の部屋に集まつた幼馴染の四人は、お酒の代わりに麦茶を飲み、真剣な顔であちこちのニュースを見つめていた。

『彼らが持つっていた武装を再現してみました。入ってきました情報によりますと、現在全く解析が出来ていない状況にあります』

キャスターがスタジオの中央に現れたCG画像を手で指し示す。やはり機械的な外見をしていて、SF作品にでも出てきそうだ。スリーブに身を包んで髪を固めた、どこかで見たことのあるコメントーターが緊張の面持ちで話す。

『この武装については解析を急いであります。ですが、ある程度の予測は我々理研の方で出ています』

『それは一体?』

『まず、この兵器の主武装はレーザーであろうということです。木が弾け飛んだということですが、おそらくレーザーによつて内部の水分が急速に水蒸気に変化したことによるでしょう』

汗を拭いながらも流暢に言い切ると、キャスターはさうに質問を浴びせかけた。

『では、彫刻の破壊方法について、何かわかることは?』

『あちらは目撃情報が少ないので何とも言えませんが、削盤機のよ

うなものは使つていなかことなので、もしかすると、衝撃波を用いたのではないかという推測が出ています』

『なるほど……』

じつと二人のやり取りを見つめていた健が、ちらりとさくらの横顔に目を向けた。

「なあさくら、レーザーで本当に今言つたみたいな事できんの？」  
さくらは口を真一文字に引き延ばし、いかにも困つたような顔で健を見た。首を傾げて田をくじくじさせながら、健の田を上田遣いで覗き込む。

「どうして私に聞くの？」

「だつて、大学に行つたのさくらだけだし……」

「大学に行つたからって、勉強してないことは知らないからね？  
私工学部だつたけど、そつち方面は関わつてないし」

ああ、と健は納得したように手を叩いた。

「そつか、わりい」

健が手を合わせると、さくらは急に頬を緩め、にやにやしながら健の肩を叩いた。

「でもね、レーザーで溶接とかできるらしいし、レーザーで戦闘機を撃ち落とす兵器の研究とかまであるらしいよ。できるばずよ」

そう言つて、さくらは知らん顔で麦茶をする。健は納得していつが、そのうちさくらに一杯食わされたことに気がついた。口を尖らせると、いきなり彼女の頬をつまんで引っ張つた。

「いたた！」

鈍い痛みを感じたさくらは、大げさにじたばたして健の右手を引き剥がそうと躍起になる。しかし、それくらいでは健の握力から逃れることはできなかつた。引いたり緩めたりを繰り返しながら、健は口角の釣り上がつた笑みを浮かべてさくらに詰め寄る。

「お前、結局知つてんじやないか。からかつたな？」

「ふええ。剣人、ヘルパー！」

たまらずさくらは剣人に助けを求めた。彼はため息をつき、情け

ない顔になつているさくらと、楽しそうに彼女の頬を引っ張り回している健を見比べた。中学生の頃から変わらない一幕の一つだつたし、特に介入しようとは思わなかつた。当然、この剣人の反応も含めて一連の流れである。

「お前が悪い」

「えー。それが一生涯のパートナーに向かつて言ひ言葉？ うげえ

つ

さくらは首に腕をかけられ、そのまま頭をげんこつでぐいぐいやられ始めた。特に嫌そうな顔はしていなかつたが、自分の首を固めている健の腕を何度も叩き、ついでに口を尖らせた。

「これつてセクハラよ。純然たるセクハラだつてば

「うるせえよ。その前に言うことあんだら

「何よ。何を言えばいいの？」

他愛もない一人のケンカを一通り見つめた後、大希はテレビに目を戻した。チャンネルを回して、違う局に合わせる。ニュース番組のスタジオの中、緊急検証と左上にテロップされ、誰かがアップとなつていた。どこかで見たひげ面だ。得意満面、水を得た魚のように話している。その顔を見て大希は顔をしかめた。

『これは間違いなくクラリオン星人でしょう』

眼鏡をかけたキャスターは、間違いなくバカにしたような表情を浮かべた。しかし、彼はそれをすぐに隠して尋ねる。

『それは何を根拠に？』

『目撃者の証言によれば、間違いなくワープ装置が使われたに違ないません』

これにはキャスターも仮頂面になつてしまつた。しかし、時計塔が歪んで見えただとか、霧がいきなり立ち込めたとか、ついでに人が引っ張られたりふつ飛ばされたり、不思議なことばかり起きていた現状を見ると、一つの可能性としては考えられる。それはそのキャスターもわかつたのか、重苦しい動作で頷いた。

『そうですね。その可能性も考えられると思います。では、何故そ

の宇宙人は、わざわざ久宇慈市を襲つたのだと思いますか』

『それは、久宇慈市が一三七番元素の研究を始めたからです。クラリオン星人のワープ装置には百三十七番元素が用いられており、地球が同じ技術を獲得することを恐れた』

大希は見るに堪えず、チャンネルを変えてしまつた。あのようなデタラメが二コース番組でまかり通るなど、甚だおかしい話だ。それだけ世間も浮き足立つてはいるのか、それとも対岸の火事とおもしろがつてはいるのか。大希はあることないことを考へてしまつた。

「全く。デタラメもあそこまで来ると笑えてくるな」

剣人も頷いた。白髪や白い髭をぼさぼさに伸ばして、一昔前の映画にかぶれているとしか思えなかつた。

「何だかSFの設定で出てきそうな話だつたな。宇宙人とか、ワープ装置とか」

「ああ。まだ人死にも出てないからな。向こうはまだまだ平和な気分なんだろ。ついでに……」

大希はさくらと健の方に振り向く。いつのまにか立場が入れ替わり、健の方がヘッドロックをかけられ頬を引っ張られていた。親しき仲にも礼儀ありでしょ、だと、くすぐりはもうなしとか言われてはいる。大希はため息をつき、いたずら盛りの子を見る親の目で二人を見つめた。

「お前らも随分平和だよな」

「え？」

二人はケンカの手を休めて顔を上げた。大希は頬杖をつき、眉根にしわを寄せながら呟く。

「広場一つまつさらにはされたのは事実なのに、さくらも健も気楽そうにしてるからさ」

さくらと健は顔を見合させた。真剣な顔で一人はお互見つめあい、正座した膝に置く手にも力を込める。だが、二人は堪えきれずに笑いだしてしまつた。姿勢を崩し、肩を叩き合つて声を弾けさせた。その屈託のない笑顔のままで、さくらは大希に向き直る。

「今日呼ばれた時から思つてたんだけど、やっぱり私達に辛氣臭い顔なんか似合わないって」

大希は目を瞬かせた。テレビでは、武装の予測できる破壊力が検証され、その結果に対して様々な憶測が飛び交つていた。さくらはそんなテレビの電源を消してしまい、再びにこりと笑つた。

「だつてそうじやん。私達は親友でしょ？ いつも言つてるけど、親友つて、一緒にいて楽しくなれる、明るくなれる、そんな関係じやん。少なくとも私達はそんな関係だと思つてる。大希と剣人もにらめっこしてみなよ」

言われるがまま、大希と剣人は睨み合つた。しのぎを削り合つているつもりで、喉を攻めるつもりで、一人はじつと睨み合つた。最初はお互いに視線が刺さるのを感じていた。全ての感情を打ち消し、お互いを圧して倒そうとする視線だ。居丈高である剣人に視線で押されかけ、大希は負けじと目をつり上げて眼光を強くした。それに合わせ、剣人もさらに強く睨む。

三十秒もすると、視線での戦いが膠着した。お互いに攻めかね、心に空白が生まれる。すかさずその隙間に、バカバカしさが入り込んだ。お互い切磋琢磨し剣を交えているわけでもない。お互い憎しみなどあるはずもない。なら、何故自分たちは睨み合つているのだろうか。そんな事を考え始めると止まらない。大希はとうとう噴き出してしまつた。

「ほんとだ。稽古じゃないと馬鹿馬鹿しくて睨み合えねえ」「俺達には、笑顔が似合うってことか？」

剣人は肩をすくめながら微笑んだ。さくらは大きく頷くと、いきなり剣人を右手で抱き寄せた。もう片方で健を抱き寄せた。

「そういうこと。剣人といえば百人味方がいるくらい安心するし、健もいればまた百人くらい増えた気分だし……」

さくらは目で剣人を促した。慌てて剣人は大希の肩を持つて引き寄せた。

「四人でいればもっと、か？」

剣人が片方の眉を持ち上げると、さくらはくすりと照れくさそうに笑つた。

「そういうこと。私はあんなのが攻めてきても怖くない。みんながいてくれればそれで」

大希はふと、四人で誘拐された日の事を思い出した。四人バラバラでいたときは、絶望してしまいそうなほど辛かったのに、こうして肩を寄せ合うと平気になれた。さくらの言つ通りだ。きっと、自分たちはいつまでもそうなのだろう。少し暗くなつても、みんなで励ましあつていいくに違ひない。

「ああ。みんなそうや」

時同じくして、未成は疲れきつた表情で自宅に帰つてきた。機動隊が兵士を取り押さえた後、未成は他の同僚と共に広場後に駆り出され、不思議な事象の残滓を探させられたのだ。だが、そんなものは残つておらず、鑑識課の努力はただの徒労に終わつてしまつた。電気も付けずにソファーアに倒れこみ、未成は深いため息をつく。

「見つかるはずなんかないのにな……」

話す相手が欲しかつたが、今ごろ大希は幼馴染と過ごしているはずだ。そこに自分の入り込む余地はないだろつ。未成は再びため息をつき、肩を落としてうずくまつた。その時、背後で携帯が鳴つた。未成は反射的に携帯を取り上げる。

「はい。来栖です」

『もしもし。今村です。未成、今何してる?』

電話の向こう側にいたのは、紛れも無く大希だつた。呆気に取られた未成は、一瞬声も出せずに固まつてしまつ。

『未成? おい?』

『あ。ごめん。今帰つてきたところだよ。どうしたの?』

『そつか。未成、今さ、剣人達と集まつてゐるんだけど、お前も来いよ』

大希は明るい声だつた。未成ははつとして、再び声が出せなくな

つてしまつた。彼の不審な様子に大希は戸惑つたのか、困つたような声が飛んでくる。

『おい。未成、さつきからお前はどうしたんだよ?』

「い、いや。『めん。何でもないんだ。でも、疲れてるから僕は遠慮するよ。』『めんね』

『なんだ……。そうか。それなら強要しないさ。それじゃあな』

「うん。じゃあね」

切れた携帯を見つめ、未成は静かにそれを胸に押し当てる。どうして断つてしまつたのか、自分にもよくわからなかつた。だが、自分を気にかけてくれたというだけで、未成は少し満足していた。

「あいつの言う通り、世界も、少し変わつたのかな……」

そして、未成は顔を暗くした。携帯を再び開くと、そのカレンダーは十一月の十日を示している。

「でも、変わつてほしこ」とは、やつぱり変わつてくれないんだ……

…  
微かに、未成の目には涙が浮かんでいた。

十一月十一日。世間では、あるお菓子の「マーシャルみたいな日」だ。安易な考へだが、それにうっかり乗つてしまふのが悲しき大衆の性といつやつである。さくらの友人である理加は、自宅近くの、そして南広場跡近くのコンビニを訪れていた。仕事前の食料調達だつたが、やはり彼女も流行に乗せられていた。

「ポツキンナベイバー。つてか。甘い甘い。さくらはびじてこつちの良さがわかんないかなあ？」

ハーフフレームの眼鏡を持ち上げるような仕草をすると、理加はプリツツの品定めを始めた。ポツキーのように「コレーション」が派手な商品はないが、その素朴さが妙に理加は好きだった。ふと顔を上げると、鏡のようつに磨き上げられた窓に一瞬自分の顔が映つた。教科書のイラストにでも出できそうだ。不細工なわけでもなく、美人でもない。印象にも残らない。さくらのようつに満面の笑みを作つてみると、さくらのような華は無かつた。わずかに肩を落とし、理加はプリツツをサンドイッチが入つたかごに落とす。

「ま、私もポツキーは好きなんだけどね……」

踵を返し、理加はレジへと向かう。再び窓の外に目を向けると、今度は南広場の跡が目に入つた。今では全くの更地となつてあり、警戒テープがそこを囲つていた。昨日活躍した機動隊もあり、いたずらに入る者がいなか見張つてゐる。理加はため息をついた。昨日の出来事は、彼女にも深い影を落としていた。

「嘘みたい……あんな出来事……」

店を出た理加は、うつむきがちになり、小さくなつてその向かいを通つた。

「どうして私、こんな所にマンション借りやつたんだる……」

最初は広場が一望できて小洒落ているからと、多少の出費は我慢

して借りた自宅だったが、今となつてみればおちおち眠ることもできない。今にも何かが出てきそうで、理加は少々怯えていた。やや小走りになつて、角に曲がる。そして、南広場から離れられたことに安堵してほつと息をついた。その時だった。

理加の体が急に南広場の方角へ引っ張られた。大の男に無理やり引っ張られたような感覚で、抗おうとしても抗えない。理加はふらつきながら広場の方へと歩かせられていく。

「な、何？ 何がどうしたの？」

理加は蒼白な顔で振り向いた。そこに広がっていたのは、昨日の目撃者がニュースで語っていたのと同じ白い霧。だが、規模が彼らの言っていたものとは全く違つていた。広場の周囲を取り囲んでいた警官が、霧に包まれて全く見えなくなつていた。ついでに、理加は何かが震えてぶつかり合つている音を耳にした。胸の中で激しく警鐘が鳴り響くのを聞き、理加は何とかホテルの軒を支える柱に掴まつた。目の前で、人々がどんどん霧の中へと飲み込まれていく。

「これって……もしかして……」

理加は恐怖を何とか押しとどめ、柱を伝つて、働く引力の方向とは反対側の場所に移る。そして、携帯の在り処を探つた。動ける人が動かないと。理加は心を決めたのだ。スーツのポケットを探り、ついに携帯の感触を指で確かめた時、今度はいきなり何かで突き飛ばされたかのような衝撃が襲いかかってきた。理加は簡単に吹つ飛ぶ。床、広場、天井、通りと視界が激しく移り変わる中、自動ドアが確実に近づいてくるのがわかつた。

「うそ。ちょ、ちょっと待つて！」

理加は頭を庇う時間しか残されていなかつた。全身をドアに打ち付けられる。火花が散りそうなほど痛みを感じたが、幸いドアが強化ガラスだったのと、理加が瘦せつぽちだったお陰でお陀仏は免れた。ふらつきながら立ち上がり、理加は広場へと歩いていく。霧は晴れていた。そこに広がる光景を見て、理加は呆然としまつた。何よあれ。思わずそんな言葉が漏れ、携帯のカメラを向けるこ

とも忘れていた。

そこにいたのは、巨大なカマキリのようだった。ざつと見ても十メートル以上はある。白銀に光る金属の体を持ち、顔の輪郭に沿うように青白い点状の光が並んで灯っていた。不規則に明滅するそれは、周囲に倒れて呻いている人々を無慈悲に見つめている。そして、カマキリの中で最も目立っていたのは、銀色に光る前腕の刃だった。

「と、撮らなきゃ。情報を得ないと……」

最も情報と密に関わっている彼女は、それがいかに大切なものを理解しているつもりだった。身の毛がよだち、心も必死に『逃げろ』と叫んでいる。しかし、理加はそれを理性で抑えこみ、携帯のカメラで必死にカマキリを写した。その威圧的な風貌を、全体像一枚、そして部位ごとに十枚。理加は撮った。そして、理加はそのカマキリの恐怖を知ることになった。

「Follow the given command……」

無機質の電子音を発した後、カマキリはその大きな鎌で、理加とは反対側のビルを殴りつけた。ガラスが碎ける甲高い音が通りを満たし、鉄が捩じ切れしていく、耳を塞ぎたくなるような音がその後に続していく。そして、阿鼻叫喚の叫びが最後に通りを占めた。恐慌した人々は、蜘蛛の子を散らすようにカマキリから逃げ出します。

「Follow the given command！」

理加もまた同じだつた。狂つたように、人々その姿に常識など存在しないが、ビルの破壊を始めたカマキリを見て、理性など吹き飛んでしまつた。本能で安全な場所を求める、理加はホテルの中に飛び込んでしまつた。理加は恐怖で口をぱくぱくさせることしかできず、人々ホテルにいた数人の人々が必死にどこかを目指して逃げ出す中、ただただ魂が抜けたようにカマキリを見つめていた。

ビルの瓦礫に混じつて、何かうごめくものが地面に叩きつけられたのが見えた。五体満足のまま、絶望に顔を凍りつかせた人もいれば、カマキリの攻撃によって語るに堪えない有様になつているものもあつた。どちらにせよ、早くに出勤して、仕事の準備を整えてい

た不幸な人々の末路だった。まつとうに生きる人々が割を食うことがあるこの世。その理不尽を究極に表していた。そして、その刃は理加にも迫つてくるのだ。

「いや……来ないで」

ひと通りビルを破壊しつくしたカマキリは、重く胸に響く音をさせながらホテルの方に振り返つた。その目が全て光りだす。理加は果然と咳き、その驚異から逃れようとフロントへと向けて走りだした。そこにはもう誰もいない。元々いたはずの受付嬢は、あてもなくホテルのどこかへ逃げ出してしまつたらしい。理加はもたつきながらそのカウンターを乗り越え、その狭いスペースの中で身を縮める。

「やだよ……さくら、さくらあ……」

親友の名を呼んで、理加は顔をくしゃくしゃに歪めて泣きじやくつていた。体は震え上がっており、もうどこにも動けない。カマキリの甲高い動作音だけが強く耳に焼き付いていた。そして、カマキリはホテルの前でその歩を止める。

「Follow the given command……」

カマキリは鎌を振り上げ、ホテルを切り裂いた。蛍光灯が弾け飛び、天井が碎けた。そして、カウンターの角に身を寄せていた理加の頭上に、彼女の体の数倍はある大きな瓦礫が降り注ぐ。彼女の悲鳴がこだました。

大希達がそこに出場したのは、その十分後だつた。間を置かずに訪れた真の恐怖。それは、広場の周囲のビルをすでに破壊し尽くそうとしていた。血なまぐさい臭いが鼻をつき、毛布を片手に降り立つた大希は顔をしかめた。剣人や健達も続々と降り立ち、そして一様に顔を歪ませていた。

「これは……」

剣人は鼻を押さえ、顔を曇らせた。建物が崩れ、瓦礫に混じつて遺体が転がっているその有様。昨年、被災者の捜索で派遣された時

以来のショックだった。しかし、ショックを感じている暇もない。

カマキリとの戦闘は自衛隊に任せることより他はないが、まだ生存者がいるなら、何とか避難させてやらなければならない。大希も健も苦しい顔をしていたが、その目にはしかと決意が宿っていた。

「奴はまだビルを壊すのにつきつきりだ。何とか生存者を見つけて、助けてやれ」

鬼と言われる井上の声も、僅かに震えていた。彼を打ち振るわせているのは、怒りか、悲しみか。どちらにせよ、その声で隊員は奮い立つた。

「了解！」

足音を立てないよう、かつ素早く隊員たちは三人一組にばらけて走った。もちろん大希は剣人や健と一緒にいる。カマキリへの恐怖と闘いながら、大希は瓦礫となつた広場を必死に見渡した。しかし、見つかるのは目を背けたくなるような惨状ばかり、少し歩くたびに絶望も一歩一歩心に歩み寄つていた。

「待つてくれ」

うつむいていた剣人は蒼白な顔で唇を噛みしめ、急に一人を呼び止めた。そしてその場に屈み込む。そこにいたのは、目を飛び出しそうなほどに見開いたままで死んでいた、スース姿の男だった。その下半身にはその体の一回りは大きな瓦礫がのしかかっていた。震える手を伸ばし、剣人はその目を閉じてやる。その冷たくなつた感触に、剣人は思わず唇を震わせた。

「ひどい……助かつた奴なんていいるのか？」

「止めろ！ それだけは言うな！」

剣人の弱音を叱咤したものの、健に希望があつたわけではなかつた。周囲を探すことをやめ、健もうつむいてしまつた。そんな二人を見つめ、大希は体をわななかせながら首を強く振る。

「……誰か。誰かいないのか！」

大希は心の中で叫んだ。その時、カマキリの放つ金属音に混じつて、小さな小さな声が聞こえてきた。大希達は一斉にその方角に目

を向ける。そこにいたのは、右足を血溜まりに浸した女性だつた。真つ青な顔で、すでに一歩も動けぬほどに弱っていた。彼女はわずかに微笑み、こちらに手を差し伸べようとしていた。

「助けに、来て、くれたんですか？」

「は、はい！」

大希が叫んだ時、カマキリがビルに最後の一撃を見舞つた。鈍い音と共に瓦礫が弾け飛び、一際大きなコンクリート塊が大希達と女性の間に落下して砕けた。石つぶてが三人に降り掛かつてくる。三人は慌てて顔を庇う。それでも数えきれない礫が全身を襲つたが、そんな事は些事に過ぎなかつた。

「大丈夫ですか！ 無事ですよね！」

健は大声で呼びかけながら瓦礫を乗り越えて女性の姿を探した。

「は、はい……私は何とか……」

「よかつた！ 今助けてます！」

大希達は女性の元に駆け寄つた。顔色は悪いが、今すぐ助け出しさえすれば何とかなりそうではある。背負つていた毛布を下ろして広げ、右足の怪我に気をつけながら彼女を載せた。そのまま三人で毛布を担架代わりに持ち上げ、彼女を急いで担ぎ出そうとした。

「Follow the given command！」

大希は反射的に背後を見上げた。そこにいたのは、紛れも無くカマキリの化物だつた。銀色の鎌を振り上げ、今まさに四人を始末せんとしていた。

「ま、まずい！」

大希は飛び出した。何も考える余裕もなかつた。このままでは仲間が危ない。その思いが彼を突き動かし、カマキリの前に立ちはだからせた。その刹那、誰もが思いもよらぬ出来事が起きた。

「Follow the given command！」

「……」

急にカマキリの電子声が歪み、動きも固まつた。鎌を振り上げたまま、カマキリは急に痙攣を始めた。必死に鎌を振り下ろそうとし

ているのか、亀のような動きで鎌が大希の方に向かっていた。しかし、その鎌は永遠に大希の元へと届くことはなかつた。

「E - c o r d N o . 0 0 0 . I c a n n o t f o l l o w t h e g i v e n c o m m a n d 」

最後に小さく言葉を呴いた後、金属のこすれ合う音と共にカマキリはその場に崩れ落ちた。鎌が大希の側を掠めて落ち、カマキリはその場に伸びてしまつ。目の光も消え、それは物言わぬ金属の塊となつていた。

「な、どうしたんだ……一体……」

不意に訪れた出来事に、大希はただただ驚くより他に無かつた。

瓦礫の中に崩れ落ちて動かなくなつた機械のカマキリ。初めのうちは、我も忘れてただただそれを見つめていることしか大希にはできなかつた。周囲で駆け回つていた仲間たちも、微動だにせずその機械を見守つている。

「なあ、どうしたんだ？ これ……」

健は一旦負傷した女性を下ろし、そつとカマキリの方へ歩み寄つた。眼の光どころか、白銀に輝いていたその体の光も失せ、鈍色に濁つっていた。健はその有様をまじまじと見つめると、目に恐怖の色を浮かべながら鎌に手を伸ばした。

「やめろ！ 下手に触つて、何かあつたらどうするんだよ」

大希は慌てて健の腕をはたき落とした。健は眉にしわを寄せて大希を見たが、文句は言わずに腕を引っ込めた。代わりに、大希は手頃なコンクリート片を掴み、そつとカマキリの頭に向かって投げつけた。鈍い金属音が周囲に響き、コンクリートはカマキリの前にころりと転がる。カマキリは微かな起動音すら立てなかつた。

「どうした！ 何がどうなつてる！」

呆然と立ち尽くす大希達の背後から、井上の声が飛んできた。本人も身軽に瓦礫を乗り越えながら駆けつけようとしていた。

「い、井上さん。それが……このような状態で……」

井上は顔をしかめて首を振る。彼だつて、カマキリが倒れたのは見ていたのだ。

「そんなことは来るまでにわかる！ 何かカマキリにしたのか？」

「いえ……せいぜい僕がこの女性の盾になつたことくらいですが……」

大希はカマキリと倒れている女性との間に再び立つてみせた。にわかには信じられず、井上は開いた口が塞がらなかつた。周りを見渡すと、自分と同じようになつてている部下ばかりであつた。職務が

頭から吹っ飛び、ただ呆然として動かなくなっている。誰もが戸惑い息を潜めて、鉄屑と化したカマキリを見つめていた。

ようやく現実を飲み込んだのは、間近で女性の呻き声を聞いた剣人だった。踵を返して井上に振り向き、気をつけをして訴えた。

「……いけない。怪我人はまだこの場にいます。呆然としていてはいけません！」

その言葉で、ようやく井上は我に帰った。乾いた目をこすり、咳払いをして周囲を鬼の田で見渡した。

「剣人の言う通りだ。我々の職務を忘れるな！ 生存者を探せ！ 重機も呼ぶ。鑑識の犬も呼ぶ！ 全力を尽くして探せ！」

隊員は我を取り戻した。地を高らかに踏み鳴らし、揃つて敬礼した。

「了解！」

大希達はすぐさま女性に駆け寄り、頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。どうかお許しください」

「いいですよ。助けてくださるんですから……」

「すみません」

大希達は一斉に女性を持ち上げ、警備車の方角へ向けて走った。

二十分ほどして、奮闘する大希達の元にショベルカーが一台と、鑑識課が辿りついた。輸送車に乗つた自衛隊もだ。援軍によつて、膠着していく救出戦線も息を吹き返し、全身全靈でもつて生存者の捜索にあたつた。

警察犬が、血なまぐさい臭いの中、わずかな命の匂いをかぎ分け、重機が動き回る騒音の中の微かな身動きを聞き付けて駆け回つた。

その後を必死に救助隊が追い、手でどけられる瓦礫は全力でどかし、ショベルカーにも頼つて瓦礫という瓦礫を探つた。もちろん、見つかるのは遺体ばかりだ。瓦礫と瓦礫の間に、などという幸運な人は中々いない。

「そつちはどうだ！」

「だめだ。一人も見つからない」

「諦めるな！ 今にも助けを待っている人がきっといる！」

こんなやり取りが、廃墟の中にずっと響いていた。

そこには未成もいた。鉛色の空の下、未成も周囲に混じって救助を手伝っていた。下水と血の臭い、そして死臭が入り交じった臭いに彼はたまらず吐きそうになつたが、どこもかしこも無事な自分が休む気にはなれなかつた。そして、その思いがついに実を結ぼうとしていた。

「生きてる。生きてるぞ！」

誰かが嗚咽混じりの叫びを上げた。瓦礫の下では、年端もいかない男の子が、母親に抱かれたまま泣きじやくつっていた。その母親は、我が子を瓦礫から庇つて死んでいた。

「今助けるぞ！」

細身の機動隊員が素早く瓦礫の隙間に潜り込み、子供の手を掴んで無事に引き上げた。

「ママ！ ママがあ！」

「ああ。ママもあそこから出してやるからな

未成は生き残つた男の子に安堵と同情の眼差しを送り、その姿を見送つた。その心の中に、小さく刺さるものがあつた。ホテルの方を見やり、それから腕時計に目を下ろす。時は十一時の四十五分を指していた。未成はもう一度だけホテルを一瞥してうつむいた。

「やっぱり無理だ。時間が……」

未成の咳きを打ち消し、向かい側から声が飛んでくる。

「みんな！ こっちを手伝ってくれ！」

周囲は返事をしながら声のする方角へと走つていく。後ろ髪を引かれるようにしながら、未成もその後に従おうとした。

『お前がそだから世界は全く変わらない』

だがその時、未成の胸に響く声が彼の足を引き止めた。目を閉じると、あの男の狂った笑顔が甦つてくる。

『世界はいつでも決断だ』

未成は再びうつむき、小さく肩を震わせた。思い出せば出すほど、未成の目は潤み、顔は赤くなつていく。

『お前だつて、気づいているんじゃないのか』

未成は歯を食いしばった。悔しかつた。曲がりなりにも、自分は今あの男に叱咤されている。恥ずかしかつた。諦めようとした自分が。だが、もう未成は迷わなかつた。目の前を通りうとしていた大希達に気が付くと、未成は大声で呼び止めた。

「大希！ みんな！」

「うおっ。未成、どうしたんだよ」

「説明してる時間なんかない！ とにかくこっちに来てくれ！」

早口でまくし立てると、未成は瓦礫を足早に乗り越えてホテルの廃墟を目指す。顔を見合させた三人は、未成の目にあつた凄まじい氣力を見たことを確かめあい、その後をすぐに追いかけた。

「未成！ どうしたんだよ！」

「こっちにだつてまだ生存者がいるんだ！ この中だよ！」

未成は瓦礫の中腹で立ち止まるど、自分の足元を何度も指差した。今まで見たことのない剣幕に戸惑い、大希は恐る恐るという調子で尋ねた。

「ど、どうしてわかるんだよ」「

「そんなこと言つてる暇は無いんだよー。手伝いを呼んでくれ！」

そう言つて、未成はいきなり瓦礫をどかしてはじめた。コンクリートを掴み、ふもとの方へ必死に転がす。大希は目をすっかり丸くし、半信半疑で未成の行動を見つめていた。だが、やがて親友として彼の事は信じなければならぬという思いに至る。気を入れ直し、大希は新たにやつてきたショベルカーにこすりに来いと合図を送つた。

理加はぼんやりと目の前を見つめていた。最初は真っ暗で、とうとう華の無い人生も終わりを告げたのかと思った。だが、時が経つにつれてどうやらそうでは無いことがわかつてきたのだ。床にいた左手が絨毯の感触を教えてくれるし、右手の感触がカバンの存在

を教えてくれる。背中には固い感触もあつた。何より、少し息苦しい。息苦しさで生を実感するというのも変な話ではあるが、人は死を意識するからこそ生を実感する、と誰かが言つたのも事実だ。とにかく、理加は生きていたのだ。だが、理加はちつとも嬉しくなかつた。

「どうせなら、一思いに殺してよ……」

理加は運命の神を恨んだ。大きな瓦礫とカウンターに守られ、彼女は確かに無傷だ。だが、こんなところまで誰が助けに来てくれるだろう。自身の体が朽ち果てていくのを実感し、絶望しながら死んでいく。そんな末路しか見えなかつた。理加はすっかり消沈して右手のカバンを引っ張つた。しかし、カバンは全く動かない。手で探つてみると、カバンは半分が潰されていた。中身を確かめると、財布に筆記用具、そしてプリツツだけが無事だつた。理加はため息をついた。

「どうせ私はプリツツみたいな女ですよ……」

四苦八苦しながら箱と袋を開けて、理加は一本、また一本とかじつた。その度に思い出されるのは、山も谷もない人生だつた。平々凡々の家に生まれ、平々凡々な友達をつくり、それなりに恋の駆け引きを学び、それなりに勉強して、ぼちぼち今年に仕事を始めた。たつたこれだけで人生の振り返りが終わつてしまつた。なんとつまらない人生だつたろう。理加は涙が浮かんできた。ポツキーを探る手を止め、理加は眼鏡を外して涙を拭つた。

「あ……」

その時、理加はたつた一つ出来事を思い出した。ある時、理加はコンタクトをしていた。引っ込み思案なこの性格ではなく、見た目を『可愛らしい』と褒めてくれた、たつた一人の男のために。

『眼鏡は止めなつて。泣きぼくろが目立たなくなるだろ』

あの男は確かにそう言つた。熱いくせに、妙に現実的なところもあるあの男。ある映画を見てから、自分との決定的な違いを感じて疎遠になつてしまつた。いつしかコンタクトがなくなり、理加はまた

眼鏡をかけるようになつてゐた。眼鏡をかけ直し、理加はため息をついた。

「元気なのかな……このことに巻き込まれて無かつたらいいけど……」

「その時だ。何やら急に明るくなつた。どこからか人の叫び声も聞こえてくる。」

「誰か！ いるんでしょ！ 返事をしてください！」

理加はにわかに心臓が湧き、冷えかけていた体に熱が蘇つたのを感じた。細い手で必死にカウンターを叩き、声を限りに叫んだ。

「ここ！ 誰か、誰か助けて！」

気づいてくれたらしい。外が急に沸き立つた。

「いる！ いるぞ！」

「慎重に行けよ。こつからが勝負だぞ！」

光がわずかに差す穴が、徐々に広がり始めた。助かる。これからも生きていられる。理加の心に希望が帰つてきた。そして、ついに大きな瓦礫が一つどかされ、理加にまぶしい光が降り注いだ。その光を背に、一人の影が身を乗り出す。

「り、理加？」

その声には間違いなく聞き覚えがあつた。顔を上げ、理加は戸惑つた声で尋ねた。

「健？ 健なの？」

影は大きく頷いた。

「ああ。そうだよ。ちょっと待つてろ」

健は後ろを向いて何事かやり取りすると、いきなり穴に潜り込んできた。そして、その右手をぎりぎりまで伸ばす。

「理加！ 何とか掴まれるか！」

「う、うん！」

理加が懸命に伸ばした右手は、しつかり健と繋がつた。そのまま力強く理加は引き上げられた。

決して、外の空氣はよくなかった。具合悪くなりそうなほどの中

いだ。しかし、理加は天にも昇る気持ちだった。

「健。まさか健に助けてもらえるなんて」

健は肩を竦め、頭を搔く。

「俺だつて、生き埋めなのが理加だとは思わなかつたよ」「一人が数奇な運命に驚いていると、未成の鋭い声が広場の真ん中から聞こえてきた。

「健さん！ 早くそこから離れて！」

「え？ 何？」

健と理加が同時に問い返した時、急に足元が揺らぎ始めた。その小刻みな震えは強く、その場に立つているのも難しくなってきた。

「わわわ！ 理加、とりあえず言つこと聞いておこう

「う、うん！」

一人が瓦礫を下り終えた途端、先日とは比べ物にならない揺れが襲いかかってきた。そして、ホテルの瓦礫が再び揺らぎ始めた。

揺れが收まり、立ち上がった大希達はホテルの残骸を見つめていた。ただ一人、未成だけが真剣な顔をしている以外は、呆気に取られて言葉も見つからない、という調子だった。だが、やがて大希がはつと気づく。

「こんなことしてる場合じゃない！ 再開しましょう！」  
「は、はい！」

大地震の呪縛が解け、大希達は再び瓦礫との格闘に赴いていった。後には、健、理加、未成の三人が残される。

「もしかして、少しでも助けが遅れていたら、私、死んでたの？」  
理加がか細い声で呟くと、未成はホテルの瓦礫を見据えたまま頷いた。

「ええ。きっと」

理加は言葉を失い、一気に血の氣を失った。足の力が抜けて、ふらふらとその場に崩れ落ちそうになつた。気づいた健が慌てて彼女を支える。

「大丈夫か？」

「ごめん。ちょっとダメかも……」

健に寄りかかり、理加は今にも消えてしまいそうな声で呟く。ため息をつくと、健は理加を横抱きにして、救助活動の本部まで歩き始めた。

「仕方ないやつだな、お前は……」

「ごめん……健」

瓦礫を乗り越えながら健は頷く。その目は、理加の顔をしつかり捉えていた。

「ああ。……で、結局眼鏡に戻したのか。それじゃダメだつて言つたろ」

曇つていた表情をほんの少しだけ和らげると、理加は眼鏡を外し

て胸ポケットにおさめた。

「うん……」めん

震度五弱の地震により、少々の停電が発生したり、断水も起きた。そのために救助活動は滞つてしまふかにみえたが、有志が現れたことで作業の効率は何とか維持された。そして、夜までに十人の命を救つたのだった。

「大希！ 理加はどこなの！」

時計塔広場に設置された救助本部。さくらはそこに現れるなり、鬼も縮こまるような形相で大希に迫つた。

「ま、待つてくれよ。理加さんは無事だから」

腫れ物にでも触るような顔で大希がそう言つと、いよいよさくらは大希の胸ぐらを掴んで揺すぶつた。

「なら早く会わせてよ。どこ？ 一体どこなのよ！」

「わかつた！ わかつたから俺を離してくれ！」

大希は半ば突き飛ばすようにしてさくらを自分から引き剥がすと、くるりと踵を返して一つの天幕を目指した。救助隊が交代で休むためのものだ。さくらの思いつめたような視線を背中に感じながら、大希はその天幕をくぐつた。

その瞬間、さくらは嗚咽で息を詰まらせた。目の前にいたのは、健の隣で毛布を被つた理加その人。紙コップを両手に、健と控えめに談笑していた。

「理加！」

さくらは天幕いっぱいに響く声で叫んだ。飛び上がつた理加はさくらに気がついた。震える唇を噛んで押さえ、彼女は必死に泣くまいとしていた。泣くほど心配してくれたさくらに心を打たれ、理加は一気に喉が詰まり、目頭が熱くなつた。配給してもらつたココアを取り落としてしまいながら、理加はゆっくりと立ち上がつた。

「さくら」

「理加！」

「さくらあ！」

「いらっしゃれなくなつた理加は、勢いよくさくらに飛びついた。その胸にすがつて、彼女は少女のように泣きじゃくつた。

「さくらあ。怖かつたよお。も少しで、私死んじゃうとこだつた……」

さくらはきつと理加を抱きしめ、自分自身も大粒の涙をこぼした。  
「うん。よかつた……ほんとによかつた」  
一人の女性がひしと抱き合つて号泣する様子は、周囲で休んでいた人々の心に勇気を与えた。絶対諦めずに人々を助けようと、人々は決意を新たにした。

嗚咽が緩んだのを見計らい、健はココアの入つていた紙コップを拾い上げ、一人の方へと歩み寄つた。

「感謝しろよ？ 一応俺が助けてやつたんだから」

「そりだつたんだ。私もお礼するわ。ありがとう」

半べそかいたままで笑つたさくらに肩を竦めてみせると、健はそのまま外の方へと片足を踏み出した。

「理加。代わりのココア持つてくれるか？ ついでにさくらも」

「あ、うん。ありがと」

「わかった。私にもよろしくね」

一人が頷くと、健は軽く手を挙げて応えその場を後にした。健の背中をずっと見送つていたさくらだが、あることに気がついて振り向いた。

「あれ。理加と健つて、何か関係あつたつけ。一度も会つたことないような気がしたんだけど……」

さくらの腕の中で、理加は小さく肩を竦めた。

「私、大学生の時に友達に引きずり出された合コンで、おんなじように引き出されたあの人に会つたの。付き合つてたこともあるんだ。一応」

聞いた途端、さくらは鳩が豆鉄砲を食らつたような顔になつた。

「嘘だあ！ 私が健の話しても、全く知らない体で聞いてたじやん

！」

「……失恋した話なんか好きでしないよ」

「……まあね」

さくらと理加は困ったような笑顔で見つめ合い、それから吹き出した。

大希は安堵に満たされた表情でさくら達を見た後、その横を抜け未成立と剣人が座っているベンチに腰を下ろした。

「何はともあれ、助かつてよかつたよな」

座るなり、大希は未成立と剣人に話しかける。目の前の床几に置かれた小さなラジオを見つめながら、剣人は頷く。

「ああ。本当に間一髪だった。もう少し未成立の判断が遅れていたら……」

未成立は目を伏せた。遺体を安置している天幕の中、変わり果てた姿になつた理加を前にして泣き叫ぶさくらの姿。そうなつただろう。頭を押さえ、未成立は咳く。

「ああ。無事で本当によかつた……」

「しつかし、本当に不思議だよなあ」

温かいお茶を飲みながら、大希はふと思い出したように咳いた。剣人は首を傾げ、大希の方を見た。

「何だ？あのカマキリの事か？」

大希はお茶の缶を見つめたまま首を振る。

「それもそうだけどさ、俺が言いたいのは未成立のことだよ」

「ぼ、僕？」

未成立は自分の胸を指差した。いかにも意外そうにしている。

「ああ。あの時、どうして理加さんがあんな深くにいるつてわかつたんだ？ついでに、まるで地震が来ることを予知してたみたいだ

し」

引きつった笑みを浮かべ、未成立は反対側にいる剣人の方に振り返つた。今まで気楽そうな表情をしていたくせに、いつの間にか真剣

な表情に化けている。気の抜けた笑い声を漏らし、未成は愛想笑いした。

「やだなあ。そんなに真剣な顔しないでくださいよ。勘です。勘」

大希と剣人の顔が一気に歪んだ。

「勘？」

「ええ。それにちょっとしたテレビの噂を信じてみたんです。段々警察犬の落ち着きが無くなってきたたじやないですか。地震が起きた数分前は、もう犬は使い物にならないほど慌てていて……これつて、地震の前触れかな？ って思つたんです」

未成の背中越しに、大希と剣人は目を合わせる。疑おうと思えばいくらでも疑えるが、彼の結論でよしとした。

「まあ、そういうことにしどぐ。でも、まだ理加さんの謎が残つてるぞ」

未成は舌を巻き、顔をしかめた。

「それは……恥ずかしい話、本当に勘なんだよ。ホテルはまだあまり手が回つてないようだつたし、探せば一人くらい助かつてる人がいるかな、つて思つたんだ」

未成の引きつった愛想笑いを覗き込むように見つめ、大希はため息をついた。

「お前……きっと勘で油田も掘り当てられるぞ」

未成は大希の言葉が皮肉だということには気づいていたが、わざと気が付かないふりをした。

「はは。そうかもね」

大希と剣人は再び顔を見合させた。未成がそう言い張るのでは仕方がない。二人は、変に『私は未来が見える』などと言われるよりはましだと思つておくことにした。

「まあ、お前がそう言うんなら、そなうだらうけど……」

それきり三人は黙り、ラジオの声に耳を傾けた。まず、昼の地震の被害状況が小さく伝えられた。震度は五弱、この地震によつて崩壊した建物はなし。だが、沿岸部付近で古い水道管が破損し、断水

に陥つたし、北部で一部が停電した。そして、謎のロボットによって倒壊したビルからの救助活動に深刻な影響を及ぼした。そう伝えられた。そして、今日の朝に起きた事件に話が移つた。剣人はラジオをじつと見つめてため息をつく。

「さあ、ラジオは今日のトピックスをどう伝えるつもりだ」

『本日午前七時頃、南広場にカマキリに似た姿のロボットが突如出現、そして周囲のビルを襲撃しました。これによつてビル四棟が全壊、現在判明しているだけで百一名が死亡、五名が重体、二十三名が重軽傷を負つています。現在はロボットも起動を停止して自衛隊に回収されており、現場では懸命の搜索活動が続けられています。今後も襲撃の可能性は懸念されますが、現在対策は検討中の事です。以上、久宇慈市のニュースでした』

キヤスターは一気に事実を並べ立てるに終始して、そのままニュース自体が終わつてしまつた。しばしほんやりとしていた大希だつたが、ニュースの内容が飲み込めてくるにつれゆっくりと頷き始めた。

「そうだよな。ラジオだし、コメンテーターを呼ぶことは少ないか」「変な憶測吹きこまれて不安になるよりずっとといいさ」

聞くことは聞いたと、剣人は手を伸ばしてラジオの電源を切ろうとする。その時、戸惑つたように上ずり氣味の声で、キヤスターがいきなり話し始めた。

『全国のニュースの前に、速報です。現地時間で午後一時、ドイツのベルリンでマグニチュード6・0の地震が発生しました。多くの建物が半壊または全壊し、多くの死傷者が出ております。また、他にも中国の上海、インドのムンバイ、ロシア連邦のモスクワなど、各国の大都市にて、それぞれの現地時間午後一時にマグニチュードが6・0付近の地震が発生しており、不可解な規則性に気象庁は首を傾げてあります』

「おいおい。どうじうことだ？ 世界はどうなつてんだ」

大希はラジオを搖すぶつた。未成は冷や汗を垂らしながら唇を噛

み、剣人は戸惑つて目を瞬かせた。

「中国やインドはともかく、ロシアやドイツじゃそんなに大きな地震は起きないだろ。パリの時もそうだったし、やっぱり地球は少しおかしくなつてきてるんじゃ」

「一〇一二年。地殻大変動が起きて世界は危機に晒される」

三人の横で、ココアを健から手渡された理加がうつむいたまま呟く。大希達も、さくらも、健も、一斉に理加の方を見た。健は彼女の手元を見つめたまま、静かに呟いた。

「それって、あの映画だよな」

理加はこくりと頷いた。

「……ほんとは、私もあんな話はつくり話だと思つてた。でもさくらが肩を叩き、その話を遮つた。顔を上げた理加に、さくらはそつと微笑んでみせる。

「だめ。この先を変に捉えたらだめだよ。来るのは来るかもしれないし、来ないかもしれない。どんと構えて、来たものに対処しな。ね？」

「うん。そうだね」

さくらに励まされ、理加は小さく微笑んだ。二人の友情の暖かさに、周囲もわずかに顔を綻ばせた。しかし、そんな彼らにいきなり次の試練が振りかかつてくる。

『二コースです。現在、沖縄に上陸した台風一十五号が、さらに勢力を強めて北上しております。このままの速度で北上すれば、明日未明に本土へ上陸するものと見られています。非常に強い大型の台風で、沖縄では現在毎時百ミリの大雨を記録しています……』

地震の次は季節はずれの台風。六人は呆然としてラジオを見つめていた。

風が鳴り、あられ混じりの雨が天幕を襲う。炊き出しを買って出ていたさくらと理加は、天幕の中で豚汁の様子を見ながら、不安そうに天幕に雨あられが当たる低い音を聞いていた。手を休め、理加ははためく天幕の壁を見つめた。

「こんな状態で、みんなは救助活動しているのね……まだ暴風域に入つてないし、これからもっと強くなるのに……」

さくらも理加と同じ方角を向いて頷いた。常に微笑みを絶やさない彼女も、この日ばかりは少し表情が曇つていた。

「そうだね。この天幕だつて、いつまで持つか……」

さくらが、天井の骨組みを見上げると、いきなり入り口が開き、ずぶ濡れになつた大希と剣人が姿を現した。さくらと理加に気付くなり、入り口の方を指差しながら大希は大股で二人に近付く。

「さくら、佐藤。救急救命センターに本部を移す。撤収だ」

さくらと理加（苗字は佐藤といつた）は顔を見合わせ、納得した顔で頷きあつた。救急救命センターは、ここから一キロと少し離れたところにある。少し現場から離れてしまつが、新たな本部には適任だらう。

「この豚汁はどうするの？」

「それはそのまま蓋をして運ぶつもりだ。重いだらうから俺達が持つ」

そう言つて密封用のプラスチックの蓋を取つた剣人に、さくらは両手を胸の高さに上げながら尋ねた。

「ねえ、じゃあ私達はどうしたらいい？」

「ん？ ああ、火の始末と、そこら辺の物を片付けてくれ。終わつたら、天幕の撤去を手伝え」

剣人は天幕の中央に寄せられた段ボール箱を指差す。調理道具などが入つていた。さくらはにっこり笑つて頷いた。

「わかった。じゃあ、救命センターで会おうね」

「お、おう」

彼女の笑顔に思わず見とれた後、剣人はぎこちなく頷き返した。

外では、透明な合羽に身を包んだ健と未成が必死に負傷者を車の中に運んでいた。

「大丈夫ですか？ 肩貸しますよ？」

健は、昨日助けた女性に声をかける。右足のふくらはぎが縦に裂けていた彼女は、全く歩行不能というわけではないようだ。が、それでも顔に血の氣はないし、立っているだけでも相当苦しそうだ。それでも、彼女は気丈に首を振った。

「気にしないで下さい。私は大丈夫ですから。それより、動けない人を助けてあげてください……」

だが、その消え入りそうな声は、雨が地を叩く音と風鳴りに阻まれ健に届かない。戸惑った顔で女性に歩み寄る。

「今、何と……」

女性は深く息を吸い込み、声を張り上げた。

「私に構わぬ！ 行つてください！」

その勢いに押されて健は飛び上がり、慌てて敬礼した。

「り、了解！」

途端、天幕の中から未成の声が飛んできた。

「健！ こっちを手伝つて！」

「今行く！」

右足を引きずりながら警備車に向かう女性を見送り、健は天幕に飛び込んだ。未成は、頭に包帯が巻かれた男性の足元にひざまずき、担架の片一方を握つていた。

「健、早くこっち持つて！」

「あ、ああ」

健はすぐさま負傷者の頭側に膝まずき、未成と一緒に担架を持ち上げ、天幕を出た。間を置かず、激しい雨、身を切る寒さが健達を

襲つた。

「さつさと運ぼう。この寒さは体に毒だ！」

あられの激しさに目を開けていことができず、健は顔をしかめながら未成に叫んだ。

「わかつてゐ！」

未成も大声で答え、いそいそと一人は救急車を目指していった。

そして、井上は一人の部下と共に遺体を青ビニールシートで包み、

トラックに積み込んでいた。

「井上さん。この人達はどこに運ぶつもりですか？」

雨除けに警帽を目深に被つた部下は、その視線を下に向かたまま尋ねる。井上は遺体を丁重に降ろし、押し殺した声で答えた。

「体育館に協力をもらつた。救命センターにはスペースがないからそつちに運ぶ」

「了解しました。……すみません」

冷静に受け答えしようとした彼だが、急に喉をつまらせ、さらには警帽を目深にかぶつてその場を後にした。井上は沈痛な面持ちでその背中を見送り、わずかに死臭が漂う荷台の中を見回した。その中には、変わり果ててしまつた彼の妻もいるのだ。警帽を深く被つたのは、雨除けのためだけではないだろう。

「あいつには、少しそつとしてやる時間をやらないとな……」

咳きながら、井上はそつと遺体達に手を合わせ、静かにトラックを後にした。すると、大希が水たまりを踏みながら駆け寄ってきた。後に剣人も従えている。

「井上さん！」

「ああ。大希か。炊き出しの天幕は片付け終わつたのか？」

「ええ。今荷物を救命センターの方へ向かわせました」

「そうか……佐藤理加、とか言つたか。彼女自身も大変な目にあつたのに、よく働いてくれる……さくらもだ」

「ええ。私達にできることはこれくらいだからつて、ずっと言つて

います」

井上は長いため息をついた。普段の強気な表情が失せ、その肩も少し小さく見えた。

「あの兵士達はいまだに黙秘権を行使し、何も口を割らないそうだ。何か隠しているのは自明なのに、その正体を知ることができないとなると、これほどもどかしい事はないな」

剣人は頷き、重たくなった帽子のつばに触れる。

「ええ……僕達には情報が少なすぎます。ただでさえ天災が断続的に襲つてきているのに、あんな訳のわからない兵器にも襲われていては、たまつたもんじゃありません」

井上は黙り込んだ。うつむき拳を握りしめ、どこかを凝視するような顔をしていた。対応は後手に回り、それをどうにかすることもできない。その悔しさがにじみ出でていた。大希も無表情で井上の目を見つめていたが、やがて顔を上げた。

「でも、守り続けましょう。ここで頑張らなかつたら、僕達はただの給料泥棒です。井上さん、あなたには鬼でいてもらわないと困ります」

井上は顔を上げ、微かに笑つた。

「……そうか。覚悟しとけよ」

救命センターの一階は、設備が一変した。待ち合い用のベンチは並べられて簡易なベッドと変わり、安静が求められる患者が寝た。病棟のベッドの空きが少なく、重体患者しか寝せられなかつたのだ。そして、床には毛布が敷かれ、軽傷の人々が雑魚寝した。勤務中の医師が総出で手当てに回り、ロビーは戦地のようになつていて。それでも、屋内というだけでかなり気が楽になつたのは確かだつた。

「何とかなつたな。この先もこの調子の対応ができるりやいいけど」さくら達が作つた豚汁で体を暖めながら、健は咳く。いつもの三人が集まつて、病院の隅に設置されたテレビを見つめていたのだ。

今回の事件は深刻に取り上げられていた。曲がりなりにも久宇慈は東京のお膝元であるし、緊張するのも当然だった。レポーターが合羽を着込んで現場中継していたが、そのレポーター以外にも、カメラの前で喋っているらしい人影が映っていた。

「見てないで手伝え！ つて感じよね」

いきなりつけんどんな声がして、三人は思わず振り返った。いつの間にかさくらが隣にやってきて、腕組みをしながらテレビを見つめていた。彼女の目には、カメラの脇で必死に動いている自衛隊員しか映っていない。大希も頷いた。

「まあな。……後一時間遅かつたら、俺はあいつらにつつかつてたかもしれない」

大希の言葉を聞き、健や剣人はテレビに向かつて鼻を鳴らして笑つた。一時間後には、大希達が搜索・瓦礫撤去をしている手はずになつていたのだ。

「まあ、適当に報道させといてやれ。手伝ってくれたところで、足手まといかもしれないしな」

剣人が含み笑いをしながらさくらに手配せしてやると、さくらも小さく肩を竦めた。

「そつか。その可能性もあつたわね。なら、ちょっと見届けてやるとしますか……」

そう言つて彼女がため息をついた時、急に映像がおかしくなつた。何かもやのよくなものが映り込み、さらに映像が歪んだのだ。四人が戸惑つていると、いきなり私語がテレビに飛び込んできた。『引つ張らてる』『逃げるべきだ』と。そうはなしているうちに、ストジオからの問いかけも聞かずに呆然としていたレポーターが悲鳴と共に地面に倒れた。急にカメラの映像が霧に包まれたかと思うと、大きく揺らいで下に落ち、何かが割れるような音と共に映像がブラツクアウトした。

四人どころか、テレビを見ていた人々は皆息を呑み、にわかに口べらが騒がしくなつた。四人も目の前で起きた奇々怪々の事態に戸

惑いを隠しきれずにおろおろしていると、背後に理加がのつそりと現れ、独り言のように口にした。

「カマキリが出たの、ここの後なの……」

「何だつて！」

大希はテレビを注視した。突如起きた事態に動搖しながら、スタジオのアナウンサーは決して時計塔広場には近づかぬよう久宇慈の市民に呼びかけている。大希は周囲で恐怖に怯える人々を見つめた。青い顔をしてただただ黙りこんだり、自衛隊員の安否を気遣う人もいた。テレビの音が遠くなり、大気の耳には豪雨の音がよく聞こえるようになつていった。そして、大希は目の前でカマキリが崩れ落ちていく光景を思い出した。それは、とある記憶とリンクする。以前に見た夢だ。あの時も、カマキリは眼前で崩れた。時計塔の前から霧のように立ち現れ、そして自分に襲いかかってきたのだ。デジヤ＝ヴュ。頭の中に、何かが閃いた。

「おい、大希？」

健の声が、大希を思案の海から引き上げた。大希はしばしほんやりとして目の前を見つめた。心配そうに顔を曇らせ、さくらと理加がしきりに手を振っていた。大希は一瞬目を閉じた。心臓の鼓動が聞こえた。冷や汗がうなじを伝うのもわかつた。けれど、大希はさくら達の手を退け、出口の方へと足を踏み出した。

「ちょっと、俺行くよ」

「行くつて、一体どこに？」

大希はさくらが伸ばした手を軽くいなし、脇田も振らずに出口へ向かつて駆け出した。

「おい、待て！」

剣人が叫んだが、それは通り抜けた影が鎮めていった空間に、虚しく響くだけだった。

街に重く響き渡る豪雨の中、大希は南広場を目指してひた走った。

大粒の雨は、もはや雹のように冷たく、突き刺さつた。合羽は最早役に立たず、身を切るような寒さが徐々に大希の体を侵し始めた。それを振り払うかのように、大希はさらに疾く走つた。夢と現にまたがるものを見確かめるために。

次第に、広場の方から雨の音も凌ぐ喧騒が聞こえてきた。何かが破裂するような音。大希はそれが銃声だと気が付いた。息を潜め、一応腰のホルスターに手を伸ばす。しかし、その手は何度も宙を搔く。休憩中は武装を警備車に保管していたのだ。大希は丸腰のまま飛び出したことによく気がついたが、今更一キロの道を取つて返すわけにもいかない。

「どうせ効きやしないよな」

大希は覚悟を固めた。水跳ねの音も出さないように気を払いながら、ビルの陰に身を潜め、南広場の周辺を窺つた。

そこにいたのは、巨大なサソリとクモだった。白い体を持つたサソリは、一対の鋏<sup>はさみ</sup>を振り上げ、尾をあちこちに向けて、その攻撃的な様子を余すところ無くむき出しにしていた。右の鋏の間にはガトリング砲のような銃口が覗き、左のハサミの間には、以前現れた兵士達が持つていた武装と同じ、メガホンのようなものが備え付けられている。尾の先には、ひどく刺々しいパラボラアンテナが付いていたが、それがどんな武装なのか大希に知る由もなかつた。夢でサソリはあの武器を使つていない。

サソリは瓦礫と化した建物を、今度こそ完膚なきまでに破壊しようとしていた。ガトリング砲を瓦礫に打ち込んで石ころのように碎き、メガホンを使い、ジェット機のような轟音をさせながら粉々に破碎する。大希は苦痛に顔を歪めた。まだの中には助けを待つている人がいるかもしれない。その望みすらもサソリは壊そうとしていた。

自衛隊は、用意している兵器の全てを以てこれを阻止しようとしていた。しかし、それを銀色に輝くクモは嘲笑うかのように防ぎ止

め、無に帰していた。サソリに向かって放った戦車砲、手榴弾はクモの体の至るところから放たれる光線に打ち落とされる。マシンガンの弾は流石に撃ち落とせなかつたが、そもそもサソリが受け付けない。『必要最小限』とされながら、世界でも有数と噂されていたはずの『実力』。それは、サイバー兵器の前には全くの無力だつた。

大希は一瞬足が竦んだのを感じた。自衛隊が全く敵わない兵器に向かっていこうとする自分が、ひどくバカバカしくなつた。だが、大希は予感してもいた。あのクモもサソリも夢に出てきたのだ。あの夢はただの幻じやないはずだ。きっと何かを暗示しているのだ。

……やってみるだけの価値はある。絶対に。

大希は駆け出した。瓦礫と一緒にされないよう、サソリの動向に気を配りながら走り、南側から近づいていった。銃を構えた自衛隊員の横を走り抜け、制止も聞かずに入希はサソリに向かって叫んだ。

「止まれ！ このサソリの化け物！」

サソリは瓦礫に向ける手を止めた。その赤く光るライトで大希を一睨みすると、ゆっくりとその体を正面に向ける。

「Follow the given command！」

サソリは鉄を開き、ガトリング砲の狙いを大希に定めた。大希はもう体が震えてどうしようもなかつたが、それでも目を見開いて踏ん張る。来るなら来いという気分だつた。レーザーポインターの赤い印が、大希の胸を捉える。自衛隊員達は思わず固まつてしまつた。助けに行こうと思つても、体が全く動かない。一人の警察官が蜂の巣にされてしまう光景を思い浮かべることしかできなかつた。

しかし、当のサソリがおかしい。狙いを定めているはずなのに、中々撃とうとしないのだ。それどころか、いきなり胸を捉えていたはずのレーザーポインターが震え始める。大希はサソリの顔を見た。その目のライトが明滅し、よく見るとその体も震えていた。

「E - cord No - 000 - I cannot follow

W t h e g i v e n c o m m a n d . . . .

突然サソリがそう呴くと、目のライトから光が失せた。そのまま  
サソリは、そしてクモまでも、いきなりその場に崩れ落ちた。大希  
は果然としてガラクタになつた兵器達を見つめる。

さんざん自衛隊を苦戦させていたサイバーの末路は、あまりに呆  
氣ないものだつた。

しばしの沈黙。大希は棒立ちになつたまま、自衛隊員は撃ち方の姿勢のままで動かない。サイバー兵器は身じろぎ一つせず、不気味な雰囲気を保つて黙り込んでいた。

高く鳴る風に巻かれ、大希はふいに自分の今ある状況に気がついた。いつの間にか雨は止み、雲の切れ間から覗く月が、サイバー兵器を青白く浮かび上がらせていた。

「やっぱりだ。やっぱり動かなくなつた。……一体どういうことなんだ？」

大希は目の前の事実を訝しむばかりで、背後から近づく人影に気付かなかつた。

「おい」

いきなり低い声がして、大希は思わず飛び上がつてしまつた。振り返ると、自衛隊の一人が目の前に立つていて。彼もまた戸惑つたような表情をしていた。大希より頭一つ背の高いその男が、大希の肩に手を置き、半ば詰め寄るような口調で尋ねた。

「お前、奴に何かしたのか？　このわけのわからない兵器が一瞬で黙り込むようなこと」

「僕は何もしてません。ただ石を投げただけです」

大希がのけぞりながら首を振ると、その男はため息をつき、周囲で固まつている同僚達を見つめた。未だに謎の兵器を警戒して銃を向けているものもいれば、粉々にされてしまつたビルの瓦礫を見つめ、呆然としているものもいた。男は大希に向き直り、責任感に溢れたその目を見つめた。

「ともかく、何て無謀な事をしたんだ。死んでもおかしくなかつたんだからな、わかつてゐるのか？」

大希は不気味なガラクタとなつた兵器を見つめる。夢で同じくこうなつたから、と言えるはずもなく、男に向かつてただ頷くことし

かできなかつた。

「ええ。十分に承知しておりますよ。でも、なんかこう、まだ生存者がいるかもしれないって望みをこのサソリに壊された気がして、黙つていられなかつたんです」

自衛隊の男は一旦目を閉じ、それからゆっくりと見開いた。口元に疲れの見える小さな笑みを浮かべ、帽子を取つて頭を搔いた。

「俺だつて、あの山やこの山が壊されて、望みもまとめて壊された気分だ……確かに、俺がお前の立場だつたら、おんなんじ事をしてたかもな。人を助けるために動いてたら、やっぱりそなつちまうのかもしれない。面倒くさい性分だな。俺達は」

男はにやりとしてみせる。その様子に、大希は顔を綻ばせた。

「ええ、そうですね」

大希が頷くと同時に、呻き声がどこからか聞こえてきた。まだサソリの手が及んでいなかつた瓦礫の方からだ。ふと大希が足元を見ると、カメラの残骸が転がつていた。大希は急にテレビの存在を思い出した。

「あ。そういえば、メディアの人達がいたじゃないですか！　あの  
人達は？」

自衛隊の男はため息をついた。しかめつ面もして、どうやらメディアの人々にいい印象を持つていよいよだ。

「メディアの奴ら？　吹つ飛んできたから助け出してやつたさ。いい迷惑だよ。手伝わないくせにピーチクパーチク。……何だ。あそ  
こにもいたのか」

「まあ、精々この街の『惨状』とやらを伝えてもらおうじゃないですか。希望を伝えるよりショックを与える方が、人気出るんでしょ」

大希はため息をつき、呻き声のする方へと全力で駆け出した。文句は言うが、やはり放つておけなかつたのだ。男も鼻を鳴らすと、重い足取りで仕方なさそうに後に従つていつた。

その様子を撮つているカメラが一つ。頭にべつとり血を付けたままのカメラマンが、じつと大希の姿に焦点を合わせ続けていた。

大希は、そのまま夜明けまで救助隊の交代時間を待つことにした。知り合つた自衛隊の男曰く、これより自衛隊は付きつきりでこの辺の防衛に当たるつもりらしい。一式戦車だのなんだの、最新鋭の装備が時計塔広場に来るということで、時計塔の前は迷彩服が盛んに行き交うようになった。大希は、瓦礫の撤去を手伝いながらその様子を見つめていた。

「大希！」

そんな折、さくらの大声が、東雲の空を突き抜けるようにして飛んできた。日頃から大声には慣れていても、その気迫には参つてしまふ。大希は飛び上がって南の方を見る。そこには、剣人や健達の先頭に立ち、般若面のようにその目をつり上がらせたさくらがいた。大希はまともにその顔を見られず、視線は明後日の方に向いた。

「さ、さくら……」

さくらは舌打ちをした。ここまで態度が悪くなるといつことは、滅多になかったほどの怒りようだということだ。大希はつかつか歩いてくるさくらを見て震え上がつた。彼女は大希の目の前で止まり、白い目で大希の瞳を射抜く。大希は息が詰つた。

「このバカあ！」

さくらの全靈を込めた平手打ちが大希の頬を鋭く捉えた。大希はよろめき、瓦礫に倒れ込んでしまつた。頬に手を当てる、鈍い痛みが熱と共に感じられた。出端小手の名手が受けきれない一撃ではなかつたが、受けないと失礼に値すると大希は思つたのだ。今の痛み以上にさくらが心を痛めたことは、そのつり上がつた目に浮かんだ涙、そして声の裏返つた悲痛な叫びですぐにわかつた。大希は、体を起こして膝立ちになり、さくらに向かつて頭を垂れた。

「『めん。さくら、心配かけて』

さくらの頬を一筋涙が伝つた。しかし、彼女はあくまで表情を改めずに腕組みする。

「みんなにも言つたら？」

「ああ。もちろんそうする」

大希はゆっくり立ち上がると、じつとこちらを見つめている五人の方に向かつた。さくらのように怒りを全身から立ち上らせているようなのはいなかつたが、皆一様に神妙な顔をしていた。

「みんな、ごめん」

大希は静かに頭を下げた。

「俺、夢中だつたんだ。何とかしないと、何とかしないといけないと思つたら、勝手に体が動いてたんだ。心配かけたと思う。悪かつた」

剣人は肩を竦めてため息をついた。頭のてっぺんから足の先まで見つめて、そこに一分の怪我も無いとわかると、ようやく表情を緩める。悄然としている大希の肩を叩き、にやりとした。

「まあ、お前に怪我もないことだし、さくらに一回きついの張られたつてことで、とりあえず許してやるよ、な？」

剣人は健達の方を見た。健もまた表情を緩め、大希の肩にわざとぶつかりながら歩き出した。

「おう。そろそろ他も来るぜ。一足先に作業開始だ」

大希はぎこちなく健の姿を目で追い、途中でさくらの背中に視線を切り替えた。まだ彼女は肩を震わせている。下手なことは言えないぞ。大希は心のなかで独り言を呴いた。すっかり意氣消沈した様子で瓦礫に向かおうとしていた大希を、未成はしつかりと見ていた。わずかに微笑むと、大希の隣に駆け寄り、そつとその肩を叩いた。

「大希。僕もさくらさんの機嫌を取つてあげるから、元気出しなよ」大希は首を傾げた。機嫌を取ると言つても、何か買つてあげたくらいであるの機嫌が治るとは思えないし、変なことを言えば火に油だ。一体未成はどうするつもりだろう。だが、やはりその気持ちはありがたかつた。大希は微笑み返し、小さく頷いた。

「ああ。まあ、手伝つてくれよ」

二人は肩を並べ、黙々と瓦礫をかき集めはじめたさくらの方へと歩いていった。

言葉を尽くして、何とか一人はさくらをなだめた。つづけんどんな態度は相変わらずだったが、彼女も思いきりひっぱたいたことで、ある程度はすつきりしたと言つて許してくれたのだ。ようやく安心した大希は、先日以上に気合いを入れて瓦礫の撤去作業に臨んでいた。まさに不幸中の幸い、サソリが瓦礫を粉碎したお陰で撤去の効率はかなり良くなっていたのである。

だが、士気の高まりを一気に冷ます輩が突然現れる。ワゴンやら何やら、いきなり大きな車がやってきたのだ。何の気も無しにその車両を見た大希は、一気にその顔をしかめた。

「またかよ……変にジャーナリズム発揮して。来るだけ迷惑だつてのに」

「怪我した人もいっぱいいるのに、よく頑張るね」

未成は時計をちらりと見ながら頷いた。ワゴンに目を向けると、慌ただしくマイクやカメラなどの機材を揃えている人々が見える。彼らは本当に手伝う気がないらしい。レポーターはスース、裏方はお洒落な私服だから一目でわかるというものだ。再び不機嫌な表情を取り戻し、白いウインドブレーカーに身を包んでいるさくらが彼らを睨んだ。

「取材する前に手伝えつて」

「まあ、変に足手まといなことされるより遙かにましだつて」

大希が苦笑いしながら言うと、さくらは仏頂面で肩を竦め、剣人の方へとすたすた行つてしまつた。その背中を目で追う未成の横で、いきなり大希が表情を曇らせた。取材陣が、明らかに自分達のいるところを目指しているのだ。さくらは田舎とくそれに気づいて離脱していたのだ。右に倣えといきたいのは山々の大希だったが、それはもう無理だつた。

「未成、お前も逃げれば？」

「いやいい。近くにいるよ」

二人がそんなやり取りを交わしているうちに、取材陣はとうとう

一人の前にやつてきた。制服の襟をさり気なく整えた未成だつたが、彼はいきなり裏方の一人に肩を掴まれた。未成は戸惑い、キヤップを被つた青年の顔を見た。

「え？ 一体これはどういうことです？」

「あなたは少し向こうに行きましょう。カメラに映らないところで作業していくください」

脇に押しやられそうになり、未成は目を丸くして男を押し返そうとした。

「ちょっと待つてくださいよ。どういうことですか？ あなた方に作業を指図されても困ります」

「私達は『今村大希』さんに用事があるんです。彼を取材したいんですね」

抵抗の意を示している未成に、唇を一文字に引き締めた女性レポーターがにべもなく言い放つた。未成は顔をしかめ、一層強く裏方の男を押し返す。

「無茶苦茶じゃないですか。自分の事情で復興作業を邪魔しないでくださいよ。また奴らだつて来るのに」

大希は未成の口を手で制した。白い目をして、とことん嫌気の差した様子でレポーターを睨む。

「やめとけ。こいつらは俺に用事があるんだろう？ 未成が突っかかる必要は無いさ」

そう言って、大希はレポーターに詰め寄つた。

「ここじゃ作業の邪魔だ。場所を移そうじゃないか。そしたら、どういつもりかわからねえけど、取材受けるよ」

「そうですか。ならそうしましょう。『久宇慈の救世主』今村大希さん

一本調子で答えたレポーターに向かつて、大希は顔を歪めて思い切り怪訝な表情をした。

「何だよそれ」

レポーターはタブレットを取り出し、いきなり動画を再生した。

暗闇に映る影。白く輝くサソリに向かい合っている大希の姿だった。

「これは……俺？」

大希はタブレットを食い入るように見つめた。巨大な白サソリは自分に向けてガトリング砲を向けている。暗闇の中の大希は棒立ちでその姿を見つめていた。見る間にサソリは細かく震えだし、目のライトも激しく明滅する。そしてついにそのライトが消えて、サソリは死んだように崩れ落ちた。大希は眉根にしわを寄せ、レポーターの顔を見つめる。

「どこでこれを撮つたんですか」

「我が局のカメラマンが、突つ込んだ瓦礫の影から撮つていました。今は病院で寝込んでおりますが」

四角四面に答えられ、大希は肩を竦める。口ボットみたいだな、と思わず口をついて出でてしまった。しかめつ面のままの大希に、赤いランプのついたカメラが向けられる。大希がそのランプを食い入るよう見つめると、いきなりレポーターが踵を返し、カメラに目を向けた。

「こちらが久宇慈に現れたサイバー兵器を停止させたという、今村大希さんです」

「あ？」

大希はもう顔が歪みっぱなしだった。止まれと思はしたが、停止したのは單なる偶然だろう。レポーターの腹の中が全くわからなくなつてしまつた。

「一体どのようにしてあの兵器を停止させたのですか？」

レポーターは真剣な顔で大希に迫る。圧倒的なサイバー兵器と、それを停止させた男。独占スクープにできるとなれば、取材陣達は興奮に鼻を膨らませずにはいられない。大希は田ざとくそれに気がついていた。改めてメディアの視聴率主義を知ると、ため息も思わずこぼれてしまう。

「俺が知るわけないだろ。勝手にあれが崩れたんだから」「勝手に？ それでは困ります。何かしたのではありますか？」

本当に何もしなかったんですか？」

しつこい問い返しに、大希はうんざりした。何もしていないのだから答えようもない。大希はいらいらと語気を強めた。

「だから、何もしてねえって。石とか投げたぐらいだよ」相変わらずレポーター達は退く気配が無く、その表情にも揺らぎがない。彼らの思考が読み取れず、大希はいらいらしている上に緊張までしてきた。レポーターは一瞬目を閉じ、それから大希の口元に向かってマイクを強く突き出した。

「あなたは何かを強く願つてはいませんでしたか？ ビリですか？」「どうつて、そりや……」

あの兵器が止まつて欲しいと願つたさ、と言いかけた。しかし、剣士として植え付けられた本能がすんでのところで口を止める。出小手を返される時と全く同じだ。心がぶれて、せっかちになつてしまつ。そこを餌食にされるのだ。大希は深呼吸して、氣を練り直した。

「待つてください。ずいぶん具体的な質問をなさるんですね。おかしくないですか？」

口調は丁寧になつたが、その裏には大希の鋭い攻めがあつた。その凄みに押され、レポーターの目が泳ぐ。

「おかしい？ どこかですか？」

「だって、サイバー兵器を倒したんですね。どうやつたんですか、で普通済むじゃないですか。それなのに、根掘り葉掘り聞く必要があるんですか？」

大希はレポーターの心にできた空白を逃さない。さらに攻め、レポーターから隙を引き出しにかかつた。彼女は唇を一瞬噛んだ。心なしか、顔色が少し悪くなつたようにも見える。

「そ、それは……曖昧でなく、きちんと私達の質問に答えて欲しくて……」

しじるもどりになつた彼女の言葉が浮いた。そこへ大希は一気に飛び込んだ。

「答えて欲しいって……あなた方が望むように、って事ですか？  
単なる偶然を無理やり必然に仕立てて、スクープしようつてことですか？」

舌鋒鋭く迫つた大希に押される一方で、取材陣は言葉をつげずにいた。そこを見逃す大希ではない。一気に決めにかかりた。  
「たとえば、僕が『止まって欲しいと思った』、と答えたとします  
よ。そしたら、あなた方は僕が『超能力』を使つただとかなんと  
か、書くつもりだったんじゃないですか？」

取材陣の目が曇る。丁寧に攻める段階は終わった。後は一気に攻め立てて一本を取るだけだ。

「謎の武装集団の登場で、市井は今揺らいでいる。好きなだけ適当な事を抜かされても、それを信じてしまう。去年もおんなじ事があつたな。震災の混乱の中で、どれだけのデマが溢れたか。お前らは、いやしくも公共の電波を使ってそれをしようとしてたのか？ 僕を使つて、何が何だかわからないサイバー兵器を使って、視聴率を搔き集めようとでもしてたのか？ どうなんだよ！」

とうとう彼らは大希の圧力に屈してうつむいた。だんまりを決め込み、これ以上は何も語ろうとしない。大希は舌打ちした。この世には黙秘権というものがある。これ以上詰め寄るのは無理だつた。鼻を鳴らすと、大希は踵を返す。何はともあれ、これくらいこてんぱんにやり込めてやれば当分懲りるだろう。大希はゆっくりと止めを刺す。

「ほら。何もしないなら帰つてくれよ。道の真ん中にいられたら、瓦礫を運び出すトラックが動けないだろ」

まさに大希の言つ通り、瓦礫を山のように積み込んだトラックが、出発を待ち構えていた。そろそろとメディアの人々は顔を見合わせ、少々青くなつた顔で頷きあつた。素早く機材を抱え、彼らはそそくさといなくなる。破壊された市街地の状況を映そうという気は無い

ようだ。自分もトラックの通る道を空けながら、大希はため息をついた。

「視聴率が大事か。これじゃあどうしようもないな……」

未成は重い足取りで戻ってきた大希に向かって微笑んだ。

「お帰り。何とかなつたみたいだね」

「何とかしたさ。危うくへんてこりんなヒーローに持ち上げられるところだつた。あんなサイバー兵器、俺が倒せるわけないだろ」  
いまだにしかめつ面でいる大希を、未成は神妙な顔つきで見た。  
それからふと視線を時計に落とす。もつすぐ朝の八時、そろそろ差し入れが入る頃合いだつた。

「まあね。でも、どうしてサイバー兵器はいつも最後には止まるんだろう？」

大希は時計塔の方角を見て目を細め、サイバーの崩れしていく姿を思い浮かべた。奴らは動かなくなる寸前、何か言つていたのを思い出した。

「イーコードナンバー オーオーオー、つて言つてたんだよ。多分一番初步的なエラーが奴らに起きてると思うんだよな」

「初步的なエラー？」

「ああ。バッテリー切れか燃料切れだな。俺にはそれくらいしか思い付かない」

未成は大希の後ろで感心の表情を見せた。

「へえ。なかなかいい線ついてるかもしねないね」

ひとまず無事に作業を交代し、大希達は正午に戻つてきた。食事をして仮眠して、次の活動に向けて銳気を養おうというところだつたが、そんな思いを忘れさせるような緊張感が、その頃病棟を包んでいた。

「どうかしたのか。みんなテレビに見入っちゃつて」

ロビーに入るなり、健はさくらに尋ねた。彼女は昼食を作るため、一足先に病棟に戻つてきていたのである。皆一様にテレビを見つめ

ている怪我人達の真ん中に立ち、さくらは目を丸くして、眉を下げ、すっかり当惑した顔をしていた。

「ねえ。これ見てよ」

「あ？」

大希は先ほどの事もあって、著しく不機嫌になつた。だが、一応幼馴染の言つことは聞いておくことにした。大希は横目でテレビを見つめる。そして、映つていたニュースは一気に大希を引き込んでしまつた。

「アメリカ軍、日本全国から一時撤退？」

テレビの中では、防衛大臣がマスコミに対して汗をかきながら答弁していた。その顔にも驚きの色が浮かんでいる。この事は、やはり誰もが想定しない事態らしかつた。

『撤退の理由は知らされておりませんが、十時間ほど前、神奈川県久宇慈市に出現したものに酷似した兵器がニュースワークにも出現しましたという情報がありますので、それが理由とみて間違いないと思します』

「日本全国からだけじゃないの。アフガンからも他からも、全部。それに、アメリカだけじゃないの」

さくらが付け加えて言つことには、先進国はもちろん、中国にもかのサイバー兵器が出現し、各国の市街を破壊したということだった。ニュースでも、各地の映像が絶えず報道されており、人々も不安な表情を隠せず、ぼそぼそと隣り合つた人同士で小さく会話を交わしていた。テレビを見つめながら、未成はぼそりと呟く。

「まあ……他の街はこっちも広場だし……」

「え、なんか言つた？」

大希が尋ねると、未成は慌てて首を振つた。そして取り繕つように腕時計を見る。あと十分で十一時半だ。未成はふと広場の方角を見つめる。目を閉じ、手を強く握り締めた。骨が白く浮き出て、爪が深く手のひらに食い込む。未成は俯きがちで、何かに少し迷つているかのようだつた。だが、やがて顔を上げて、まっすぐに広場の

方角を見据えた。

……僕は変えるつて決めたんだ。もう迷わない。

未成は手を開いた。世界の緊張を伝えるテレビに背を向ける。怪訝な顔をした大希の手が、肩に伸びてくる。しかし、未成はそれを振りきつて、陽の光が差し込んでくる出口の方へと走りだした。

時計塔南広場跡地。一体どれだけの人々が犠牲になつただろうか。オフィスビルはまだいい方だ。まだ朝方だつたために、ホテルの瓦礫の下からはたくさんの遺体が見つかった。特にひどいのは、非常階段、エレベーターとおぼしき場所だ。折り重なるようになつた数十人の遺体が見つかったのである。未知の恐怖から逃れる手段を見失い、とにかくその場を離れようとしていたのだろう。皆一様に顔を絶望に歪めていた。

それを見た人々は、やはり心をひどく痛めた。そして同時に、再びかの兵器が現れた時は、必ずこの場に食い止め被害を広げるまいと、決意を新たにしていた。

しかし、今までほんの露払いに過ぎなかつた事を、今までに思い知らされるのだ。

「皆さん！ 一旦退避してください！」

未成が瓦礫の片付いた跡地に立ち、大声で叫んだ。作業に没入していた人々は、皆怪訝な顔をして彼の事を見る。一番近くにいたボランティアの男が首を傾げて未成の真剣な瞳を見つめた。

「退避？ 鑑識さん、どうして退避しないとならないんだ」

男の低い声に合わせて、周囲の人々も頷く。未成は頭を搔き、困ったような顔をした。そんな何気ない仕草だが、どこかに強い思いが感じられて、人々は何も言わずに未成の言葉を待つた。

「……来るんです」

「え？」

「奴らが来るんですよ！」

未成は腹の底から叫んだ。その剣幕に、人々は思わずたじろぐ。よくよく考えてみれば、それらは前触れも無しに現れているような存在なのに、今の時点で登場を察知はできるはずもない。人々はそ

う思つたが、彼にはそんな考えを一掃してしまうような気迫があった。未成のすぐそばで彼の叫びを聞いた男は、おずおずと仲間達の方を向く。

「一旦下がりましょう。ここまで言われると、やっぱり何か起きそうな気がしませんか」

「は、はい。そうしましょう」

一人がその場を離れると、他の人々もそれに従つて持ち場を離始めた。警察に自衛隊員も、不審な表情はしていたものの、やはりその場を離れようとは遅れて動きだす。まさにその時だつた。

急に重力が働き、人々の体を掴んで引き戻そうとはじめた。必死に広場から離れようとすると、全く歩みが進まない。戦慄し、人々は今まで溜まつていた疲れも忘れて走り続けた。その背後に、身を切るような冷たさの霧が迫つてくる。足が滑り、宙に浮き上がつた。そのまま霧の中へと引きずり込まれそうになる。その恐怖に人々が縮み上がつた瞬間、今度はいきなり弾き飛ばされた。激しく地面に叩きつけられ、人々は苦しみに呻く。その背後には、にわかには信じがたい有様が広がつていた。

「来た……」

未成は立ち上がり、広場に現れた集団を見つめる。六体の巨大なサイバー兵器がいた。二体のカマキリ、二体のサソリ、二体のクモ。だがそれだけではない。上空にも、スズメバチのような姿をとつたサイバーが浮いていた。

今回やつてきたのはサイバー兵器ばかりではない。兵器の足元には、大きなバックパックを背負つた兵士達の姿まであつた。

「うわあ！ 来たあ！」

人々は悲鳴を上げ、散り散りになつて逃げ出し始めた。脇目も振らず、とにかくサイバー兵器から離れようと走つていく。その真ん中に立ち尽くし、未成は不可思議な武装集団を見た。サイバーは、口々に任務開始の意を示し、近くの建物へと迫つていく。未成は様々な感情が入り交じつた目でその姿を見つめ、それから時計塔の方

へと目を向けた。

戦車が火を吹いた。轟音と共に、その砲弾は一匹のサソリの長い尾を貫通した。尾は折れ地に落ち、異常を感じ取ったサソリが言葉にならない叫びを上げた。それを聞きつけた武装集団の一人が、タクトのようなものでクモを差し、サソリと自衛隊の間に振った。クモは足早に動き、サソリの前に立ち塞がる。それと同時に二つの砲弾が尾のもげたサソリを追撃すべく放たれる。目にも止まらぬ速さの一撃は、今度こそサソリを貫いているはずだった。

だが、相手は人ではないのだ。クモの体の一点が光り、同時に乾いた破裂音が周囲を満たす。そして、爆ぜて原形を留めない程に歪んだ砲弾がサソリの足元に落ちた。クモは一番前の足を振り上げ、不気味な不協和音を立てて威嚇を始める。目の当たりにした隊員達は息を呑み、身体中の毛がそば立つのを感じた。だが、サイバー達の方にも動く気配は無く、双方睨み合つ形になつた。冷たい風が、二つの集団の間を吹き抜けていく。

そこにできた空白をついて、白銀のプロテクターを身に付けた兵士達が一気に散開した。サイバーに気を取られていた自衛隊員達はそれに気付くのが遅れ、何もすることができなかつた。一人が悔しそうに歯を食いしばり、近くの隊員を指差して何事かを話す。了解の意を示して、彼は後方にある車両に向かつて走りだした。それを見送り、男は一人領いた。

「Follow the given command!」

自衛隊が攻撃の準備を整えたのと、サイバーがいつもの通りに叫んだのは同時だつた。サソリが先手を切り、右手のガトリング砲を突き出し、狙いを定めにかかる。対して自衛隊は横一列にバズーカ砲を撃ち出した。十余の弾頭がサソリやクモに向かつて一斉に襲いかかり、胸に響く轟音と共に炸裂した。巻き起こつた灼熱の炎と眩い光に、隊員達は思わず目を背けて顔を手で庇う。

使い捨てのバズーカを地面に放り投げ、拳銃を腰から引き抜きながら、隊員達は静かに爆風が晴れるのを待つた。一秒立ち、一秒立ち、次第に砂煙が薄れていく。その中で待ち構えていたのは、恐ろしい事態だった。

顔を上げた隊員達は、口さえきけなくなるほど衝撃を受けた。その中に立っていたのは、紛れも無くクモのサイバー。ところどころに僅かな凹みがあるもの、ほとんど無傷のままだ。体の至る所から煙を漂わせ、目や体を光らせながら轟然と立ち死くクモは、しつかりとサソリのことを守り通していた。

自衛隊達は、動く要塞に苦悶の表情を浮かべたが、まだまだ諦めなかつた。今度は一台の戦車が同時に砲撃する。しかし、それもクモは簡単に撃ち落としてしまう。鈍い音を立てて、ひしゃげた金属の塊が地面に転がる。その堅牢さに、隊員の一人が顔を青くした。遠くを見れば、カマキリとクモを相手に、他の隊の仲間が同じ事をしている。どんな攻撃もクモに飲み込まれ、全く有効な攻撃を与えられないでいた。男は天を仰ぐ。その視線の先では、スズメバチ型のサイバーが飛んでいた。見張りでもしているかのように、それは彼らの上空を行つたり来たりしていた。守らなければならない。そんな決意も、たつた八体のサイバー兵器の前に揺らぎかけていた。

そして、自衛隊の猛攻を凌ぐクモの背中で、ついにサソリが一步を踏み出し、ガトリング砲を突き出した。右の鋏の間で、その銃口が銀に怪しく輝いた。

サソリのガトリング砲が火を噴く。その威力の前には防弾チョッキも普段着も同じだつた。幾人もの隊員が、頭から地面に突き倒されたり、腹を突き上げられるように飛ばされたりした。生きている隊員達は、何とか戦車の背後に回つて身を隠した。装甲は凹んだり、穴は開いたりするものの、致命傷を与えられることはだけは免れていだ。だが、戦車砲が通用しない以上、このままでは撃たれっぱなしで、どのみちやられてしまつ。

「クモを何とかしろ！」

戦車の背後に寄りかかり、ある兵士が声を振り絞つて叫んだ。その向こうでは、尾のある方のサソリがゆっくりとその尾の先端を戦車に向け始めていた。先端に備え付けられた銃口が怪しく光り、ぴたりと戦車に狙いを定めた。絶対に何かがある。無駄なことかもしれなくても、戦車はサソリを攻撃する他無かつた。爆音と共に撃ち出された砲弾。やはりクモに弾かれてしまつた。

「Follow the given command！」

サソリの目が一段と強く輝き、同時にその尾から眩い光が放たれた。その光線は、戦車の機関部を貫いた。鉄が弾ける鈍い音と共に、戦車が爆発した。戦車の陰に隠れていた隊員達をも巻き込み、戦車は火の玉と化す。残された隊員達は、唇を震わせ、目を見開いてその光景を見つめていた。

誰もが今すぐ逃げ出したかつた。こちらの攻撃は通用せず、サイバーの圧倒的な攻撃力の前にこちらは次々と倒されていく。だが、逃げるわけにはいかなかつた。逃げねばすなわち、久宇慈市の終わりを意味してしまつからだ。歯を食いしばり、一人が叫んだ。

「怯んだら駄目だ！ 僕達が逃げたらこの街はどうなる！」

隊員達は、静かに武器を握りしめ、サイバー兵器を見た。その目に確固たる意思を宿らせ、彼らは頷いた。

いきなり上空から耳をつんざくような轟音が飛んできた。隊員達も、サイバー兵器達も一瞬そちらに気を取られる。その視線の先にあつたのは、三機の戦闘機だつた。風を切り裂きながら飛んできてい、三機は急降下しながらサソリやクモに向かつてミサイルを撃ち込んだ。クモは目を光らせ、そのミサイルの迎撃にかかる。そこを地上の隊員達は見逃さなかつた。

「今だ！ 撃て！」

一人が叫び、今度は全員がクモに向かつてバズーカを撃ち込んだ。クモは戦闘機の放つたミサイルを撃墜し、上空で爆破する。それと同時に、十数発のバズーカをその背中に受けてしまつた。いくら守るためだけに生まれた存在といえど、一発で戦車に致命傷を与えるような攻撃を一斉に受けて耐えられるわけは無かつた。腹に当たる部分が一気に弾け飛び、後には弱々しく光るクモの頭だけが残されていた。サソリはガラクタになつてしまつたクモを見つめ、その目を明滅させた。まるで、同僚の死に驚いているようにも見える。その隙に、戦車が尾のないサソリに一撃を見舞つた。頭が潰れ、そのサソリはそのまま崩れ落ちて動かなくなつた。それも確認した最後のサソリが、目を赤く光らせて自衛隊の人々を睨みつけた。

「Annihilate！」

サソリが甲高い声で叫び、その尖つた尾から再びレーザーを放とうとする。しかし、盾を失つたサソリにはもう反撃の機会などなかつた。レーザーが放たれるより先に、戦車砲がサソリの胴体を捉えていた。サソリが動かなくなつたのを確かめると、隊員達は、すぐにカマキリやクモと対峙している仲間たちの援護に向かつた。

その頃、大希達は救急病院の周辺を哨戒していた。歩兵たちが散開したという情報が入り、大希達のいる地区も緊急体制に入つていいのだ。久方振りに完全武装して、大希や剣人達は緊急病院を目の端に捉えられる位置に立ち、その周囲に気を立てていた。

「ついに相手が本気出してきた、ってことか？ ……相手がどんな

奴なのかもわからないけど」

大希は盾の握りの具合を確かめながら呟く。剣人はにこりともせずに頷いた。

「ああ。本当にわけがわからない。他の国もこんな風に襲われてるんだろう？……案外、宇宙人が攻め寄せてるっていう話は本当なのかもしけないな」

「そんな事があつてたまるか」

大希は剣人の言葉に首を振つて答えた。なまじ「冗談」とは言い切れない。だが、そんな話を信じてしまえば、自分の生きてきた世界の価値観全てが壊れてしまうような気がして、とても認めようという気にはなれなかつた。健も強く頷く。

「そうだ。宇宙人なんて……日本を襲うんだったら東京を攻めるだろ？ 何で久宇慈なんか襲つてくるんだ」

「理由など知る必要はない。死ぬ運命にある者が」

健の言葉を遮り、その背後からいきなり声がする。慌てて振り向くと、盾を並べて警戒している同僚たちの前に、三人の兵士が立つていた。じつとこちらを見て、あの奇妙な銃をこちらに向けている。「何を言つている！ 大人しく投降しろ！」

機動隊員達は、素早く銃を引き抜いて兵士達の方に向けた。しかし、彼らは自分たちに向けられた十余の銃口に全く動じることなく一步前に踏み出した。

「我々の任務は、この土地より人を、街を消し去り、この世界に『干渉』すること……だから、お前たちも死ね！」

兵士達は引き金を引いた。光線が前線の隊員の盾に命中する。途端に盾が白熱し、隊員達は叫んで盾を落とした。そこに、すかさず兵士達は光線を打ち込む。眩い光が胸に突き刺さり、肉が焦げる臭いが鼻を突く。そして、光線に貫かれた胸から鮮血が飛んだ。彼らには、断末魔を叫ぶ暇も与えられなかつた。

「うわあ！」

呆氣無く人の命が失われていく光景に恐怖し惑い、数人が腰を抜

かして倒れてしまう。だが、そんな彼らをも兵士は容赦しない。盾が外れて隙だらけになつた胸をめがけてレーザーを撃ちこんだ。何も音はしない。吹き飛ばされもしない。ただ隊員達は心臓を焼き尽くされ、静かに絶命するのみだった。にわかにはこの事態を信じられないという顔で、残された大希達三人は一瞬で命を奪われた仲間たちの亡骸を見て、それから兵士達の暗い目を見つめる。大希は歯の根が合わないほどに震えだしてしまつた。自分もまさに死ぬかもしれないという恐怖は、身も心も凍りつかせるのだ。しかし、大希はそれでも盾を構え直して一步を踏み出し、震える声で叫んだ。

「どうして、どうしてこんな事を簡単にできるんだよ！」

「どうしてと言われたところで。言つているだろ。どのみちお前たちは死ぬんだ。誰が殺したところで同じ事」

びくりと体を震わせ、健は何度も舌を噛みそうになりながら叫んだ。

「狂つてる。そんな、そんな考え方、おかしいとおもわないのか！」

兵士は鼻を鳴らし、意にも介しない様子で首を振った。

「これが戦場だ。戦いだ。迷つたやつから死ぬ。それだけのことだ」剣人は舌打ちをし、素早く銃を引き抜き、真ん中の兵士に向かつて撃つ。だが、その銃弾は銀のプロテクターに阻まれ、兵士に傷一つつけられなかつた。剣人は顔を歪めた。

「くそ……」

「わかつたか。お前たちもここで死ぬといつことが……そろそろ話はお終いだ」

兵士は大希達に銃を向け、一斉に引き金を引いた。三人は思わず身を固め、目を固く閉じてしまった。

しかし、胸はいつまでたつても撃ち抜かれない。耳に引き金を引く音が何度も何度も聞こえてくる。大希達はうつすらと目を開き、目の前を見た。そこにいたのは、戸惑つた様子で自分の銃を見つめ、引き金を引いたり、振つたりしている兵士達の姿だった。

「何故だ？ どうして撃てない！」

兵士達の声が上<sup>う</sup>ずり、ほんの僅かな怯えも見えた。今まで存分にその脅威を振るつていた武器が、うんともすんとも言わなくなつてしまつたのだ。今や、彼らは丸腰同然だつた。突然の状況に戸惑いつつも、大希達は頷きあつた。

「確保だ！」

大希は一足先に飛び出し、腰から引き抜いた警棒で兵士を打つた。堪えかねた兵士が身を庇おうと腕を持ち上げたところを、大希は鋭くその喉元を突いた。息を詰まらせ、兵士はその場に倒れ込む。そこで、大希は素早くその腕に手錠をかけた。

「何故だ……何故……」

「何故、はこつちだ。どうして……どうして俺の仲間たちは死なないといけないんだよ！」

兵士を引きずり寄せて叫ぶと、そのまま地面に突き倒した。拳を固く握りしめ、大希は静かに涙を浮かべる。健也、剣人も同じだつた。血の海に倒れこんだ同僚、友人の亡骸を見つめる。一緒に汗を流して訓練し、時には馬鹿な話をして笑いあつた彼らはもうない。

理不尽な現実を目の前に焼き付けられ、大希は吼えた。

「明人！ 涼！ 幸太郎！ どうして……どうして！」

健は亡骸の前で泣き崩れ、剣人は物も言えずうつむいていた。真つ白な雪景色が、鮮紅に染め抜かれていく有様を、三人はただ見つめていることしかできなかつた。

雪がうつすらと降り始めた冬の日暮れ。沈痛な面持ちで、大希達は友人の遺体が トラックに積まれ、市民体育館へと向かっていく光景を見つめていた。三人は恐怖や怒りで散々に心が痛み、表情が失われ、涙すらも忘れていた。そんな三人の後ろに、さくらが足音を控えてやつてきたものの、三人が見つめる現実の重さを突きつけられ、さくらは結局三人に掛ける言葉を見失ってしまった。

「……ひどい」

喉から搾り出されるようにして出てきたのは、これだけだった。飛び上がらんばかりに驚き、剣人は背後に振り返った。荒い息をして、見開かれた目をしていた。何とか声の主がさくらであることを飲み込み、剣人は表情に乏しいやつれた顔でため息をついた。

「さくらか。頼むから、変に驚かすような事するなよ」

さくらは目を細めた。一瞬見えた彼の顔は、ひどく怯えているようだった。普段からは遠くかけ離れた恋人の姿に、さくらからも自然とため息が洩れてしまった。

「別に何もしてないじゃない。私ごときでそんなに怯えないでよ」「怯える？ 僕がか？ こんな場で『冗談はよしてくれよ』

剣人は顔を引きつらせた。どうやら笑顔をつくろうとしているらしいが、さくらはその表情を笑顔として受け取る事はできなかつた。さくらはウインドブレーカーのポケットから手鏡を取り出し、剣人にそれを突きつけた。

「自分の顔を見てみなよ。それが怯えていない人の顔なの？」

剣人はさくらから手鏡を受け取り、まじまじと自分の顔を見つめた。瞳孔は開き、頬が引きつり、口元が震えている。紛れもなく、さくらの言つ通りだつた。剣人はさくらに手鏡を突き返し、苦悶に顔を歪ませる。

「死ぬんだぞ？ あつという間に友達が、目の前で。しかも、テレビでも漫画でも、まして夢ですらない。人を殺めた銃口が、自分の胸に突きつけられるんだ。これ以上に怖いことってあるか？」

さくらは伏し目がちに頷く。剣人の気持ちは痛いほどわかつた。彼の目が、息遣いが全てを物語っている。さくらは息が詰まり、目頭が急に熱くなつた。しかし、だが、さくらは毅然と剣人を睨む。「わかるよ。私だって、ナイフを突きつけられた時は全身から血が抜けちゃうような気がしたもの。死ぬ、って思うことがどんな気分か、私だってよくわかる。けど、ビビつて縮こまつてたら、それこそみんなが浮かばれないんじゃないの？」

剣人、大希や健もさくらを見つめた。さくらは唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうな顔をしていた。肩を震わせ、浮かぶ涙を拭いながらさくらは剣人の肩に触れる。

「私だって剣人の気持ちは痛いほどわかってるつもり。そんな顔なんか見たことないし。それに、剣人が死んじゃうなんて考えたくないし、剣人と一緒に安全な所に逃げたいって、今も思つてる。けど……それ以上に、剣人には、私の知つている剣人でいて欲しいの。『あの』試合の時みたいに、どんなことがあっても全く怯まない剣人でいて欲しい……」

涙が一筋、さくらの頬を伝つて落ちた。ひどく苦しそうに顔をしかめて、さくらは剣人に縋つた。

「わがままだよね。私って、本当にわがまま……実際に動くのは私じゃないくせに、勝手なことべらべら……」

剣人はあまりにも悔しくなつた。自分が不甲斐ないと思った。さくらは彼女の気持ちを整理できずにいるのに、必死に自分の事を思いやつてくれている。それに比べて、自分は何もさくらのことを思いやろうとしていなかつた。自分の事で頭がいっぱい、それが当然だとしか思つていなかつた。剣人はうつすら涙を浮かべ、さくらを包み込むように抱きしめた。

「ごめん。さくら……目が覚めた。俺は守るよ。ここでふんばらな

きや、俺達はただの穀潰しだ。なあ、一人とも」

大希と健は見つめあつた。腹を決めるより他にないとわかると、二人はため息をつき、静かに頷いた。

「ああ、そうだな。自衛隊に任せっぱなしはできねえし」

健の言葉に大希も頷いた。遺体を静かに見つめ、大希はそつと敬礼する。

「お前たちの分も俺達頑張るから、心配しないでくれよ」

剣人も健も大希に倣い、三人は遺体の列と再び向かい合つて決意を新たにする。さくらもこぼれ落ちて止まない涙を必死に拭い、じつと剣人の隣に寄り添つていた。その時、背後から理加がせわしない様子で走つてきた。

「さくらー！」

「理加！」

さくらと健が振り向き、一斉に声を上げた。ずいぶんと動き回つた様子で、理加は軽く息を弾ませていた。

「さくら、私達に仕事よ。局長が呼んでたわ。『私達もできることをしよう』って」

「できること……？ う、うん。わかつた。一緒に行くわ」

さくらは大希達の方に振り向き、その真剣さを目で表しながら頷いた。

「私行くね。……みんなの無事、信じてるから」

さくらは理加と頷き合い、理加に付き従つて姿を消した。その華奢な背中に一体どれだけの心労がのしかかっているかを思うと、剣人は自然にため息を洩らしてしまつた。

「俺、さくらを支えてやれんのか……いや、まだまだだな」

大希は横目で剣人の表情を窺つた。

「おい、しつかりしろよ。そろそろさくらと結婚するんだろ？ そんなんでどうすんだよ」

剣人は目を閉じた。最近はとんと見られていないが、やはり彼女にはちよつとばかり子供じみた、弾けるくらいの笑顔がよく似合う。

剣人は表情をゆっくりと和らげ、頷いた。

「ああ。これからはしっかりするぞ。さくらの笑顔を守るためなら、俺は全部投げ出すよ」

いつもの落ち着き払つた笑顔を見て、大希は満足そうに頷いた。

「ああ。それでこそ玉龍旗の道を繋いだ大将だ」

大希と剣人が控えめに笑いあう様子を見ながら、健はとある事を思い出した。自分たちの間をすり抜け、勢い良く飛び出していった未成の姿だ。健は大希の肩を叩く。

「大希、未成は？」

それを聞いた途端、大希は目を丸くして気まずそうな表情をする。頭を搔きながら、顔をわざかにしかめた。

「あつ！ あいつには悪いけど、今思い出した……未成、絶対南広場の方行つたよな。俺、急いで探してくる。用心深いし、きっと無事でいるとは思うんだけどさ……」

「ああ。そうしてやれ。一番の友達はお前なんだからさ」

剣人は頷き、大希の背を押した。大希は片手を挙げて応えると、足早に広場へ向けて走り出した。

その頃、一人の兵士が右肩を押さえ、ビルの壁を伝つて歩いていた。今も絶え間なく血が溢れており、手で押さえたくらいではどうしようもない。血の気が抜けてきて、ヘルメットが異様に重たく感じられる。口元をしかめ、兵士はヘルメットを片手で脱いだ。その中からあらわになつたのは、つり上がつた涼しげな目元をした女性の面立ちだった。そう、その兵士は正真正銘の女性だったのだ。

「くう……こんな所で……」

兵士 北星栄花ほくせい えいかは肩を押さえながら呻く。彼女は多数のサイバー

ーと共に現れ、クモに指示を送つたあの兵士だった。歩兵達が散開した後は、物陰に隠れてサイバー達の動静を見守り、いつでもマニュアルの指示を出せるようにしていたのだ。だが、それが仇となり、クモが爆発した時にその破片が深く彼女の肩を抉つたのだ。傷は相

当に深く、それでも涙一滴こぼさないことが彼女の胆力の強さを何よりも示していた。しかし、彼女の体を力強く支え続けた精神力も、もう限界だった。よもやここまで反撃に遭つなど予想しておらず、応急処置をするための道具が不足していた。肩の深い傷を癒せる手段もなく、彼女はどんどん血の氣を失い、その場にふりつき、倒れこんでしまった。

「こんな所で……死ねるか」

彼女は目を見開き、その目奥に命の炎を燃え上がらせ、らんらんと光らせていた。痛みをこらえ、何とか立ち上がるうとするものの、力の抜けきった体ではもうそんな事すらもできなかつた。栄花は顔をくしゃくしゃに歪め、必死に泣くのをこらえながらうつむいた。

「ちくしょう。ちくしょう……」「んな、こんな所で。一人でなんて、死にたくない……」

歯を食いしばり、必死に意識を失うまいとするものの、目の前は霞み、体は中身をそつくり鉛に詰め替えられたかのように重く、動かなくなっていた。

「私、何のために生きてたのさ……」

最後に弱々しい口調で呟き、彼女は意識を失つてしまつ。その頬を、一筋の涙が伝つていつた。

そこを通りかかる一人の影があつた。大希だ。真つ直ぐに南広場を目指して走つていた彼であつたが、かすかに血の臭いを感じて立ち止まる。鼻先に感覚を集中すると、それはビルの影から流れているようだつた。左を振り向くと、路地の真ん中に倒れ伏してゐる一人の兵士が見つかった。その右肩を押さえる手には、どす黒くなつた血の塊がこびりついていた。敵、という思考が一瞬頭を過ぎつたが、それ以上に肩の怪我が気になつた。どうやら意識もないらしい。大希は足音を忍ばせて近づくと、そつと膝まずき、兵士を仰向けにした。

「え、あ？……女？」

大希は目を丸くした。血の気を失い、真っ青な顔で氣を失つていった兵士は、女性だったのだ。しかも、筋の通つた鼻や、引き締まつた唇など、そのやや氣の強そうな顔立ちは、どれだけ厳しめに見ても『美人』の範疇から外れない。一瞬大希は心臓が大きく跳ねるのを感じてしまった。

だが、彼女の右肩を触れてすぐに現実へと帰つた。今も血が少しずつ滲み出しており、大希の右手は鮮血で真つ赤になつていた。一刻の猶予も許さない。そうとしか大希には見えなかつた。大希は目を閉じる。先ほどの兵士は、『運命』だなどと抜かして仲間をことごとく殺した。その恨みがなくなるはずはない。しかし、彼にはけが人を見捨てるということなどできやしなかつた。

「助けてやらないと。何とかして……」

大希が彼女を再び寝かせ、辺りを見渡していると、外の通りの方から聞きなれた声が飛んできた。

「大希！ そんな所で何してるんだい！」

大希ははつと顔を上げる。そこにいたのは、紛れも無く未成だつた。不思議そうな顔をして、こちらのことをじつと窺つている。「何してたんだはこつちだ……と言いたいところだけど、今はそんな場合じやない。この人が怪我してるんだ！ ……一応敵だけど、俺は助けるべきだと思うし。だから未成、もし出来るなら手伝つてくれないか？」

「あ、ああ」

未成はとりあえず返事だけを返し、一足飛びでこちらにやつてきた。途端に兵士の危険な様子に息を呑む。

「確かにこれはマズイね……でも、助けたとしてもどこに彼女を入れておくつもり？ ロビーに置いておいたら、そこで頑張つている人の邪魔になるんじやないかな？」

大希はうつむいた。確かにその通りだ。しかも、自分たちを襲つた敵が同じ空間に寝ていることが許せないという人々が出てくるか

も知れない。それを加味すると、結論はすぐ一つに落ち着いた。

「何とか頼んで、普通のベッドに寝かせてもらおう。なんとかする  
さ」

「そうだね。……じゃあ僕も手伝つよ。まずは彼女を病院まで運ば  
ないとね」

二人は改めて周囲を見渡し、鉄の棒や捨て置かれた板を駆使して  
即席の担架を作る。そつとその上に女性兵士を載せ、二人は急ぎ足  
で病院に向かった。

栄花は、複雑に組まれたやぐらの上に立ち、カマキリ型のサイバー兵器 破碎サイバーの整備をしていた。頭を開き、カマキリのメインコンピュータと手元のモニターを繋いで、栄花はじつとモニターが映し出すカマキリのデータを見つめていた。その顔に表情は無く、彼女は淡淡とモニターを見つめていた。

「北星！ そつちの整備は済んだか！」

下から上司の声がした。栄花はモニターから目を逸らし、下から自分を見上げている眼鏡をかけた上司と目を合わせる。

「はい。もうすぐ済みそうです」

「そうか……北星、頼むぞ。このサイバー兵器の働きで全てが決まる。俺たちが生き残れるかどうかが」

上司の必死な表情を見て、栄花はわずかに顔色を曇らせた。モニターを横目で見て、カマキリの持つ刃のデータを見つめた。その高周波振動ブレードは、一般的の建物なら容易く破壊してしまうだろう。栄花はこつそりとため息をつき、望む答えは帰つてこないと知りつつも、立ち去りかけた上司に話しかけた。

「待ってください。……どうしても、この方法しか無いんですか？」

上司は振り返った。その冷たい視線に、一瞬栄花は身を縮めてしまった。

「今さら何を言つていいんだ。このままでいれば、消えるのは俺達の方なんだぞ」

栄花の目が泳ぐ。度重なる天災の原因も特定され、『マザー』は既に結論を下した。栄花も生き残りたいと願い、ここでサイバー兵器の整備を行つてゐる。だが、自分が作つた武器が、幾千幾万、否、とても数には挙げられぬほどの命を消し去る端緒になることに堪えられるほど、若干二十歳の栄花は強くなかった。

「でも！ 向こうには何十億もの人々が暮らしているんですよ。そ

れを全部犠牲にしてまで、私達が生きる意味はあるんですか！」

上司は目を剥いた。そばに落ちていたナットを拾い上げ、栄花に向かつて投げつけた。それは僅かに狙いが逸れ、鉄骨に当たつてひどく甲高い音を立てた。一人の他に動くものない倉庫に、その音が染み渡つていく。

「……なら、お前はできるのか？　自分の命を犠牲にすることが！」

「そ……それは」

栄花は再び目を泳がせ、口ごもつた。

「できないだろ！　そういう事だ！　誰だつて死ぬのは怖いんだ。ただそれだけだろ。お前、最近そればっかりらしいな。いい加減に自分の立場を自覚しろ！」

もう一個落ちていたナットを、再び上司は栄花にめがけて投げつけた。栄花はとっさに腕で顔をかばい、その手の平にナットを受けた。ナットの角が栄花の手を傷つけ、そこからうつすらと血が滲む。傷口を押さえながらやぐらの下を窺うと、肩を怒らせながら立ち去る上司の背中が見えた。栄花はため息をつく氣力すらも失い、肩を落としてサイバー兵器と向き合つた。

工学に対しても天賦の才があつた栄花は、そのため軍に目をつけられ、兵器開発の一助をすることになつたのだ。始めこそは彼女も乗り気でいた。自分が世界を救えるという喜びもあり、普段から同じ工学部、とくに男子にやつかまれていた反発もあつた。しかし、時を重ねるうちに、彼女はだんだんと罪の意識を強めるようになつていた。目の前の兵器を自分も作ったのだと思うと、栄花は心を搔きむしられるような苦しみに襲われるのだ。

彼女は傷口を強く押さえ、血が流れ、鉄骨に赤い染みを作つた。

「私は、もうこんなもの作りたくない……」

栄花ははつと目を覚ました。とっさに起き上がりうつしたが、まるで心身を別々に分けられてしまつたかのようで、全く体が言うことを聞かなかつた。栄花は起き上がるのを諦め、脱力して再び仰向

けに倒れ込んだ。何度も瞬きし、そこでようやく彼女は自分が涙をこぼしていたことに気が付いた。

「またか……」

咳き、栄花は涙を無造作に拭つ。ここ最近は毎日だった。いくら表向きには強がつても、既に彼女の心は悲鳴を上げていた。感情のこもらない瞳で、栄花はぼんやりと周囲を窺つ。辺り一面真っ白いものばかりだ。寝ているベッドも、壁も、カーテンも、全部白だ。栄花はこの場が病室だと気付き、ようやく違和感を覚えて訝しさに顔をしかめた。

「え？ 何で私、病院なんかで寝てるの？」

栄花は自分の体に目を走らせ、そして右肩に巻かれた包帯に気が付いた。それを見た途端、今までの記憶が奔流のようにな溢れてきた。肩に受けた激痛、朦朧とした意識。そのまま死ぬのだろうとさえ思つていた。それが、何故自分はここにいるのか。布団の端を握りしめ、栄花は自分が置かれた世界が現実であることを確かめた。そして、消し去りようのない疑問が口をついて出てきた。

「ここは、この世界の病院でしょ？ 何で私が寝てるの？」

置かれた状況に戸惑い、栄花は掴んだ布団を引き寄せ縮こまつた。男にも果敢に突つかかっていく女のはずだつた栄花の瞳は、再び潤み始めていた。その時、いきなり病室の戸が開いた。びくりと身を震わせ、栄花は反射的に戸の方角を見つめる。そこには、短髪で、澄んだ瞳が誠実さを思わせる青年が立つていた。その顔に驚きの色を浮かべ、青年はゆっくりと近づいてくる。

「もう起きたのか。医者の見立てじゃまだしばらく起きないって言つてたんだけど……」

栄花は思いきり眉根にしわを寄せた。追い詰められた猫のよひに、彼女は必死に息を荒らげて青年の事を睨み付ける。

「近づくな！ 一体何なんだよお前は！」

青年は口を尖らせ、小さく両手を挙げた。

「何だよその態度。せっかく助けてやつたのにその言い種は無いだ

ろ」

「助けた？」

栄花は警戒心を剥き出しにして、力の入らない体にムチを打ち、何とか半身を起こした。それから、不満そうな顔をしている青年を改めて睨み付けた。

「別に助けたつてつもりは無いんだろ。私を適当に生かしておいて、情報でも何でも搾り取るつもりなんだろ！」

栄花は早口でまくし立てる。その言葉に合わせ、青年は困ったように目を瞬かせていた。栄花は一瞬自分の体に手を下ろし、それから「口」よりもつつ続けた。

「それに、私は女だしな。色々使い出があるとか、思ってるんだろ。どうなんだよ」

今まで困り顔をしていた青年は、苦し紛れの栄花が最後に付け足した言葉を聞き、何と吹きだしてしまった。そのまま笑い続ける様子に戦慄し、栄花は布団で自分の身を守るようにしながら睨み付けた。

「どうして笑うんだよ。図星か？」

青年は必死に笑いを噛み殺し、再びこちらに歩み寄り始めた。

「そんなわけないだろ。そういう考えにならうって事は、自分のスタイルに結構自信あるんだな」

思わず栄花は赤面した。唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうな顔で青年を睨む。そのあまりに弱々しい表情に、青年は慌ててその場を取りなそうとした。

「ご、ごめん。セクハラだつたかな。今のは……」

栄花は自分の姿を布団で覆い隠したまま、眉一本動かさない。ひ

どく困つて、青年は目を泳がせた。

「ねえ、本当に他意は無いんだ。肩をかづさばかれて倒れてる人を放つておけるかい？ そんなわけないだろ」

青年は両手を広げ、必死に自分に敵意がないことをアピールしている。しかし、栄花にはそれが不審に見え、余計に表情を強ばらせ、

布団をきつく握りしめた。青年はため息をつきながら肩を落とし、苦笑した。

「頑固だね、君も……じゃあ、名前を教えよつか。名前も知らない奴に話しかけられたつて、怖いだけだよな。俺の名前は今村大希。いまむら たいき。神奈川方面機動隊勤務だ。怪我している君に詰問するような真似はしないから、信じてくれ」

栄花はうつむいた。大希と名乗った青年の視線はとても温かくて、目を合わせていると自分が置かれている状況を忘れてしまいそうだった。栄花は歯を食いしばり、きっと大希を睨みつけた。

「独り善がりだ。それで私のことを考えてるつもりかよ。見え見えなんだよ。私を油断させて、やっぱり情報を取ろうっていう魂胆だろ！ 私は……私は騙されないからな！」

大希は肩を落とした。その目は至極残念そうだった。悲しげに微笑をたたえ、大希は一步一步と後へ下がっていく。

「そうか。まあ、すぐに理解してもらえるとは思つてない。でも、君が思つていいようなひどい事は絶対にしない。また明日も来るよ。君の誤解が解けるまでね」

そう言い残すと、大希は扉を後ろの手で開き、廊下に姿を消してしまった。その途端、栄花は胸の中の空白に気がついてしまった。彼に怒りの刃を向けて、必死に彼を突っぱねた。しかし、そんな事をしたところで、栄花の心は休まるどころか、ますます虚しくなった。いつの間にやら、栄花は涙を溢れさせていた。拭つても拭つても、ぽつかり空いた心の隙間から次々溢れ出してくる。栄花はしゃくりあげ、鼻をすすつた。

「私は……私はどうしたらいいのさあ……」

栄花は布団に顔を埋め、その晩顔を上げること無かつた。

「来んなよ！ 私に構うな！」

病室に栄花の言葉が響く。大希は宣言していた通り、翌朝栄花の病室を再び訪れたのだ。だがと言つべきか、当然と言つべきか、彼女の態度は相変わらずだった。

「君、そうやつて医者も追い払つたらしいな。ここは俺達の病院なんだけど、わかつてるか？」

栄花は口をつぐんだ。返す言葉が見つからなかつたらしく、ただただ彼女は大希の事を睨んだ。大希は仕方なしに微笑み、そつと彼女に歩み寄る。食事を載せたトレーを、そつと彼女のベッドの横の台に置いた。

「まあ、俺は別にいいんだけどさ。ただ、そうやつて治療も拒んでたら、治るものも治らないし。言つとくけど、俺は心配してるんだぜ？ 君の言葉を借りるんなら、一応女だし」

大希は小さく微笑みながら、両手を小さく広げてみせた。栄花は固く結んだ口元をひくつかせ、またしても大希を睨み付けた。

「何だよ。私をバカにしたいのか？」

大希の態度に舌打ちし、栄花は顔をしかめて吐き捨てる。大希は一瞬肩を縮めたが、それでも辛抱強く続けた。

「そんなつもりはないさ。ただ、君は何かにかなり怯えているような気がするから、もつと気を楽にしてもいいんじゃないか、って俺は個人的に思つただけだ」

栄花は顔を引きつらせた。投げやりな雰囲気の漂う笑みを見せ、喉を震わせるような笑い声を上げた。肩をかばいながら彼女は上体全てを大希に向けるような姿勢を取り、並びのいい歯を剥き出した。

「私が何かに怯えてる？ 冗談キツイな。私はこれでも軍人だぞ？ 何かに怯えてやつていけるわけねえだろ。敵のくせに、ただのサ

ツのくせに、あんたに何がわかるんだよ」

大希は田を丸くした。肩を小さくし、両手を胸の高さまで持ち上げ、控えめに栄花の表情を窺う。投げやりな笑みの仮面で覆つても、大希にはやはり、その眼の奥に潜む苦しみが透けて見えるような気がしていた。

「そうか……俺は人の気持ちを見抜くのが得意な方だと思ってたけど、大してあてにならなかつたな」

大希は頭の後ろで手を組んで、何の気なしに咳く。栄花は田をらんらんと光らせ、鼻を鳴らした。

「ああ、そうだな。お前の勝手な考えなんかあてにならないって事だ。もうあつち行つてくれよ。私に構うな」

栄花は田を見開き、再び歯を剥き出しにして威嚇する。大希は肩を竦めると、時計を確かめたり、活動服の襟元を正したりしながら一步一歩離れ始めた。

「わかつたよ。俺は君にメシを運びに来ただけだし。ちゃんと食つておけよ。力つけなきや、治る怪我も治らないからな」

「余計なお世話だ！ 敵のお前にそんな事言われたくねえよー！」

大希はやれやれと首を振り、これ以上は何も言わずにそそくさと立ち去つてしまつた。その背中を白い目で見送つた後、栄花はため息をつき、トレーの真ん中にあつた粥に手を伸ばす。栄花は口を尖らせ、ぶつぶつ咳く。

「何なんだろ。敵のくせに……変なやつ」

右肩が痛むせいであまり腕は動かせない。自分の口を粥の椀に近づけるようにして、必死に掻き込んだ。丁寧に噛みながら、栄花はぼそりと呟いた。

「……でも、おいしい」

大希は扉を閉じてため息をついた。彼女の言つ通り、本来はテロ犯者として捕らえているわけだから、ドライに適当な扱いをしたて他の誰も、彼女すらも文句を言つまい。大希も重々承知してい

たが、どうにも彼女を放つておけなかつたのだ。一昔前の不良のようにならぬのが、彼女の本当の姿ではないだろう。大希はそう思つていた。

「また怒鳴られてたね」

少しからかいが交じつた口調で話しかけられ、大希は顔を上げた。未成が、いつものように多少の弱々しさも伴う笑顔でこちらを見つめていた。

「ああ。参つたよ。ちょっとくらい大人しくしてくれてもいいのに」「どうしてそこまで彼女を気にかけるんだい？」

腕組みをして、ぶつぶつ文句をたれる大希に、未成は不思議そうな表情を見せた。大希は瞬きすると、小さく唸りながら畠を見つめた。

「ん？ ええと……」

唸つたり頭を搔いたり、大希がすぐに答えられないでいると、未成はにやりと笑つて、大希の鼻先を指差した。

「そうか。彼女が結構美人だからかな？」

大希は目を細くして未成の表情を見つめる。確かに、一目見た時はかなりの美人だと思った。だが、その後の目をつり上がらせて怒鳴り続けるあの様子を見ては、彼女を美人と思うことはできなくなつてしまつた。大希は首を振つて顔をしかめる。

「いや。あんな美人がいてたまるか。でも、人として、何だか放つて置けない気がするんだ。何だかひどく無理してるように見えて仕方ないんだよ」

「ふうん。なるほどねえ……」

未成は病室の扉を見つめる。その目は、奥にいるであろう女性兵士の姿を見透かしているかのようだ。ほんやりとした目は、感傷に浸つているかのよつにも見える。大希は鼻で笑い、未成の肩をついた。

「何だ。お前も結構気になつてるんじやないか？」

未成は大希の方をちらりと見て、微かに頷いた。

「まあね……君が望んでいるような意味とは、違うんだけどさ」

大希が未成の言葉に首を傾げた時、遠くから剣人の鋭い声が飛んできた。

「おい！ 食事出してくるだけなのにどんだけ時間食つてんだ！ さつさと戻つてこい！」

「おつと。今行く」

大希はもう一度病室を一瞥すると、ロビーに向かつて走り出した。

大希と未成が降りてみると、ロビーの状況はまるで変わっていた。負傷者は脇に詰め、中央には井上と、それを前にして、救助に当たつていた警官が集まっていた。剣人に引きずられ、大希と未成はその集まりの隅まで行く。その様子を見つめる井上の目は、鬼のよう

に鋭かつた。

「すいません。ただいま連れてきました」

剣人は素早く井上に頭を下げる。顔をしかめつつも、井上は小さく頷いた。

「ああ。少し遅かつたが、許容範囲にしてやる……さあ、我々に重要な使命が下つた。他の隊は既に当たつているはずだ」

重要という言葉に、元々引き締まっていた空気がさらに張り詰める。井上はそんな部下の顔を見渡すと、一気に話した。

「本日閣議決定により、久宇慈市は緊急避難区域及び防衛ラインに決まつた。自衛隊は後者、防衛任務に当たり、我々機動隊は、市内より避難する市民達の警護に当たることになった。全員の尽力で、無事に人々をこの街の外へ逃がせ。いいか！」

「はい！」

井上の朗々と響き渡る声を聞き、機動隊の人々は力強く応えた。井上は頷くと、素早く隊員を指で差し始めた。

「お前らからお前らまでは南へ行け。湾岸部の住民は海路で脱する。船に乗り込む人々に混乱が起きないようこしろー」

「はい！」

「お前らは俺と中央に来い！ 既に脱出は始まっている。滞りなく済むよう交通整備に当たる！」

「はい！」

そして、井上は大希達を含む十人を指差した。

「お前らはこの病院の人々を市街の病院へ搬送しろ。既に受け入れ体制はできているはずだ。いいな」

はい、と応えかけた大希だが、ふとある姿が脳裏に浮かんだ。端正な顔を必死に歪め、自分を撥ね付けようとするあの姿だ。大希は顔を上げる。

「隊長！ ここに拘束している捕虜はどうするんです？」

「ここに置いておく。そのうちここは我々や自衛隊の拠点にするから、捕虜を置いておく方が何かと都合がいいんだ。これで大丈夫か？」

「はい。了解です」

井上は小さく頷くと、再び大声で叫んだ。

「よし！ 行け！」

大希達は素早く負傷者を集め、外に用意していた輸送車に載せていった。起き上がる事すらままたらないような者はいなかつたら、さほど時間はかかるない。

「道はどうするんです？」

負傷者を席まで誘導しながら、大希は輸送車にエンジンをかけている先輩に話しかけた。先輩は顔を上げると、目の前の通りを指差す。

「小田原市の病院が受け入れてくれるそうだ。お前も早くパトカー乗れ。さつさと出るに越したことはないからな」

返事もそこそこに、大希は頭を下げて輸送車を降り、既にエンジンをかけて待ち構えている健のパトカーに乗り込んだ。

「よし。さつさと出るぞ。人払いだ」

そう意気込んではみるものの、既に街の中心部は閑散として、出

歩いている人、道行く車両、どちらをとっても見当たらない。剣人は顔をしかめ、ぼそりと呟いた。

「俺達がこうしてゐる意味はあんのか？ 単に自衛隊の足下をチョロ口してゐるみたいだ。それに……この事態が収まつたとして、この街は元に戻れるのかもわからなくなるな」

大希は神妙な顔でビル街を見上げる。ビルの中は暗く、人気などない。まさにゴーストタウンだ。だがそれでも、大希は希望を失いたくなかった。幾つになつても、『ヒーロー』の精神はこの男に染み付き続いているのだ。

「わからぬくない。俺達が元に戻すんだ。むしろ、俺達の仕事はそこからだろ。久宇慈復興の下支えだ」

真剣な眼差しで街並みを見つめている大希。その瞳には、全く搖らぎがなかつた。ハンドルを小田原市方面に切りながら、健は力強く頷いた。

「そうだよな。俺達もできることやらないとな」  
三人はしんみりとしてしまい、思わず黙りこくつてしまつた。

そんな時、いきなり無線から激しい声の通信が入つてきた。

「大希、いるんだろ！ 聞こえるか！」

井上の声だ。大希は椅子から飛び上がりそうになり、慌てて無線を取り上げた。

「井上さん！ いきなりどうしたんですか！」

「さつきた襲撃があつた！ また別の型の奴も出てきて、そいつがそつちに飛んだ！ 何とか輸送車を守れ！」

「そんな。一体何が来るんだ……」

剣人は血相を変え、思わず後ろを振り返る。そこにはもう『それがいた。それは、一対の羽根を広げてこちらに飛んでくる。丸い頭、細い体。トンボだつた。

健はサイドミラーに目を向けた。そこには巨大なトンボ型のサイバー兵器と、それに追われる輸送車の姿が映っていた。サイバーの外見からは、いかなる装備が詰め込まれているのか全く想像がつかない。健はその不可知を恐ろしく感じた。そもそも、彼の本質には少々臆病な部分も含まれているのだから、無理もない。

浅く息をして、健はちらりと横を窺う。大希は口を固く結び、サイドミラーに映るサイバーを凝視していた。健は考えた。今、大希は何を考えているだろう。彼は一体、どうしたいのだろうか。答えに辿り着いた時、健の左手は無線に伸びていた。

「加嶋先輩！ 聞こえますか！」

輸送車のハンドルを握っている健達の先輩は、すぐに応じてきた。

『健か！ あのでつけトンボ、どうすんだ！』

健は一瞬言い濁んだ。舌の根が乾き、冷や汗が浮き出でてくる。だが、健は勇気を振り絞った。

「俺達が引き付けます！ 先輩は俺達を追い抜かして下さい！」

『あ、ああ。頼むぞ！』

輸送車はクラクションを鳴らし、一気にスピードを増して大希達を追い越していく。健は無線を戻すと、パトランプのスイッチを入れ、サイレンを鳴らした。ハンドルをしつかり握りしめ、バックミラーに映るトンボの姿を捉えた。顔の大半を覆う眼が、薄赤い光を伴いパトカーを見据えた。

「大希、剣人！ トンボを見張れ！ 今から俺は運転に集中する！」

言つやいなや、健は一気にアクセルを踏み込んだ。車は一気に速度を増していく。トンボははつきり大希達に狙いを定め、急降下を始めた。剣人は後ろを見つめて叫ぶ。

「トンボが真後ろに来た！ 何かしてくるぞ…」

「そうはいかせるか！」

健はハンドルを大きく切り、タイヤを鳴かせながら東にハンドルを切った。それと同時に、トンボはその尾を強く地面に突き刺した。「危なかつたな。もうちょっとで刺さつたぞ」

大希は頬に冷や汗を流した。サイドミラーを覗けば、そこには地面から尾を引き抜き、再びこちらに向かつて飛んでくるトンボの姿があつた。大希は健の方に振り返る。

「健！ まだ追つて来るぞ！」

「じゃなきや困るさ！ 何のために鬼ごっこしてるんだ」

健はそう言うと同時に反対車線にずれた。もといた位置には再びトンボの一撃が突き刺さる。その隙に、健は北にハンドルを切つた。あまりのスピードに、シートベルトをしていなかつた剣人はしたたかに肩をドアに打ちつける。

「イテつ！」

「シートベルトしろよ！ サツにしょっ引かれんだろ！」

「冗談がましてる場合か！」

剣人がシートベルトに手を伸ばしながら訴えると、健は間髪置かずに叫んだ。

「かまなきややつてられねえよ！ こんな事！」  
「来るぞ！」

大希が叫ぶと、再び健は車線を変えた。逆走になつてしまつていたが、健にそれを気にしている暇などなかつた。どうせこちらに走つてくる車などないのだ。十字路でハンドルを強く切り、再び東を目指して走りだす。冬道をものともしない鮮やかな健のハンドル捌きに、大希は眼を見張るしかなかつた。

「さすがは健だな。新人のくせにカーチェイスやつて、それを成功させたつていう武勇伝を持つていいだけはあるぜ」

「始末書書かされたけどな」

今や健の目は爛々として、パトカーをまるで手足のように動かしていた。雪道の滑りすらも計算に入れた方向転換は、カースタントさながらで、事ある毎に振り回されている剣人の顔は少し青くなつ

ていた。トンボがボロボロの尻尾をぶら下げながら追い縋つてくるのを何度も窺いながら、剣人は前に身を乗り出した。

「いつまでこんな事続けるんだ！　おい！」

「知るか！　あいつがくたばるまでだ！」

健は急ブレーキをかけながらハンドルを切り、いきなり狭い路地に飛び込んだ。車の底から軋んだような音がして、大希は思わず息を呑む。

「おいおい。向こうより先にこっちがくたばりそうだぞ」

「変なこと言うな！　ホントになつたらどうすんだ！」

健はアクセルを踏み込みながらハンドルを切る。路地の出口でいきなりスピードが増し、大希と剣人はいよいよ顔を青くする。が、後輪が滑つたお陰で、むしろすんなりと広い道に復帰した。目を見開いたまま、剣人は頬を引きつらせて呟く。

「ドリフトだつたっけか……ゲーセンでしか見たことねえよ」

「エフワンもあるぞ」

大希も小刻みに息をしながら呟いた。二人とも、恐ろしいものとして健のハンドル捌きを見つめていた。その様子に気づき、健は首を振つた。

「俺の手元を見るなよ！　俺は前見てるだけで、ギリギリなんだ！　ちゃんとトンボを見張つてくれ！」

鋭い剣幕に、大希は慌ててサイドミラーを見つめる。そこには、なおも追いかけてくるトンボの姿があつた。燃料が切れる様子など毛ほどもなく、トンボはバトカーを中心に捉えて急降下を始めた。

「健！　まだだ！」

「了解！」

健は再び車線を変える。そして、例の「とく」トンボはその尾を地面に突き刺してしまつた。それでも、トンボは素早く尾を引き抜き迫つてくる。剣人はその様子を瞬き一つせずにつめていたのだが、その時一つの事実に気付いた。

「おい。あのトンボのケツ、大分ボロボロになつてきてるぞ」

剣人の視線の先には、外装がひしゃげて歪んだトンボの尾があった。剣人の言葉を聞き、健はぼんやりとした表情でアクセルを離した。エンジンブレーキがかかり、九十キロを越えていたスピードがどんどん緩んでいく。もちろん、トンボは一気に間を詰めてきた。大希は焦り、声を上ずらせた。

「どうした健！ ボーッとすんな！」

トンボは尾を動かし、じっくりこちらを狙っていた。その様子が映るサイドミラーを、健は一瞬見た。深呼吸すると、前を見つめた彼は一気にアクセルを踏み込んだ。トンボが尾を振り上げた瞬間、パトカーは一気に加速して間合いを引き離す。

「なら、これでどうだ！」

健が叫んだ瞬間、トンボは地面に深々と尾を突き刺した。いつものように尾を引き抜こうとするトンボだったが、どうにもそうはいかなかつた。最大出力で突き刺したその尾が、簡単に抜けてくれるはずが無かつたのだ。それでも、機械はそこまで頭が回らない。ピカピカ光り、ウーウー叫ぶなにがしかを消し去りうると思考することしかできなかつたのだ。

「Follow the given command！」

トンボはそう叫び、フルスロットルで上昇した。途端に亀裂が入っていた尾は甲高い音を立てながら装甲が割れ、配線がむき出しになつた。それでも構わず上昇した結果、ついにトンボの尾は先端が千切れてしまつた。バランスを崩したトンボはつんのめり、そのまま地面に不時着してしまつ。

「やつた！ これで俺達の勝ちだ！」

大希は後ろで情けなく跳ねるトンボを見つめて歓声を上げた。剣人は深々とため息をつき、ほつと胸を撫で下ろす。健はブレーキを踏み、ゆっくりと車を止めた。そして、ハンドルをそつと撫でてやる。

「よくもつてくれたな。助かつたぜ」

「お前もだ。ここまで運転上手いなんて知らなかつたぜ」

大希や剣人が健を労い始め、健は満更でもない表情を浮かべて頭を搔く。

その時、なんと再びトンボが飛び上がった。だが、三人はそれに気がつくことができなかつた。音を忍ばせ、トンボはそつとサイレンが止んだパトカーの上部に迫る。そして、そのまま着地した。

「うわっ！」

いきなり車体が沈み、大希は思わず天井を見上げる。窓が割れ、金属の脚が覗いた。健は身震いし、再びアクセルを踏み込んだ。

「何だよ！ しぶといやつだな！」

健はハンドルを最大限に切る。雪上で車は滑り、スピードの乗つた車はスピンを起こした。しかし、六つの足でしっかりと車体を捉えていたトンボは振りほどかれずに耐えた。健はいよいよ青くなる。同時に車体全体を揺るがす衝撃が加えられ、パトカーは跳ねた。同時に何かが弾け飛ぶ激しい音がして、赤い色の破片がボンネットに幾つか載つた。間違いなく、パトカーの象徴、サイレンの残骸だった。健は再びスピンを試みながら叫んだ。

「くそつ！ このままじゃまずい！」

「何か手はないのかよ！」

大希は天井を睨みつけた。同時に再び衝撃が加わり、天井が凹んだ。もう後はない。次また一撃が加われば、きっと天井は壊される。しかし打つ手は見つからない。大希は目を閉じ、次に待つ光景を想像した。このまま自分たちがトンボに潰される光景を。剣人も、健も同じだつた。

しかし、その光景はいつまで待つても訪れない。大希は薄く目を開いた。

「何も……起きない？」

「……どういうつもりだ？ トンボめ……」

健はアクセルを踏み直し、再び走りだす。その時、背後で工具箱の中身を床にぶちまけたようなひどい音がした。健は目を見開き、

慌ててブレーキを踏んでパトカーを止める。そして背後を二人で振り返ると、そこには道路の上でひっくり返っている巨大な尻切れトンボの姿があった。

「トンボが止まつた?」

剣人は半信半疑な様子で咳き、二人の顔を窺つた。大希も健も、狐につままれたような顔をしていた。頷き合つと、慎重にパトカーを降り、ゆっくりとトンボのそばに近寄つた。眼の光は失せ、脚の先一つ動かさない。まるで死んでしまつたかのように、トンボは身震い一つしなくなつっていた。健はその姿を見下ろし、ため息をついた。

「やつと終わつたか……もう俺、トンボが嫌いになりそうだ」

大希も頷き、力なく微笑んだ。

「ああ、俺もだ」

「報告しよう。何はともあれ、決着は付いた」

剣人がそう言つと、健はうなだれるように頷き、パトランプが吹き飛んだパトカーのもとに戻り、重苦しい動作で無線を取つた。

「こちら空井です。加嶋先輩。そちらはどうですか?」

『空井か? 無事だつたんだな! こつちも何とか小田原に着いたぞ。全員無事だ』

先輩の元気そうな声を聞き、健は小さく微笑む。途端に疲れが全身に覆い被さつてくる。全く抗えなかつた健は、そのまま運転席に上半身を預けて眠つてしまつた。慌てて駆け寄つた大希と剣人は、立派に戦つた親友の姿を見つめた。無表情にどっぷりと眠り込んでいて、これを起こしてやるのは酷に見えた。小さく笑いあうと、二人はそれぞれそつと肩を叩いてやつた。

栄花が曇りがちな外をぼんやり見つめていると、いきなり背後から戸の開く音がした。全く躊躇いのない、勢いの良いその音。栄花は虚ろで感情のこもらない目をしたまま、振り向きもせずに尋ねた。

「またお前か。今村」

大希は朝食のトレーを持つたまま、栄花の華奢な背中を見つめて眉を持ち上げた。彼女は大希を拒絶してばかりで、歩み寄ろうとう姿勢はつゆほども見せていなかつたから、大希は素直に驚いてしまつたのだ。顔をほころばせながら、一步一歩彼女に近づいていく。「なんだ。名前覚えててくれたんだ。それに、振り向かずに俺が来たつて当てるなんて、結構やるねえ」

億劫そうに首を動かし、栄花は大希に横顔だけを見せる。伏せがちでいるその目には、やはり寂しさがあつた。

「お前、私が寝てるかもしれないのに、全く気にしないで戸をガラ

ガラ開けるだろ。……もう耳に染み付いた」

彼女の感情を機敏に感じ取つた大希は、ベッドのそばのテーブルに朝食を置き、そのまま椅子を持ちだしてきて座り込んだ。

「君、何だか寂しそうな顔してるな」

「は？」

彼女は語調を強めたが、やはりその目にはこの前までの烈火が宿つていなかつた。大希は栄花の鼻先を指差す。

「ほら。やつぱりそんな目してる。寂しくて仕方ない、って感じだぞ。仲間に会いたいのか？」

大きくした目を瞬かせ、栄花は一瞬戸惑つたような顔をした。次第に彼女は口を固く結んでしかめつ面になり、またしても顔を背けた。

「余計なお世話だ」

「あれ、違つた？」

「だから、余計なお世話だつて」

栄花が睨みつけると、ようやく大希は黙り込んだ。彼女自身も沈んだ空氣の中でうつむいてしまい、病室の中は一気に重苦しい空氣になる。大希は頭を搔き、栄花の横顔をじっと窺う。伏し目がちのその表情は、やはりどこか寂しそうで、何かに苦悶しているようにも見えた。このまま放つておくのは彼女の精神衛生上良くない。大希はそう決めつけ、再び話を変えてみる事にした。

「どうしてトンボなんかを兵器のデザインにしたんだ？ サソリやクモはわかるけどさ、カブトムシやクワガタの方がトンボより強そうじやないか」

栄花は顔を上げ、大希を尻目にかけて鼻を鳴らした。

「あれは虫が肉食かどうかで決めてるんだ。カブトムシやクワガタは、結局樹液を吸つて生きてるからボツ。トンボはしつかり肉食だから……」

栄花は急に言葉を切り、大希の事をまじまじと見つめた。どんな形であれ、女性にじつと見つめられたのは久しぶりで、大希は思わず顔を赤くして鼻先を搔いた。そんな彼の事を、栄花は思いきり睨みつけた。

「危ない。色々喋るところだつた。お前、やつぱり私から情報を引き出そうとしてたんだな？ …… 何で顔赤くしてんだよ！」

頬を赤くして、半ば呆然としている大希に気付き、栄花はその頭を前触れも無く叩いた。その高らかな音と共に大希は我に返り、力無く笑いながら頭を搔いた。

「ごめんごめん。一年近く彼女いなくてさ、こんな近くで見つめられるの久しぶりで」

栄花は一瞬口をつぐみ、頬を染めた。その戸惑った表情は、怒鳴り睨むいつもの様子とは正反対だった。それから彼女は憮然とした顔で腕組みをすると、彼女はふいと顔を背けてしまつ。

「バツカみたい」

返す言葉は無く、大希はただ愛想笑いするしかなかつた。それを

横目で窺い、栄花は小さく鼻を鳴らした。

その時、戸が何度か叩かれた。同時に健の声が入り込んでくる。

「大希。敵さんが可愛いからって口説くのもいい加減にしろよ。

井上さんに突き出すぞお」

「口説いてねえよ！ 勝手なこと言つな！」

大希は顔をしかめ、半ば足を踏み鳴らすようにして出口へ向かおうとする。その背中を田で追い、栄花は眉を持ち上げて鼻で笑つた。

「結構すれすれだけどな」

「うるせえ！」

大希は振り返つて栄花をしかめつ面を見せつけ、そのまま再び踵を返してさつさと病室を出ていこうとした。田を丸くしてその表情を受け取つた栄花は、肩を竦めて再びその背中を見つめていた。言いたいことを口に含んでいるようで、唇を噛んだり、中途半端に口を動かしたりしていたが、中々彼女は言い出せない。だが、大希が取つ手に手をかけた時、ついに栄花は静かに呼び止めた。

「なあ、ちょっと待つてくれ

「ん？」

大希は取つ手を引く手を休め、栄花の方に振り返る。彼女はうつむいたまま、耳を澄まさなければ聞こえないほど小さな声で尋ねた。

「なあ大希。……また、来るのか？」

大希は田を瞬かせた。わかりきつている事を尋ねてきた栄花の顔は捨て猫のようで、そしてそこには全く繕いが無いように彼には見えた。こんな表情を見てしまうと、彼女のことを放つて置けなく思つていることを大希は改めて実感した。小さく微笑むと、大希はしつかりと頷いた。

「ああ。君がそうして欲しいんなら、毎食届けに来てやるよ

栄花はほんの一瞬目を輝かせた。だが、結局は風船がしほむように彼女の表情は暗いものに戻つてしまつた。

「……余計なお世話だ」

「やっぱり頑固だね。君つて

大希は咳くと、そつと戸を開けて立ち去った。一人取り残された栄花は大きくため息をつき、再び膝を抱えて外をぼんやりと見つめ始めた。その目はやはり捨てられた猫のようだつたが、虚ろでは無くなっていた。

健にからかわれつつロビーに戻った大希は、昨日と同じく、井上からの指示にじつと耳を傾けていた。

「今日もまた三つに分かれる。中央部の避難は大方完了したから、今度は外縁部の人々の避難の警護を行う。今日は西と東に向かうぞ」そこまで一気に言い切ると、井上はまた適当なところで隊員達を区切る。

「お前達は東へ行け」

「はい！」

井上はすぐに一組目を区切る。大希と健が組み込まれ、剣人とは分かれてしまった。

「お前達は西だ」

「はい！」

大希達の威勢がいい返事を聞きながら、剣人は井上の事をじつと見つめた。西も東も担当が決まつた。なら彼や残つた仲間がすべき仕事は一体何か。剣人はあれこれ考えながら次の言葉を待つた。井上は息を継いで、剣人達の顔一人一人を改めて見渡しながら静かに口を開いた。

「残りは港の倉庫に行け。久宇慈デジタルセキュリティエージェンシーの方々がサイバーの解析をある程度終えたらしい。社長がこつちに戻りたいということだつたから、迎えに行つて彼らの身の回りを警護しろ。わかつたか？」

「はい！」

剣人は目を輝かせた。さくらや理加の働いている会社の名前だ。ここ数日さくらの事が心配で、満足に休めなかつた彼にとつて、それは願つてもない仕事だつた。剣人は誰にも気づかれないよう、小

さく小さくガツツポーズを決め、軽快な足取りで仲間達の後を追いかけていった。

その頃、港に面した倉庫では、さくらや理加が収納されたサイバー兵器の様子をもう一度だけ確認していた。

「ねえさくら。こんなこと、あるのかな」

サソリ型サイバーの全身を見上げながら、理加は小さな声で呟く。さくらは唇を噛みしめて、理加の質問には答えないままパソコンの画面を注視した。そこには、サソリの全身像をシルエット化した画像が左半分にあり、そして左鍵に内蔵された武器のステータスが右半分に文章化されていた。

「衝撃波を攻撃に転用する兵器、レーザービーム。これが今に有り得る武器じやないことは、分かりきつしたことなんだけどね……社長は何て説明するつもりなんだろ」

さくらはぼそぼそ喋つてため息をつくと、ふと周囲に広がる景色を見渡した。理加や同僚には打ち明けていなかつたが、ここにいるだけでさくらは具合が悪くなっていた。そんなところで、ろくに眠りもしないでパソコンの画面を見つめ続けていたものだから、さくらはもう頭が痛くて仕方がなかつた。

「ようによつて、どうしてこここの倉庫を選んだんだろ……」

頭を押さえながら、さくらは入り口近くにある、小さな一室を見つめた。彼女は今にも泣き出しそうなほど苦しそうな顔をして、か細い声で呟いた。

「何だか、嫌な予感がする……」

理加は慌てた。理加は、そんな言葉はさくらにとつて最も縁の遠い言葉だと思つていた。だからこそ余計に慌ててしまい、うらぶれた表情のさくらを何とか励まそうと肩を叩いた。

「い、嫌な予感つて！ そんな不吉なこと言わないでよ！ 私が言うならともかく、さくららしくないよ……」

さくらは応えず、じっと黙つて倉庫の中空を見つめていた。その

曰は、そひ立つてこむ誰かを見つめつてこひみつだつた。

暗雲立ち込める空の下、さくらの嫌な予感は的中してしまった。その頃、剣人はパトカーの中で、一つの知らせを蒼白な顔で聞いていたのだ。

『高屋！ 聞こえてるか！ サイバーが来た。スズメバチ型が八体だ！ 戦闘機が間に合ってないうちに、奴らは色々な所に飛んだ。一体は間違いなく南に向かってる。サイバーより早くたどり着いて、人々を守ってくれ！』

彼らしくない、井上のひどく慌てた声の通信が途絶えた。途端に剣人は唇を震わせ、我を失った様子で必死に目の前の運転席を叩いた。

「高屋先輩！ 早くしてください！ お願ひです！」

背後で喚かれ、高屋はイライラと声を荒げながらアクセルを踏み込んだ。

「うるせえ！ わかつてるつつの！ あそこにお前の彼女がいるんだろ。もうすぐ着くんだから心配すんな！」

高屋の言う通り、すでに道の側には海が広がっていた。遠くにさくらたちがいるという倉庫も見える。剣人は最早待ち切れず、手を握つたり開いたり、貧乏搖すりを始めたり、身悶えしながら倉庫を見つめ続けた。早くさくらに会いたい。さくらを抱きしめて、その存在を確かめたい。剣人にはそれしかなかつた。

「ほら！ 着いたぞ！」

倉庫の前に辿り着き、パトカーはようやくその車体を止めた。途端に剣人はドアを開け放つて飛び出し、彼女たちのいる倉庫に向かう。そこでは警察の助けを待つさくらたちが倉庫の入口の前で固まっていた。剣人は誰よりも先に駆けつけ、人々に向かって叫んだ。

「皆さん！ 輸送車が来ます！ 早くそちらに乗り込んでください！」

剣人が振り返ると、遅ればせながら輸送車がやつてくるところだつた。顔を安堵にほころばせ、社長達はゆっくりと剣人に歩み寄る。

「ありがとうございます。助かりました」

その時だ。剣人は、倉庫の背後にスズメバチの姿を見た。剣人は目を見開き、慌てて人々を手招きした。

「皆さん早く！ サイバーが来てます！」

その声に、人々は一斉に後ろを振り返る。そこにいたのは、まさにスズメバチだつた。羽根にミサイルのようなものを携えたそれは、蒼く光る目で冷たく倉庫を見下ろしていた。人々は震え上がり、悲鳴を上げながら慌てて走りだした。足をもつれさせたりしながら、我先にと輸送車へ急ぐ。剣人はそんな人々を避けつつ、見開かれたその目は真っ直ぐさくらを捉えていた。彼の目の前で、彼女は剣人に向かつて必死に走りだそうとしたが、鋭い頭痛に堪えかねて、一歩も踏み出さないうちにへたり込んでしまつたのだ。

「さくら！」

頭を押さえてうずくまるさくらの元に、剣人は素早く駆けつけた。苦痛に歪むさくらの顔を覗き込み、必死に肩を叩いて呼び掛ける。

「さくら！ 大丈夫か！」

「……ごめん。肩貸して」

さくらの絞り出すような声を聞いて、剣人は思わず涙ぐんだ。さくらの腕を首に回し、彼女をゆっくり支えてやる。

「おい！ 大丈夫か！」

輸送車の方から高屋の声が飛んでくる。剣人は一瞬うつむき目を泳がせたが、すぐに顔を上げて声を張つた。

「高屋さんは先に行つてください！ パトカーで追いかけます！」

「そ、そうか！ 無事でいろよ！」

それだけ言い残し、輸送車は動き出した。それを青い顔で見送りながら、さくらは弱々しく呟く。

「ごめんね。私のせい……」

「いい。お前は気にするな」

連れだって歩き、必死に生きようとする一人。その仲を、はたして邪魔できる者がいるだろうか。しかし、今この場にいるのは『者』ではない。『物』なのだ。今でも、人々が逃げ出すのを慈悲で待つてはいるわけではなかつた。冷酷な青い目を倉庫に走らせ、任務遂行のための計算をしていただけなのだ。

「Follow the given command!」

スズメバチはそう叫んだ瞬間、四つの羽に取り付けられたミサイルを全て撃ち出す。ミサイルは倉庫に突き刺さり、全てを吹き飛ばした。サイバー や倉庫のコンクリートの瓦礫が一緒くたになつて、剣人達にも襲いかかる。

「まずい！」

剣人は一瞬振り返り、さくらの事を半ば引っ張るようにして走りうとした。しかし、人間の脚力で吹っ飛んでくる瓦礫から逃げおおせられるはずもない。咄嗟に気付いた剣人は、歯を食いしばりながら覚悟を決めた。さくらを自分の前に引き出し、全身の力を込めて彼女の事を突き飛ばした。

「うわっ」

抗う力も無く、さくらは地面に投げ出される。同時にさくらの背後で地面を搖るがす轟音が響いた。さくらはハツとなり、金切り声を上げた。

「剣人！」

目の前に降り注ぐ瓦礫。さくらは絶望に心臓を薙ぎみされ、絶叫した。その声は港中を震わす。だが、さくらの悲痛はやはり、かの機械には届かなかつた。

「Given command completed.」

瓦礫の山と化した倉庫を見下ろし、一言呟いてスズメバチは行つてしまつた。取り残されたさくらは再び崩れ落ち、顔を歪め、止めどなく溢れ出す涙で地面を濡らした。

「剣人。どうして？ どうして……」

さくらは自分を責めていた。頭痛などで自分がへたり込んだせい

で、剣人は自分を守ろうとして、飛んできた瓦礫に巻き込まれてしまつたのだ。その事実を確かめれば確かめるほど、さくらの心は抉られていった。

「嫌だ……嫌だよ……こんな所で死んじゃうなんて嫌あ……」

さくらが嗚咽をもらした時、目の前で微かな物音が聞こえた。目を裂かんばかりに開き、さくらはゆっくりと顔を上げる。間違いなく何かが聞こえた。さくらはそれを確かめると、慌てて瓦礫の方角に駆け寄つた。

「剣人！ 剣人！」

「さくら……」

剣人は、瓦礫の側、正確に言つならば、瓦礫に膝から下を埋めてしまつたような形で倒れていた。焦点の合つていらない瞳で、必死にさくらのことを見つめようとしていた。さくらは半ば飛びつくようにして剣人のそばに膝をついた。

「剣人！ ……よかつた。生きてた……」

「ああ。何とかな……悪い。くらくらして動けないから、俺を引っ張り出してくれ」

さくらは頷くと、剣人の脇を横から抱え、何とか彼を瓦礫の山から引きずりだした。幸運にも瓦礫の隙間に足は入り込んでいて、簡単に出してあげられそうだ。さくらは一瞬そう思つた。しかし、その感覚は半分当たりで、半分違つていた。さくらは剣人の足元を見つめ、そして三度崩れ落ちた。彼の左足は無事だつた。何事も無く、無傷でそこにあつた。しかし、右足は、膝より下が瓦礫に押しつぶされ、失われていた。流れ出る血の鮮やかさ、臭いがさくらに現実の二文字を、静かに突きつけていた。

「剣人！ 足が。足が……」

剣人の目が虚ろだつたのは、痛みを忘れるために頭が呆けていたからだつたのだ。さくらは目を真つ赤に腫らしてしゃくりあげ、うつ伏せに倒れる剣人に向かつて頭を垂れた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。……私のせいだよね。私のせいで

剣人は……

「……泣くな」

剣人が蚊の鳴くような声で呟く。だが、我を見失つて泣き続けるさくらにそんな声は届かなかつた。顔を歪め、剣人は体を起こそうとしながら叫んだ。

「泣くな！ 僕は」

言葉が切れた。呆けた頭を現実に引き戻したために、右足を失つたことを告げる激痛が彼の全身を貫いたのだ。剣人は絶叫し、仰向けになつて背中をぴんと反らせた。剣人の剣幕とその惨たらしい様子に、さくらは思わず大きく身震いして体を硬直させた。肩で息をしながら、剣人は腕を伸ばしてさくらを引き寄せる。

「俺はお前を守れたんだ。右足、それも膝から下くらい安いもんだ……俺はさくらの笑顔をずっと見ていたい。だからお前を守つたのに。泣くなよ……お前言つたよな？ 僕達に辛氣臭い顔なんか似合わないつて……笑えよ。お前が一番、そんな顔似合わないんだよ……」

さくらは大きくしゃくりあげた。鼻をすすり、目からは大粒の涙が今も溢れている。しかし、さくらは唇を震わせながら、何とか口角を持ち上げ、小さな微笑みを作り上げた。

「これで、いい？」

「ああ。さくらはやつぱり笑顔じゃないとな……」

剣人がわずかに微笑んだのを見て、さくらは指で涙を拭つた。スースを脱ぐと、ワイシャツの右袖を掴んで一気に引っ張つた。甲高い音と共に、袖は裂けた。冬日だつたが、さくらは寒さだと、そんなものはもう感じていなかつた。

「今から止血するね。痛いけど……ちょっとだけ我慢して」

剣人が頷くと、さくらは触れてしまわないよう気をつけながら、切り離したワイシャツの袖を右足の傷口近くに回し、一気に縛り上げた。襄いかかつた鋭い痛みに、剣人は思わず顔をしかめる。

「うあっ！ いてエ！」

「我慢して。お願ひ！」

剣人の苦しそうな顔に、さくらは顔をしかめたが、何とかワイヤツの袖で右足を絞め上げ、溢れ出す血を止めた。引き締まつた彼の足を絞るには相当力が要つたようで、さくらは肩で息をしていた。何とか血を止めたことで、さくらの胸にはようやく安堵が立ち上つてきた。さくらはスースを着直し、くすりと笑つ。

「よく我慢できました」

「……冗談じやねえよ」

剣人も苦笑いしながらさくらの腕を叩いた。静かにさくらは座り直し、改まつた。思いつめた表情で、さくらは剣人に向かつて小さくとも明瞭な声で切り出した。

「剣人。……私、今日から柳さくらだから  
は？」

剣人は足を失つた男とは思えないほど気の抜けた表情をして、さくらに問い合わせた。さくらは笑顔の中にも真剣な色を帯びた瞳で剣人を見据えた。

「だから。今日から私はあなたの奥さんになるつてこと。ずっとそばで、片足を失くしちやつたあなたを支え続けるつてことよ」

さくらの言葉には、一切の搖らぎがなかつた。驚きの眼差しで剣人はさくらのことを見つめていたが、やがて諦めたように鼻を鳴らし、苦笑いした。

「……柳に桜か。変な名前になつちまつたな」

さくらは肩を竦めた。その顔には、どこにも一切の後悔がなかつた。

「別に。響きはいいじゃない。……まあ、何とか立つてもらうよ。

あのパートカーは私が運転するけど、まずそこまでたどり着かなきやね」

「ああ……辛いなあ」

ぽんやりと咳く剣人の肩を叩き、何とか引きずり起しそうとした。その時、遠くから低い声が聞こえてきた。

「まあまあ。仲の良いご夫妻だな」

さくらは素早く振り向いた。そこに立っていたのは、いつだつたか、テレビで見た顔の男だつた。剣人は何とか顔を上げ、その男を見た。

「工藤<sup>くわいとう</sup>……征尚<sup>まさなお</sup>。お前はどうしてここにいるんだ。拘置されていた

んじやないのか」

「俺にとつて、牢屋などあつてないようなものだ。今までは大人しく捕まつてやつていただけのこと」

工藤は、仮面を被つたように無表情のまま言い放つた。剣人は顔をしかめ、舌打ちしながら声を振り絞つた。

「ここに何しに来たんだよ！ 何のつもりだ！」

「さあな？」

さくらはようやく思い出した。こいつは大希に瓜二つの男を殺し続け、果てには大希自身に捕らわれた男だ。さくらは危機感が身を駆け抜けていくのを感じた。大人しい作りの顔を必死に歪め、工藤に向かつて叫んだ。

「来るな！ 私達をどうするつもりよ！」

「……殺す、つて言つたら？」

さくらは心臓が跳ねるのを感じた。冷や汗が全身に浮き出て、自然と体が震えてくる。しかし、さくらは恐怖を何とか振り払つた。後ろには、守るべき人がいる。そう思えば、さくらは殺人鬼を怖がつてなどいられなかつた。剣人の腰に備えられた拳銃を引き抜き、ゆつくりと工藤に向かつて狙いを定めた。目をかつと開き、自分の中にある恐怖を全て追い払つよう叫んだ。

「それより先に、私がお前を撃つ！」

「お前が、俺を撃つ？ 震えているくせに、何を言つんだ」  
 工藤の言つ通りだつた。さくらの手は恐怖で小刻みに震え、まことに工藤のことなど狙えていなかつた。威勢よく叫んだ割には、彼女の顔は恐怖に目を見開いたまま硬直していた。工藤が鼻を鳴らして拳銃を指差すと、さくらはびっくりと跳ねて一瞬身を引いてしまつた。そんな様子をにやりと笑いながら眺め、今度は立てた親指を小さく曲げ伸ばしした。

「撃鉄起こしてねえぞ。それじゃ撃てねえよ」

さくらはハツとして手元に目を下ろすと、慌てて撃鉄を起こし、再び男に向かつて狙いを定めた。声を震わせながらも、胸を張つて何とか気丈に振る舞おうとした。

「『』、ご親切にどうも。でもいいの？ 私は本当に撃つわよ」

工藤は顔をしかめてさくらを睨み付けた。一瞬震えてしまつたが、彼女は負けじと工藤を睨み返した。

「そんな顔したつて、怖くなんかないから」

「そうか？ 十分ガタガタ震えてるけどな……」

工藤は首を傾け、斜に構えながらさくら達の元に歩きだした。その手は、まさに首を絞めるような動きをしてくる。さくらは血の気を失いながら叫んだ。

「来るな！ 来るなあ！」

さくらは引き金を引いた。しかし、震えに震えたせいでもともに狙いなど定まっていない。おまけにさくらの瘦身では銃の反動に耐えられず、彼女は転んで尻餅をついた。呻きながら銃を取り落とし、さくらは真つ赤に腫れた両手を開く。そんな彼女を見下ろしながら、工藤は小さく頷いた。

「まあ、普通の女がいきなり撃つたらそつなるわな」

「さくら……」

剣人は呻きながらさくらの震える背中を見た。恐怖に縮こまるその姿は、誘拐された時の小さな彼女にそつくりだつた。激痛を堪えて身を起こし、剣人はどうにかさくらと工藤の間に割つて入ろうとした。

「俺が、俺が守る。だから」

だが、血を失つた剣人にそんな体力は残つていなかつた。再び意識が朦朧として、剣人は氣を失いその場に力なく倒れ込んだ。その様子を見て、工藤はバカにしたように肩を竦めた。

「ふん。足を失くしても、態度は相変わらず一人前なんだな」

さくらは血が滲むほど唇を噛みしめ、両拳を握りしめて立ち上がつた。目を涙でいっぱいにして、口を血で真つ赤に染めて、さくらは鬼の形相で工藤を精一杯に威嚇した。

「剣人には手出しさせない！」

工藤は鎌首をもたげた蛇のように、目を細めて剣人やさくらの姿を隅々まで眺め回した。右手を胸のあたりまで持ち上げると、さくらの喉元を狙うようにして突き出し、するすると足を擦らせて近づいてきた。さくらはもう恐れるのをやめた。拳を関節が浮き出るほど握りしめ、息を大きく吸い込むと、そのまま一気に飛びかかつた。

「この！」

さくらは小さな拳を工藤の顔めがけて振り抜いた。工藤はその動きをあくまで冷静に捉えると、彼女の腕を横から掴み、そのまま後ろ手に捻り上げた。今にも肩を引き抜かれそうな痛みに苛まれ、さくらは思わず苦悶の声を上げる。それでも彼女は、そのままの姿勢で男の向こう脛を踵で蹴りつけようとした。工藤はそれを身軽にかわしながら、静かに感心の声を上げた。

「ふうん。てつきりお前は『剣人だけは殺さないで……うつ……』

とか言うと思つたが、中々どうして、根性ある女だな」

「うるさい黙れ！ あんたに何がわかるの？ 剣人だけ生きててもダメなの！ もちろん私だけでもダメ！ 二人で生きてなきや……

今日から私はずっとこの人を支え続けるつて決めたんだから！ 放

せよ！」

さくらがそう叫んだ途端、工藤は拍子抜けするほどあつさりと彼女の腕を離した。そのまま、その男は絞りだすような声で笑いながら、さくらのことを見据えた。

「そうか。お前は中々に魅力があるな。本當なら放つておいて、なるがままにしておこうと思つていたが……気に入った。俺がお前らのことを助けてやる」

突拍子も無い話だ。さくらは思わず嘲笑した。

「助ける。あんたが？『冗談よしなさいよ』

「俺は、『冗談なんて時間の無駄になるようなことは言わない。ほら見ろよ』

工藤は着ている黒いコートを開き、ひらひらさせた。何かが入っているような雰囲気は全くなかった。

「さつきはお前を試したくて『殺す』なんて言つたが、本當は丸腰だ。で、お前らには銃がある。俺にお前らを殺せる可能性なんかそもそもねえんだよ。どうだ？ 少しは俺を頼つてみよつて気にはなつたか？」

さくらは倒れ伏す剣人を見つめた。気絶した剣人は、それはもう全身を使って息をしているような有様だ。仮にパトカーをここまで近づけても、彼女一人で剣人をパトカーに載せるという事はできそうにない。どのみち、彼女に選択肢は無かつたのだ。さくらは最大限に神経を張り詰め、工藤の不気味な笑みを見つめた。

「わかったわ。でも、少しも変な真似はさせないから」「ふん。怖いもんだねえ」

工藤は腕組みをして、小さく鼻を鳴らした。

大希はその頃、未成や理加達と共にさくらの帰りを待ち続けていた。すぐに追い付くと剣人は言つていたのに、輸送車が病院に着いてからもう十数分は経とつしていた。当然大希達は気が気でなかった。

「まだかよ……十分は『すぐ』じゃねえぞ……」

大希のいらいらとした声に、理加は頷いた。苦しそうに顔をしかめていたさくらが、彼女のまぶたの裏に焼き付いている。最悪のシナリオが頭に次々浮かんできて、理加はそれを振り払うように頭を振った。

「さくら……無いよね？ 絶対に、そんなこと無いよね？」

未成は小さく頷いた。

「無いと信じたいです……きっと無いと……」

「おい！ パトカーだ！」

誰かがそう叫び、道路の向こう側を指差した。大希達は慌てて道の方に身を乗り出し、指差す方向に目を凝らした。そこには、確かに一台のパトカーがあつた。

「きっと剣人だ。無事だつたんだな！」

未成がほんの少し表情を陰らせた以外は、みんな一斉に顔を輝かせた。平然と走ってきたパトカーは、そんな彼らの前でゆっくりと停車した。運転席がまず開き、誰かが飛び出してきた。その姿を見て、誰よりも驚いたのが未成だった。

「さ、さくらさん」

その声はあまりにも大きく、さくらの無事に沸き上がろうとしていた雰囲気に冷や水をぶちまける結果になつた。静まり返つてしまつた人々の前で、さくらは静かに助手席を開け、中にいた人物を引つ張り出した。

「お前は……」

大希は言葉を失つた。現れたのは、他ならぬ敵、工藤征尚かたきだったからだ。ただ、工藤は両手を手錠で繋がれ、抵抗の意思も見せていなかつた。さくらは大希の方に工藤を突き出し、彼女らしからぬつり上がつた目で戸惑つた様子の大希を見た。

「そいつをどつかに突つ込んでおいて。留置所から脱走したみたい」

「あ、ああ……」

大希はひとまず頷き、工藤の襟首を掴んで引き寄せた。よろよろ

と動き、工藤は疲れきった口調で呟いた。

「あの女はしたたかだな。せっかく手を貸してやつたってのに……  
パートカーに乗った途端手錠かけてきやがった……」

大希は工藤の気の抜けた口調に舌打ちで応えた。

「ああ。さくらは結構ちやつかりしてゐるからな」

さくらは後部のドアに手をかけたが、開ける前に首を振り、近くの人に呼びかけた。

「ストレッチャー頼んでください。できるなら、手術の準備もしてほしいです」

さくらの深刻な表情を見て、頼まれた人は頷かずにいられなかつた。病院の中へ駆け込んでいき、少しして看護婦や医師、ストレッチャーを従えて戻ってきた。さくらは彼らに頭を下げるが、ゆつくりと後部のドアを開け放つた。

とたんに血の臭いが周囲に立ち込め、人々は思わず顔をしかめた。中を覗き込んだ医師や看護婦、そして野次馬は一気にのけ反つた。尻餅をついてしまつたものまでいる。それでも医師達はさくらの方を見て頷き、車の中から一人の青年をストレッチャーの上まで運び出した。

「け、剣人！」

大希はまたしても茫然自失とした。ストレッチャーに乗せられた剣人は、右足を半分近く失っていたのだ。止血が施されると同時に、周囲が寒かつたことすでに出血は収まつていたが、それだけに詳細が見える傷口は惨たらしかつた。大希は思わず目を背けて涙ぐむ。自分の知らないところで親友の一人が足を失つた事実は、彼にとつてあまりにも重たいものだつた。大希は歯を剥き出し、工藤に激しく迫つた。

「お前、お前か。お前がやつたのか？」

「そんなわけないだろ。俺は丸腰だぞ？ 丸腰で足をもげると思つてんのか？」

彼の言う通りだ。丸腰の工藤に何かできるはずもなかつた。怒り

を向ける矛先を見失い、大希は工藤の目の前でうつむいてしまった。

剣人の怪我はすぐに隠されたが、それでも大半の人間が目の当たりにしてしまった。誰もが凄惨な傷、血の臭いに苦しみ、顔を真っ青にしていた。井上とさくらが勤める会社の社長は並んで立つていたのだが、社長は蒼白な顔で井上に頭を下げた。

「……すみません。報告の件、明日の朝でも構いませんか。……具合が悪くなつてしまつて。カンファできそうにないんです」

井上は剣人が運ばれていく様子を瞬き一つせずに眺めながら、口元を震わせ小さく頷いた。

「ああ……俺も、今日は無理そうだ……」

健が病院の中から外に駆け出してきた。同時に、血の氣を無くした剣人が静かに病院の中へと運ばれていく姿とそれ違う。瞬く間に沈痛な空氣を察知した健は、慌てて周囲を見回した。すぐ目に付いたのは、肩を震わせ、顔を手で覆つている理加の姿だった。健は一足飛びで彼女のもとに駆け寄り、その肩を叩いた。

「なあ理加。剣人はどうしたんだよ？」

真つ赤に泣き腫らした目とは裏腹に、振り向いた彼女の顔は蒼白だつた。

「失くしたの」

「え？」

「剣人さんが……右足の、膝から下を失くしたの……」

健は目を見開いた。機械のようにぎこちない仕草で、健は何とか病院の方を振り向く。

「……そんな。バカな事つてあるかよ」

「ほんとなの。……ひどい話だわ。さくらも剣人さんも、とってもいい人なのに……」

理加は呻き、思わず健に縋り付いて泣き始めた。健も思わず彼女の肩を抱き、神妙な顔でうつむき、黙りこんでしまった。

手術中のランプが光る。それを見届けたさくらは、その場に崩れ

落ち、静かに嗚咽を漏らした。地べたに突つ伏し、今まで押し留めに押し留めてきた涙を、全て溢れさせていた。

「そんな事があつたのか。だからそんなに暗い顔を……」

栄花は朝食を運んできた大希の顔を覗き込んだ。大希はうつむきがちに座つたまま、疲れきつた笑顔を浮かべていたのだ。大希は目を瞬かせると、慌てて表情を緩めた。

「そんなに暗くなつてるか？ 悪い。心配させちまつたな」

大希の無理やり取り繕つた笑みを見て、栄花はため息をついた。彼は死ななかつたが、それ以前に一体どれだけの人がサイバー兵器の犠牲になつたかを思うと、強く胸をつかれた。

「悪いのはこつちの方。私があんなもの作らなかつたら、お前の友達も足を失わずに済んだし、たくさんの人が死ななくてすんだのに」大希は首を振つた。確かに彼女は敵で、言つたことも間違つていな。サイバー兵器を、躊躇なく仲間を殺した兵士達を恨む心もあつた。だが、どうしても彼女のことを責めようという気にはなれなかつたのだ。

「まあな。どうしてここを狙つているのか、とか、どうして一般市民を襲うのか、とか。挙げれば君達を許せないと思うことはたくさんある。でも、今回のことに関しては、まあ、不幸中の幸いかとも思つてゐる」

栄花が首を傾げると、大希は静かに続けた。

「よくよく考えたら、あいつは結局生きてるんだ。もう剣道はできないだろ？ し、警察の仕事も厳しい。でもまあ、死んじゃ全部おしまいだし。それよかましだ」

栄花は大希から目を逸らした。彼の気丈な振る舞い一つ一つが、彼女の胸に刺さるのだ。心に罪の意識が深くのしかかり、栄花は息を荒らげながら思わず頭を搔きむしった。

「ぶん殴つたつていいんだぞ」

「え？」

栄花は大希を見据えた。その気迫に、思わず大希はたじろいでしまつ。

「殴れよ。私達の事が許せないなら好きにして。私は恨まないから」大希は心底戸惑つたように目を白黒させた。一瞬の空白の後、大希は軽く笑いながら首を振つた。

「ありがたい話だけど、殴れないし、殴る気もないよ」

「どうして。許せないんでしょ？ そうでもしてくれなかつたら、私の心もぐしゃぐしゃだ……」

栄花が咳くと、大希は前触れもなく鋭く右手を振りあげた。その勢いに、栄花は思わず縮こまる。しかし、大希は軽く彼女の頬を平手打ちしただけだった。小さく乾いた音がするだけで、頬は全く痛まない。栄花は果然として目を見開き、静かに大希の顔を見つめた。「じゃあ、君の為にこれだけはしようと。あのねえ、確かに君達は許せない事をした。でも、俺は警察だから。父さんも警察だけど、言つてたんだ。『許せなくとも憎まない』って」

「許せなくとも憎まない……？」

「ああ。罪を犯した人を、許さなくとも憎んじやいけないんだってさ。憎しみは人から冷静さを奪う。正しく物を見る目を奪う。その果てに冤罪があつたり、逆にこつちが憎まれたりする。何かと非難される事つてあつてさ。税金ドロとか言う奴もいてさ。傷ついちまうんだよな。こつちは一生懸命何かあつた時のために備えてるのに、そんな事言われるとわ……」

そういつた彼の表情は、ひどく寂しそうだった。栄花はそれを見て、ひどく心が痛むのを感じた。そんな彼女の眼差しからは、もうすでに殺伐とした雰囲気が無くなつていた。膝を抱えて座り込み、栄花は静かに天井を見上げる。彼女の人生にも、思い当たることは數えきれないほどあつたのだ。

「何だかわかる。今村の寂しい気持ち。私も一生懸命頑張つてきたのに、いつも『あいつは天才だから』とかつて、まともに見てくれ

なかつたんだ。そつそつ。私もよく憎まれるんだよね。『女のくせに』つて。悔しいし悲しいし……結局、私が必要とされたのはこの戦いの時だけ。都合が良すぎるよ』

大希は微かに笑つた。彼女の丸くなつた声色から、心をゆつくり開き始めているのがわかつたのだ。加えて、大希は栄花に奇妙な連帶感を感じたのだ。

「そうか。お互ひ苦労あるな

「だね」

大希は何度も頷くと、膝を叩いて立ち上がつた。栄花は体育座りしたまま、寂しそうな上目遣いで大希のことを見上げた。

「なんだ。もう行っちゃうの？」

「ああ、そろそろ戻らねえと叱られるからな。……何だか寂しそうな顔してんの。いいのか？ 僕は敵なのに」

栄花は肩を竦め、鼻を鳴らした。

「なんかどうでも良くなつてきた。ここで一人になつてると、誰が敵とか、彼が味方とか、もう氣にするの疲れちゃつたつていうか……」

その言葉を聞いて、大希はほんの少し嬉しくなつた。彼女は自分を繕わなくなつていて。無理して反抗を続けていた、捨て猫のような姿はもう影を潜め、彼女は少しずつ自分に正直になり始めているように見えた。それが、何故だかは彼自身にもよくわからなかつたが、喜ぶべきことだと大希は感じた。手を振つて、大希はゆっくり彼女のベッドから離れだす。

「そうか。じゃあ、また明日来るからな」

「……待つて」

その時、栄花がいきなり大希を呼び止めた。振り返り、大希は首を傾げる。

「どうしたんだよ？」

呼び止めた栄花は、思いつめたように唇を噛み、目を大きく開いて大希を見つめていた。何度か彼女は言いよどみ、そうして恐る恐

る口を開いた。

「私の名前、言つてなかつたよな？……北星栄花だ」

「ホクセイ、エイカ？」

「北の星、栄える花つて書いて、北星栄花だ」  
しばらく嬉しそうに頷きながら聞いていた大希だが、急に頭を搔きながら思わず笑つてしまつた。

「ふうん……何だか不思議な名前だな」

言い切つてしまい、どこかすつきりとした、清々しい表情をしていた栄花だったのだが、いきなり自分の名前を笑われてはたまつたものでなかつた。

「何だよ！ そんなに変か！」

大希は首を横に振り、笑いを何とか噛み殺した。

「いや。いい名前だとは思つんだけどさ、剣道やつてると、どうにも変に聞こえちゃうんだよ。ごめん」

栄花は腕組みをしてむくれた。やはり言い訳の一つか二つで許す気はないらしい。

「勘弁してよ」

大希は肩を竦め、そそくさと病室を後にしてしまつた。口を尖らせてその背中を見送つた栄花は、静かに閉じた窓を見て仕方なしに微笑んだ。

「やつぱり、変なやつだな」

大希が病室の外に出ると、ちょうどさくらと鉢合させした。小脇に大きなファイルを抱えて、ついでに例の銀縁伊達眼鏡もかけている。さくらはぎこちなく微笑み、大希の肩を叩く。

「今日は自分から出てきたのね？ もうすぐカンファ始まるから、行こうよ」

眼鏡で少々目立たなくなつていたが、彼女の眼の下には深いくまがあり、艶のあつた黒髪もパサパサに乾いていた。肩も、何か重たいものを背負つているように小さくなつっていた。大希は彼女のやつ

れた様子に息が詰まり、彼女の肩を掴んでその顔を覗き込んだ。

「なあ、大丈夫なのか？……昨日はずっと剣人のそばで寝ずにいたんだろう？」

さくらは笑顔を消し、真剣な顔で頷いた。

「大丈夫よ。……本当はずっと剣人のそばに居たいけど、それよりもまずは、今やらなきゃならないことをしなきゃいけないから」

「さくら。それなら何も言わない。……でも、辛い時は俺や健を頼つてくれて構わないからな？」

さくらは顔を綻ばせ、小さく頷いた。

「ありがとう。こんな時でも、やっぱり持つべきものは友達ね」

「ああ」

大希は力強く頷き、さくらの肩を励ますように何度も叩いた。さくらは眼鏡をかけ直すと、踵を返して一階に向かって歩き出す。大希もその後に従い、下の階に降りようとした。

その時、病室の方からひどくむせ返る声が聞こえてきた。大希は振り返り、一瞬栄花の存在を意識した。その瞬間、大希の頭の中で何かが動いた。その途端に大希は居ても立つてもいられなくなつた。大希はさくらの方に駆けて追いつき、彼女の肩を叩いた。そのまま大希は真剣な顔で訴える。

「ごめん。俺、あの人には確かめなきゃいけないことができた。悪いけどカンファには出られない」

「え？ ちょっと何言って？」

さくらが言い終わらないうちに、大希はすでに病室の方へと駆け戻ろうとしていた。

「ごめん！ 俺の代わりに謝つといて！」

慌ただしい親友の動向に、さくらはやれやれとため息をついてしまつた。

「あのバカ……今更あの兵士に何を聞くの……」

栄花は白米を見つめてうんざりとため息をついた。今までがぬる

いおかゆだつたために、熱い白米を食べたら思わずむせ返つてしまつたのだ。思いつきり布団やトレーの上にご飯粒をぶちまけてしまい、栄花はため息混じりにそれを拾つては空いたおかずの皿に戻していた。

「あーあ。久しぶりのご飯だと思つたら……」

そんな時に大希がいきなりドアを大きな音で押し開けたために、栄花は赤面して振り返つた。

「ど、どうしたのよいきなり！ 食事中に押しかけないでよ！」

大希はひどく慌しい様子で椅子を引っ張り出し、栄花の隣に腰を据えた。そのまま栄花に詰め寄り、大希はその左肩を掴んだ。

「それは悪かつた。でも俺はそんなの気遣つてる余裕なくなつたんだよ。君の名前を聞いたお陰でね」

大希の目にただならぬ雰囲気を感じ、栄花は思わず真剣な表情になつた。その瞳を見つめ返し、栄花は抑えた声色で尋ね返す。

「私の名前が……どうかしたの？」

「そうさ。君は日本人なんだろ？ 栄花。ちょっと考えればわかることだつた。日本語がペラペラじゃないか。肌も髪も、日本人のそれだ。なあ、そうだろ？」

栄花は大希の強い眼差しに引きこまれ、思わず頷いてしまつた。

「ええ……その通りよ」

「だからこそわからないことがある。日本に『あんなもの』を作る技術がないことくらい、俺は知つてゐる。なのに、それを操つていた君は日本人だ。一体どういうことなんだ！ 頼む……教えてくれ。頭がこんがらがりそうだ！」

目を大きく見開いて、必死にまくし立てる大希を見て、栄花は静かにうつむいた。事實を話すということは、すなわち彼女の世界を裏切るということに等しい。だが、栄花は迷つてゐた。自分の世界のために働いて、その末に自分は幸せに暮らしていけるのかどうか。自分たちが創りだした兵器が起こした惨状を見て、栄花は最早自信が無くなつていたのだ。栄花は頷くと、ゆっくり大希を引き剥がし

た。

「わかつた……全部教える。でも、全部信じろよ？ これは真実だからな」

静かに尋ねた栄花の目には、強い決意が宿っていた。

「ああ。信じる。全部信じる」

「……なら話す。……私は、私は、もう一つの久宇慈から来たんだ

「……」

一階に下りたさくらは、待ち構えていた社長の進藤の元に駆け寄つた。

「すみません。お待たせしました」

進藤はいいよいよと手を振ろうとしたが、彼女が一人で来たことに気づき、手を瞬かせて眼鏡をかけ直すような仕草をしてさくらを覗き込んだ。

「それはいいけど、城は人を呼びに行つてたんだしょ？　どうして一人で戻つてきたんだい？」

さくらは苦笑いして肩をすくめた。

「急用を思い出したらしいです」

「へえ……まあいや。城、準備はできるね？」

さくらはファイルから紙の束を取り出す。紙面には、『サイバー兵器の製造元と年代について』と示されていた。

「はい。この事実が知れわたつても何か変わるとは思いませんが……それでも、私たちは知らせなければ」

「私が『修正軍』と呼ばれる組織に入った時、私は教えられたの。私の世界はもうすぐ崩壊して、その世界に存在が根付いている私たちも消えるんだって」

信じるとはいつた大希だが、栄花のとつとつとした語りは初っ端から飲み込みがたい話だった。大希は唸り、こめかみを押さえた。

「待つてくれ。俺頭悪いからよくわかんねえ。まず、栄花の世界つて何なんだ。もう一つの世界つて、つまり平行世界つてこと？」

栄花は布団を握りしめ、小さく首を振る。何かに対しても怯えている彼女は、小刻みに肩を震わせていた。

「違う。平行世界だつたら、私はここをサイバー兵器に襲わせる必

要なんかなかつた。私達の住む世界は、タイムワープの失敗で生まれた、大希達がいる世界の出涸らしのようなものなんだよ……」

さくらはロビーに集まつた人々に用紙を配り終え、進藤に向かつて目配せした。進藤は頷くと、パソコンやプロジェクターの前に座つて理加を指差した。理加はパソコンの操作を始め、スクリーンにその画面が映し出された。その中央に、一つのファイルが開かれている。それを見つめながら、進藤は静かに話し始めた。

「まずは謝らなければなりません。調査は進めましたが、未知のプロテクトに阻まれ、結局私達はサイバー兵器の概要を窺うことしかできませんでした。ですが、その事で我々は恐るべき事実を確認しました」

紙面に目を通した人々の、驚きや疑いの視線がプロジェクターへと一気に移る。そこにあつたのは、サソリのメインコンピューターから吸い出してきたバージョン情報だった。そこには、やはり誰もが目を疑う文字が並んでいた。

『製造元 久宇慈 製造年 一一一一年』と。

「その事故が起きたのは、私が生まれる三十年前の事だつて。無限にエネルギーを生み出す『ギャラクシウム』という元素を用いたタイムワープの実験が、世界各国で同時に行われたの。けれど、量子コンピューターで導き出されたはずの方法は失敗。タイムマシンは暴走を起こして、作り出されたタイムホールは、久宇慈市や、世界各国の都市をも巻き込んで……私たちの住んでる世界、偽物の百年前に飛ばしてしまつたんだつて。それが全ての始まり」

大希は頭を抱えていた。いきなり突きつけられた小説のような話に、ともすればついていけなくなりそうだつた。手を上げて彼女の話を一旦制し、深く唸りながら目を泳がせた。

「ああつと……タイムマシンが壊れて、周りの都市を巻き込んで、全部別の世界に飛ばしちやつた……でいいのか？」

「まあ、それだけわかってればいいよ。最初は大混乱が起きたんだって。だって、その世界は人がいない、土台を掘った跡はあるけど、建物はない。そんな感じだったって。でも、何とか立ち直ると都市はそれぞれ自治を始めたの。人工衛星を打ち上げてネットのインフラを整えたりして、都市と都市の間で協力して、どうにか迷い込んだ新しい世界に順応しようとしてた。それが私の生まれた頃なの」

栄花が立て板に水を流したように話し続けるのを、大希はとにかく黙つて聞いていた。話の中身が理解できるできないに関わらず、大希は彼女の独白を止めず、腕組みをして腰を落ち着けて聞くことにしたようだ。栄花はそんな大希の真剣な瞳をじっと見つめた。

「ここからが本題。一年前、私達の世界では天災が頻発するようになった。今年に近づくごとに、どんどんひどくなつていったわ。

地割れが起きたり、台風が年中発生したり、火山が爆発したり……もう私達は災害の対処に追われすぎて限界だった。そんな時に、私達が『マザー』って呼んでる、量子コンピューターがその元凶を突き止めたの」

大希は生唾を呑み込んだ。こちらの世界も、昨今天災が頻発している。あちらで地震が起きたと思ったたら、こちらでハリケーンが起きて……と、また次、また次と発生する。その理由は、栄花の言う『マザー』の突き止めた内容に関わっているのだろう。大希はそう確信して、栄花の方に身を乗り出しその言葉に耳を澄ませた。

「さつき、今村はここと私の世界を平行世界って言つたでしょ？ 半分当たりで半分違う。一つの世界は平行じゃない。交点があつたの。それがここの一〇一二年、向こうの一一一二年。一つの世界が完全に衝突するのが今年の冬至だって、『マザー』は言つたわ

「衝突したら……どうなるんだ？」

栄花が一際強く顔を強張らせ、布団の端を握りしめた。体をびくりと震わせ、恐怖を目一杯に湛えて、かすれ切った声で答えた。

「はじめに言つたでしょ？ ……元々事故から生まれた私達の世界

は不安定だった。多少はこの世界にもダメージがあるかもしない。けど、消えるのは私達の世界。絶対に」

栄花は口元を震わせ、必死に涙をこらえているようだった。何度も何度もつづかえ、鼻をすすりながら、ただひたすらに呆然としている大希に向かつて話し続けた。

「それを逃れるためには、こうするしか無かつた……この世界にあつて、私達の世界になかったもの……つまり人間を、この世界には存在しないイレギュラーな存在の私達が殺すことでこの世界に揺さぶりをかけて、かけて、かけ続けて……最後に、ギャラクシウムを使った爆弾で事故と同じ状況を引き起こして、そのまま冬至の衝突に持ち込む。そうすれば……そのせいで不安定になつたこの世界が壊れて、代わりに私達の世界が残る……それが『マザー』の出した結論だつた」

彼女の頬を、静かに涙が伝つた。しゃくり上げて、何度も何度も鼻をすすりながら、栄花は大希の瞳を食い入るように見つめた。

「私は生き残ろうと、したの。生き残りたかったの。だって、私怖かつたから……まだ二十歳なのに、まだ大学生だったのに、それなのに、自分の世界ごと死んじゃうなんて言われたら……」

栄花は一際大きく鼻をすすつた。目を真つ赤に泣き腫らし、大希を見つめるその顔は、まだまだあどけなさが残る一人の女性でしかなかつた。涙で布団を濡らし、悲しみに呻いて、栄花は大希に向かつて言葉をぶつけた。

「だけど、もうわからないよ。こんな恐ろしい事をしてまで私達が生きる意味なんて！ それでも私はみんなのために、つて頑張つてきたけど、大希が、大希が私に優しくしてくれるから……本当にわからなくなつちゃつたよ……」

栄花はいきなり布団を抜け出し、真つ直ぐ大希に飛びついた。大希は思わず抱き止める。大希の胸の中で悲嘆に暮れる彼女は、今にも脆く崩れ落ちてしまいそうだった。

「教えて！ 私はどうすればいいの？ 私に生きる意味はあるの……」

…？」

大希は、肩を震わせてただただすり泣く彼女を胸に受け入れて、大希は掛ける言葉を必死に探した。しばらく黙り込んだ後、大希は栄花をそっと胸から引き離し、彼女の涙に濡れた瞳を覗き込んでゆっくりと話しかけた。

「人はみんな誰かの指図を受けてる。それは否定できない事実だ。俺なんか、上意下達だし、上司の命令は絶対さ。でも、生きる意味まで誰かに指図されちゃしようがないだろ。誰かに押し付けられた価値観で生きたって、苦しいだけじゃんか。違う？」

「そんな綺麗事、言われなくたってわかるんだよ……私が聞きたいのはそんな事じゃない……」

「俺は単なる綺麗事だとは思わない。最後に何かを決めるのは自分しかいないんだ。受け入れるにしても、踏み出すにしても。栄花。君の本心はどこにあるんだい？ 君は、本当はどうしたいと思つてる？ 俺達の事を消したいなら、消したいと言つてくれて構わないから……」

栄花は涙を拭き、大希を睨みつけた。

「ずるいね。大希に向かって……『私は生きたいから消えてほしいなんて、言えるわけ無いじゃん……』

大希は思わず切り返しに戸惑い、言葉を失つてしまつた。そんな様子を見てため息をつき、栄花は大希の額を小突いた。

「もういいよ。私のために、色々ありがとう。……ほんと、どうして私達は敵同士で出会つちゃつたかな。……うん。私は自分で探すよ。私が生きる意味

「ごめん……どうしようもない言葉しかかけられなくて」

「気にしないで……励ましてもらえるだけ、私は幸せだしな」

一人は肩を小さく竦め、そして仕方なしに笑いあつた。超えることができない壁を知つた二人は、笑うことしかできなかつた。

その時、大希は下が騒がしくなつたのを感じた。

「どうしたんだ？ 何かあつたのか」

大希は訝しげな顔をすると、栄花を黙らせ下の階に意識を集中した。誰かの怒号が聞こえてくる。そう思つた時、いきなり背後の戸が開いた。大希が慌てて振り向くと、そこにいたのは健だった。

「大希！ 大変なんだ。お前も下に来い！ ……サイバーが。『ギブリみみたいなサイバーが、何百体も久宇慈で暴れだしたんだ！ たくさんこっちに向かってるんだよ！ 今は自衛隊の人が外で食い止めてるけど、俺たちも何とかしないと…』

「あ、ああ。分かった！」

大希はちらりと栄花のことを窺うと、小さく頭を下げた。

「ごめんな……栄花」

栄花はしばしばんやりと大希を見つめていたが、ふと急に真剣な顔になると、急にベッドから降り立つた。途端に彼女はふらつき倒れそうになつた。

「お、おい。いきなりどうしたんだよ」

「言つただろ。生きる意味は自分で探すつて。……私は迷つてた。二つの間で。生き残つて、死んだ心地で余生を過ごしていくのか、生きた心地しながら、死んでいくのがいいのか。私は決めたんだよ。……私はやっぱり、たとえもうすぐ死ぬとしても、充実して生きたい」

彼女はそばに置かれていたボロボロの隊服を漁ると、その中から、彼女が持つていたタクト状のものを取り出した。

「私は、もう迷わない」

ローチーは緊迫していた。報告では、南広場の空間が歪んで、その中から「ゴキブリ」のような形をしたサイバー兵器が続々と溢れ出してきたといつ。その数をもつてサイバーは建物を埋め尽くし、次々に分解して崩落させているというのだ。単体は大して強くもないため、外では必死に撃退しているのだが、姿が「ゴキブリ」ならば性質も「ゴキブリ」、歪んだ空間から次々と湧いてくるため既に対処しきれず、大量のサイバーが市中に放たれてしまったのだった。

「どうするーー！」に籠つてしているだけだつたら久宇慈は終わりだぞーー！」

井上が自衛隊の士官に向かつて叫ぶ。士官もひどくうつむいた様子で、次々と舞い込む無線の報告を聞いていた。

「久宇慈だけじゃない！　こんなものを外に逃がしたら、取り返しのつかないことになるーー！」

進藤やさくら、そして理加などは、ただおろおろしてサイバー兵器がどんどん市中を埋め尽くしていく様子を眺めていることしかできなかつた。そもそも、彼らはパソコンのエキスパートというだけで、単なる一般人でしかないのだ。彼らにできることなど、何も無いように見えた。

「さくら……私達はどうしたらいいんだろーー……」

さくらは理加の問いに答えられないまま、建物に張り付くサイバー兵器の姿をじつと見つめていた。

タクトを取り出した栄花は、体力の衰えた体を何とか窓辺まで運び、力一杯に窓を押し開けた。外は氷点下、大希も栄花も思わず身震いした。大希は、窓の下を覗き込んでいる栄花に向かつて尋ねた。

「まさか、そこから逃げる気か？」

「そんなわけ無いでしょ！ できたらとっくにそうしてたし！」

寒さに負けまいと声を張り上げた栄花は、そのままゴキブリたちはびこる外を見て、それから自分の手にある白いタクトに目を下ろした。両手でタクトを握りしめ、その先端を睨みつけて何かと葛藤した。だが、腹をくくっていた栄花はすぐに頷き、力強くタクトを振り上げた。鋭く振り下ろし、サイバーを囲むように動かした。自衛隊に飛びかかるうとしていたそれらは、いきなり動きを止めて栄花の方を見上げる。タクトで再びそのサイバーを指した彼女は、そのまま先端を滑らせ別のゴキブリを指し示した。それを見た彼女に従う一派は、いきなり味方であるはずのサイバーに向かつて飛びかかった。すぐに飛びかかつた相手をバラバラにしたそれらだったが、すぐに目を赤く光らせ栄花の言つことは聞かなくなってしまった。自衛隊の方に向き直り、再びサイバー達は敵へと戻ってしまう。栄花は舌打ちし、窓ベリを叩いた。

「くそつ！ やつぱダメか！」

「栄花？ 一体何を……」

大希は栄花の隣に一足飛びで駆け寄り、一緒に道路を見下ろした。その間にも、どんどんサイバー兵器は増えていく。「アイツらをこのタクトで操れないかと思ったの。でも、やっぱり『ローチ』だけは無理そうね」「ローチ？」

「ゴキブリよ。制圧戦で、物量で一気に押し切るサイバーなの。……やつぱり元締めを乗つ取らないと……」

栄花はいきなり独り言を呴くと、大希に向き直つて訴えた。

「大希お願ひ！ 私をロビーに連れて行つて！」

「え！ うーん……」

「手錠つきでいいから！ お願ひ！」

「広場周辺のビルが次々に倒壊しています！」

ロビーにひどく焦つた様子の報告が続々と飛び込んでくる。檄で

返す自衛隊の士官だつたが、彼の焦燥も最早隠しきれないほどになりました。

「何か手は……何か手は無いのか！」

彼が机を叩き、隅に固まつていたさくら達はびくりと肩を縮こまらせた。近くで鳴り響く銃声、爆発音に耳を傾けながら、さくらはうつむいた。

「私に何かできることがあれば……」

その時、そばの階段から小さな足音がした。振り返つて見上げると、そこにいたのは大希と、手錠で拘束されたかの女兵士であつた。目を真ん丸に見開いて、さくらは思わず大きな声を上げる。

「ちょっと！ 何してんの！」

「驚くのはわかつてゐ！ でも俺を、この人を信じてくれ！」

信じろと言われたところで、いくら寛容なさくらも『はい』そうですか『はい』かない。眉根にしわを寄せ、ただただ親友を訝つた。

「信じる？ 今までにサイバーが襲つてきてるこの状況で、何を信じるの？」

さくらが言つと、それを聞いた栄花はため息をつき、じつとせくらの事を見つめた。

「別に私を信じるとは言わない。でも、この男の言つことは信じてやれないのか？」

さくらの眉がぴくりと動いた。栄花の揺るがない瞳をじつと見つめた。穴が空くほど見つめた。それでも、彼女の視線は少しもぶれなかつた。

「……あんたに何がわかるんだか

さくらはため息をつくと、腰に手を当て斜に構えて尋ねた。

「で、何をするつもりなの？」

「あのサイバー達を根こそぎ乗つ取る」

栄花が当然のように言い放つた言葉に、さくら達は我が耳を疑つた。周囲はお互ひ訝しげな顔で目配せをかわし、さくらはぽかんとして栄花の事を見上げていた。気の抜けた声が彼女の口から漏れる。

「乗つ取るつて……散々この街を痛めつけておいて、一体どういうつもり？」

「私だって、好きでやっているわけじゃなかつたというだけの事よ」栄花は涼やかに言い放つと、手錠をされたままで残り五段から下まで飛び降りた。井上はそれに気がついた。後に付き従う大希をつけ、井上は足早に詰め寄つた。その顔はまさに鬼のようだ。

「大希！ こんな時に兵士を引っ張り出してくるつて、お前どういうつもりだ！」

一步間合いは離したもの、彼は今にも大希の胸ぐらを掴んで捻り上げそうだつた。それでも、大希は井上のことを身じろぎもせずに目を据えた。

「井上さん。僕は彼女を信じたいと思つています。彼女がきっと僕達を助けてくれると信じています。彼女が何かしよつとしたなら、僕も責任を負います。だから……信じて下さいませんか？」

井上は目をつり上げ、じつと睨みつけた。大希は眉根にしわを寄せ、井上の気迫に負けまいと足を踏ん張つた。いくら父親代わりとして自分のことを支えてくれた人物とはいえ、大希はここで折れるわけにいかなかつた。ふんまん憤懣ふんまん遣る方無い様子の井上だが、いつにも増して頼もしい、精悍な表情を見てしまつては、引き下がらないわけにはいかなかつたようだ。

「仕方ない。ならあいつから田を逸らすな。何かおかしな行動を見せたらすぐに取り押さえろ」

「わかっています」

大希は栄花の方を振り返つた。栄花は口を真一文字に引き締め、そつと手錠を目の前に引き出した。額き合つうと、大希は鍵を取り出し、素早く彼女を開放した。手を払うような仕草をすると、栄花は近くにあつたパソコンの乗つたデスクをいきなりロビーの真ん中近くまで押し出した。

「ちょっと。一体何を……」

さくらは栄花の隣にくつつき、彼女の必死そのものの目を覗き込

んだ。栄花はさくらの方に目だけ向けて、そのまま遠くにまとめていたパソコンを指差した。

「あそこのパソコン、ハブで繋げるだけ全部このパソコンに繋いで

「え？」

「あの『ローチ型制圧サイバー』は、中枢となっているサイバーが一体いるの。それは『マザー』という量子コンピューターが直接操っているんだけど……まあそれはいいわ。このパソコンにこれを繋ぐの」

栄花は腰に差していたタクトを取り出す。柄の底をいじると、いきなりUSBの接続端子が現れた。栄花は躊躇なくそれをパソコンに接続し、タクトをアンテナのように立てた。そのままコマンドプロンプトを開くと、怒涛の勢いでキーボードを叩きながら栄花は背後に立っているさくらに叫んだ。

「早く！ チャンスは一回だけよ！」

人々は言葉を失い、呆気に取られて栄花の姿を見つめていた。敵であるはずの女が、何をどう血迷ったのか、いきなりこちらの手助けをすると名乗り出て、いきなりキーボードを叩き始めたのだ。信用などできるはずもなく、人々は奇異の視線を栄花に向けたまま立ち尽くしていた。そんな視線に気づいたのか、栄花は振り向きたくら達の事を睨みつけた。

「ちょっと！ ここを守る気あるの？」

理加は腹の前で組んだ指を見つめながら、小さな声で呟いた。  
「そんな事……いきなりあなたに言われても……」

「そうよ。そんな風に居丈高に言われたって、従うに従えないわ」さくらがちくりと刺すと、栄花は顔をしかめて頭を搔いた。外のサイバーを一瞥した後、小さくため息をついて肩を落とした。口調も軍人然とした格式ある言葉遣いに変わる。

「……すまない。私の立場を忘れるところだった。……けれど、私はここにいる人のことを助けたいと思っているんだ。たとえ生きている世界は違つても、私はこの世界にも間違いなく生きている人々がいることを改めて知つてしまつた。この世界には何十億もの人々がいるんだろう？ ……何十億の命を殺して生きるか、五千万の命と無理心中するか、私はこの男の言葉で決めたんだ」

栄花は、大希の顔を静かに指差した。周囲から視線が集まつてくるのを感じ、大希は自分でも自分を指差した。

「俺？」

大希の戸惑つている様子を見て、栄花は静かに微笑んだ。

「とぼけるな。泣いた私を突き放しておいて……まあいい。私は決意したんだ。それを、あなた達は私の事を信用できないばかりに、反故にするのか」

誰もが黙り込んだ。聞こえるのは、次の指令を必死に仰ぐ、外か

らの通信ばかりだった。隣と田配せしたり、うつむいたり、気まずく栄花を見るだけだった。

だが、ついにさくらが動き出した。カバンの中からハブを取り出し、遠くからパソコンを持ち出してきたのだ。栄花の隣にそれを置き、静かに笑いかけた。

「ま、大希が信じた人が、こずるい奴なわけないか。あなたの言つ通りね。……私達は、ここを何とかしないといけない。手伝ってくれる？」

さくらがそつと手を差しのべると、栄花はしつかりその手を掴んだ。悪戯っぽく口角を持ち上げ、しつかりと頷いた。

「言つまでもない」

打ち解けあつた二人を見て、進藤は息を吸い直してネクタイをととのえた。

「井上さん。私達は彼女に協力を仰ぎたいと思います。よろしいでしょうか」

そう言つた彼の瞳には、確固たる強い決意があつた。それを見た井上は帽子を目深に被り直し、彼らからそつと田を離した。

「……このままではどうしようもないのは事実だ。俺は口出ししない」

進藤は部下達と頷き合ひ、素早く回線を繋ぎ始めた。すぐさま五台のパソコンが一つに結ばれる。進藤、さくら、理加、そしてもう一人がそのパソコンの前につき、パソコンに向かい合ひ。

「準備はできました。我々はどうしたらいいんでしょうか」

進藤が尋ねると、栄花は相変わらず激しく打鍵しながら答えた。

「今私はあのサイバー兵器群の司令部、『ホーム』に接続しようとしている。……厄介なことに、攻撃された事を感知すると、逆に敵方のコンピュータのシステムを攻撃しに行くカウンター型のセキュリティプログラムが組まれているんだ」

「そんなこと、可能なんですか？」

理加は聞いたことが無いといった様子で、栄花の真剣な表情を小

さく窺つた。

「USBやダウンロードファイルからボットが侵入するのとは違つ。今やううとしてるのは、単にこの送信器を使って正面勝負しようとしているだけだ。とてもリスクー、無謀なやり方なのは承知の上だが、『ホーム』に接続するにはそれしかない。そろそろ他地方に進出しようとしたつておかしくないんだ。まさにそれを目的に動いているわけだからな」

自分達が背負つた役割を改めて認識し、さくら達は神妙な顔で互いに目配せしあつた。眼鏡をかけ直し、深呼吸して両手を握りしめ、さくらは目の前のディスプレイを睨み付けた。

「オッケー。じゃあ本題に戻りましょう。私達は何をすればいいの？」

「ああ。この時代のセキュリティはWPA2を使つていいんだったな？」

時代、という言葉に田を瞬かせたさくら達だが、間違いはないから頷いた。

「ええ。まあ」

「わかつた。なら、向こうがこのシステムを乗つ取るまでの時間は大体三分だな。それまでの間に、急いで認証コードを打ち込んで『ホーム』のシステムに乗り込む。正規の方法に見えるかもしけないが、奴はすぐに気づく。そこから奴は私達に攻撃を始めるんだが、やられるよりも先に『マザー』との連絡を切斷する。そして、『ホーム』の管理スイッチをオンにする。これで私たちの勝ちだ。了解か？」

四人は頷いた。栄花は返事の代わりにエンターキーを押した。同時に、四人のディスプレイが暗転した。栄花の目の前の画面も同じく暗転し、四人とは違つて白い英文が画面にびっしりと浮かび上がる。最後に現れた『Password?』の文字を見つめながら、押し殺した声で呟いた。

「私が認証コードを打ち込んで、『ホーム』に乗り込む。そして、

私が暗号化されたデータと、復号の鍵を送るから、すぐに解読して正しいパスワードを打ち込んでくれ。……じゃあ、行くぞ」

栄花はパスワードを打ち込み、『ホーム』に乗り込んだ。おそらく向こうも気づいたに違いない。その攻撃が表面に現れることはないが、それゆえに強く緊張が走った。栄花が素早くキーを打ち込み、進藤に復号したデータを送り出した。いきなり画面に白文字が浮かび上がって一瞬戸惑つてしまつたが、彼はすぐさま画面にかじりついた。

「何々……」

進藤は眼鏡をかけ直し、すぐさま暗号解読にとりかかった。いくら複雑怪奇なものでも、鍵さえわかつていればどうということはない。三十秒ほどで全文を復号した。

「マザーとの接続を切断する場合は、YESを選べ。だそうです」「すぐ！」

栄花の鋭い言葉に急き立てられ、進藤は反射的にエンターキーを押した。それを確かめた栄花は、すぐさま別の文章をさくらと理加に送りつけた。栄花は思いつめたような顔になり、目の前の画面を見つめた。

「『ホーム』の管理は厳重だ。下つ端の私に管理権限はないから、正規のルートでは行けない。けど、何とかやるしかない」「さくらは時計に目を落とした。あと一分ほどしかない。

「じゃあどうすればいいの？」

「サイバー兵器には、万一の暴走に対応できるよう緊急プログラムが組まれている。そのプログラムを起動できれば、私達が管理者権限を得ることができるはずだ」

呟く栄花に向かって理加が叫んだ。

「時間がない！」

「わかつてゐ！ 今私が送つた暗号を復号してくれ！ 私がサイバーを暴走状態に落とし込んだら、また新しい文章が出てくるはずだから、それまでに頼む！」

「はい！」

栄花は再びキーボードを打ち込み始めた。『ローチ』に司令を送っているシステム内に入り込むと、栄花はいきなりそこにクラックを仕掛ける。司令システムはデータを大量に送るようにはできても、大量に受け取ることには慣れていない。そこを突き、栄花はゴミクズのようなデータを大量に送り込んだのだ。すると、案の定バグが発生し、いきなり外で大騒ぎが起きた。

「サイバーが共食いしてるぞ！」

「一体どうなってるんだ！」

さくら達はその声に一瞬気を取られて振り返りそうになってしまつたが、栄花はテーブルを叩いて素早く彼女達を引き止めた。

「あれは一過性のものだ。さつさとしないと『ホーム』が勝手に修復プログラムを起動させてしまつぞ！」

「は、はい！」

二人は慌てて田の前の文章を復号した。

『異常が発生。緊急対策として操作を現地手動に切り替えますか？ その場合、下にパスワードを提示して下さい』

『管理者権限を切り替える場合、下にパスワードを提示して下さい』他にもたくさんの文章が出てきたが、大概はこんなところだった。さくらは栄花の方を向いた。

「現地手動に切り替えるパスワードって？」

『Galaxium、ギャラクシウムだ！』

さくらにはその言葉の意味するところがわからなかつたが、どうせパスワードと、細かいことは最初から気にしなかつた。素早く打ち込むと、そのままエンターキーを押した。すると、下に新しく暗号が羅列される。さくらはすぐさま解読した。『Feynmannium』、そう書かれていた。それを確かめた栄花はさくらと頷き合いい、理加を指差した。

「新しく出てきた最後の単語を管理者権限のパスワードに打ち込んで！」

「は、はい！」

理加は迷わず打ち込み、決定した。

「よし！ 私達の勝ちだ！」

管理者権限を得た栄花は、数秒後に全ての「キブリサイバー」に停止の命令を送った。外で暴れていたサイバーは、すぐに動かなくなつた。今まさに飛びかかるうとしていたローチは、前のめりのままで止まり、ビルの壁に張り付いていた大群は、全てボロボロと剥がれて地面に墜落したのだ。その光景を、病院の中にいた人々は唖然とした表情で見つめた。再び声を上げるものは無くなり、静寂が空間を満たす。

その静寂を打ち破つたのは、やはり外からの通信だつた。

「報告します！ サイバー兵器が全て停止しました。再起動する様子も見せていません！」

「……やつた。やつたあ！」

眼鏡を外して、さくらは弾かれたように立ち上がると、理加の手を取つて引き上げいきなり抱きついた。理加は目を白黒させながら、困つたような笑みを浮かべて咳いた。

「ちょっと、苦しい……」

そんな二人を見て、周囲も勝利を実感した。ロビーの空気が歓喜に震え、病院を守り抜いた人々、あるいは勝利の立役者を労おうと、人々は病院の出入口と中央のパソコンに殺到した。それに気づき、栄花は人々が近づく前にふらりと抜け出し、病室へと歩き出して行つてしまつた。喜びで半ば前後不覚になつていた彼らは、栄花がどこかへ行つてしまつたことに気づかない。

「栄花……」

結局、彼女の動きに気づいたのは大希ただ一人だつた。そつと彼女の横に駆け寄り、大希は栄花の清々しい様子の横顔を見る。

「栄花、君のお陰だ。ありがとう」

「別に、感謝されようと思つてしたわけじゃないし。私は自分が何のために生きているかを探そうとしてただけよ」

あつけらかんと言い放った栄花を、大希は生意気な妹を見るよつ  
な顔で肩を竦めた。

同刻。未成は歎声を階下に聞きながら、工藤の拘束されている暗  
い空間を訪れていた。

「来栖。どうやら今回はうまくいきそうだな」

工藤は両手を拘束され、壁に背を預けていた。世を見切りでもしたかのような、傲岸な口調はこの期に及んでも相変わらずだ。それでも、未成は神妙に目を細めただけだった。

「あなたの叱咤のお陰かもしませんね」

暗がりの中、工藤は未成の顔を横目に一瞥して鼻を鳴らした。

「そりゃあ。俺は何でも知ってるからな。あ、でも、俺がここに来られたのはお前がしくじりまくったからか……まあどうだっていい。今回の世界は大きく変わった。膠着した流れが動いて、もう元には戻らない。一人の生存から、お前が握り続けた台本は役立たずになつた。今村大希の幼馴染が生き残つたのは大きかつたな。お陰で今村は冷静なままだ」

未成は頷いた。目を閉じれば、今も一つの光景がありありと浮かび上がってくる。瓦礫に飲み込まれ、右肘より先だけを遺して死んだ城さくら。その亡骸を後生大事に抱え、ただただ呆けている柳剣人。今後の事を考えたらやや不憫だが、今回剣人が足を失うだけで済んだのは幸いという他無かつた。

「ずっと……どんなに足搔いたところで、生死の運命だけは変えられないと思っていました。でもそれは、僕に動く気が無かつただけなんですね。だからちょっとした出来事は変わつても、結局誰も助けられなかつた……」

寂寥感を含んだ未成の呟きに、工藤はため息をつきながら応えた。

「運命は、長い鎖の柵みたいなもんだ。鎖を揺らしたところで、鎖を留める杭は抜けない。お前はずつとそうだった。策士策に溺れて、自分の過ごしてきた世界と築いてしまつた友情の間で、中途半端に動くことしかできなかつた。だろ?」

心の奥底をあつさりと見抜かれても、未成はもう身動き一つしな

かつた。懐に手を当てながら、田を細めて工藤の事を見つめる。

「本当に、あなたは何でもわかってるんですね……」

「ああ。俺は全てを感じてきたんだ。全てが一つで、一つが全ての世界でな」

未成は、工藤の言葉の端にわずかなやつれを感じ取った。彼の言う『世界』は理解できなかつたが、『マザー』からある情報をもらつた今、彼がどんな出来事に遭遇したのかは何となくわかっていた。未成に同情の念を送られながら、工藤は静かに続ける。

「だがもうそんな事もおしまいだ。というよりは、いい加減おしまいにしてもらいたいもんだな。来栖未成」

未成は深々と頷くと、懐に手を滑り込ませた。

「わかつていますよ。……過去に足跡を刻むはずだった、時間調査士の工藤征尚さん」

工藤は肩をすくめ、暗がりの中で動き続ける時計を見上げた。その表情は、どこか柔らかだつた。

「なんだ。ようやくわかつたのか」

「ええ。『マザー』から教えてもらいました。……こんなに大切な事を隠すなんて、『母親』としてどうなんですかね」

「だからミスを起こしたんだ。アレが嘘をついたせいでは」

工藤が吐き捨てた言葉に未成は心得顔をして、ゆっくり懐から手を抜いた。そこに握られていたのは、刃渡り十センチほどのダガーナイフだ。それを睨めつけるように凝視して、未成は小さく呟いた。

「そして、その混乱を僕が大きくしてしまった……だから、この片は僕が付けます」

その頃、理加は健と共に流し台で食事の後片付けをしていた。最近は備蓄されている糧食ばかりだから、片付けといつても大したことはない。せいぜいゴミを分別して捨てるくらいだ。ものの数分で終わる。それをぐだぐだ十分近くも続けていたのは、やはり互いに一緒にいたいと思う気持ちがあつたからだろう。

「サイバー兵器ももう形無しだって、あの兵士さんが言つたって。大希さんはそう言つてたね」

理加は、ちらりと隣の健を窺いながら呟いた。彼女はカップ麺の空き容器をわざわざ丁寧に洗い、しつかり重ねて「ミニ袋に捨て続けていた。一方の健は飲料水のペットボトルを、これまたフィルムを剥がし、キャップを外してと、わざわざ時間をかけてまとめていた。「ああ。俺も聞いた。……大希と兵士の間に、何かあつたな。理加はどう思う」

健は明るく、雑誌の「Gシップ」を読んでいるかのような口調だった。彼らしい、やや緊張感に欠けた姿に、理加は困ったように笑いながら肩を竦め、白い歯をのぞかせながら宙を見つめた。

「……私が言えたようなもんじやないのかもしれないけど、あの兵士さんは大希さんに気があるんじやないかな。そう思う」

それを聞いた途端、健はからからと笑い始めた。

「やつぱり。理加もそう思うよな」

「うん。私達にはかくかくした感じで話しかけてきたのに、大希さんに向かって話した時だけ……なんていうか、普通の女の子みたいだつたから」

健は小刻みに頷くと、腕組みをして訳知り顔に呟いた。

「男女の恋愛に、シチュエーションなんか関係ねえんだな。まさに実感してるぜ」

「そうね。私もそう思う」

一人が静かに笑いあつた時、さくらが水差しを片手にふらりと現れた。彼女はいきなり肩を竦めると、一人に水差しを振つてみせて微笑んだ。

「ごめん。お邪魔しちゃつた?」

健は顔を小さくしかめ、手で払うような仕草をしてみせた。ふと右を見ると、理加と視線がぶつかる。頬を赤らめた元恋人達は、同じように口を尖らせさくらに向き直つた。

「気にするなよ。そっちの方が恥ずかしくなる」

「そう? じゃあいいや」

さくらはどこか弾んでいる様子で、鼻唄混じりに水を汲み始めた。その表情をじっと窺いながら、理加はおずおずと尋ねた。

「剣さんは大丈夫?」

「うん。大分意識もハツキリしてきて、早くリハビリしたいってごねてる。前と何にも変わってない」

健は顔をほころばせた。生真面目な顔でさくらに向かって訴えている様子が目に浮かぶようだった。

「そうか……よかつたな」

「うん。だから私もいつも通りにすることにしたんだ。剣人がくよくしてないのに、私だけいつまでも落ち込んでるわけにいかないもん」

蛇口をしめると、さくらは一人に軽く手を振つて、再び軽快な調子で流し台を立ち去つた。健が後を追うように声を張り上げる。「剣人の看病だろ? 僕も後で行くから、そう伝えといてくれ」

「はい、了解」

さくらの声は、最後まで明るかつた。理加はほつと息をつきながら、誰もいない廊下を見つめる。

「よかつた。やっぱりさくらはああじやないと」

「だな。さくらまで暗くなつたら、生真面目な剣人と釣り合い取れなくなる」

二人はくすりと笑いあつた。だが、それきり二人は黙り込み、お互い静かになつてしまつた。蛇口を捻る音、水がステンレスを打つ音だけが二人の周りを満たす。一度落ち着いてしまつた空気というものは盛り返し難く、健はちらちらと理加の方を窺うものの話しかけることまではできなかつた。結局健はうつむき、ペットボトルを見つめてしまつた。

しばし続いた沈黙の後、思い詰めた顔で口を開いたのは理加の方だつた。

「……私、この事態が収まつたらコンタクトにしようと思つ

健は眉を上げ、理加の顔を見つめた。真剣な顔で、真っ直ぐに彼女は健を見つめていた。健は手元に目を落とし、ペットボトルを弄び始めた。何度も舌を噛みそりになりながら、よつやく言葉を絞り出す。

「……やめとけよ。古い酒は悪酔いするつて、よく言つたら」

理加はふと緊張を解き、目を細めて首を傾げてみせる。たつたの一言で、のこのこと引き下がる気はなかつた。

「確かにね。……でも、ヴァインテージもののワインは、私達なんかには手が届かないほど高いよ」

健は自分の額を手のひらで打ち、小さく唸り始めた。眉根にしわを寄せて、健は迷い、悩んでいた。理加は拳を固く握りしめ、熱のこもつた瞳で健に視線をぶつけた。

「私、あなたが少し現実的過ぎる、価値観が合わない、そんな風に思つちやつて、きちんとお別れの挨拶もしないで、勝手に距離を置いちゃつて……でも、今はそんな事どうでもいいと思つてる。あなたに助けられて、本当に『運命』なんぢやないかつて、最近健と話すたびにそんな事ばかり思つてたの。価値観の違ひなんて、結局は理解してればいい話。ちょっとくらい口喧嘩があるくらいの方が、張り合ひあつてちょうどいいんじゃないかなあ、つて。そう思つてるんだ……」

みるみるうちに理加は頬を赤らめて、まともに健の顔を見られずうつむいてしまつた。健は目を瞬かせ、地味な中に清楚な魅力を漂わせている女性の姿を見つめた。彼は観念したように肩の力を抜くと、腕を震わせながら、徐々に理加の方へと伸ばしていく。そして、彼女の肩に手を載せると、いきなり健は理加を引き寄せた。

「そうかもな……理加の言う通りかもしれない。……でも、俺はちよつとした実際家、理加はちょっとした空想家。対極だけど、分かれ合えるかなあ？」

理加は健の肩に頭を預け、少しうつとりした顔で呟いた。

「やつぱりどこか臆病みたい。私は全然心配してないよ」

「そつかあ……わかつたよ。もう一度、やり直してみるか……」  
健はさらに深く理加を抱きしめる。理加も健の腰に手を回すと、  
そつと引き寄せた。

それを、物陰から未成は見つめていた。未成の記憶では、今頃は大希を取り巻く友人などいなくなつていてはずだつた。しかし、たつた一人を必死になつて救つたことで、みんな生き残つたのだ。

「一本の杭を抜いただけで……どんどん抜けていったのか……」

未成は微かに笑みを浮かべると、静かにその場を立ち去つた。

そしてその頃、大希はぼんやりと栄花を見つめていた。彼女は昼食をゆつくりと頬張りながら、顔を綻ばせていた。しかし、彼女が背負つたものを知つた今では、大希も笑顔になる、などとはいかなかつた。

「よく笑つていられるよな」

カツプ麺を、音を立てながらすすると、栄花はそのままにっこりと笑つてみせた。

「久々に力口リーあるもの食べてんじ。太るものつて、大概おいしいから困るんだよね」

「まあ、そうかもしけないけどさ……五千万の命と心中する気になつてるようには見えないんだよ」

腕組みして顔をしかめている大希の咳きを聞くと、口を尖らせながら栄花は大希に詰め寄つた。

「何よ。悪い？」

「いや。君が元気なら、それはそれでいいと思うんだけどさ……」

大希が口ごもる間に、栄花は大きく喉を鳴らしてカツプ麺のスープを飲み干した。空の器をテーブルに載せると、彼女は笑を吹き消してベッドに寝転んだ。

「……確かに、母さんや弟を巻き込んでやうし、それを考えたら、心臓が痛んでくる。でも……やっぱり私達が生き残るなんて、何だ

か間違つてゐると思う。世界のあり方をねじ曲げてまで生き残つて、その先に明るい未来が待つてゐる、なんて私はやつぱり思えない」そこまで言つと、栄花は急に悪戯つぱく笑い、大希の瞳を覗き込んだ。

「それに、大切な人を死なせるなんて、我できないし。そんな事するくらいなら、私が死んだほうがまし」

「……殊勝つて、君みたいな人を言うんだろうな」

大希が素直に感心して頷くと、栄花は再び笑顔を曇らせてしまつた、大分動くようになつた右腕で大希の胸を叩き、舌打ちまでしてみせた。

「鈍いんだね。大希も」

「な、何が？」

急に不機嫌になつた栄花に、大希は戸惑つて目を泳がせた。そんな様子を見ると、栄花はさらに不機嫌になり、大希から目を逸らしてしまつた。大希が肩を竦めていると、いきなり背後の戸が開いた。

「大希」

呼ばれて大希が慌てて振り向くと、そこにいたのは未成だつた。大希は顔を綻ばせ、彼を迎え入れようとする。ただ、どこか様子がおかしかつた。目を力一杯に見開き、気迫のこもつた表情で大希を見据えていたのだ。剣道四段の大希ですから、その勢いに戸惑い、恐れを覚えて足を止めた。異変に気づいた栄花が体を起こして未成を見た。途端にその目は大きく見開かれる。

「来栖先輩……」

「な、何だつて？」

大希は思わず栄花の方を振り返つた。そして、再び未成の方に振り返る。その手に握られていたものを見て、大希は思わずたじろいでしまつた。

「おい。未成。それはどういうつもりだよ」

未成は大希の言葉に全く応じず、右手のダガーナイフを大希の胸

に向けて歩み寄る。大希は守りを固めるよつと右手を差し出し、ナイフから身を守りとした。

「なあ、未成……」

その時、ぴたりと未成は足を止めた、表情も緩め、ゆっくりと右手を離し、ナイフを落とす。

「……大希。本当は、ここで僕は君を殺そうとするはずだったんだ。

『特異点』として

「トクイ……テン？」

大希は右手をやや下げる状態で固まつた。未成は落としたナイフを蹴り払い、穏やかに口角を持ち上げた。

「そう。特異点は二つの世界の接触が始まつた瞬間、二つの世界を僅かでも安定させるために、それぞれの世界に生まれ落ちたログラムだ」

栄花は口を小さく開けたまま、呆然と首を振つた。

「そんな、そんな話、今まで聞いたこと……」

「無くて当然。僕にしか知られてない話なんだから」

未成は栄花に向かつて優しく微笑んで見せると、立ち尽くしている大希の脇をすり抜け、丸椅子を取つて腰を落ち着けた。

「大希も座りなよ。長くなるから」

大希は黙り込んだ。いきなり未成が異彩を放つ不思議な存在に見えて、無意識の内に目を擦つていた。眉根にしわを寄せ、大希は訝しむ目で未成を見た。

「未成、話がわからない。どうして未成が俺を殺そうとするはずだつたんだよ」

未成は組んだ指を見つめ、そしてそつと目を閉じた。

「君も『特異点』なんだ。こっちの世界のね。僕達の世界が生き残るようにするには、君の存在は最も大きな脅威なんだよ」

大希は目を見開き、いきなり椅子に崩れ落ちた。唇を噛みながら未成の真剣な顔を見つめる。

「特異点？ 僕が？ バカ言うなよ。俺は普通の人間だろ」

未成は静かに微笑み、大希の戸惑う表情を見つめる。

「君は、錠前に家を守つている自覚があると思うかい？ 思わないでしょ？ それとおんなじさ。君は、警察として持つている『守りたいという思い』で、時空間の歪みを知らないうちに修正していく

んだ

大希は頭を抱え、小さく首を振った。

「そんな。そんな事が……」

「ああ。考えてみればわかるじゃないか。『修正軍』の動力は、全てギヤラクシウムを使ってる。サイバー兵器から何から、全部だ。だから、君に対しては等しく無力だったじゃないか。あれがまさに証拠だよ」

大希は茫然と未成を見つめた。未成は相変わらず穏やかな顔のままで、先ほど見せていた狂気の表情が嘘のようだ。大希は目を伏せ、今まで出くわしてきたサイバー兵器を思い出した。ビルを破壊したカマキリ、その瓦礫を粉々にしたサソリと、それを守護していたクモ。そして、健の機転で何とか破壊したトンボ。確かに、どれも最後には動かなくなつた。一三七番元素ギヤラクシウムが引き起こす時空間の歪みを利用し、人々はエネルギーを取り出しているという。大希がその時空間の歪みを修正しているなら、なるほどギヤラクシウムは形無しだ。彼は事実を受け入れ、うつむくしかなかつた。

「俺が『特異点』なのは分かった。でも、どうして俺を殺そうとしたのかの答えはまだ出てないぞ」

未成は道理だと頷き、ゆっくりと口を開いた。

「君の前に、未来世界の兵器は無力だ。それどころか、もしここにいる栄花が君を殺そうとして飛びかかっても、君には傷一つ付けられない。体から力が抜けて、すぐに動けなくなるはずだ。たとえ銃を使つても、まともに照準を合わせすことすらできない」

「どうして私がそんな事を」

栄花は自分を引き合いに出されたことが気に食わないようで、頬を軽く膨らませ、むくれてしまつた。そんな様子に、未成は困ったような笑みを浮かべる。

「単なる例えじゃないか。気にするまでもないでしょ？……けれど、特異点の僕は君に傷をつけることができる。僕が心から『世界を変えたい』と願いながら君の心臓にナイフを突き立てた時、この

世界の均衡は深刻なダメージを受ける。天災の類が全世界で起きて、世界は深刻なダメージを受ける。そこを、僕達はギャラクシウムを濃縮した爆弾を、各地で一斉に爆発させるんだ。そうしたら、この世界はすぐにも崩壊寸前になつた状態で僕達の世界と衝突して、消滅する。僕達の世界が消える代わりにね」

未成は自分の手の平を見つめ、一回大きく身震いした。大希も自分の胸を押さえ、気の抜けた顔で未成の怯えたようなその顔を見つめた。

「思えば、とつても恐ろしいよ。……だけど、僕は自分の世界を見捨てることができなかつた。だから、君を殺すためにこつそりこの世界に降り立つたんだ。そして、『マザー』の根回しで、僕はどこからか転属された鑑識官として働き始めた。何もなかつたとしても、僕は鑑識官として働くつもりでいたから、丁度良かつたよ。そして……まもなく君に出会つたんだ」

大希は口を固く結び、まぶたをきつく閉じた。未成と初めて出会つた時のこと�이思い出される。例の居酒屋でばつたりだつた。先に来て飲み始めていた大希は、陽気な気分で様々なことを話した。未成は全部笑顔で聞いていたが、思えばその時の笑顔は全て偽りだつたのだろう。そう思うと、大希はひどく心が傷んだ。その苦悶の表情を見て、未成はため息をついた。

「思い出してるんでしょ？……確かに、あの時は笑顔を作つてたよ。『特撮』つてのが、何かもよくわからなかつたしね。けど、僕なんかが君を簡単に殺せるわけなんかないと思つたから、友人として、君に近づいて機会を狙あうと思つた。だから君に話題を合わせるために、『特撮モノ』を暇さえあれば見てた。そうして君と他愛もないことまで話して、君の心を油断させようと思つていた……けど、油断してしまつたのは僕もだつたんだ……」

未成は苦しそうに顔をしかめ、そして目頭を押さえながら呻いた。「僕は僕の心の弱さを悔つてた。そして、大希の人格もね。君がとてもいい人だつたから……いつの間にか、僕は君と本当の友達にな

つてた。そこから僕は苦しくなつた。友人になつてしまつた君を自分の手で殺したくない。でも、殺さないと、僕はもちろん、僕の暮らしている世界のみんな、それどころか一つの世界がどちらも崩壊して、全部終わりになるかもしれない。だから今日、さくらさんを目の前で失い、ローチに無謀な突撃を仕掛けて死んだ剣人さんの前で呆然としていた君を殺そうとした……」

うつむいたまま話を聞き続けていた大希は、驚きのあまり声を上げた。さくらはもちろん生きているし、剣人も一応生きていて、今は一人とも別の病室にいるはずだ。ならば、未成は一体何を言つてゐるのか。大希にはもうわけが分からなかつた。

「待てよ。さくらも剣人も死んでないぞ」

「今話す。……大希の言つ通りだよ。『今回』はね。……これまでは、さくらさんも、剣人さんも、健さんも理加さんも、みんな亡くなつてしまつたんだ。君は覚えていないだろうけど、君も相当心の傷を負つてた。その不安定な精神状態に付け入つて、僕は君を殺そうとした。……でも、やっぱりできなかつた。……そして僕は君から逃げて、終末を待つた。僕が作戦に失敗したのはきっと僕達の世界のみんなはわかつていただろうけど、それでも、僕の世界の人々は、ギャラクシウム爆弾を発破させたんだ」

顔を蒼白にして、未成は拳を固く握り締める。その手の内から、静かに血が溢れ出した。それでも未成は、拳に力を込め続け、声を震わせた。

「世界は揺らいだ。僕は止まることのない地震の中で、このままだちらの世界も滅びてしまつに違ひないと思つた。けれど、そうはならなかつた。僕は目も眩むような光のなかに放り出されて、世界が、自分の体が消えて行くのを目の当たりにした。このまま世界はオシマイかつて、そう思つたんだ。けれど……気づけば僕は、二一二年の元日の日にいたんだ。何も変わつてない。大希も、みんなも、何事も無かつたかのように無事だつた……世界は巻き戻つてたんだ。崩壊はしかけたけれど、結局特異点の僕達を起点にして、世界が復

元されたんだと僕は思つてゐる」

大希は未成の言うことを到底飲み込みきれず、ただただ呆然として苦悶する未成のことを見つめていた。その時、大希の思考の空白に一つの記憶が入り込んでくる。『大希』だ。はつとして、大希は恐る恐る未成に尋ねた。

「もしかして、あの時の、別の俺つて……」

未成はうなだれるように頷いた。

「そうだよ。僕はこれまで、おんなじようなことを六度も繰り返したんだ。情けないよね。散々迷ったよ。自分の世界と、友情を築いてしまった人との間に苦しんで、一度は自分の世界の味方みたくしたり、一度はこっちの世界の味方みたくした。けれど、結局はどちらも捨てきれないで、ちょっとは出来事が変わったかもしれないけど、結局死ぬ人はみんな死んで、この日にもつれ込んで、結局僕は君を殺すことができないままに終末を迎えるだけだ……」

未成はゆっくりと手を開く。血まみれになつた両手が、彼の心の痛みを如實に表していた。

「その度、僕にはその失敗の記憶が魂に刻まれ続けた。体は二十三のままだけど、心は少し老けたよ。心は蘇った世界にも引き継がれただけだからね。……で、君の話だ。君は多分逆だ。世界が崩壊した時、特異点の君は肉体が残つて、心が消えた。だから、巻き戻つた世界の中に、抜け殻になつた君が引き継がれたんだ。死ぬことも、生きることもできないで、ただただ徘徊し続ける存在になり果てた君が。一方で、もう一人、心体共に健全な君が世界と共に再構築されて、新年の挨拶をしに僕のところを訪れたんだ」

栄花は何も言うことができずに口を震わせ、大希もまた、未成の告白がどこか遠く聞こえていた。きつく目を閉じ、それからゆつくりとまぶたを開きながら未成の顔を見据え、小さな声で呟いた。

「……ごめんな。未成……お前がそんなに悩んでるなんて事、全く気付いてやれなかつたよ……」

「謝らないでくれよ。……全部僕が悪いんだから。決断力のない僕

が、全て引き起こしたことや」

未成の頬を、一筋涙が伝う。その心中を察したのか、栄花も静かに涙を浮かべる。大希も、かける言葉を見つけられずに再びうつむいてしまった。

だが、それ以上未成は涙を流さなかつた。涙を拭き取ると、表情を再び穏やかにして顔を上げたのだ。

「でも、今回だけは違う。僕はもう迷わないことにした。君の抜け殻を葬つた、工藤征尚さんに出会つて、全てを変える決意をしたから……」

「さん？　どうして奴をさん付けにするんだよ？」

大希は信じられないといつた顔をした。大希は、今も彼は単なる人殺しでしかないと思っていたからだ。未成が小さく微笑んだのを見た大希が戸惑つていると、いきなり扉が開いた。そこに立つていたのは、紛れも無く工藤征尚だった。

「それはな大希。俺が全ての原点だからさ。俺は工藤征尚。タイムマシンの事故で、全ての次元を超えた世界に飛ばされて、ようやく戻ってきた男だ。……教えてやるよ。今から、本当に、本当の真実をな」

大希はぽかんと口を開け放ったまま、すっかり自由の身となつている工藤のことを見つめていた。

「本当の真実……？ その前に、お前はどうやってあの場を抜けだしたんだよ」

工藤は不敵に笑つた。その男のポケットからみ出してきたものを見て、大希は思わず声を上げてしまった。男を拘束していたはずの手錠が、外れたまま、ひとりでに動いているのだ。栄花も目を瞬かせ、呆然とその手錠を見つめていた。

「嘘。何かのマジックよね？」

「マジックなものか。俺はもう『人』じゃないんだ。言うなれば、この世の一部だ」

そう言いながら、工藤は空になつたカップ麺の容器に手を伸ばす。すると、不意に容器が浮かび上がり、大希や未成の脇をすり抜けて工藤の手に飛び込んだ。

「このカップには種も仕掛けもないだろう？ 俺はタイムマシンの事故に巻き込まれた。ブラックホールに似た空間に呑み込まれて、仲間が目の前で無に分解されていくのを見つめながら、俺も死を思つた。だがな、そとはならなかつた」

工藤は手のひらを天に向けた。ゆっくりとカップが浮かび上がり、その場でいきなり潰れた。

「しばらくして、俺はふと気がついた。俺がまだ存在していることに。だが、身体それ自体は失われていることにもすぐ気がついた。それを感じたんだ。何かに触れるでもなく、自分の状態を極めて客観的に把握していた」

近い経験のある未成は納得した顔をしていたが、未だ自分の存在というものがわからない大希、そして居合わせているだけの栄花は工藤の言葉を全く飲み込めないでいた。栄花はうろたえた様子で尋

ねる。

「じゃあ、じゃあなんであなたはここにいるの？ 体だつてあるし「急ぐなよ。それはラストだ。……ともかく、俺はその感ずることのできる状態の中で気がついたんだ。自分が世界をも感じてこることにな」

工藤はカップをゴミ箱まで飛ばすと、窓の先にある遠い空を見つめはじめた。

「本当に世界を感じていた。今世界でどんな事が起きているか、思考を探ればすぐに見つかった。世界の有り様は乱れに乱れていた。世界の、概念とでも言うべきものが一つに分かれているようで、完全に分かれきってはいなかつた。全てが揃つた大きな世界と、人間とそれに準ずる概念を失つていた小さな世界だ」

椅子に座り込んだ大希が苦しそうに目をつぶり、そのまま険しい表情で工藤を見上げた。

「待つてくれ。『概念』ってなんだ？」

話を切られた工藤は不機嫌な様子で鼻を鳴らし、目を糸のよじて細めて大希を見た。

「そうか。わからないよな。『概念』ってのは……まあ俺も正確な名前は知らないからそう呼んでるだけだが、パソコンのデータみたいなもんだ。おおまかなものもあれば、細かなものもある。人間といえばお前らを指すし、哺乳類といえばさらに犬や猫なんかも巻き込む。つまり、この世界というパソコンに人間というデータがあるから、お前らは存在しているんだ」

「じゃあ。私達の世界はその人間や人工物の概念が存在していいから、私達が飛ばされた時代から人間や建物を取つ払つたようになつてたわけでしょ？ なら、どうしてあの場に私達は暮らしていられるの？ 概念がないんだから、私達は消えてもおかしくないじゃない」

再び工藤の語りを遮ったのは、栄花だつた。戸惑いを隠しきれず、目を丸くしている彼女の顔を、工藤は射抜くような視線で見つめた。

「まあ、三人もいればそう考える奴が一人はいるだろつと思つたさ。新しく生まれた世界にとつて、お前らの存在はイレギュラーだつた。それが元々不安定だつた世界をさらに不安定にさせた。あるはずのないものがその場にあるんだからな。そして、その不安定な状態は大きな世界も同じだつた。だから、それを世界は危険と判断したんだろう。世界は自己修復を始めた。分かれ出た小さな世界を再び大きな世界に取り込み、完全な安定を取り戻そうとしたんだ」

「そして、二つの世界の融合が始まった時、僕と大希が生まれた……」

未成がそう呟くと、工藤はその神妙な顔つきを見て頷いた。どちらともなく大小二つの青い玉を取り出し宙に浮かべると、二つをいきなりぶつけ合つ。

「まあ、二つを無理にぶつけ合つても融け合つはずはない。そのためにお前達は生まれたんだ。大きな世界を安定させるために、小さな世界を速やかに崩壊させるためにな」

未成は目を見開いた。今まで彼が信じてきた、『マザー』の言った見解とは正反対だつた。しかし、信じると言われば信じられない話でもない。

「……僕は、僕に与えられた『特異点』としての性質は、元々僕が暮らしてきた世界を無に変えるために存在していたということですか？」

「まあそういうことだな。その力を、世界の意志に関わらず自分達のために使つたのが人間だ。成功すればまあそれはそれで良かったが、結局のところはしくじつて、世界は共倒れの危機に瀕することになつた」

未成に三人の視線が集まる。彼らをそれぞれ一瞥し、未成は再びうなだれて頭を抱えてしまつた。その姿を見下ろしながら、工藤は髪を搔き上げる。

「俺はずつと外から見ていた。この男が動くに動けないまま、世界が崩壊しかけて、そして一年前のものに復元されて、再び、という

繰り返しを。もどかしかつたよ。復元するたびに、世界は歪んでいく。今村大希という存在の抜け殻、来栖未成が抱く記憶という、『あるはずのない』存在のせいだな。……だが、来栖が今まで成功できなかつたのはむしろ僥倖きょうこうだ。世界の歪みがひどくなつたお陰で、俺の意志を介入させる余地ができた。そして俺はこの世界に無理やり飛び出し、何とかこの世界のあり方を変えようとしたんだ』

大希は飲み帰り、そして時計塔下での出来事を思い出した。あの時はただの狂つた男とばかり思つていたが、その背後に背負つているものを知つてみると、この男に対して今もわずかに残していた警戒心も徐々に薄れていくようだつた。ため息をつき、大希は静かに椅子から立ち上がり工藤を真つ直ぐ見つめる。

「……じゃあ、俺の抜け殻を殺し続けたのは、世界の歪みを修正するため。そういうことか？」

「そうだ。そして同時に、お前達の意識を大きく変えることを狙つた。来栖も、お前も狙い通りにうろたえ、今まで取つたことのない行動を取つた。お前は怪我をして入院し、そして俺を捕まえた。来栖は俺の挑発に乗せられて、ついにこつちの味方として大きく立ち回つた」

工藤は三人の前を通り過ぎ、風の吹き荒れる外を見つめた。雲は足早に流れ、その隙間から太陽の光は眩しく降り注いでいた。

「そのお陰でお前を取り巻く死の運命は全て解き放たれ、お前は今冷静にこの時を迎へ、今まで知りもしなかつた事実を受け入れていい。だから俺は最後の手段に移る。どちらの世界も、人はいる。動物もいる。生きている。世界に取り込まれている間、俺はその事実が心に染みつくほど感じ続けてきた。……だから、俺にはどちらを消そうとか、どちらを残そうとか、そんな無味乾燥な真似はできない。だから俺は模索し続けてきた。一いつの世界を活かす方法を。そして、俺は『マザー』に命じて方法を探させた。今度こそは嘘を付ぐなと固く命じて。そして、『マザー』はしつかり見つけたんだ。唯一無二の、俺、そして特異点のお前ら一人が揃うことのみで可能

となる方法を

大希は呆然として工藤を、そして未成を見つめた。未成はすでに自分の運命を受け入れたらしく、すつと背筋を伸ばして正立しじつと工藤の背中を見据えていた。静かに彼は口を開き、尋ねた。

「教えてください。それはいかなる方法なんですか」

工藤は静かにポケットからタブレットを取り出し、その画面を大希達の前に突き出した。そこには原子のボーアモデルのような図が描かれていた。

「一七二番元素を生成する」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9326w/>

---

原子番号173

2012年1月12日22時52分発行